建築と社会

2005 No.1000

特集
・次世代に伝える「木」の建築
・一〇〇〇号記念

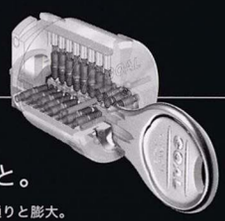


7

日本建築協会

GOAL®
SINCE 1914

NEW



① 膨大であること。
- 鍵違いは1,000兆2,800億通りと膨大。
- 複雑多岐なキーシステムの構築も可能。

② 強靱であること。



- ドリリング対策も万全。
- ピッキングやインプレッションなどの不正解錠はほとんど不可能。

③ やさしくあること。



- 手にやさしくなじむキーフォルム。

④ キーチェンジも可能。
- オプションでキーチェンジシステムの搭載も可能。

鍵違い——
1,000兆2,800億の防犯力。

ディンプルキー・GV24 リバーシブルピンシリンダー
DIMPLE KEY ・ GV24 REVERSIBLE PIN CYLINDER

GRAND V
グランブイ

株式会社ゴール　ホームページ　http://www.goal-lock.com

本　社　〒532-0032 大阪市淀川区三津屋北2-16-6
☎ (06)6309-1271(代) FAX (06)6302-0561

東京支店：TEL(03)3452-6341　大阪支店：TEL(06)6308-5441　富山支店：TEL(076)434-3971
営　業　所：札幌・仙台・名古屋・広島・高松・福岡・米子　工　　場：佐賀・米子・徳島・東京流通センター・台湾

会告

総会議決お知らせ

平成17年６月15日開催の平成17年度第１回通常総会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

・第１号議案
　平成16年度事業報告の件(詳細2p)
・第２号議案
　平成16年度収支決算報告の件(詳細3p)
・第３号議案
　役員改選の件

＊６月19日付で退任した理事(敬称略)
川口順弘/元㈱竹中工務店
松岡憲生/㈱きんでん
川本得信/都市再生機構
阪倉嘉一/大阪府建築都市部
鈴木映男/㈶日本建築総合試験所
松村雄吾/㈱松村組
松丸哲也/豊國建設㈱
永原義夫/王建工業㈱
＊６月19日付で辞任した理事(敬称略)
杉山泰生/事務局
＊６月19日付で退任した監事(敬称略)
本郷　聰/元㈱松村組
＊６月20日付で就任した理事(敬称略)
足髙晴夫/㈱きんでん
門川清行/㈱竹中工務店
岨　良政/大阪府建築都市部
古元眞美/㈱シブタニ
松原徹雄/㈶日本建築総合試験所
森本晴夫/三和建設㈱
森井雅久/都市再生機構
山形政昭/大阪芸術大学
白井元之/㈱フジタ
人見尤浩/事務局
＊６月20日付で再任した理事(敬称略)
岩橋貞雄/八千代電設工業㈱
大林剛郎/㈱大林組
奥村太加典/㈱奥村組
片倉健雄/元近畿大学
北山啓三/大阪市住宅局
木村之彦/木村工業㈱
栗原信英/栗原工業㈱
鴻池一季/㈱鴻池組
小橋鴻三/清水建設㈱
佐藤友美子/サントリー㈱次世代研究所
城口俊雄/㈱大阪城口研究所
設楽貞樹/㈱安井建築設計事務所
錢高善雄/㈱錢高組
竹中統一/㈱竹中工務店
立野純三/㈱ユニオン
髙木嗣郎/㈱大林組
千種幹雄/㈱昭和設計
和田克朗/元㈶日本建築センター
＊６月20日付で就任した監事(敬称略)
川口順弘/元㈱竹中工務店
杉山泰生/元日本建築協会

臨時理事会議決のお知らせ

平成17年６月20日開催の平成17年度第１回臨時理事会において、役付役員並びに理事の会務分掌が、Ｐ５の別表のとおり決まりました。

第22回茶室見学会（建築協会・建築学会共催）大徳寺 孤篷庵「忘筌」及び 玉林院「蓑庵・霞床席」

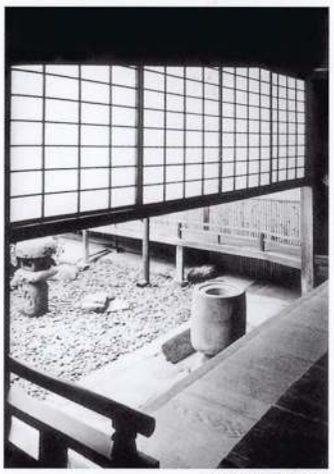
日　時　2005年9月3日(土)
　　14:00～17:00
講　師　中村昌生
　　京都工芸繊維大学名誉教授
集　合　現地／京都市北区紫野大徳寺町「孤篷庵」前
　　(地下鉄烏丸線「北大路」下車、西へ徒歩約20分)
定　員　40人（申込者多数の場合は抽選）
参加費　両会会員とも5,000円
　　（期日までに前納）
申し込　７月29日(金)までに
　　FAXまたはEメールで、
　　①催し名　「共催茶室見学会」
　　②氏名③会員（個人・団体）・一般区分④職場名または学校名⑤参加証郵送先（郵便番号）
　　⑥連絡先電話番号
　　を添えてお申し込みください。
申込先　(社)日本建築協会編集事業課
　　〒540-6591
　　大阪市中央区大手前1-7-31
　　（OMMビル７階）
　　TEL : 06-6946-6981
　　FAX : 06-6946-6984
　　E-mail : jigyoka@aaj.or.jp



玉林院蓑庵・霞床席

今回は、建築学会の05年度大会（近畿）が９月１日～３日に開催されるのを受けて、協会・学会の共催による茶室見学会を企画しました。（参加は両会のどちらかの会員に限る）京都市北区、大徳寺内にある孤篷庵の「忘筌」と、玉林院の「蓑庵・霞床席」を見学します。

●孤篷庵「忘筌」（ぼうせん）
忘筌は孤篷庵の方丈の書院にあたり、遠州はここを茶の湯に使える座敷として工夫し、書院造りの構えだけで茶室を完成させたと言われています。
内部は12畳に一間床が付き、全体に天井を低く抑え、中柱や落ち天井など草庵茶室の要素を用いることなく構成され、北側の3畳間は相伴席に見立てられる造りになっています。座敷の外には広縁、落縁があり、縁先の中敷居、障子等により客殿の「八景の庭」の景色を切り取り、軒下の飛び石、沓脱ぎ石や手水鉢により露地空間を演出しています。


孤篷庵の忘筌

●玉林院「蓑庵（さあん）・霞床席」
寛保２年（1742年）大坂の富豪・鴻池了英が、玉林院内に祖先の牌堂として南明庵を造営し、その付属施設として牌堂の東西に両茶室を配置したものです。蓑庵は草庵茶室で、客座と点前座の間に中板をいれ、３畳敷きに微妙なゆとりを加えています。点前座には中柱を立て、窓は少なく伝統的な雰囲気は良く保たれていますが、天井はいわゆる真行草の３段の変化をつけています。霞床席は４畳半の広さで、蓑庵に対する書院としての意匠を備えています。間口１間の床に違い棚を備え、うしろの富嶽の絵の霞に見立てたといわれています。　（森田芳次）

平成16年度事業報告書

平成16年4月1日～平成17年3月31日

1．総　　会

(1) 第1回通常総会　平成16年6月16日
議事　①平成15年度事業報告承認の件
②平成15年度決算報告承認の件
③役員選任の件
(2) 第2回通常総会　平成17年3月23日
議事　①平成17年度事業計画承認の件
②平成17年度収支予算承認の件
③名誉正会員推薦の件

2．理　　事　　会

(1) 第1回通常理事会　平成16年6月2日
議事　①平成15年度事業報告承認の件
②平成15年度決算報告承認の件
③役員選任の件
(2) 第1回臨時理事会　平成16年6月20日
議事　①会長等役付役員互選の件
②役員の会務分掌の件
(3) 第2回通常理事会　平成17年3月9日
議事　①平成17年度事業計画承認の件
②平成17年度収支予算承認の件
③名誉正会員推薦の件

3．評　議　員　会

(1) 第1回定時評議員会　平成16年6月2日
議事　①議長互選の件
②役員選任候補者の件

4．役　員　会　等

(1) 正副会長会議　2回
(2) 常任理事会　8回

5．常設委員会等

	委員会	小委員会等
(1) 編集委員会	12回	87回
(2) 事業委員会	7回	7回
(3) 教育委員会	2回	5回
(4) 出版委員会	10回	12回
(5) 建材委員会	4回	

6．特別委員会等

(1) 工高生デザインコンクール審査委員会　1回
(2) 青年技術者選考委員会　1回
(3) 「日本建築協会賞」選考委員会　1回
(4) 1000号特集特別委員会　1回

7．建築と社会・特集号

4月号　省リスクな「まち再生」～地域資源を生かした都市・建築・暮らしのデザイン～
5月号　リニューアルの技
6月号　地域住民主体のまちづくりと支援制度
7月号　Product Design+1～プロダクトのインテリアデザインへの展開～
8月号　銭湯～心地よさを求めて～
9月号　「建築家」とは何か－建築家の職能を考える－
10月号　巨大地震にそなえて
11月号　私の空間作法－会員作品－
12月号　第51回青年技術者
1月号　震災から10年～震災より生まれた都市再生の潮流～
2月号　「健やか」～自然作用を活用した健やかな室空間の実現～
3月号　東海支部会員作品2005
東海における施設づくりへの新たな試み

8．出版及び講座

<プロのノウハウ>講座

- プロが教えるキッチン設計のコツ
講師：井上まるみ／住まいの研究室主宰
6月10日　於：ハービスPLAZA4階　受講者62名
- 建物トラブルにみる常識非常識
講師：荒川治徳／荒川建築技術コンサルタント代表
3月30日　於：大阪工業技術専門学校　受講者28名

9．見　　学　　会

茶室見学会（第21回）奈良の八窓庵－伝古田織部
9月17日　参加21名
梅田阪神第2ビルディング、第2吉本ビルディング合同見学会
10月23日　参加57名
大阪証券取引所ビル見学会
11月25日　参加31名
話題建築を聞く（第37回）関西電力新本社ビル見学会
2月16日　参加84名
講師：室井　明／関西電力本店地域共生広報室支配人

10．近代建築シリーズ

日本建築協会と阪急電鉄との共同企画によりモダン建築再見2004（4回シリーズ）を実施した。
京都市内見学：関西近代建築の父武田五一
9月11日、10月2日　参加101名
講師：石田潤一郎／京都工芸繊維大学教授
講演&シンポジウム：近代建築の挑戦者たち
10月30日　参加92名
於：大阪倶楽部（見学会を併せて実施）
講師：坂本勝比古／神戸芸術工科大学名誉教授
石田潤一郎／京都工芸繊維大学教授
山形　政昭／大阪芸術大学教授
梅宮　弘光／神戸大学助教授
コーディネーター：中川　理／京都工芸繊維大学教授
神戸市東灘見学：阪神間の郊外住宅地をよむ
11月6日、11月13日　参加96名
講師：坂本勝比古／神戸芸術工科大学名誉教授
講演&シンポジウム：パトロンが育てた建築家と建築
12月4日　参加46名
於：御影公会堂（見学会を併せて実施）
講師：福田　晴虔／西日本工業大学教授
坂本勝比古／神戸芸術工科大学名誉教授
佐野　吉彦／安井建築設計事務所取締役社長
コーディネーター：橋爪紳也／大阪市立大学助教授

11．建築工事実務講習会

大阪開催「施工計画」
3月15日　9：00－17：00　大阪府建築健保会館
講師：仮設・地下工事　有光利治／鹿島建設関西支店
上部工事・工程　池田孝夫／大成建設関西支店
受講者20名
大阪開催「仮設見積、積算業務」
3月29日　9：00－17：00　大阪府建築健保会館
講師：仮設見積　阪井　聡／大林組本店
積算業務　瀧田俊明／竹中工務店大阪本店
受講者18名
東海支部主催「施工計画、仮設見積、積算業務」
1月26日　9：30－17：00　昭和ビル
講師：施工計画　森　良次／清水建設名古屋支店
仮設見積　堀　政広／大林組名古屋支店
積算業務　坂井弥一郎／竹中工務店名古屋支店
受講者69名

12．新　建　材　の　頁

建材委員会事業として、会誌「建築と社会」の誌面を活用して保水セラミック環境材等新建築素材の特性、市場への展開等の紹介を行ったほか、工場見学会を実施した。

13．コ　ン　ク　ー　ル

第50回工高生デザインコンクール
設計課題：住宅
応募学校数：34校　応募作品数：150点
審査会：9月30日　表彰式：11月20日
審査委員長：設楽貞樹／安井建築設計事務所
入選作：10点（うち最優秀1点、優秀2点）

14．後援・協賛等の承認

- 第24回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）に対する協賛
- 「A／E／C SYSTEMS JAPAN 2004」開催に対する協賛
- 「平成16年建築基準法改正（既存不適格建築物の関連）」講習会開催に対する協賛
- 「平成16年景観法等の制定」講習会開催に対する協賛
- 「けんざい2005－第18回総合建築材料・住宅設備展」に対する後援
- 「2004年　E・家　くらし　住まいの設計コンテスト」に対する後援
- 第28回人間－生活環境系シンポジウム開催に対する協賛
- 「第3回人間－生活環境系国際会議」開催に対する協賛
- 「構造材料の耐火性ガイドブック」講習会開催に対する後援
- 「あすなろ夢建築」第14回大阪府公共建築設計コンクール対する後援
- エコウイルハウスコンセプトコンペティション事業に対する後援
- 第26回Japan Home & Building Show 2004 に対する協賛
- ホームビルダーズエキスポ OSAKA 2004ならびにプロツール＆ハードウェアショーOSAKA 2004に対する協賛
- 「第21回睡眠環境シンポジウム」開催に対する協賛
- 「IFYANAGOYA2005」開催に対する後援
- 「建築・建材展2005」に対する協賛
- シンポジウム「関西文化の再生を目指して」後援
- 設計事務所フェスタ≪ちゃんと住むとこ考えよか展≫後援
- 「鉄筋コンクリート造建築物の耐久設計およびひび割れ対策に関するシンポジウム」開催に対する協賛
- 「景観法等の施行に伴う政省令・運用方針等に関する講習会」開催に対する協賛
- 「第22回睡眠環境シンポジウム」開催に対する協賛
- 「ATC関西学生卒業作品展vo1.10」開催に対する後援
- シンポジウム「くらしといのちを守る」開催に対する協賛

15．青年技術者の顕彰

昭和29年から本顕彰を実施しており、第51回は応募者38名のうち23名を顕彰した。

16．合同忘年懇親会等

建築関係団体合同忘年懇親会
16年度は日本建築家協会近畿支部が当番会となり、下記のとおり開催した。
12月14日　18：00～19：30　太閤園
建築関係団体合同新年交礼会
16年度は（社）日本建築協会が当番会となり、下記のとおり開催した。
1月4日　14：30～15：30　マイドーム大阪

17．役員を送っている団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
日本建築総合試験所	理事
大阪建築防災センター	理事
大阪住宅センター	理事
国際デザイン交流協会	評議員

18．建　築　ク　ラ　ブ

会員の有志で組織する「建築クラブ」は、16年度は計3回大阪全日空ホテルにおいて朝食会ならびに講演会を開催した。なお、7月以降当分の間休会とすることにした。

平成16年度決算報告書

収支計算書

平成16年４月１日～平成17年３月31日

（単位：円）

Ⅰ．収入の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 会費収入	51,591,000	73,627,503	△ 22,036,503
個人正会員	15,524,000	19,300,133	△ 3,776,133
個人正会員（地方）	1,122,000	1,324,500	△ 202,500
団体正会員	34,928,000	52,989,570	△ 18,061,570
準会員	17,000	13,300	3,700
2 事業収入	30,562,000	25,123,133	5,438,867
会誌収入	25,252,000	20,177,902	5,074,098
契約約款収入	2,300,000	2,674,140	△ 374,140
会員名簿収入	0	0	0
出版委員会収入	1,000,000	823,732	176,268
事業委員会収入	600,000	408,500	191,500
教育委員会収入	1,050,000	931,328	118,672
建材委員会収入	0	0	0
記念事業費取崩収入	200,000	0	200,000
事業雑収入	160,000	107,531	52,469
3 寄付金収入	0	3,250,000	△ 3,250,000
4 雑収入	200,000	29,748	170,252
5 前払費用収入	0	125,334	△ 125,334
6 仮払金収入	0	533,776	△ 533,776
7 固定資産売却収入	0	60,000,000	△ 60,000,000
当期収入合計（A）	82,353,000	162,689,494	△ 80,336,494
前期繰越収支差額	0	10,771,855	△ 10,771,855
収入合計（B）	82,353,000	173,461,349	△ 91,108,349
Ⅱ．支出の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 事業費	28,750,000	24,624,246	4,125,754
会誌発行費	25,150,000	21,075,123	4,074,877
契約約款費	1,100,000	1,336,883	△ 236,883
会員名簿発行費	0	0	0
出版委員会事業費	300,000	219,740	80,260
事業委員会事業費	600,000	208,458	391,542
教育委員会事業費	1,050,000	1,281,848	△ 231,848
建材委員会事業費	0	0	0
記念事業費	200,000	251,820	△ 51,820
事業雑費	350,000	250,374	99,626
2 管理費	41,348,000	63,384,841	△ 22,036,841
給与・手当	22,914,000	26,126,494	△ 3,212,494
法定福利費	2,843,000	2,816,768	26,232
退職金	0	13,358,664	13,358,664
福利厚生費	20,000	31,460	△ 11,460
小計	25,777,000	42,333,386	16,556,386
助成費	2,617,000	2,728,343	△ 111,343
会議費	780,000	854,593	△ 74,593
旅費・交通費	45,000	11,550	33,450
通信運搬費	600,000	441,380	158,620
集金費	1,150,000	922,615	227,385
消耗品費	1,450,000	2,060,765	△ 610,765
修繕費	47,000	17,850	29,150
印刷製本費	80,000	84,525	△ 4,525
光熱費	300,000	263,405	36,595
火災保険料	16,000	21,640	△ 5,640
租税公課	2,500,000	1,861,491	638,509
清掃費	183,000	59,325	123,675
建物管理費	4,093,000	4,780,429	△ 687,429
雑費	1,710,000	6,943,544	△ 5,233,544
小計	15,571,000	21,051,455	△ 5,480,455
3 予備費	150,000	0	150,000
4 中期国債ファンド費用支出	0	29	△ 29
5 前受金支出	0	18,692,900	△ 18,692,900
6 仮受金支出	0	927,568	△ 927,568
7 敷金・保証金支出	0	3,436,650	△ 3,436,650
小計	150,000	23,057,147	△ 22,907,147
当期支出合計（C）	70,248,000	111,066,234	△ 40,818,234
当期収支差額（A－C）	12,105,000	51,623,260	△ 39,518,260
収支差額（B－C）	12,105,000	62,395,115	△ 50,290,115
次期繰越収支差額（B－C）	12,105,000	62,395,115	△ 50,290,115

正味財産増減計算書

平成16年４月１日～平成17年３月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．増加の部	
1．資産増加額	
中期国債ファンド増加額	29
敷金・保証金増加額	3,436,650
当期収支差額	51,623,260
小計	55,059,939
2．負債減少額	
前受金減少額	18,692,900
仮受金減少額	927,568
退職給付引当金減少額	13,358,664
小計	32,979,132
合計	88,039,071
Ⅱ．減少の部	
1．資産減少額	
前払費用減少額	125,334
仮払金減少額	533,776
土地売却額	59,800,000
建物売却額	114,672,000
ソフトウエア減少額	66,255
小計	175,197,365
2．負債増加額	
小計	0
合計	175,197,365

当期正味財産増減額	△87,158,294円
前期繰越正味財産額	118,490,451円
期末正味財産合計額	31,332,157円

（注）
予算額に対して決算額が、5,000,000円以上差が生じた主な理由
（収入の部）
・会費収入の増:財政支援による臨時会費があったため
・会誌収入の減:広告収入の減
・固定資産売却収入:大阪駅前第3ビル事務所の売却収入
（支出の部）
・退職金:今期退職者が発生したため
・雑費・事務所移転に伴う経費が生じたため

貸借対照表

平成17年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額	科　目	金　額
Ⅰ．資産の部		Ⅱ．負債の部	
【流動資産】	80,321,317	【流動負債】	49,999,616
現金・預金	73,866,974	未払金	17,131,437
未収入金	5,659,578	前受金	32,439,014
前払費用	688,119	仮受金	429,165
仮払金	106,646		
【固定資産】	6,970,760	【固定負債】	5,960,304
有形固定資産	111,260	退職給付引当金	5,960,304
什器	111,260		
無形固定資産	160,116	【負債合計】	55,959,920
ソフトウェア	160,116		
その他固定資産	6,699,384	Ⅲ．正味財産の部	
記念事業積立預金	2,821,953	【正味財産】	31,332,157
中期国債ファンド	440,781		
保証金	3,436,650		
資産合計	87,292,077	負債及び正味財産合計	87,292,077

計算書類に対する注記

1．重要な会計方針

(1)固定資産の減価償却方法について

・有形固定資産：定額法

・無形固定資産：定額法

(2)引当金の計上基準について

・退職給付引当金

期末退職給与の要支給額を引当てている。

(3)資金の範囲について

・資金の範囲には、現金、預金、未収入金及び未払金を含めている。

(4)消費税等の会計処理について

・消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．次期繰越収支差額の内容は、次のとおりである。

科　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	34,008,224	73,866,974
未収入金	6,427,345	5,659,578
合　計	40,435,569	79,526,552
未払金	29,663,714	17,131,437
合　計	29,663,714	17,131,437
次期繰越収支差額	10,771,855	62,395,115

3．有形固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

科　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什　器	1,112,560	1,001,300	111,260
合　計	1,112,560	1,001,300	111,260

財産目録

平成17年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額
Ⅰ．資産の部	
1．流動資産	80,321,317
【現金・預金】	73,866,974
現金手元有高	85,731
中央三井信託銀行梅田支店	900,492
三井住友銀行大阪中央支店	8,808,139
UFJ銀行瓦町支店	10,607,404
りそな銀行北浜支店	3,725,272
郵便振替　00910－9－39975	16,385,960
普通貯金マーチャンダイズビル内郵便局	1,008
定額預金マーチャンダイズビル内郵便局	34,000
定期預金三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000
定期預金UFJ銀行瓦町支店	32,318,968
【未収入金】	5,659,578
会誌収入	4,166,500
個人正会員会費収入	894,899
地方会員会費収入	98,700
団体正会員会費収入	487,479
教育委員会収入	12,000
【前払費用】	688,119
助成費	621,929
会誌発行費	66,190
【仮払金】	106,646
切手・はがき代	106,646
2．固定資産	6,970,760
【有形固定資産】	111,260
什器　書棚一式	111,260
【無形固定資産】	160,116
ソフトウェア	160,116
【その他固定資産】	6,699,384
記念事業積立預金	2,821,953
三井住友銀行大阪中央支店	2,821,953
国債ファンド　UFJつばさ証券	440,781
保証金	3,436,650
資産合計	87,292,077
Ⅱ．負債の部	
1．流動負債	49,999,616
【未払金】	17,131,437
会誌発行費	2,687,489
退職金	13,358,664
助成費	101,384
集金費	25,100
租税公課	958,800
【前受金】	32,439,014
個人正会員会費収入	5,659,400
団体正会員会費収入	26,225,114
地方会員会費収入	470,100
準会員会費収入	8,400
会誌収入	76,000
【仮受金】	429,165
給与源泉税預かり	41,820
報酬源泉税預かり	174,468
健康保険料・介護保険料預かり	21,560
厚生年金保険料預かり	30,655
市民税預かり	25,000
見学会暫定保険料預かり	51,832
誤振込預かり分	83,830
2．固定負債	5,960,304
退職給付引当金	5,960,304
負債合計	55,959,920
Ⅲ．正味財産の部	
正味財産	31,332,157
負債及び正味財産合計	87,292,077

平成17年度

日本建築協会役員会務分掌（敬称略）

名誉会長	佐野　正一／㈱安井建築設計事務所	
名誉会長	市川　　宏／㈱東畑建築事務所	
名誉顧問	薬袋　公明／㈱日建設計	
会　　長	佐野　吉彦／㈱安井建築設計事務所	
副 会 長	足高　晴夫／㈱きんでん	会勢・事業担当
副 会 長	井上　　豊／大阪大学名誉教授	編集・研修担当
副 会 長	門川　清行／㈱竹中工務店	企画・財務担当
副 会 長	髙木　嗣郎／㈱大林組	会勢・事業担当
副 会 長	中谷　秀敏／大阪ガス㈱	総務・事務局担当
副 会 長	中井　　進／㈱日建設計	編集・研修担当

理事（○印は常任理事）

（総務） 6名
大林　剛郎／㈱大林組
栗原　信英／栗原工業㈱
立野　純三／㈱ユニオン
○松原　徹雄／㈶日本建築総合試験所
伴　　昭秀／㈱西原衛生工業所
○山形　政昭／大阪芸術大学

（財務） 4名
奥村太加典／㈱奥村組
木村　之彦／木村工業㈱
相馬　一男／住友電設㈱
森本　晴夫／三和建設㈱

（編集・出版） 9名
○上原　正行／神戸大学
岡田　聿之／㈱東畑建築事務所
久我　三郎／久我産業㈱
佐藤友美子／サントリー㈱次世代研究所
○設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所
竹中　統一／㈱竹中工務店
立成　良三／㈶大阪住宅センター
広原　盛明／元・京都府立大学
堀田　修二／鹿島建設㈱

（会勢） 12名
淺沼　誠夫／㈱淺沼組
古原　直人／毎日工業㈱
小橋　鴻三／清水建設㈱
古林　敏郎／㈳広島県建築士会
鴻池　一季／㈱鴻池組
菅谷　　節／ダイダン㈱
錢高　善雄／㈱錢高組
浜辺　鶴志／戸田建設㈱
藤井　　實／エスケー化研㈱
松本壮一郎／愛知工業大学
前川　　翼／㈳大阪建設業協会
與謝野　久／㈱日建設計

（事業） 7名
北山　啓三／大阪市住宅局
森井　雅久／都市再生機構
城口　俊雄／㈱大阪城口研究所
白井　元之／㈱フジタ
○瀬戸川　葆／関西住宅品質保証㈱
任田　　勉／西松建設㈱
渡辺　勝紀／㈱熊谷組

（研修） 7名
岩橋　貞雄／八千代電設工業㈱
片倉　健雄／元・近畿大学
岨　　良政／大阪府建築都市部
千種　幹雄／㈱昭和設計
寺下　　均／大成建設㈱
古元　眞美／㈱シブタニ
和田　克朗／元・㈶日本建築センター

常務理事　人見　尤浩

（監事）　川口　順弘／元・㈱竹中工務店　　前田　隆司／㈱前田商会
杉山　泰生／元・㈳日本建築協会

平成17年度

日本建築協会評議員（敬称略）

議　長　三木　敏男／㈱サングローブ
副議長　宗田　奎二／㈱竹中工務店

本部所属評議員

（技術部門）
三木　敏男／㈱サングローブ
村上幸三郎／村上デザイン事務所

（総合部門）
木村　修治／㈱奥村組
小西　和一／㈱錢高組
笹本　孝史／㈱鴻池組大阪本店
竹岡伸一郎／三井住友建設㈱
中窪　義征／㈱淺沼組
野村　俊明／安藤建設㈱
宗田　奎二／㈱竹中工務店
森井　繁夫／㈱大林組
山本　清彦／戸田建設㈱
和田　哲郎／飛島建設㈱
金山　隆興／㈱金山工務店
中道　正伸／㈱中道組
原　　眞一／コーナン建設㈱
藤田　正昭／豊國建設㈱

（電気部門）
浅海　伸之／浅海電気㈱
大久保　喬／近畿工業㈱
大石　忠彦／㈱きんでん
嘉納　秀一／三宝電機㈱

（管工部門）
田中　達夫／㈱精研
若林　尚史／若林設備工業㈱
春木　雄一／㈱三晃空調大阪本店
古武　秀幸／㈱三冷社西日本支社

（建材部門）
月城　則男／新東洋合成㈱
深江　隆司／アスワン㈱
山中　豊茂／㈱山中製作所
安田　　誠／安田㈱

支部所属評議員

（京都支部）
上林　研二／㈱地域生活空間研究所
長瀬　博一／長瀬建築研究所
森島　照雄／森島建築設計事務所
山田　昌次／花豊造園㈱

（中国支部）
井上　弘美／アオケン㈱
国沢　幹男／日本住宅パネル工業協同組合
嶋津　孝之／広島大学
村重　保則／現代建築設計事務所㈲

（東海支部）
小宮　三辰／三辰設計事務所
後藤　利秋／㈲和光建築計画研究所
鈴木　慶智／㈱伊藤建築設計事務所
寺本　英一／㈲T.R.A
中村　哲士／元・安井建築設計事務所
福田　泰造／福田泰造建築事務所
森田富士男／㈲シード
芳山　明久／元・㈱INAX

（和歌山支部）
岩脇　伸行／環境建築計画
北山　泰秀／㈱北山組

平成17年度

日本建築協会支部長（敬称略）

京　都　望月　秀祐／モチケン・コーポレーション
中　国　古林　敏郎／広島工業大学講師（非常勤）
東　海　松本壮一郎／愛知工業大学
和歌山　東野　信義／東野建築設計事務所

平成17年度

日本建築協会委員

平成17年４月13日開催の常任理事会において、下記のとおり各委員会委員を委嘱いたしました。

（敬称略　◎印委員長　○印副委員長　△印幹事　☆顧問　　職場名は略称を用いました）

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

◎設楽　貞樹／安井建築設計事務所

■特集小委員会

計画分科会

（計画系）

飯田　　匡／大阪大学大学院
伊縫　憲幸／日建設計
鈴木　克彦／京都工芸繊維大学大学院
田中　直人／摂南大学
高橋　和也／大阪市計画調整局
辻　　武之／阪急不動産
紅谷　昇平／UFJ総合研究所
△松田奈緒子／京都工芸繊維大学大学院院生
三宅　次郎／阪神電気鉄道
森　　康郎／竹中工務店
吉村　英祐／大阪大学大学院

（建築計画系）

安部　新二／大建設計
荒木　宏之／大成建設
江副　敏史／日建設計
奥村　朋孝／鴻池組
菅野　忠司／鹿島建設
木多　彩子／摂南大学
楠　　敦士／安井建築設計事務所
小林　優子／ＵＲ設計
桜井　則雄／大林組
△所　　千夏／アトリエＣＫ
野田　隆史／竹中工務店
枇杷　健一／枇杷健一建築設計室
松森　織江／東畑建築事務所

（インテリア・住宅系）

阿部　泰造／都市再生機構西日本支社
加藤　　力／宝塚造形芸術大学
神谷　浩司／大林組
黒栁　　亮／竹中工務店
高野　直樹／安井建築設計事務所
△田中　浩介／積水ハウス
戸井賢一郎／日建スペースデザイン
ペリー史子／大阪産業大学
本山　　仁／松下電工

構造分科会

稲田　竜也／デザイン・構造研究所
大氏　正嗣／デザイン・構造研究所
木下　隆嗣／東畑建築事務所
白髪　誠一／北條建築構造研究所
田渕　勝道／竹中工務店
中塚　光一／大林組
永原　吉浩／鴻池組
難波　　尚／神戸大学
△肥嶋　好浩／ZEN建築構造事務所
向井　洋一／奈良女子大学
安田　拓矢／安井建築設計事務所
山本　健二／日建設計

設備分科会

赤澤　正治／竹中工務店
△梶井　宏修／近畿大学
河井　康人／関西大学
河津　隆之／河津隆之事務所
近藤　国夫／きんでん
多賀　浩三／大阪市建築技術協会
谷野　太志／新菱冷熱工業
夏井　重行／富士ネオ工業
桝井　貴廣／総合設備コンサルタント
森本　史郎／安井建築設計事務所
村上幸三郎／村上デザイン事務所
山下　　修／大阪市住宅局営繕部

施工材料分科会

植田　　実／清水建設
竹中　秀文／大林組
太刀川丈爾／竹中工務店
△平田　茂良／大和ハウス工業
平野　　剛／鹿島建設
吉田　正友／日本建築総合試験所

法令分科会

片岡　正和／大阪市住宅局建築指導部
野村　　彰／京都府土木建築部
△溝上　省二／京都市都市計画局
宮本　佳典／大阪府建築都市部
山口　一郎／兵庫県県土整備部まちづくり局
山根　正利／神戸市都市計画総局

■作品作風小委員会

赤木　　隆／日建設計
石塚なぎさ／大阪府公共建築室
居内　章夫／徳岡昌克建築設計事務所
井上　雅祐／大林組
池上　　明／エーアイアーキテクトスタジオ
稲垣　和江／イナガキ ケンチク ケンキュウショ
川上比奈子／夙川学院短期大学
倉渕奈千子／田中啓文総合建築研究所
澤田　純一／兵庫県県土整備部まちづくり局
戸川　勝之／安井建築設計事務所
鞆野　淳司／竹中工務店
○中村　文紀／東畑建築事務所
芳谷　晴彦／清水建設
増田　敬彦／増田敬彦一級建築士事務所
山田　俊紀／昭和設計

■広告企画小委員会

荒本　俊明／鴻池組
今井　成年／竹中工務店
大竹　賢次／大成建設
　未定　　／昭和設計
前田　　衛／日建設計
横田　知生／大林組
○渡邉　浩文／安井建築設計事務所

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・懇親会・若い会員の集いなどの企画および実施

◎瀬戸川　葆／関西住宅品質保証
○原見　昌志／元・安井建築設計事務所
○南　　次郎／元・淺沼組
○米井　　寛／東畑建築事務所

■情報見学小委員会

○松浦　剛士／清水建設
　赤松　千州／竹中工務店
△伊藤　　博／元・松村組
△大喜多孝哉／大林組
△小林　一成／鴻池組
△坂田　雄二／竹中工務店
△中西　　稔／ジェイアール西日本コンサルタンツ
　福家　　敬／元・大阪府
△松浦　範明／大林組
△森田　芳次／安井建築設計事務所
　岡本　　隆／日建設計
　川東　　隆／日建設計
　佐々木　栄／昭和設計
　田崎　祐生／大阪成蹊大学
　塘　　伸夫／東畑建築事務所
　平島　則行／きんでん
　福島　　隆／鹿島建設
　杢谷　通夫／大成建設

■若い会員の集い小委員会

○杉本　真一／大阪芸術大学
△石井　太志／昭和設計
　青田有里子／島隆男建築研究所
　河合　哲夫／竹中工務店
　杉山　美納／東畑建築事務所
　樋上　新治／都市プランナーズオフィス
　廻　はるよ／廻はるよ建築＋デザイン事務所
　吉川　　雅／アトリエJIGSAW

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行、ならびに講座の企画・実施

◎上原　正行／U建築工房
　荒川　治徳／荒川建築技術コンサルタント
　井上まるみ／住まいの研究室
　植村　典人／修成建設専門学校
　川戸　敏雄／近畿大学
　河田　康夫／竹中工務店
　神田　暢子／神田建築工房
　田中　正司／鹿島建設
　玉水　新吾／エス・バイ・エル
　谷川　康信／大阪工業技術専門学校
○中川　　徹／清水建設
　峯松　秀吾／マイン企画
☆山田　　修／修建築事務所

■教育委員会

建築教育についての調査・研究、講習会の企画・実施ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎山形　政昭／大阪芸術大学

■講習会小委員会

○有光　利治／鹿島建設
　梶川　賢一／大成建設
　佐貫　　久／高松建設
　白塚　芳郎／鴻池組
　田中克治郎／錢高組
　水野　貴夫／清水建設
　八木　博嗣／竹中工務店
　山内　博記／淺沼組

■工高生教育小委員会

○和田　康由／大阪市立都島第二工業高校
△植松　清志／大阪人間科学大学
　大西　正宜／大阪府立西野田工業高校
　岡本　展好／大阪市立都島工業高校
　小池　啓夫／日建設計
　小山　将史／堺市立工業高校
　神野　　茂／堺市立工業高校
　武田　雄二／愛知産業大学
　出雄　　隆／大阪市立工芸高校
　永島　敏郎／安井建築設計事務所
　山岡　　徹／堺市立工業高校
　吉井　和男／東畑建築事務所

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

◎松原　徹雄／日本建築総合試験所
　菅　　知史／鹿島建設
　川上　宏伸／大林組
　河津　龍大／日本建築総合試験所
　阪本　重信／大成建設
　新谷　英夫／奥村組
　徳山　正司／錢高組
　仲西孝子郎／日建設計
　西出　　浩／大建設計
　松本　　章／東畑建築事務所
　三井　　実／大阪府公共建築室
　森川　　務／竹中工務店
　安野　明男／都市再生機構
　和田　克朗／元・日本建築センター

■企画委員会

協会の今後の運営を検討、審議

◎片倉　健雄／元・近畿大学
　三木　敏男／サングローブ
　和田　克朗／元・日本建築センター

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成17年12月号

「第52回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに51回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

52回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成17年9月末日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第52回青年技術者特集号」（平成17年12月号）に掲載するとともに、記念品を贈呈する。

＊第48回から、すいせん者による「すいせんのことば」を省いています。応募提出規定に沿って、応募資料をご提出下さい。

6．提出資料

■すいせん用紙

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者・本人の執筆に限る。

このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7．**提出期限**　平成17年9月20日（火）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984

9．**青年技術者選考委員会**（平成17年度）

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委　員　末包　伸吾／神戸大学助教授
貴志　雅樹／高岡短期大学教授・貴志雅樹環境企画室
佐々木正人／竹中工務店プロジェクト推進本部長
松村　孝治／東畑建築事務所取締役開発本部長
多田　元英／大阪大学大学院助教授
樫原　健一／鴻池組建築本部エンジニアリング部長
三浦　満雄／日建設計設備設計部設計長
田辺　光雄／清水建設関西事業本部設計部第4部副部長
梶川　賢一／大成建設関西支店建築部次長
釼吉　敬／大林組本店建築生産技術部部長



作　品　募　集

「建築と社会」平成17年11月号の

「第12回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」11月号では会員作品発表の場として、**“第12回会員作品特集号・私の空間作法”**を企画しております。対象は、建築、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、まちづくり、アート等、建築に関わるすべてとし、表現方法は、写真、CG等の別を問いません。
みなさまの個性あふれる作品の応募をお待ちしております。

※

■提出資料

作品は、竣工作品、計画案を問いません。下記要領に基づいてお送り下さい。

1．写　真　外観・内観・ディテール・模型写真等のプリント
（サイズはキャビネ判程度、5～6枚）
2．CG等　パース、コンセプト図等
（パースの写真撮影等は致しかねますので、印刷原稿となる状態でお願いします）
3．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
4．説明文　作品についての考えを300字程度にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足

1．掲載料は無料です。誌面は白黒ページとなります。
2．写真の撮影者名は必ず付記願います。
写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
3．掲載頁数は、原則として、1社（1人）1頁とします。
また、8月末までに竣工予定の作品を掲載希望の場合、写真等の原稿期日は配慮致しますので、ご連絡下さい。
4．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合があります。
5．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先

1．期　日　**2005年8月30日（火）必着**
2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
「会員作品特集号」係
〒540-6591　大阪市中央区大手前1丁目7番31号
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
TEL. 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984

建築と社会

Architecture and Society
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第86集　通巻1000

2005 7

目次

特集●　次世代に伝える「木」の建築

［総論1］　次世代に伝える「木」の建築●坂本　功 …… 18
［各論1］　「木の家」をデザインする―山と町をつなぐこと―●三澤文子 …… 22
「木」を生かす設計術●竹原義二 …… 24
［各論2］　木を生かした建築の構造技術●長瀬　正 …… 26
木々の呟き●中川克己 …… 28
木造建築は火に弱いか?―良い木造と悪い木造―●原田和典 …… 30
「木」を伝える●佐野春仁 …… 32
［総論2］　世界に誇れる木造建築●木下孝一 …… 34

特集●　「建築と社会」1000号記念

［グラビア］　1000枚の表紙 …… 48
［本文］　晴れやかさからの出発、そして●佐野吉彦 …… 50
活動シーズの変遷とその行方●與謝野　久 …… 51
「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷●北浦かほる … 53
［座談会］　歴史を踏まえて未来へ―協会活動を魅力あるものに― …… 64
上原正行／河津龍大／神田暢子／小山将史／中村文紀／松浦剛士
［設楽貞雄外遊日記］　90年前、建築家が見た欧米
大正元年10月16日、神戸駅から …… 70
大正一ケタ時代の建築の世界●石田潤一郎 …… 71

会告　総会議決お知らせ.臨時理事会議決のお知らせ.第22回茶室見学会・大徳寺 孤篷庵「忘筌」及び玉林院「蓑庵・霞床席」.平成16年度事業報告書.平成16年度決算報告書.平成16年度日本建築協会役員会務分掌.日本建築協会評議員.日本建築協会支部長.日本建築協会委員.若き創造者たちへ―第52回青年技術者特集号へのお誘い―.私の空間作法―会員作品特集号―作品募集 …… 1

作品作風　横浜市立みなと赤十字病院 …… 10
介護老人保健施設　ケアヴィラ宝塚 …… 14

gallery　動きのあるデザイン（クレフテ）●川上比奈子 …… 16

法令コーナー　老朽危険家屋への神戸市の取り組み●平川利人 …… 38

構造の頁　JR奈良駅の曳家●奥田和弘 …… 39

REPORT　葉　祥栄／教授退官最終講義レポート
『メビウスの輪を歩いて』～ミースから日本的な空間の精神性へ～●横井篤文 …… 40
日本の精神的空間―非物質性の発見●葉　祥栄 …… 43

information　第7回「人間サイズのまちづくり賞」募集.歌一洋ヘンロ小屋展.第25回大阪都市景観建築賞（愛称:大阪まちなみ賞）.戦後60年目の戦争展作品募集.特別展「第51回 全関西美術展」開催並びに作品募集.「エコビルド賞」作品募集.特別展「大阪近代住宅ものがたり―あこがれの住まいを求めて」.'05「ダントー」「ディープライス」新作発表会.建築仕上診断技術者資格取得講習.「海のギャラリー」38年前の姿に復元.AWDA2006、作品募集.「世界遺産・博物館島　ベルリン至宝展」―神戸市立博物館― …… 44

月間の動き　平成17年5月分 …… 45

※1000号記念協賛広告目次はp.90に所載

今月の表紙

企　　画　枇杷健一
企画・写真　伊藤　彰
表紙デザイン　伊藤　彰

御堂筋沿いの銀杏の緑陰が、昨年オープンしたアップルストア心斎橋のステンレスの外壁面に映り込んでいます。

混沌たる都市の中に在るいつまでも変わらない銀杏並木の風景と、刻一刻と変化し続ける新しい都市の風景。

それらの一瞬の重なりが、時として美しい風景をつくる瞬間があるような気がします。

（枇杷 健一）

■特集予告
8月号／改正建築基準法と景観緑三法
9月号／火災から守る
10月号／構造技術の進歩と今後の課題

編集委員会（平成17年度）

■副会長　永原　吉浩
井上　豊　雛波　尚
中井　進　△肥嶋　好浩
■編集担当理事　向井　洋一
上原　正行　安田　拓矢
岡田　聿之　山本　健二
久我　三郎　□設備分科会
佐藤友美子　赤澤　正治
◎設楽　貞樹　△梶井　宏修
竹中　統一　河井　康人
立成　良三　河津　隆之
広原　盛明　近藤　国夫
堀田　修二　多賀　浩三
■特集小委員会　谷野　太志
□計画分科会　夏井　重行
★計画系　桝井　貴廣
飯田　匡　森本　史郎
伊縫　憲幸　村上幸三郎
鈴木　克彦　山下　修
田中　直人　□施工材料分科会
高橋　和也　植田　実
辻　武之　竹中　秀文
紅谷　昇平　太刀川丈爾
△松田奈緒子　△平田　茂良
三宅　次郎　平野　剛
森　康郎　吉田　正友
吉村　英祐　□法令分科会
★建築計画系　片岡　正和
安部　新二　野村　彰
荒木　宏之　△満上　省二
江副　敏史　宮本　佳典
奥村　朋孝　山口　一郎
菅野　忠司　山根　正利
木多　彩子　■作品作風小委員会
楠　敦士　赤木　隆
小林　優子　石塚なぎさ
桜井　則雄　居内　章夫
△所　千夏　井上　雅祐
野田　隆史　池上　明
枇杷　健一　稲垣　和江
松森　織江　川上比奈子
★インテリア・住宅系　倉澤奈千子
阿部　泰浩　澤田　純一
加藤　力　戸川　勝之
神谷　浩司　鞆野　淳司
黒柳　亮　○中村　文紀
高野　直樹　芳谷　晴彦
△田中　浩介　増田　敬彦
戸井賢一郎　山田　俊紀
ベリー史子　■広告企画小委員会
本山　仁　荒本　俊明
□構造分科会　今井　成年
稲田　竜也　大竹　賢次
大氏　正嗣　前田　衛
木下　隆嗣　横田　知生
白髪　誠一　○渡邊　浩文
田渕　勝道
中塚　光一

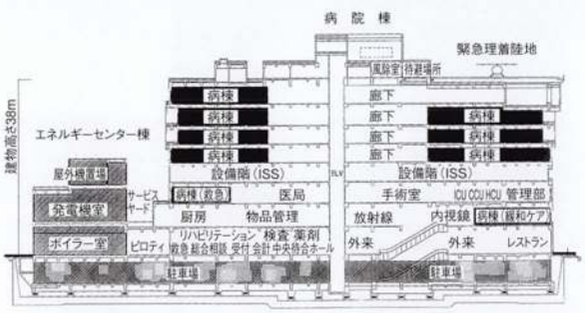
◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2005年6月25日
発　行　2005年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
（株）NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

南西面全景



航空写真



病院正面方向から見た断面図

所 在 地 ——横浜市中区新山下3-12-1
敷地面積 ——28,613㎡
建築面積 ——14,100㎡
延床面積 ——74,148㎡
構造規模 ——SRC、B1F、8F
工　　期 ——2000年12月～2003年12月
最 寄 駅 ——JR桜木町駅から市営バス
撮　　影 ——三輪晃久写真研究所

作品

設計・監理■
伊藤喜三郎建築研究所

施工■
建　築：（本館棟）清水建設・大林組・大成建設・三星物産・
佐藤工業・飛島建設・安藤建設・渡辺組・
紅梅組・奈良建設JV
（エネセン棟）相鉄建設・八千代アクタスJV
電　気：きんでん・トーエーネック・共栄社・三沢電機JV
空調設備：川本工業・新菱冷熱工業・日宝工業・鈴木商会JV
衛　生：ダイダン・三建設備工業・興信工業・山本電機水道JV

横浜市立みなと赤十字病院

横浜市立みなと赤十字病院の設計コンセプトを「**快適で機能的な病院**」・「**長持ちする病院**」・「**災害に強い病院**」と定め、以下のような計画内容とした。

■快適で機能的な病院

1．機能的でわかりやすい部門配置：複雑な平面計画になりがちな大規模病院では、機能的でわかりやすい部門配置とすることが、患者・職員の双方にとって快適であるための重要な条件と言える。
従って、外来部門及び外来関連部門を出来る限り1階に設けた。また、サービス部門は、外部からのアクセスが良く、かつ院内の供給の核となるエレベーターコアに近い位置に設けることにより、スタッフ動線の短縮を図った。

2．病棟の充実：入院患者の不安や不快感を和らげ、安心して治療に専念出来る快適な療養環境を提供するという観点から個室率を高くし、一般的多床室（4床室）においてはベッドサイドにそれぞれの窓を持つ、個室的多床室の形を採用した。

3．隣接道路からの騒音・排気ガス対策：病院の主要部分はなるべく北側道路から遠ざけて配置するとともに、敷地の北側にはエネルギーセンターなど障壁となる建物を配置して、騒音の緩和を図った。

■長持ちする病院

1．将来増・改築スペースの確保：病院建築を永く使うためには、将来の医療環境の変化に伴うスペースの拡張や、大規模な修理・模様替えをする際の仮移転先スペースの確保等、平常の病院機能を維持しつつ容易に増・改築出来るスペースが必要である。今回の計画に当たっては、5階の一部に将来増築可能なスペースを確保した。

2．変更・更新しやすい建築・設備計画：建物の経年変化や使用条件の変化に応じて変更・更新が容易にでき、構造躯体が寿命を迎えるまで、建物を使い続けられるような配慮の一つとして設備中間階（ISS）を設けた。

■災害に強い病院

1．免震構法の採用：大地震時においても病院機能を停止することなく医療活動が可能なように、エネルギーセンターを含む全ての病院機能を免震層の上に配置した。

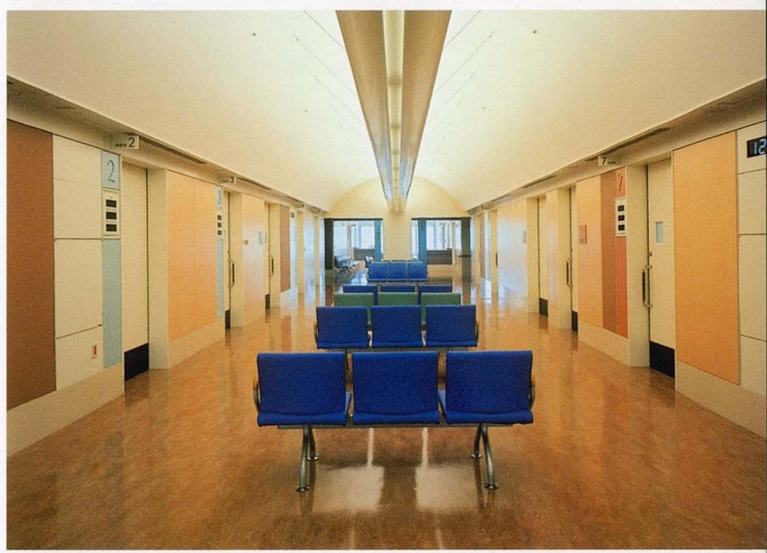
2．主要機能の地上設置：災害時の浸水の危険性も配慮して、災害時に必要となる医療機能は全て（エネルギーセンターも含め）地上階に設置した。

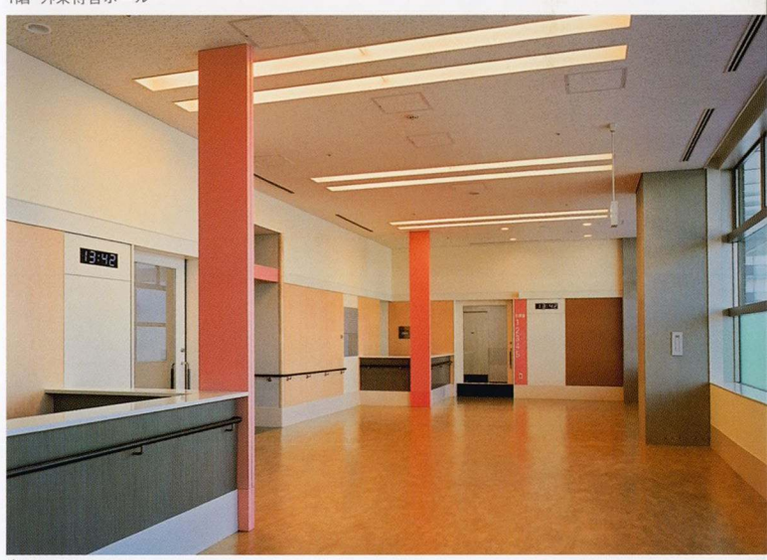
3．エネルギーの備蓄：主エネルギーを電気・都市ガスとし、災害時に両方のエネルギーが遮断されたときでも、備蓄液体燃料（備蓄量､軽油7日分）にて、コージェネレーションを活用し、防災及び医療負荷に電気及び熱エネルギーを供給することができる。

（名取政春／伊藤喜三郎建築研究所）



1階 耳鼻・咽喉診察室廻り


1階 外来待合ホール

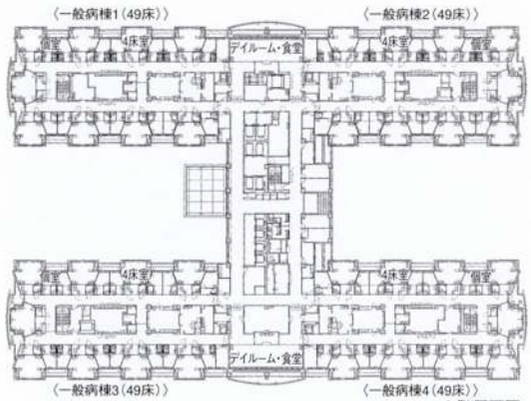


1階 外来待合ホール

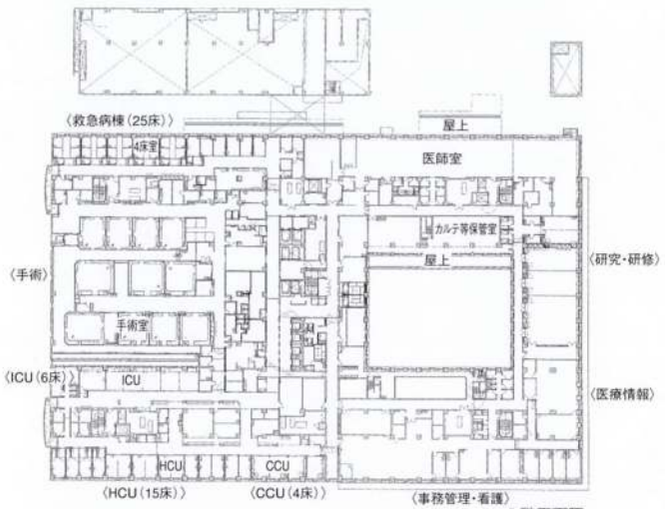




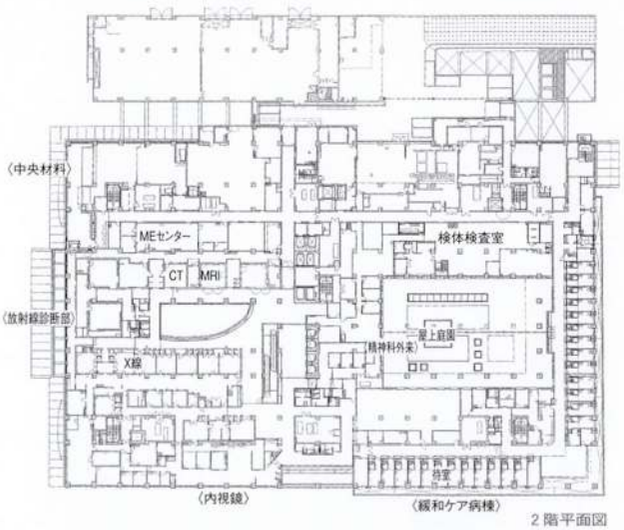
1階 中央待合ホール



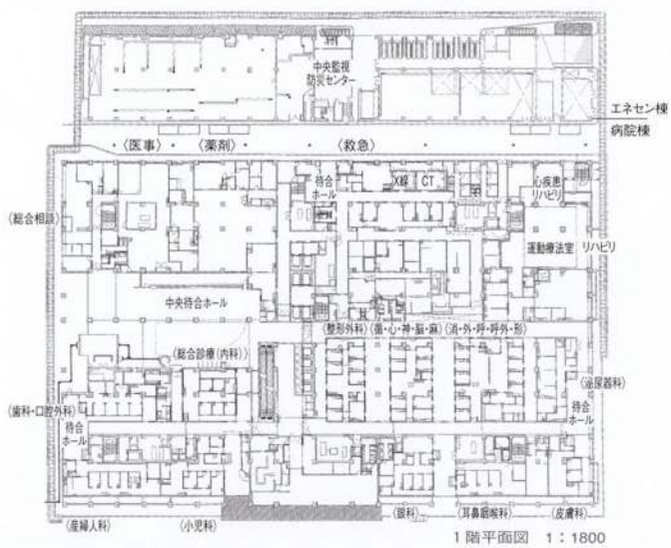
6 階平面図



3 階平面図



2 階平面図



1 階平面図　1：1800


一階外来廊下


一般病棟 4 床室（個室的多床室）


一階　リハビリテーション室



作品風作

設計監理■
上坂設計

施工■
大林組

介護老人保健施設
ケアヴィラ宝塚

独特の景観を構成する宝塚の街並に、ユニットケア形式の新しい介護老人保健施設が誕生した。この施設は、100人定員の介護老人保健施設と30人定員のデイケア、9人定員のグループホームで構成されている。

宝塚の街並で特徴的な屋根の色（スペイン瓦）をバルコニーのフレームに施し、宝塚の街並に馴染みながら独自の外観を有する建物としている。長いバルコニーを区切るフレームは、内部の生活単位と外観の調和を図り、大きな建物ボリュームにヒューマンスケールを与えている。既存の樹木を活かした配置計画と屋上庭園や光庭を積極的に取入れたプランニングにより、機能的でありながら「ゆとり」のある空間を実現している。建物の中にいながらも四季の変化や気候の変化を感じ取ることができ、あたたかいふれあいの場が創出されることを願っている。（中川幸洋、角田泰孝）



所 在 地 —— 兵庫県宝塚市亀井町
敷地面積 —— 3,869.69㎡
延床面積 —— 5,204.90㎡
構造規模 —— RC、5F
工　　期 —— 2004年6月～2005年3月
最 寄 駅 —— 阪急今津線逆瀬川駅
撮　　影 —— エスエス大阪（左海一郎）


▲正面外観


▲ロビーからデイケアを見る


▲デイルーム

▼機械浴室と一般浴室



gallery

7

動きのあるデザイン

設計

クレフテ

中津に事務所を構え、店舗の内装設計を中心に、オリジナルの家具、照明の製作を行なうデザイングループ。機能的、印象的かつリアリティを目指した創作活動を進めている。事務所に併設するギャラリーはオリジナルの家具、照明の展示を中心に、かつ若手作家の作品展示の場として機能。プロデュースを行う飲食店dadacoとともに、kräf・teの考えるモノ作りを表現している。

12

kräf・te 動作を誘発するデザインを意図する

it makes me moving various action

ε

4

クレフテ

2004.3　基幹メンバー3人にてkräf・te設立
2004.12　飲食担当を迎えdadacoのリニューアル
2005.4　事務所オープン
2005.7　ギャラリーリニューアル
URL:www.mdnc-krafte.com

企画編集　川上比奈子(作品作風小委員会)

特集

次世代に伝える「木」の建築

「木」は代表的な日本の伝統的な建築材料です。日本の気候風土に適し、かつ国内の豊富な資源でもあり、昔から住宅・寺社仏閣等と、幅広く使われてきました。今も、木を好み、新しい木造建築を作り続ける建築家・棟梁は少なくありません。

そんな中、木造建築をとりまく環境にはまだまだ課題が残っています。

例えば、木造は鉄筋コンクリート造などに比べて耐火・耐震性に劣るとされ、技術開発や法整備が進みつつあるとはいえ、特に大規模建築などで採用しにくい場合があります。また、比較的安価で入りやすい輸入材に対抗し、国内産木材の価格が下がり続け、そのため経営上苦しんでいる林業家も少なくありません。そしてまた一方、数ある大学・工業高校等の中で本格的な木造建築教育を行う学校は皆無に等しく、木造建築技術の継承についても危機感がつのっています。

木造建築は今も変わらず必要とされながら、木造建築生き残りに対し、周辺環境は十分に整備されているとは言えない現実を見据え、改めて木造建築周辺の問題点を見直し、今後の可能性と課題について考えてみたいと思います。

編集委員　所　千夏

総論 1

次世代に伝える「木」の建築／坂本　功

各論 1

「木の家」をデザインする―山と町をつなぐこと―／三澤文子

「木」を生かす設計術／竹原義二

各論 2

木を生かした建築の構造技術／長瀬　正

木々の呟き／中川克己

木造建築は火に弱いか？―良い木造と悪い木造―／原田和典

「木」を伝える／佐野春仁

総論 2

世界に誇れる木造建築／木下孝一

企画　建築系分科会

次世代に伝える「木」の建築

坂本　功

最近の木造ばやり

大学で、木造建築の講義をもうかれこれ30年ほどやってきた。講義の名前は「建築構法特論」である。その内容は、私が講義をするのでしょせん構造寄りの、つまり力学的な観点に偏っているということは変わりがない。

しかし、学生の予備知識に関しては、大きな変化があったので、そのことを念頭に置いて講義するようにしている。その変化とは、学生にとって、木造が特別なものから、当たり前のものになってきたということである。30年前には、建築関係の雑誌に住宅以外の木造の作品が載ることは、まずなかった。それは当然で、建築家が手がける木造は住宅に限られており、それより規模の大きい木造建築は、日本ではほとんど建てられていなかったからである。

20年ほど前大規模木造が復活してきてから、雑誌にもぽつぽつ紹介されるようになってきたが、最初のうちはまだ木造の作品そのものが少数であり、学生にはなじみのうすいものであった。それに対して私はそれが専門だから、国内の作品はもちろん、外国の木造もせっせと見ていた。そこで講義では、「君たちは知らないだろうが、日本でも木造でこんな建物ができている。この前、ヨーロッパへ木造ばかり見に行って来たが、こんな木造が、ごく当たり前に建っている。」などと、自慢げに話ができた。まず、木造でも住宅よりも規模の大きい体育館や学校、公共施設ができるんだ、ということを示すことが講義の目的のような観があった。

しかし最近では、建築関係の雑誌には、ほとんど毎号のように、そのような作品が紹介されており、学生の多くは、私よりはるかに豊富な知識を持っている。教えているつもりの私にとっては、不利な状況になってきているわけだが、それだけ木造がはやるようになっているのだから、めでたいことだと思わないわけにはゆかない。

大規模木造の空白期と復活

大規模木造の空白期と復活については、方々で書いたので重複するが、ここで簡単にまとめておきたい。昭和35年（1960）ころから昭和60年（1985）過ぎまでの30年近くの間、日本では大規模木造の空白期と呼べる期間があった。震災、風水害、空襲、都市大火、老朽化など、木造の負の面が強く指摘された一方で、戦後の高度成長期を迎えて、鉄筋コンクリート造や鉄骨造を作る経済力がついてきたためである。大規模木造の代表的な建物であった湾曲集成材による体育館の建設は、昭和35年を境にして激減した。その後同じ構造による大規模木造が作られたのは、木造復活作戦の一環として建てられた林業試験場（現独立行政法人森林総合研究所）の体育館であり、昭和52年（1977）のことであった。その間に、やはり湾曲集成材を使った所沢聖地霊園礼拝堂（昭和48年、1973）という珠玉のような作品が作られたのは、不思議なほどである。なお、在来構法以外の戸建て住宅の構法として、木質系プレファブの開発とツーバイフォーの導入が行われたのは、昭和30年代の末と、同じく40年代のことであり、大規模木造の空白期の前半のことであった。

さて、昭和60年（1985）ころからの大規模木造の復活の理由として、私は四項目をあげている。まず、貿易摩擦解消の一環としての外材輸入の促進。次に、戦後植林した木が成長し本格的に伐採・利用すべき時期になったこと。三番目に、建築家が木を新しい構造材料として再発見して、意欲的な作品を生み出そうとしたこと。最後に、日本が豊かになってきて一般の人が「木のぬくもり」を感じるゆとりが出てきたこと、である。

その後は、読者の方々がご存じのように、昭和62年（1987）と平成10年（1998）の建築基準法の改正に代表される規制緩和によって、木造ばやりの状況が現在も続いている。しかしこのように木造がはやり始めてみると、心配なこともでてくる。ある県の武道館は、現代木造の代表作のひとつと思い、またそこでの催しにも主体的に参加したこともあってなじみもあるのだが、施工上の落ち度が問題になっている。それは木造部分ではないが、一般論として、このような現代木造の木造部分に不都合が生じる可能性はないとは言えない。せっかくはやり始めた現代木造が、健全に発展するためには、企画・設計・施工・維持管理にわたって、十分な配慮が必要である。



現代木造建築（海の博物館展示棟、内藤廣、平成４年、1992）

既存木造住宅の耐震性

平成７年（1995）の兵庫県南部地震は、阪神・淡路大震災と名付けられた大災害をもたらした。建物の被害は全壊約10万棟、半壊約10万棟であり、犠牲者の数も直後数日のうちに5300人余りに達した。

その犠牲者のうちの9割近くが倒壊した建物の下敷きになったためであり、かつそのおもな元凶となったのは、木造住宅であった。

このことは、耐震性に乏しい木造住宅がきわめて多数建っていたということであり、木造住宅のストックの大きな問題点として認識された。これに関して、既存木造住宅の耐震診断法は、この地震の16年も前の昭和54年（1979）に作られており、しかも、昭和60年（1984）には第1回の改訂までされていた。しかし、その存在は建築の世界でもほとんど知られておらず、この大災害をきっかけとして、再発見されて急に注目されるようになった。最初の版や改訂版の作成にかかわった筆者としては、なんとも妙な感じがした。それ以来、既存木造住宅の耐震診断は、方々で行われるようになり、その分一般の人々にも認知されるようになってきている。

この診断法は、昨年平成16年（2004）に再改訂されて現在に至っている。このように、診断の技術的な手法はほぼ確立されたが、実際の適用となると、意識の問題や費用の点で、まだまだきわめて不十分な状況である。それに加えて耐震補強となると、ほとんど行われていないのが実状である。しかし、次の世代に健全な木造住宅のストックを伝えるとすれば、これは重大な問題である。

木造住宅で耐震性の乏しいものは、一般的には、昭和56年（1981）の新耐震基準（建築基準法の耐震規定の総称）施行以前のものと見なされているが、では現在建っているものが耐震性に関して問題がないかといえば、筆者は必ずしも楽観していない。法令違反かどうかはおくとして、実態として耐震性に乏しいものが、今なお建てられ続けているのではないかと案じている。いま建てているものも、建った瞬間から既存住宅になる。つまり、次世代に伝えるものになる。そうであるなら、いま建てているものの耐震性をしっかりと確保すべきである。住宅の建設に携わるものの社会的使命であり、職業倫理の問題である。



木造住宅の地震被害（新潟県中越地震、川口町新道島）

木造住宅の耐久性

日本の木造住宅の耐久性は、欧米のそれと比較して、格段に低いという統計データがある。しかし、正確には、現在除却されている住宅の平均的な築年数が短いということである。すなわち、多くの木造住宅が、建て替えのために取り壊されている。

これに関して、次のような調査結果がある。ひとつは、東京都内のある地域を限って、現在建っている木造住宅の維持管理の程度と築年数との相関性を調べた。その結果、維持管理が行き届いていないものほど築年数が長い、つまり長生きしているということがわかった。常識と逆の結果である。しかし、これにはすぐ理由が考えられる。維持管理を十分にできるくらいの経済力のある持ち主は、建て替えをする力があり、それすらできない人は、いくら老朽化しても不都合が起こっても、そのまま住み続けざるを得ないということである。

似たようなことは、東海地震対策を県を挙げて進めている静岡県でも聞いた。建て替えが進んでいるのは築30年前後のものが中心で、それより古いものはそのまま残っているというのである。その理由として考えられるのは、それらの古い住宅の持ち主は、老齢化していて、建て替える経済的な余裕がないのである。

このような老朽化した木造住宅のストックも大問題である。おいそれと解決できそうにない。しかし、数十年先を考えれば、やはりいま建てているものが築数十年になる。そこでやはり、次の世代にいいストックを伝えるためには、いま耐久性の優れたものを建てる必要がある。もちろん維持管理は重要である。しかし、最初から耐久性があり、維持管理のしやすいものでなくては、維持管理の効果も上がらない。

ここ十数年の間に、構法的に耐久性を高める方法が普及してきている。床下の地面に防湿用のポリエチレンシートを敷き込むとか、外壁の通気構法などである。これだけではないし、またこれらが万全というわけではもちろんないが、なんらかの工夫をすることによって、耐久性が高まることは確かである。

伝統構法の再評価

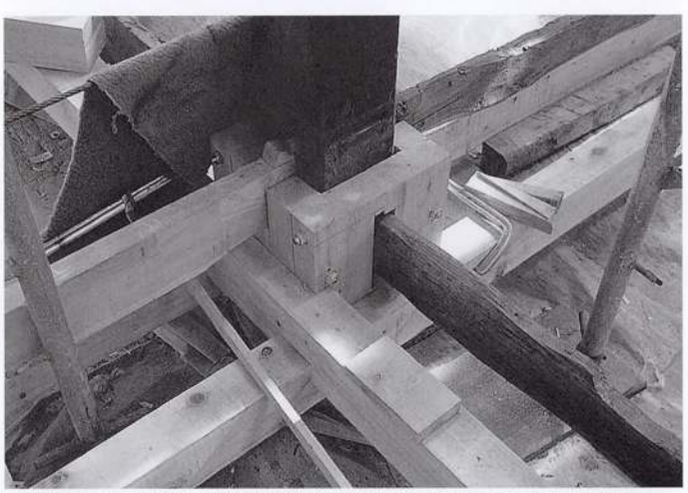
社寺や民家の作り方を、伝統構法と呼んでいる。その構法的な特徴は、貫をもつ軸組と金物を使わない接合部である。それが現代構法では筋交いと金物になっている。その経緯も、すでに方々に書いてきたので、詳しくは繰り返さないが、単純化していえば、明治24年（1891）の濃尾地震における大被害をきっかけとして始められた耐震研究の結果である。

しかしそれは、伝統構法を現代構法に置き換えることであり、伝統構法の特性を吟味した上でのことではなかった。もっとも、耐震性の研究をしている私からみると無理のないことである。伝統構法では、多くの人命が犠牲になり、莫大な財産が失われてきたことに対して、その解決法として安直にでもいいから現代構法、すなわち筋交いと金物による構法が推し進められたのである。

近年、といっても平成7年（1995）の阪神・淡路大震災以降のことであるが、伝統構法の構造特性、なかでも耐震性の研究が盛んになってきた。伝統構法は日本の文化のひとつであるという認識とともに、その耐震性をなんとかしなければ、地震そのものによる被害によって、あるいは耐震性不足という理由による人為的破壊によって、伝統構法の建物が次々に失われてしまう危機感によるところが大きい。

その研究成果によって、相当のことが分かってきた。なによりも、伝統構法そのままの耐震性の評価が可能になりつつあることである。たとえば耐震補強にあたっても、以前はその耐震性をゼロとみなして、付加する現代的補強方法の部分（筋交いや合板張り、鉄骨フレーム）のみの強さで持つようにせざるをえなかった。それが、現在では、伝統構法で不足している分だけを補うような補強方法が採用できるようになってきている。伝統構法の良さを活かしつつ耐震性に関する現代の要求性能を満たすようにするためには、このような方法をぜひ学んでほしい。

ところで、平成に入ったころ、日本各地で伝統構法によるお城の復元が盛んになった時期がある。私はそれを平成の築城ブームと呼んで、見学会を兼ねたシンポジウムを企画したことがある。また現在、平城宮跡では大極殿（正しくは、大極殿院正殿というのだそうである）が復元されつつある。これらのお城や宮殿は、今回の建設にあたっては、もはや本来の目的のためではなく、観光や町おこしのためか、あるいは文化事業としてである。



民家の構造補強（平井家住宅、茨城県、基礎固定にせず足固め）

それでは、このような復元建築は、どのくらいもつであろうか。伝統構法なので、維持管理の仕組みは十分分かっているといってよい。しかし、そのような維持管理を、今後数百年にわたって続けることができるだろうか。多くの場合自治体などの公共建築であるだけに、この点ははなはだこころもとない。もっとも、鉄筋コンクリート造や鉄骨造で数百年ももつものはありそうにないので、生き残るとしたら、これらの復元木造のほうであろう。それだけに、きちんとしたものを作っておく必要があると思う。そういう意味で、私はこれらの復元をちょっとからかいながらも応援している。

これらに対して、お寺で本堂や五重塔が伝統構法による木造で新築されることも、珍しくない。そしてこれらの建物は、今後数百年にわたって建ち続けるであろう。なぜなら、こうして現在新築されている本堂や五重塔も、本来の目的のためのものだからである。いまの時期にせっせと新築しておけば、べつに文化財などにならなくても、日本の文化を伝えるものとして、重要な役割を果たすことになるだろう。

洋風化と和室

一般の住宅が洋風化したのは、戦後のことである。「nLDK」といった集合住宅の間取りが率先する形で進められた洋風化により、新築住宅では畳の部屋がどんどん減ってきた。いまや、年寄り用の部屋としてしか存在しないという勢いである。もちろん、本来の形を備えた床の間は、絶滅の危機に瀕している。

私は、このような傾向は、押しとどめられないと思っている。衣食住という言葉があるが、「衣」はほぼ完全に洋風化している。和服を着るのは、女性では成人式や冠婚葬祭などに限られている。男の場合には、旅館に泊まったときの浴衣くらいなものである。伝統



和風住宅（旧茨城県会館、真壁）

構法を信奉している人で、日常的に和服を着ている人はまずいない。

さて、和室の消滅は、真壁の消滅につながる。すなわち、大壁だけになってきている。そのことは、柱が見えなくなることを意味している。見えなくなれば、木目も木肌もどうでもよくなる。必要な強度があって、狂いが少なければよい。いきおい外材の集成材でこと足りることになる。国産材の杉の出番がなくなるわけである。

また、住宅全体が大壁の構法、すなわち壁をすべて合板や石膏ボードでべた張りした構法の住宅で、和室を作ろうとすると、真壁に見せるためにちりの分だけの厚さの付け柱をつけることになる。この場合にも、外材に檜の突き板を貼ったものを使う。独立柱も集成材に突き板貼りである。無垢の檜の出番はない。

このように、見かけは和室であっても、実はほとんど外材でできているというのが多くの木造住宅の現状である。山には木材資源が着々と蓄積されつつある日本としては、ゆゆしきことではある。秋田や宮崎では、県を挙げて杉の使い道を探っている。今のところその決定打はまだ見つかっていないようであるが、長い目で見れば、木造が見直されてきたように、無垢の杉が見直される可能性はある。そのためには、杉を使っていい住宅が作られなければならない。実務に携わる方々に期待したい。

人の問題

阪神・淡路大震災が起こったとき、近畿地区には木造の耐震性を専門とする研究者は、一人もいなかった。鉄筋コンクリート造や鉄骨造、耐震工学の専門家はたくさんいたのに。いや、昭和40年代には、関東にだって建築出身で木造の研究者は、ほとんどいなかった。（そのころ、私は耐震工学の一分野である地震応答の勉強をしており、木造などなんの関心もなかった）わずかに、さきごろ亡くなられた杉山英男先生が、明治大学で育てられた一握りの研究者しかいなかったといってよい。

しかしいまにして思えば幸いなことに、各大学の農学部林産学科出身で、木造建築を専門とする一群の研究者がいた。この人たちが当時の木造建築を支えていた。

このような状況は、一口に言って、ものごとのはやりすたりの問題である。先に述べたように、大規模木造が空白期に入っていて、つまりすたれていて新しいものが建たないのだから、研究する必要もない。したがって、それを専門とする人を育てる必要もない。それが、昭和60年ころから大規模木造が復活しかけてみると、それにかかわる技術や技能がほとんど失われてしまっていることに気がつかざるをえなかった。つまり、わかる人がいないのである。

現時点では、木造は気味が悪いほどはやっている。だから木造に興味を持つ学生も少なくない。しかし、このような状態、すなわちいつまで木造に追い風が吹き続けるだろうか。私は、少しも楽観していない。それだけに、すたれかかった時にも、ほそぼそとでもいいから、木造の研究を続けられる戦略を練っておくべきだと思う。

木造の多様性を認めよう

ここに書いたことは、ほとんどのことが、私が独自に考えたことではない。木造にかかわってきて、研究者仲間、大工・棟梁、木材業の人など、さまざまな人に聞いて、なるほどそうかと思ったことを、自分流に文章にしたまでのことである。ただし、私はもともと先見の明に欠ける上に、木造を取り巻く状況はきびしく、難問ばかりである。したがって本稿もお説教のような、愚痴のような、寝言のような、とりとめのないものになってしまった。

それにしてもつくづく思うのは、木造は非常に多様であり、またそれに応じて木造に対する考え方もきわめて多様であるということである。木造が好きだという人でも、人によって念頭に置いている「木造」の意味が異なる。無垢の国産材でできている純和風のものだけが木造と思っている人もいれば、鉄やコンクリートとの複合構造も木造だという人もいる。

私にとっては、構造材として木または木質材料が使われているものなら、全部木造である。木造は、住宅を除けばまだまだ少数である。そのなかで、主義主張を押しつけあっている場合ではない。それぞれの人が、自分の好みの木造建築を作り、あるいは評価すべきだと思う。なにせ、木造は無限の可能性のある面白いものだから。

（さかもと　いさお　東京大学大学院研究科建築学専攻教授）

「木の家」をデザインする—山と町をつなぐこと—

三澤文子

木造住宅と環境問題

2002年内閣府の「森林と生活に関する世論調査」において「新たに住宅を買ったりする場合どんな住宅を選びたいと思うか？」という設問に対し、60％が伝統工法（軸組工法のことだと推測する）の木造住宅を選びたいと答えている。伝統工法以外（たとえば2×4工法）の木造住宅を選びたいと答えた約20％と合わせるとおおよそ80％が木造住宅を支持している。確かに新着着工戸数における木造率は1984年に50%を切り、40％台をここ20年間ふらついているといっても、こと戸建て住宅に関しては80％台の木造率であることをすれば、前述の調査の結果と合致することになる。この調査の結果で注目したいのが、「木材を利用した住宅を選ぶときに重視すること」といった設問に対し、「国産材が用いられている」や「手入れが適切に行われている森林の木材を用いている」といった森林の問題、さらには環境の問題を重視した回答が上位を占めていることである。少なくとも、私たちが地域の木をつかった木の住まいをつくる活動をはじめた20年ほど前には、とても得られない回答だろう。そもそも、住宅の多くが木造住宅であり、その木造住宅を構成する木材が、森林が生産する再生可能な材料であるということを、どれだけ理解されていたのだろうか。20年ほど前を振り返れば、住宅を設計することを得意とする設計者であっても、建築材料や構法が、どの程度環境負荷を与えているのかを議論することは、少なかったように思われる。

さて、前述の世論調査であるが、木造住宅が支持されているのにかかわらず、実は日本の木材自給率は下降をたどり、1957年、私が生まれた頃の93％からおよそ50年が過ぎた2002年では20％を切り、現在18％である。日本は国土の約70％が森林であるというのに、多くの木材を海外から輸入して、そして多くを住宅の材料に使っている。主だった世界各国の自給率で50%以下なのは日本くらいというのが現実である（**図1**）。

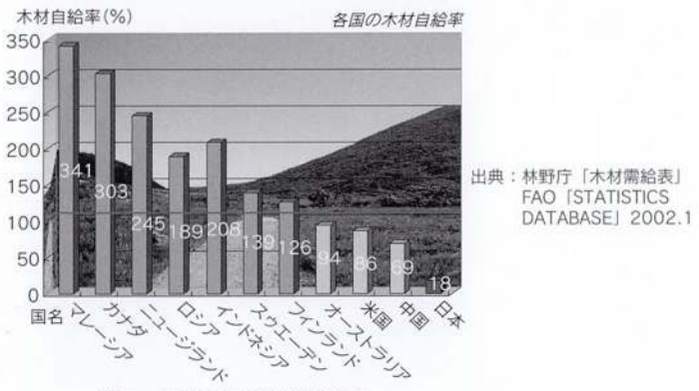


図1　世界各国の木材自給率

民家型構法の提案

木造住宅に国産材が何故使われなくなったのか、その理由を詳しく述べることは、ここでは避けるが、昭和30年代からの住宅戸数の増大から低コストの住宅供給が求められ、それが住宅建設の工期の短縮化につながると、それまでのように軸組みの架構に、どこにでもある竹や土や木で、壁や屋根の下地をつくるような構法では時間がかかって仕方がないということになる。工期短縮のためにはボード類のような新建材は好都合であった。それら新建材と呼ばれる建築材料の普及によって、柱や梁といった木構造材を見せることなく覆ってしまう大壁構法がいつのまにか日本の住宅の標準になってしまった。そしてある意味、品質、量とも安定し、コスト的にも利のある外材や外材集成材が、住宅生産者サイドに大きく支持されることになる。

そのような工法が、住宅の耐久性や環境に及ぼす負荷について問題視されはじめた1983年、「民家型構法覚え書」（注1）が雑誌「新建築」で掲載され、そしてその提案は、林野庁の「国産材ハウス」というモデルに採用され、1984年にはモデルハウスの建設に至った。その設計に携わっていた私は、その後この「民家型構法」がライフワークとなったのだった。

後に加筆され「民家型構法の理念」となったが、そこでは7項目の日本の住宅が抱える問題と課題を述べている。その1項目に「戦後植林された森林が伐期を迎える時期となっているのにかかわらず、国産材が使われなくなっている」という問題に対し、「特に量の多い日本の杉をいかに使っていくか」という課題が提示されている。

それからおよそ20年が経った現在、さらに自給率は下がっているという現実に対し無力感すら感ずる。しかしながら前述の国民の意識が、23年前に比べ明らかに高まっていることを考えると、持続してきた活動の成果を何かしら感ずるものでもある。ただ、環境意識の高くなりつつある住まい手に対し、つくり手側がその要望に、十分応えていない現実があるのではないかとも思うのだ。

阪神大震災から10年がたち

1985年、大阪を拠点としてMs建築設計事務所（注2）を開設し数多くの住宅をつくっていった。10年でおよそ100棟あまりの、「民家型構法」にのっとった木造住宅をつくった1995年に阪神淡路大震災があった。そしてそれから10年間、震災以前に比べ、木造を取り巻く環境は激しく変化していった。震災時に仲間と共に木造住宅の被害調査を行ったことで自分自身の意識も高まっていった。同時に「民家型構法の提案」に重ねて「安全性」を含む住宅の性能を定

量的に把握し設計することの必要性を実感し、さらに性能の確保と同時に、家族の生活を包む安らぎのある空間をつくることの必要性も強く感じることになった。そして1998年５月号の「住宅建築」で、“Ms「木の家」をデザインする”といったタイトルの特集を組んでいただいた。その時、それらの思いを「木の家」ということばで表現することを、当時、編集長と相談の上、決めたことが思い出される。

“Ms「木の家」をデザインする”の「デザイン」の意味は、従来の設計の枠を超えて、林業の現状をどのように改善し、木材流通に風穴をあけ、山から町までの人のネットワークをつくっていくこと、さらには木材の品質や量の確保のために、どのようにしていけばいいのかを追求していくことなど、広い行為を意味している。言い換えれば「山と町をつなぐ一貫した木造技術コンセプト」（注３）といってもいいだろう。

震災の翌年、1996年に大阪で始めた建築技術者のためのMOKスクールも、今年でとうとう10年目となった。大学での木造教育がなされていないことが問題であると、震災直後議論となった。また、建築技術者の継続的な教育の必要性がこのMOKスクール誕生の背景なのだが、実は自分自身こそ、学び続ける必要性を痛感したからでもある。ほとんどの建築技術者が木構造を理解していない現実に対し、このMOKスクールでは、特に木構造にウエイトを置いたカリキュラムを提供していった。この10年間で300名以上の受講修了者を出したわけであるが、気持ちを同じくした仲間、木造が分かる設計者、着実に「木の家」をつくることのできるつくり手が、増え続けるという必要性は今も感じている。

岐阜県立森林文化アカデミーの木造建築教育

そして、2001年に開学した岐阜県立森林文化アカデミー（以下、アカデミー）において、木造建築スタジオを率いることになった。「持続可能な社会を再構築する」といった同じ目標をもった林業や環境教育を学ぶ人たちと共に議論するなかで、「森」の文化「木」の文化こそ現代の日本人の生活のなかで、失ってはならないものなのではないか、という共通認識を得るようになった。すでに建築教育を受けた学生が、それらの共通認識を持ちながら様々な実践的教育を受け、前述の「山と町をつなぐ一貫した技術コンセプト」を習得する。このスタジオでは、構造専門、木材専門の教員スタッフと共に、確実にその技術コンセプトを高めている真っ只中なのだが、その奮戦ぶりについては、いつか機会があれば紹介したいものである。

アカデミーでの活動を通して、高品質な住宅を丁寧につくりあげることはもとより、木造住宅の長寿命化にむけて、地域の町並みを保存するような古い木造建築や高度成長期につくられた現状の建築基準法不適格の「木造住宅のリフォーム設計法」にも取り組んでいる。（**写真１・２・３**）

学内では「不夜城」と呼ばれる、あたかも設計事務所のような木造建築スタジオで、今後しばらく、「山と町をつなぐ」こと、そして「持続可能な社会を構築する」ことのために何ができるか、様々な挑戦を続けていきたい。



写真１
白川村の白水湖畔ロッジ
2003

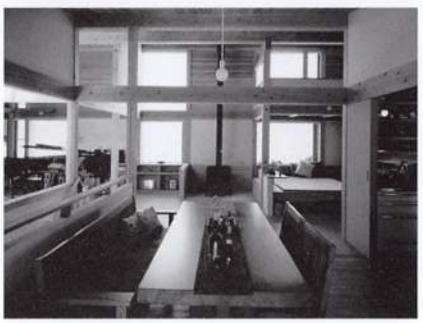


写真２
岐阜市の日野の家
2004



写真３
アカデミーのある美濃市内の築100年以上の長屋の改修。家主との事前相談

注１　建築家であり現代計画研究所を主宰する藤本昌也氏の論文で新建築1983年２月号に掲載される。その後、建築資料研究社発行の住宅建築別冊29「民家型構法の家」では「民家型構法の理念」という論文となる。

注２　建築家・三澤康彦との共同設立。

注３　「民家型構法の理念」のなかで記述された「木材生産者からユーザーまでを結ぶ一貫した技術コンセプト」を踏襲している。

（みさわ　ふみこ　岐阜県立森林文化アカデミー教授）

「木」を生かす設計術

竹原義二

木の生かし方　現代の住宅における木造建築の可能性を探ってみると、ただ単に木造でつくればいいということではないことは自明のことである。住宅の性能は高断熱・高気密であることが当たり前に求められ、たくさんの衣装を着せられた木は当然「生きて」こない。たとえ意匠的に柱梁を化粧の木で現しにしたり、床材や建具を木としたところで、それは自然に触れたいという人のための「優しい建築」ではあるけれども、木という素材が本来もっている力というのはそういった「優しさ」だけではない。

では木を「生かす」ということはどういうことであろうか。その術は三通りあるように思われる。

ひとつは数奇屋の建築に見ることができ、極限の空間に熟練した技と研ぎ澄まされた感性によって美しい銘木の有り様をそのまま「生かす」のである。銘木をありのままの姿で使うという慎ましさの奥には、素材を選りすぐり空間全体の調和の美を追求した緻密なデザインが隠されている。

もうひとつはそのような銘木を手にすることが少なくなった現在、最もその可能性を広げている集成材による構法である。チップに粉砕された木を集成材に加工して均質な材とすることで、構造としても強度を増し、断熱材をサンドイッチしてパネルにするなど、高性能な材料に「再生」される。現在の技術ではスライスしたり材を細くすることが容易であり、コンピュータで制御された機械が材をカットし、工期短縮やローコスト住宅のために大いに活躍する。また表に見える金物も最小限に抑えることで、一見透明で抽象的な空間をつくることさえできる。しかし木という素材に対して我々が抱いているものは本来均質なものではなく、均質な空間と不均質な自然素材がうまく融合していたのが日本建築の良さでもあったのである。プレカットや単一の金物で手に技術がなくても簡単につくれてしまい、構造的な強さをもってはいても、のりで固めて人工的に圧縮した均質な集成材の建築と、種類によって硬さ、表情も個性を持ち、長きにわたり職人が仕口、金物、その使い方へのきめ、構法をあみだしてきた無垢の木の建築では感じる力強さが異なる。

そして三つめは民家の建築に見られる、空間の骨格を生む木の力である。周囲を土壁で塗り込め、内部空間は一室空間となりながら骨太の柱梁に床や天井、建具や板壁によって適度に仕切ることができる。風土や気候と呼応しながら実用的に発生した建築全体の骨格は、粗削りで力強く、素朴である。数奇屋のような銘木ではないが美しさを感じる。古い民家が時間の経過と共に朽ちていき、その骨格が露わになった姿は、人々の手で入念に手入れされて黒光りするほどまでに艶が出て、むしろ生き生きとした美しさを増す。崩れかけた土壁から露わになった小舞のような骨組みにさえ、丁寧に作り上げている強さを感じる。木や土といった素材は生活の中に生じる湿り気や乾きといった空気の変化をも受容する。
民家には木そのものの美しさを生かすということよりも、職人が手を掛けてつくり、長い年月をその土地に根ざして暮らす人々の生活してきた痕跡が空間の骨格として生きているのである。

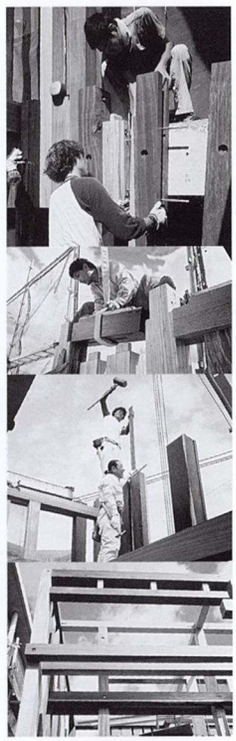
伝統的木造建築物として知られる伊勢神宮は針葉樹が使われており、繊細な白木づくりに黒や朱の漆や、腐る手前の柿渋などで防腐防虫も兼ねて色彩を加えている。神聖な木造建築において、20年というスパンで建替を繰り返し、大工の技術伝承の中に伝統文化を築き上げてきた。それに対し民家は素地の状態で鮮やかな色彩をもち堅くて重い広葉樹の粗い木を組み上げ、職人の手の痕跡と代々住み続ける家族伝承の中に生活文化を築き上げた建築である。

このように単に木といっても、木の種類、(針葉樹、広葉樹)、木の産地、構法、手入れなどによって異なる建築がつくり上げられてきた。そして現代の民家である都市住宅で、その木の生かし方を問うとすれば、かつての民家に帰着するのではないだろうか。



撮影　絹巻豊（25P左写真とも）





木の魅力の引き出し方　自邸である「101番目の家」では100m²の小さな敷地において、地下１階地上2.5階建てに外部空間を挿入しながら、民家がもっていた力強い空間の骨格をつくり上げている。それは素材の表面の美しさではなく、素材そのものがもつ表情や重量感などといった個性を構造や空間構成においての力強さとして生かすことである。そこで以前からも試みてきた大断面木造と、混構造をこの住宅の主なテーマとし、広葉樹の木とコンクリートという異種素材とのぶつかりの中で生まれる緊張感を都市住宅における現代の民家の在り方として試みている。

かつての木の民家は土壁で覆い、板壁や建具で一室空間を仕切り、かつ力強い骨格をもっていた。ここでは民家の土壁を都市から住まいを囲い取る強いコンクリートの壁に読み換え、コンクリートの骨格に負けない力強い柱梁は広葉樹の大断面木造としている。構成は用途の決まらない曖昧な室を点在させ、外部空間や半外部空間、そしてズレと隙間によってひとつながりに繋いでいる。構造を剥き出しにして、構造と仕上げが一体となって、素材の力強さが空間の中に現れる。一本300kgほどもある鉄の塊のように重硬な木材で、色彩や艶、節や杢などの表情豊かな広葉樹を20種類以上使い、製材の過程で断面の異なる角材を裁ち屑を出さないように使い切るために、製材されたままの断面寸法の異なる柱を大断面のまま連立させている。運搬上トラックに積載可能な寸法に裁断し、通し柱ではなく、軸を150mmずらしながら断面の異なる柱を300mmピッチで連結させて2.5層の高さまで軸を組む。木の柱とコンクリートの隠し梁は軸をずらしてボルトで緊結される。コンクリートの梁が空間の外へずらされ、上階のスラブと構造体の間に隙間をつくることで、木の柱は垂直方向への連続性を見せ、100m²の小さな敷地の住宅をひとつながりに覆う。コンクリートの基礎の上に土台を乗せてから柱を建てるとめり込みが生じるため、鉄のように重い柱をアンカーボルトで基礎の上に直に載せて荷重を伝えている。この家は構造と仕上げを一体とするため、外壁をほとんどもたず、構造体となるコンクリートの壁柱と木の列柱、列柱から外側にずらした建具によって外部と仕切る。内部からは列柱の間のスリットが開口部となり、そこにはまぐさを入れて上部の柱を受けている。

こうして組まれた木造はすべて職人の手仕事によるものである。のみの柄よりも堅い広葉樹一本一本に仕口をすれば当然何本も道具を欠き、電動のこぎりで切れば、密度の詰まった木からはかけらではなく鮮やかな色の木の粉が舞い上がる。職人の手では持てない重さをクレーンを使って引っ張り上げ、渾身の力を込めて大きな木槌で打ち込む。それでいながら優しい手つきで木の肌をなでて、鉋をかける。構造が露出されるということは、施工に逃げが全くないということになる。逃げのない納まりは「手加減」をよく知り尽くした職人が苦労してつくり出す。現代の民家として広葉樹を使いこなすには、単に鉄筋コンクリート造の上に木造が載った一般的な構法ではなく、新たな構法を生み出さなければならない。それは伝統的な構法を知っていて、そこから新たな技術を生み出せる職人と１対１の関係でつくるということである。木の魅力と木の扱いを知っているのは誰よりも職人であるし、新たな構法を共に生み出すことで職人の技術の可能性を引き出していく責任が設計者にはある。

広葉樹は過酷な大地で何十年、何百年も生きてきた木である。木は土の上で100年生きれば、死んでなお100年生き続けるという。その木が混構造の中で異種素材とぶつかり合うことでさらに力強さを増し、工業製品のように均質化した材ではなく、一本一本が表情もクセも違う木を見極める職人の経験、かつそれを新たな構法でつくる職人の技術の集まった家がどれほどの力強い建築となって生活に緊張感を与えるか。その試みがまさに木造建築の可能性としてもうひとつの道筋になるのではないだろうか。

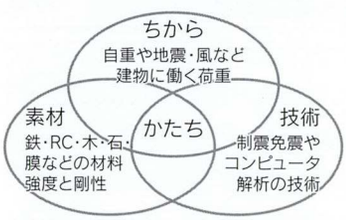
（たけはら　よしじ　無有建築工房、大阪市立大学生活科学部教授）

木を生かした建築の構造技術

長瀬　正

素材とかたち

建築構造の合理的な「かたち」は「ちから」によって支配されるが、**図1**のように、「素材」と「技術」も大きな役割を果たしている。例えばエジプトのピラミッドは、石の重さと強度を生かして、鉛直荷重や水平荷重に対して安定した形となっている。一方同じ形ではあるが、ルーブルのピラミッドは、鉄とガラスを素材として、現代のテクノロジーを駆使することで実現されている。



素材を生かす技術や，建築のかたちを変える免震制震技術など技術のウエイトが大きくなっている。

図1　かたちを決めるもの

建築における素材・材料は本来地域風土性が極めて高いものである。日本の木の建築は、竪穴高床住居から寺社書院楼閣と最近の大空間構造まで、長い歴史と多様な展開を示している。ところが、戦後40年間は主に耐火上の問題から木の建築が打ち捨てられ、木構造の暗黒時代とまで言われた。それには耐火の問題だけではなく、経済性論理の優先や、計算にのらない経験的伝統的な構法に対する当時の研究者や構造設計者の無関心も、木構造を低迷させた要因であると思われる。

20世紀末から現在にかけて、大規模木造や集成材そして伝統的構法の数理化などに見られるように木構造の再生が謳われている。このような木の建築の復権には、素材を生かすための構造技術が大きく寄与している。本稿は次世代に資することを願って、木を生かした技術に関して、筆者の経験の範囲で事例を紹介するものである。

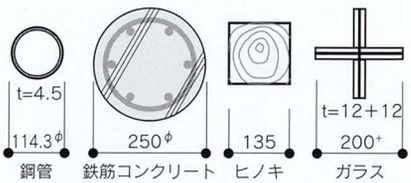
軽さとしなやかさ

構造材料としての木の特徴は軽いこと、そしてまずまずの強度を有していることである。軽さと強さを表す指標として、引張り強度を密度で割った「比強度」というものがある。数式は控えるが、比強度はその材料を吊り下げた時、自分自身をどこまで支えられるかを表わしている。長さが単位となり、軽くて強い物ほど比強度は大きくなる。**表1**のように、通常の構造材料の中では木の比強度が大きく、風や地震を外して自重を支えるだけなら計算上では高さ17kmの木のカーテンが可能ということになる。圧縮強度については、木はコンクリート並の材料で10トンの荷重を支える柱を作ると**図2**のような大きさとなる。

表1　構造材料の比強度

構造材料	引張強度 kg/cm²	密度 g/cm³	比強度 km
鉄	4,100	7.85	5.2
コンクリート	30	2.3	0.1
ヒノキ	700	0.4	17.5
マツ	400	0.4	10.0
ピアノ線	35,000	7.85	44.5
ジュラルミン	5,000	2.7	18.5
強化ガラス	1,450	2.5	5.8

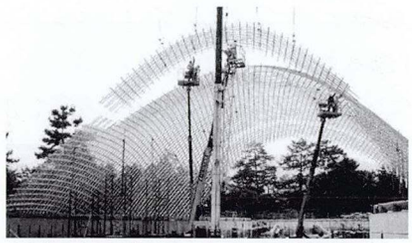
比強度とは，自分自身を支えることのできる限界の長さ。例えば，ヒノキであれば17kmも吊り下げることが計算上は可能。軽くて強いものほど比強度は大きくなる。



10トンの荷重を支える高さ4mの柱を作るとこのような大きさとなる。鉄筋コンクリートの柱の寸法は施工できる大きさで決まっている。

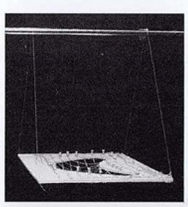
図2　10トンの荷重を支える柱の例

軽くて強い木は構造材料として大空間を覆うのに適しているが、変形しやすいという問題がある。ヤング係数の逆数でたわみやすさを見れば、木はコンクリートの3倍、鉄の30倍となる。木の重さがコンクリートの1/4、鉄の1/14程度であることを考慮しても、変形のしにくさでは鉄に軍配があがる。そこで、1988年奈良シルクロード博のための展示館・案内所など3棟の木造格子シェルの設計では、自重に対して最も変形しにくいカテナリーアーチを採用した。木をアーチ状にしなやかにたわませて格子シェルを施工する状況を**写真1**に示す。幅7cm成4cmのスギ材を、2方向にそれぞれ2段に重ねて用いている。最大のアーチスパンは30m、高さは15mである。フライ・オットーによる木造格子シェル構造は、等間隔メッシュが任意の曲面を覆うことができることを応用して、直線材を変形させながら造っていくもので、木の柔らかさを生かした構造・構法である。カテナリーは懸垂曲線といわれるように、ネックレスなどチェーン状のものを垂れ下げた時にできる形状で、鉛直荷重を引張り力だけで処理できる形である。これを反転させた**図3**のアーチは、鉛直力を圧縮力だけで支持する最も合理的な屋根構造となる。**写真2**はカテナリー形状の探索方法として、ガウディはじめ一般に用いられるハンギング法によって、格子方向など基本的な形状を検討するための模型を示す。最終的な形状はコンピュータ計算によって作成している。



木をたわませて施工している。アーチ端部を設定された取付け角度に収めると，設計曲面が容易に得られる。しなやかな木ならではの施工法。

写真1　木造格子シェルの施工



建物外形をくりぬいた板にチェーンを垂らしてカテナリー曲線による形状を検討。反転すれば屋根形状が得られる。

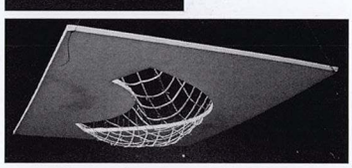


写真2　カテナリー形状模型

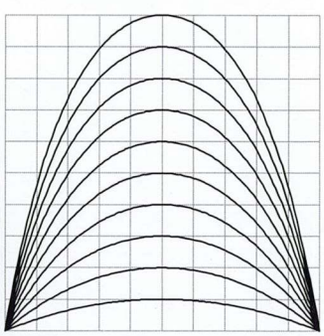
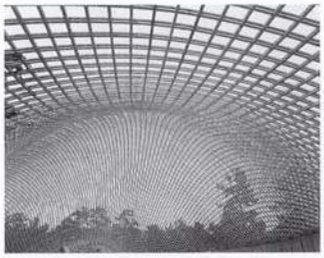


図3　カテナリーアーチの形



屋根は膜材を用いて仕上げる。内観は50cm等間隔の格子が曲面の変化を示して面白い。しなやかな木ならではの構造。

写真3　木造格子シェルの内観

写真3は建物内観を示す。規則的な格子がなだらかに変化していく様子は圧倒的であり、他の構造では表し得ないものである。木造格子シェルは、ちからを受ける仕組みとしても、表現された素材としても、木を最高に生かした建築のひとつである。

古代を解く

時代を越えて伝えていく木の建築といえば、やはり法隆寺に代表される伝統的な木造建築である。木の建築が1300年ももってきたのには驚かされる。これには「1300年もつような耐久性のある建物ではなく、1300年もたせる価値のある建物」（坂本功：木造建築を見直す、岩波新書）という言葉があたっている。定期的に屋根の葺替えを行い、必要に応じた修理補強を施すことで、現在まで保存継承されている。伝統構法による木の建築では、柱や梁それに多くの組物を解体して修理できることが、西洋の石の建築にはない大きな特徴であり、残すべきものは残されて1000年以上の耐用を可能にしている。解体修理は建物の保存だけでなく古人の技術を再確認して次の時代に伝承する機会とも考えられる。保存修理とは、今風に言えば建物維持管理システムである。このように、伝統木造が有しているさまざまな特長・機能は**表2**のように現代の技術に対応させて考えることもできる。例えば、最近のコンバージョンなどは、伝統木造では移築転用として古くから見られるものである。

表2　伝統的木造建築のキーワード

	伝統木造の特徴	現代的解釈
システム	保存修理	LCM・リニューアル
	手当ての易さ	損傷部位取替え
	移築・転用	コンバージョン
	化粧材と野物材	構造デザイン
構造	しなやか	変形能力・高靭性
	柔らか	免震
	大きな屋根・太い柱	傾斜復元力
	深い軒や桔木	天秤構造
	多くの部材と仕口	ダンパー
	五重塔の心柱	可変剛性
材料	ヒノキ	高耐久性
	斗など木の横使い	緩衝材
	土壁	ダンパー・エコ材料
	版築層	地盤改良
	たたら鉄	錆びない鉄

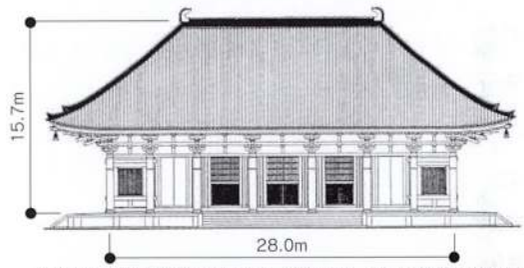
図4に示される唐招提寺金堂では明治の改修から100年を経た現在、平成の修理が進められている。外観上は大きな損傷が生じていないが、詳細に調べれば、柱の内倒れや柱上の組物の回転などが見られる。屋根重量による柱の内倒れは、水平抵抗力の乏しい骨組みを有する伝統的木造建築に共通した特徴であるが、唐招提寺金堂では特に顕著であり、明らかに構造架構の仕組みに起因するものである。平成の保存修理は、材料の経年劣化に対する部材補修というよりも、構造上の問題を解決することを主な目的として進められている。

唐招提寺の保存修理は調査・解体・補強・組み立てと約10年の事業で2009年の完成を予定している。構造上の問題を解決するための構造解析には**図5**に示されるように、最新の解析モデルと手法を適用した。国宝クラスの伝統木造の構造補強にコンピュータ解析が用いられるのは画期的なことである。1250年を迎える唐招提寺の歴史に、最新の構造解析技術が新たな頁を加えることが期待されている。

伝えていくもの

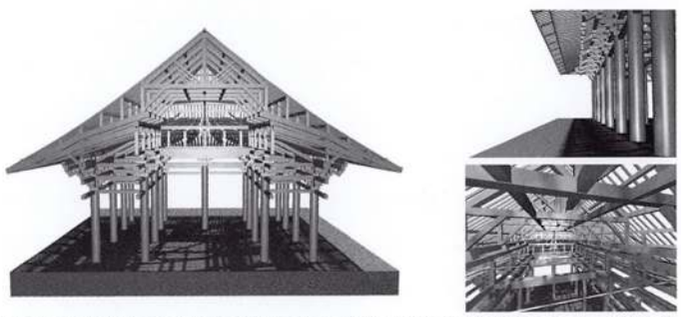
伝統の強みは、失敗を含むこれまでの多くの経験に裏打ちされていて、今後大きな誤りを重ねるリスクが小さいことである。伝統技術の伝承といえば、熟練者の経験・知恵・ノウハウを引き継ぐ人材の育成が重要なことはいうまでも無い。しかし、ノウハウを解き明かして知恵を知識に汎用化する努力もまた必要である。また、**図6**のように、免震構造などの現代技術を伝統木造に組み合わせることも行われつつある。伝統木造をはじめ木の建築は、構造技術の視点からも取り組むべき大きな魅力を有している。

太田博太郎ほか「日本建築史基礎資料集 成四仏堂Ⅰ」中央公論美術出版に加筆



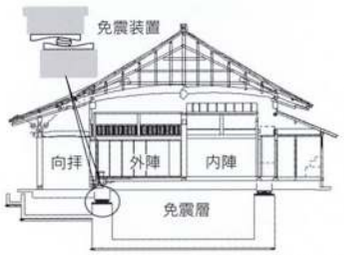
唐招提寺金堂は8世紀末に建立後、鎌倉時代、江戸時代および明治時代に大規模な解体修理がなされてきた。今回、平成の解体修理を行うにあたって、柱の内転びや軒先の垂下の問題を解決するため、唐招提寺保存修理委員会は構造技術者を参加させることとし、構造解析技術提案コンペが実施された。

図4　唐招提寺金堂



解析モデルは線材である梁要素を用いているが膨大な数の部材を把握するには、単なる線図表現ではなく構造モデルCGの利用が役立つ。

図5　唐招提寺金堂解析モデル



寿命の長い寺社建築では考慮する地震も大きくなる。伝統構法を用いて，現行の耐震基準を満足させる方法のひとつに免震構造の採用がある。見えがかりを損なうことなく新築した寺院の例。

図6　免震構造による伝統木造例

（ながせ　ただし　㈱竹中工務店設計部構造担当副部長）

木々の呟き

中川克己

原木との付き合い方

私は二十歳から製材業に関わってきて今日に至っている。山の中で育ちながらも、立木で分かるのは、杉、檜、栗ぐらいで、製材されたものは何の木か分からない状態からの出発であった。基本的には、地域から伐採された原木を挽く素材業も兼ねた製材業としてスタートした。

この頃はまだ戦後植林された原木は間伐材として製材所に入ってくる状況であった。素材業も兼ねてやっていたので原木市場では売り辛いものとか、高値が見込めないような原木を多く製材するのが4〜5年位続いた。ほとんどが天然林材で樹種は、杉、檜、ヒバ、栗、モミ、たまに松もあった。この時から、アテ材、芯割、水割れ、腐り等の欠点を持った原木との付き合いが始まったのである。

当時の私にとっては、色の黒い木とか大節の材は良材であった。ただどう製材すればその木の特性を生かすことが出来るかという見極めは、原木一本ごとに判断しなければならなかったが。今ならば、そんな欠点材は原木市場には出回らず、山に放置されるか、チップ工場に運ばれてしまう。

外材の台頭・国産材の衰退

この頃日本では、すでに外材が多く入って来るようになっていたが、当社には天然林の個性の強い「おもしろい」木があると聞き知った様々な人に来てもらえるようになっていた。製材技術が稚拙なこともあって製品が安定しない状況ではあったが、多種な材を挽いていたお蔭で、多方面の方々と知り合うことができ、木取りについても教えて頂いた。

この頃は売るための努力をさほどしなくても製材さえすれば何とか売れていたように思う。当時の植林においては、杉や檜を植えさえすれば当然売れるはずという風潮がまん延し、天然林の存在価値を見失わせていったのではないだろうか。その結果、50年生くらいの杉檜の原木はいくらでもあるものの、それ以上の大径木(杉、檜、松、栗、その他の広葉樹)は減り続けているのである。

そのような中で、設計者、工務店、施主は国内で少なくなった材の代替品を外国に求めるようになった。これらの中には、国産の杉や檜で十分間に合うはずのものまでも入ってきている。あえて外材を使わなくても良いのに、杉檜を使おうとしない。これは全く材質を無視した現実であると思う。どう考えても杉檜より良いとは思えない木を、杉檜並みかそれ以上の価格で多量に使用する風潮を誠に情けない気持ちで眺めている。

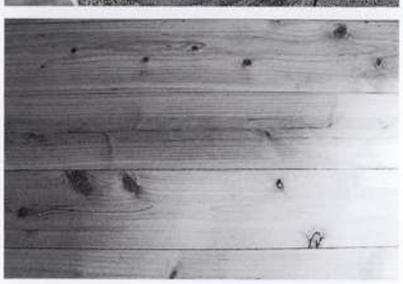
確かに外材は、見た目に美しく、かつ、大人しい。その上、現在は安定的な供給がなされているようだ。しかし、長期的にみれば供給が不安定な外材を、目先の利益にかられてこれ以上使うのは止めて欲しいと思う。国産材は、今はコストが高くとも、供給が安定すれば価格を下げることが可能となる。杉でも檜でもしっかりと手入れがなされた40〜50年生のものなら、外材以上の働きをする材がほとんどだと思う。

国産材の需要拡大を図るために

さて、アテ、腐り(死節ではない)を除く材の乾燥は、安定供給体制を確立する面で、ひいては国産材の需要拡大を図る上での大きな課題であるが、このことを考えるにあたっては問題がある。「50年生くらいの原木を製材して、今の建築にどのように使用するのか」である。この問題には、外国産のモルダー加工を施された製品や積層材として輸入された製品を進んで使おうとする限り、また、日本の杉、檜の特性を知ろうとしない限り、解答が出せないのではないだろうか。

袋小路に迷い込んだ観のある現在、数少ないこだわりを持った注文を暫く横に置いても、とにかく、売れる=使われる製品を製材する努力が一番必要だ。そこで、死節・腐りの材をなるべく避け、誰が見てもそこそこの評価が得られる製品をつくるようにこころ掛けることとし、具体的には、2×4工法で用いられている材の使い方を考えてみることにした。







試行錯誤を繰り返し、ようやく当社では3年ほど前から厚さ40㎜・幅85㎜のフローリング材を檜の小径木で作れるようになった。小径木を使用するため、生角にならない製品もできるので、すべて木裏使いで使用している。このような製材の仕方とか木材の使用方法は、今まで製材をして来た中では思いもつかない木取りであった。何人かの人に出来上がった製品を見てもらったが、無関心に近い人が殆どの中で、少数の人の励ましと支援を得たおかげで、この3年間そこそこ

安定して使用して頂いている（左頁**写真**参照）。

この製品は、芯割りの工程中、芯部が見えないため、挽いた結果使えない不良品が10～20㌫くらい発生する。しかし、その不良品は別の用途を捜すことで、材のほとんどを消化している。

ヨーロッパから輸入される壁板や床板が、木表・木裏を無視して加工が施されていることをヒントに、原木の選別が大事だという基本も踏まえてこの製品が出来上がった結果、他の材の製材・木取りにも多少幅が出来たと思っている。

この10数年の木材不況で原木価格が下落したため、造林地の世話が行き届かなくなり、手入れの良い木材は京都でも減って来たように思う。実際には製材業者が考えているほど材質はさほど悪くなっていないのかも知れないが…。

新建材が今ほど使われていなかった30年位前には、悪いとされていた材も他に用途があったと思われ、大工や製材所も区別してうまく処理してきた。10年くらい前まで当社でも、土留工で用いられる矢板を、多い時には１年で300㎡ほど出荷していたが、それも今ではゼロとなった。矢板の需要があった頃は木取りに余裕が持て、自然と建築用製品の品質も良かった。矢板に代わる木取りが出来るかどうかが、売れる製品を作るための課題の一つである。

国産材の生かし方

現在製材所が抱えているものとして、外材との価格差の縮減を図るにはどうすればいいか、という問題がある。しかしこれは自社の力だけではどうすることも出来ない。そこで、たとえば同業者による共同出荷などは安定供給を確保するためのひとつの方法ではないかと思う。それを実行する中でリスクを減らし、安定価格、品質維持の確保を図っていけばよいのではないだろうか。そのためには、まず価格提示が一番目の目標となる。次に納期。品質に関しては、売る側と使う側の材への思い入れの中から、いかに多くの共通点を見いだせるかどうかで決まる。

だからといって、製品の品質に関して見栄えとコスト面をあまり厳しく追及されると、原木出荷、製材、販売サイドでは、国産材の取り扱い意欲を減退させてしまう。そうならないよう、国産材の特性を生かした材の使い方について、良いところを生かすために良くないといわれる面をうまく使うなど、一層の研究・工夫をして欲しいと思う。

この良い面、良くないといわれる面は、原木を見て頂くなり、山に立っている状態で、どの部分なのか、どんな場所で成長してきたのか、を製品になる前の姿を山、製材所でみて欲しいと思うのである。そうすることで、一本の原木の半分ぐらいを使うのではなく、すべてを製品として使い切ることが出来るならば、余計な在庫を抱えなくて済む。また、良い材、悪い材と判別する見方も、角度を変えることにより、その木の用途を広げることに役立つものと思われる。その結果、価格面で今までは損をすると思っていた部分で得になり、売り手、買い手とも、余裕を持って対応できることになり、木への理解が深まれば双方の信頼関係も一層深まる。そうなれば少しずつでも無理のない価格提示機会が拡大する。なお、納期に関しては自然乾燥と人工乾燥を併用することによって、一か月前後で納品できる。

山が玉切りする時にも、製材所が製材する時にも、売り先が見えない中では常に不安がつきまとうのが現状である。不安を僅かでも払拭しようと、「このような材が在ります」、「この材はこういう場所に使ったら良いのではないか」、と提案できる製材所であろうと心掛けている。

現在では欠陥材とされているような原木でも、豊富に手に入れることが出来なかった時代には、その原木を何とか生かそうと工夫して木取り（製材）がなされてきた。また、そのような先人の工夫、努力の積み重ねが、木を本当に生かす建築へと発展していったようにも思う。

その木が持つ特性を最大限に生かしてやろうと、今一度努力し、厳しい市況にさらされている国産材を蘇らす契機を模索していきたいと考えている。

（なかがわ　かつみ　株式会社花背製材所代表取締役）



木造建築は火に弱いか？—良い木造と悪い木造—

原田和典

木造建築は、鉄筋コンクリート造等に比べて耐火性が劣るので、大規模なものが建てられない。しかし、品質の良い材を使って適切に部材を設計すれば必要な耐火性を確保できる。本稿では、耐火上の要求と最近の技術開発動向を紹介し、大規模木造建築が発展するために何が必要かを考えてみる。

木造建築は火に弱い

江戸時代から明治を経て、戦後暫くまでは、日本の都市は都市大火に頻繁に見舞われてきた。木造の歴史は都市大火制圧の歴史と重ねて語ることができる。戦前には、防空研究の一環として、当時の木造住宅を火災実験に供している。**図1**は、昭和9年に東京帝国大学の構内で行われた実大火災実験の様子である。点火した家屋は、内容物と外壁がともに燃え上がり、激しく炎上する。その後、14分ほどで崩壊に至っている。裸木造（防火被覆のない木造）の火災は激しく、制御し難いものがある。やはり、「普通の」木造は火災に弱い。裸木造が密集した都市が大火に見舞われるのは想像に難くない。

そこで対策として考え出されたのが外壁にモルタルを塗り、屋根を不燃材料で覆った防火構造である。隣接する建物が火災になったとしても、もらい火をしない建物であれば、都市大火に至るような延焼をある程度は防ぐことができる。しかし、当然ながら、建物内部で出火すると裸木造と同様に良く燃える。外壁面が激しく燃えることは無いが、内部の間仕切り壁が崩壊し、屋根が燃え抜けると**図2**に示すように、建物全体が激しく炎上する。

室内側からも軸組を不燃材で覆って大壁とし、軀体内にファイヤストップを設ける等の対策を施すと、ある程度は火災に強い建築物ができる。このタイプの建物は、建築基準法では準耐火建築物に分類される。**図3**は、木造3階建て共同住宅（準防木三共）の実大火災実験の写真である。住戸間の界壁や、部屋と部屋の間の間仕切り壁にある程度の耐火性があるため、建物全体が燃え盛る恐れは少ない。図3では、2〜3階の燃焼が激しくなっているが、この時には1階の燃焼は下火に向かっている。このように、室ごとの燃焼に時間差を付けてやれば、木造建築であっても激しく炎上することはなく、都市大火の引き金になることは少ない。しかし、最終的には崩壊してしまう。

木造は、やはり火に弱いのだろうか？

建築基準法における木造建築物の扱い

最近の木造ブームのためか、建築基準法ではどうして大規模木造が造れないのですかと聞かれることが多い。建築基準法の耐火要求は2段階ある。まずは、不特定多数が利用する建物で一定規模以上であれば、耐火建築物とする義務が生ずる。その理由は、必ずしも明言されていないが、在館者の避難や消防隊の消火活動中の崩壊を防止することにある。

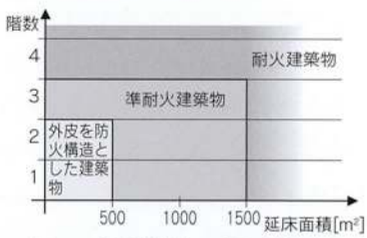


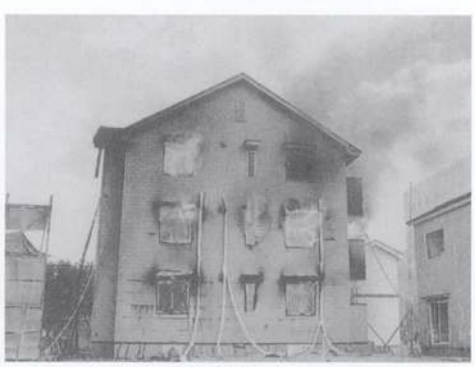
図4　建築基準法で建設が許可される構造形式（準防火地域）

次に、都市計画法と連動して、防火・準防火地域内の一定規模以上のものは耐火建築物としなければならない。これは、建物が激しく炎上して周辺建物へ容易に延焼したり、崩壊時に大量の火の粉を撒き散らすことを防止するためと考えられている。

以上のように、木造建築は結局は崩壊するから、在館者の安全確保と都市大火の防止の両面から悪者として扱われてきた。特に、日本の多くの都市は、防火地域あるいは準防火地域に指定されている。準防火地域では、**図4**に示すように、防火木造が建てられる範囲は2階建てでかつ延べ床面積が500m²以下に限られる。準耐火建築物であっても、3階建てかつ1500m²以下である。4階建て以上のも


図1
木造住宅の火災実験[1)]


図2
木造2階建て長屋（外壁モルタル塗り防火構造）の火災実験[2)]


図3
準耐火建築物の火災実験[3)]

のは、耐火建築物とする義務が生ずるので、都市内の建物の多くは鉄とコンクリートで造られることになり、無機質な表情の建物となりがちである。

火に強い木造建築

平成12年の建築基準法の改正は、木造建築物にとって良い方向に行われたのではないかと思う。改正前は、良い木造も悪い木造も、とにかく「木造だから駄目」という規定が多かったが、材料名ではなく性能による規制に変わったため、木造だけが不当に排除される理由はなくなった。性能規定化の良いところである。

実務的には、1～3時間の火災に対して載荷加熱試験を行い、加熱後も含めて崩壊しない性能があれば可燃性の構造部材でも耐火構造として認定され、理屈の上では大規模建築物を木造で建設する途が開けた。しかし、そのハードルは低くない。載荷加熱試験とは、長期許容応力度に相当する荷重を加えた状態で実大の部材を加熱し、常温に復帰するまで崩壊しないことを確かめるものである。木質系の部材であれば、**図5**に示す温度で1時間の加熱とその後の3時間の徐冷に耐えなければならない。徐冷期間中には、自己燃焼により炭化がさらに進むので、有効断面がさらに細くなる。自己燃焼が持続すると、最終的には芯まで燃え尽きてしまい部材は崩壊してしまう。そのため、何らかの方策により自己燃焼を終結させる「燃え止まり設計」が必要となる。

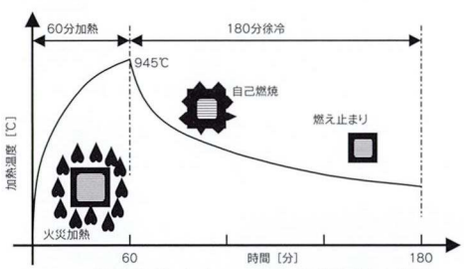


図5　載荷加熱試験の温度と木質部材の挙動

燃え止まり設計を施した木質ハイブリッド構造

燃えている木が、水を掛けたりしなくても勝手に燃え止まるのは突拍子もない話に聞こえる。しかし、様々な挑戦がなされ、大規模木造建築の可能性が徐々に開けてきた。その端緒となったのは、三重県科学技術振興センターなどが開発したもので、橋梁の振動防止のためにH形鋼を集成材で補剛した部材である。これを加熱すると、不思議なことに燃え止まった。並行して行われていた国交省総合プロジェクト「木質複合建築構造技術の開発」[4] でも燃え止まり性能が確認された。

図6にベイマツで補剛した部材を加熱後に切断した写真を示す。鋼材の熱容量が集成材の自己燃焼を抑制し、炭化面が鋼材に達する前に燃焼が停止する仕組みである。このような燃え止まりが起こるのは、カラマツ、ベイマツなどの密度が高く、表面にできる炭化層が崩れにくいものに限られる。残念ながら、スギではうまく燃え止まらないことも分かってきた。

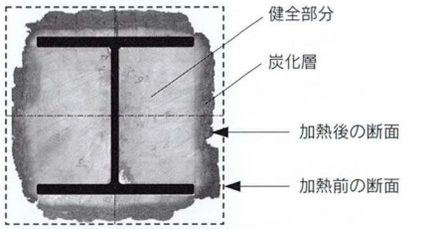
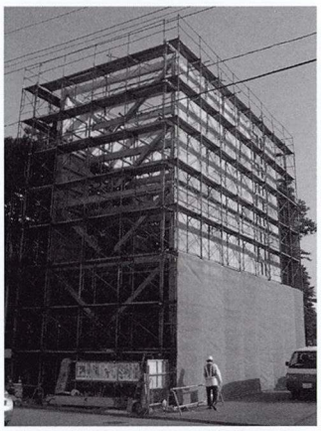


図6　H形鋼とベイマツ集成材のハイブリッド柱部材


図7　木質ハイブリッド構造のビル
（設計 -architect office- Stray' Sheep/長村寛行、設計協力 日本集成材工業協同組合）

その後、メーカーで技術開発が活発に行われ、建築に使える部材のバリエーションが徐々に増えている。**図7**は、石川県金沢市に建設中の画塾で、1階は鉄筋コンクリート造であるが、2～5階の4層に木造の耐震壁と集成材で被覆した鉄骨フレームを採用している。純粋な木造建築ではないものの、木材特有の美しさが印象的である。

良い木造を

以上見てきたように、火災で崩壊しないものが出来れば、木造建築の可能性は大きく広がる。鋼材とのハイブリッド構造はその一例であり、工夫次第でいろいろな設計が可能となるだろう。そのとき、気になるのはやはり木材の品質である。構造設計と全く同じで、燃え止まり設計をするためには、計算に乗せられるような品質の安定性が不可欠である。良い木材を使って、良い木造建築を造ることを推進したい。

引用文献

1）内田祥三ほか、木造住宅の火災實験に就て、建築雑誌、昭和20年4月
2）建設省総合技術開発プロジェクト「都市防火対策手法の開発」報告書、1982年12月
3）林吉彦ほか、市街地における木造3階建共同住宅の延焼性状に関する実大火災実験、建築研究資料No.93、建設省建築研究所、1999年3月
4）木質複合建築構造技術の開発報告書、国土交通省国土技術製作総合研究所、(独) 建築研究所、(財)日本建築センター、平成16年3月

（はらだ　かずのり　京都大学工学研究科建築学専攻　助教授）

「木」を伝える

佐野春仁

大学で建築を学び、大学院で建築の面白さを知った私であるが、今にして見れば、それは単に建築物で某かの構成を試みて愉快に思っていただけかもしれない。ドイツに留学し、夢中になって西欧の古代から中近世、近代を経て現代に至る建築や都市を眺め、そこに連綿と営まれている西欧人の地に足のついた生活に触れて、私の建築に対する考えは変わった。彼らは自分たちが属する民族や国の歴史・文化の中に、そのことを実感しながら生きている。建築や都市は歴史的な文化を支え表現している第一の身近な存在であり、彼らの生きる意味の大きな部分を支えている。偉大な建築に感動しながら、しかし私は常に異邦人であることを思い知らされた。日本の建築に向かわなければならない。そしてアジアの一国である日本の伝統的な建築を今日に改めて問い直したい。

一文無しで大学院に戻った私は、アルバイトとして今の専門学校で教えることになった。この学校はもともと戦後まもなく大工たちが子弟教育のために設けた組合立の建築学校に始まる。大学や大学院を出た者は全国に散って京都に残らないが、この学校を卒業した者はほとんど京都周辺で働く。京都のまちをよくしようと思えば、専門学校で教える方がいいのではないか。20年もすれば、少しは影響を受けた卒業生も増えて、京都の建築も変わるかもしれない、と考えたのである。

そして今日、その20年が経った。図らずして世間には町家や木造が流行している。この稿を借りて、20年の間にこの学校が積上げて来たものを眺め、その意義を問うてみたい。

京都建築専門学校での取組み

本校で行っている教育事業のうち、「木の建築」を志向する取組みを挙げ、簡単に説明しよう。

1　授業・演習などに組入れているもの
- a　細部意匠までを扱う日本建築史の授業
- b　市内の伝統建築を見学するゼミ
- c　宮大工棟梁に木工技能を学ぶ実習
- d　町家の意匠、構造、分布と現状、生活文化を学ぶゼミ
- e　伝統的木造住宅の構法について学ぶ講義
- f　卒業制作木工コースでの制作

2　夏休みに行う林業地での木工合宿（木匠塾）
3　社寺・茶室・住宅・規矩・その他の講議・演習を行う伝統建築研究科（別科）
4　毎年秋に行う市民講座「木造の魅力」
5　町家の修復、改修調査、設計、工事を行う町家研究室

■講義・演習

通常の建築専門学校と同様、建築士受験に必要な科目を修めるため、講義では木造のみならずRC造やS造も扱うが、木造とくに京都の伝統的木造について学ぶ機会を別に設けている。特に文化財保護技士を長らく務めた三上皓造校長（伝統建築研究科主任）による詳細で具体的な講義は、本校の最も人気のある授業のひとつであり、膨大な資料やスライドと併せて、見学に出て現地で講義を行う演習も行っている。同じく宮大工としていくつもの文化財の修復に当たってきた横井博史棟梁もまた、木工技能の師匠として、若い学生たちの人気と信頼を集める。一方、町家校舎を拠点として、市内にまだ数多く残存している京町家とその生活文化を次世代に伝えようと、町家に直に触れながら学ぶ演習を行っている。職人の町家を多く残す西陣地区の東南端というロケーションを生かし、町家の構造や意匠、歴史、生活スタイル、近隣地域の町家の状況、分布など、入門からフィールド調査までを連続的に行っている。また、伝統的な生活文化の学びのひとつとして、茶道を、また、町家や民家などの伝統的木造住宅の構法について在来構法と比較しながら、現代においてなお有効であると思われるもろもろの技術や技術観について講義を行っている。この秋から近畿大学の村上雅英教授の指導を得て、学生たちが自分で組み立てた土壁モデルを水平加力試験機によって強度を測定しようという計画がある。今後はこうした実験を通して、学生だけではなく大工たちも共に伝統的な工法の構造学的な評価を進めて行きたいと思っている。

2年制の建築科は卒業制作として、設計と木工制作とが選択される。設計ではほとんどの学生がRC造の建物を手掛けるが、中には数寄屋や社寺の詳細にわたる学習の成果を見せるものもある。木工制作では、グループで町家の改修や民家の増築を行っている。昨年は廃棄された民家の中門を修復した労作もあった。



卒業制作木工作業

■木匠塾

学生の楽しみのひとつに、夏休み期間中に京北の山村の民家を拠点として、合宿しながら木工を行う活動「木匠塾」がある。例年、京都大学の学生たちと一緒に合宿制作し、交流を行っている。昨年は間伐材を山から降ろし、皮を剥き、丸太を使って遊具を制作した。まずは杉や檜などの素材に触れるということ、素材調達から加工、完成まですべて自分たちで経験してみることに意味があると考えて



間伐材搬出



遊具制作

いる。何も知らない学生たちが各場面で方法について思案し、工夫をこらして克服して行くところが面白い。その上で、プロの仕事の確実さを思い知るのが望ましい。また、林業地での活動には、自然に山村の人たちとの交流が生まれる。まだ林業そのものへの積極的な参加というところまで踏み込めていないが、何らかの形で林業への関心を深め、将来の設計や工事の視圏に納めてもらいたいものである。

■伝統建築研究科・市民講座

京都ならではの伝統的建造物の意匠、構造、細部の勉強ができるいわば大学院とでもいうべき学びの場を設けている。１年制であるが、連続して受講する者も多い。受講生はベテラン大工や、大学卒生、設計士である。市民講座とほぼ同時期に開設し、今年で18年になる。

■町家の改修と保存

「よしやまち町家研究室」を置き、そこで有志学生たちと町家改修相談、調査、補修、改修、耐震補強のアドバイスと設計、適切な工事業者の紹介、補修・改修工事の実践などを行っている（詳しくは学校のHPを参照いただきたい※）。学生による工事には無論のこと限界があり、高度な技能を要する仕事や、最低限の安全管理、仮設機材、材料納入、技術指導などは専門業者に依っている。しかし、庶民的な町家の補修・改修に当たっては、不要な内装材の解体撤去や土工事、基礎の据付、壁下地となる竹小舞編みや荒土壁塗り、中塗りなどのほか、べんがらや柿渋塗りなど、学生でできる仕事がかなりあるものだ。授業のある平日は講義やゼミが終わってからの作業となり、時には夜中まで行うこともある。学生はどんな作業でも喜んで引き受けてくれるし、汚れる仕事をきらう者もいない。何にしても初めての経験なので、最初からうまくこなせることは滅多になく、いちいち指図と段取りに手を取られるのは致し方ないが、学生たちの積極的な参加に支えられなければ、とてもできない仕事である。彼らも日に日に上達して、その内ある程度任せて放っておいても仕事が進むようになる。プロに比べると数倍の日数がかかり、出来も無論劣るが、何と言っても弁当茶菓子、交通費と風呂代だけの労働力はありがたい。



よしやまち町家校舎
外観



土壁塗り



木工作業

今後こうした形態でどこまで展開できるか。学生たちの演習としての教育的な場という趣旨は変えないにしても、それだけでは量的な限界があり、京町家が毎日一戸ほど姿を消しつつある現実に歯止めをかけるところまではいかない。現に、依頼は数を増し、当方の能力を超えつつある。新築物件や寺社など町家以外の相談も来ているところに、新たな時代への変化を感じている。今は若い大工たちによる勉強会のメンバーや町家研究室OB、また意欲的な外部からの参加者も含めた恒常的な活動体組織を構想しているところである。また、ここでの経験や技術を生かした設計や工事を業として成り立たせる途を拓くことが今後の課題である。

※京都建築専門学校
http://web.kyoto-inet.or.jp/org/y-machi/machiya/hyoshi.htm

（さの　はるひと　京都建築専門学校教務主任）

世界に誇れる木造建築

木下孝一

数寄屋建築の棟梁として木造建築を手がけ、研究を続けているが、日本の伝統木造建築が優れているのは、先人の棟梁たちが全ての材料を知り、地盤・地質を知って土木を含めた構造を練り、湿気や地震から長期的に建物を守る工法を採っていたことにあると思う。数寄屋を含む伝統木造建築を造るときに最も大切なのは、全ての材料の特徴を知り、それを加工するまでの技術を把握し、使いこなして、活かしきることである。植物、原木、岩石、地層、さらに和紙、建具、金工、瓦を含めた焼物、そして漆芸。もちろん造園も建物に合わせ、植木屋に一任することはできない。

一木一材を知ること

その中で最も重要な材料は、いうまでもなく木と壁土である。木造建築の主要な構造材である木材は、原木を見る事が重要である。製材済みの木材ばかり使っていると、正しい事は分からず、後に狂いが生じる。木の生まれた地と育った環境を知らなければ、外見からでは木の性質を理解できないからである。山を見、木を見て、原木から良質材と一般材、造作材、構造材を判断できるようでなければならない。実際に原木に手を当ててみれば、乾燥状態も分かる。構造材に適した木材を知り選ぶには、刻んだり、ホゾを付けたり、刃物を使って体験することだ。例えば、黒部杉は繊維が弱く米杉に似ている。木曽檜などは年輪がいくら緻密でも一般に柔らかい。化粧材に適しているけれど、構造材としては北山丸太の白杉には到底及ばない。いかに大きな木でも繊維の弱い木は製材した時に分かる。また『あて木』という硬さはあるが弾力性のないもの、夏目と冬目のバランスが悪いものは割れやすい。目が細かくて強そうでも、割ってみるとスパッと裂けてしまう木もある。こういう木材は構造材には適していない。年輪を見て芯が寄っている方を北と考えがちだが、生き物のことであるから必ずそうとは限らない。木は大きな石や池を避けるときも芯が寄る。「北向きの木は北へ使え」などという言葉を鵜呑みにして、何も考えずにそう使っていたら、力のかかる部分にアテがきて不都合が起こることもある。人間と同じで木も一本一本違うのだから、それをきちんと見極められなければ、まともな木造建築は建たない。

壁土に関してはどうだろう。奈良や京都では淀川から木津川のあたりまで、水に強く耐火性もある粘土が結構取れる。昔、渡来人の瓦師が日本で初めて瓦を焼いたのは奈良といわれているが、奈良から伊賀、信楽のあたりに非常に良い土があることを知っていたようである。私もこのあたりの山から採ってきた土で壁のサンプルを作り、あらかじめ土の耐水性、耐火性を調べる。その上で土を練るときに藁スサをどのくらい混ぜるか、水をどの程度加えるか、状況に応じて微調整している。荒壁、底埋め、中塗り、仕上げの4種類の土はそれぞれ役割が違うため、材料を混ぜる分量や養生方法も違う。実際には荒壁土は、しっかりと接着して粘りがあり、乾いたときに割れが少ない土ほど防火・耐水に強いのだ。時には古土や聚楽土の篩いカスを混ぜながら調整し、一般的といわれる量の3倍～5倍の藁スサを、水合わせして溶け具合を確かめながら、半年以上かけ、数回に分けて混ぜ込む。加える水には水道水を使わず、井戸水と川水で枯草菌によるスサの分解を促して、繊維質だけを土の繋ぎ役にする。昨今は運送費も安く、荷運びに便利な袋詰めもできるので全国どこにでも送れる。

土壁の下地としては、貫に使う木材は構造材であるので、伸縮があるものだと土が剥がれてしまう。そこで、十分に乾燥し強度もある赤杉の柾板を使用している。4寸角以上の大きな柱には壁も厚いので、檜・杉の一等材で縄、または小竹を打つなど工夫すれば良い。間渡、小舞に使う竹は糖分の少ない虫の付きにくい竹に限定して、十分に乾燥させる。木材に防腐・防虫剤を注入すると、水に強く腐りにくくはなっても、木の繊維を弱らせ、強度を著しく低下させるのと同時に、竹も防虫剤を入れると手で簡単に折れるほどになる。壁下地に用いる竹は、表面の皮の繊維の強度が重要なのに、防虫剤はその繊維を弱らせる。竹の薄い表面の皮の中は、澱粉質である。だから竹を伐ったまま束ねて放置すると必ず虫が入る。しかし時期を選んで伐り、すぐに割って乾燥させると澱粉質が減り虫が付かず、防虫剤は必要ないのだ。壁下地としての竹の良し悪しは、竹の色を見れば判る。水分の少ない山の竹（水位の低い所）は黄色っぽく、川端（水位の高い所）では青々としており、2～3年ものの成長した竹になっても甘く、虫が付きやすくなる。砂地の竹やぶの筍は、アクが強くて苦く、エグミがなかなか抜けない。こういう場所の竹は建築材にすると繊維が硬くて虫の付きにくい良質材になるといえる。竹の伐採時期は、筍が出終り、親竹の葉が開けば伐り時と言われている。筍に栄養を取られカラカラの親竹が、次の年の筍のために水を吸い上げるため、吸い終わって葉を開く頃に伐れば、強度もあって虫が付きにくいのだ。おおむね9月から11月頃が伐採時期と、昔から口伝として知られているが、それも一概には言えない。破竹、真竹を有馬で2月に伐ったが、すぐに割って乾燥させたので虫は付かなかった。孟宗竹、破竹、真竹の3種類の伐り時は、孟宗竹は6月～8月、破竹は8月～10月、真竹は10月～11月頃が良いようだ。

以前は左官職人が土壁から下地材にまで注文をつけ、壁にこだわりをもっていたが、今はビニール製の縄や防虫剤入りの竹を使っても、何も言わないことが多いようである。もちろん棟梁や設計者が

指定しなければならない事なのだが。特別な材料は何もない。手間と時間をかけて材料を使いこなす、ただそれだけのことなのである。いずれにしても材料の性質や構造に関して何か先人の知恵がきちんと口伝で残っているものは全くない。むしろ間違った知識が「伝統」として継承されていることがある。だからこそ自分でひとつひとつ研究していく必要があるのだ。

木造建築の頂点は室町

日本の気候風土にかなっていて、構造的な配慮が行き届いている木造建築は、室町期のものが頂点だと思う。ごつごつと武骨だった鎌倉時代を経て、室町時代には材料が細くなってくる。屋根の出は深く、丈は低い。屋根の出が長いと建物が直接風雨に晒されないので、長い寿命が保てるつくりになっている。それが桃山、江戸時代に進むと、だんだん意匠が優先されるようになってきた。鐘楼や五重塔は別だが、当然構造は雑になる。方丈、書院、建築で、江戸時代の木造建築は、柱が太く天井が高いのに、軒の出が変わらないのが特徴で、足元から腐る率も高くなった。しっかりしてバランスも良い室町期のうつくしさをなぜか失ってしまった。同じ伝統木造建築といっても、江戸時代以降は構造的配慮が欠ける弱い建物といえる。長屋制度ができたのも、木造建築を悪くしてきた一因であろう。利益を上げるための建築になり、現代の建売りと同じく手を抜けるだけ抜く。悪かろう安かろうで、安易に建築する者も増えてくる。実際にその頃の有名な棟梁が建てたものを修復してみても、見える所にばかり金と手間をかけ、見えない部分が雑になっている。これでは逆である。

明治以前は建築用の釘や金物が大量生産されることはなく高価だったので、木造建築では屋根や垂木などを除いて、釘を使わずホゾや仕口、継手などの部材を組み合わせて固定する技術が発達した。単なるホゾや仕口の複雑さではなく、細い木につけたホゾが何百年も、その土地の気候や地震に耐えうる強度を保持する方法が研究されていた。強い木と弱い木を見分け、力を調節する木組みの技術があったのだ。しかし明治10年以降、米国から釘やボードが大量に輸入され、大正元年には国内で作られた釘が出回り、洋釘も大量に輸入されるようになると、釘さえ打てば一時的に木材が留まるため、安易な釘付け構造の木造建築が増え続け、今日に至っているのである。

また、セメントが入ってきて伝統木造建築にとどめを刺した。材料を見分けたり、個々の木材を当てはめて建物の構造を考えなくても、机上で計算式にあてはめ、絵を描いて設計できる鉄筋コンクリート造の建物が増し、伝統的な木造建築は半減していった。しかし近年、鉄筋コンクリート造の寿命は以前ほど長くはもたないであろう。強度を保っていた川砂が今はなくなり、山砂、海砂しか使えないのだから。セメントに川砂と市販の砂を混ぜたものの２種類を用意し、木枠を作って固め、水を張ってその浸透度を見れば、違いははっきり分かる。難しい計算はいらない。コンクリートの亀裂は鉄筋の腐食を招き寿命を縮める。基礎に用いるコンクリートも同様で、私は花崗岩の延石を併用している。ただし、この延石も加工方法によっては水を上げ、柱断面を腐らせるので注意しないといけない。

木造建築の安全性

建物は安全でなくてはならない。最近の新潟中越地震をはじめ、釧路地震や奥尻島沖地震、阪神淡路大震災で直撃を受けた多くの建物の中で、私が造った建物は、有馬の断層の上に建っているものですら被害がなかった。地震が多発するこの国では、建物の耐震性を備えることは不可欠である。木造建築でも当然の事ながら、地層に対応した土木工事、基礎工事、建物構造を一体として同時に計画をする。土壌学・土質学や土木工事は建物の設計者とは別人が調査・計画する事が当たり前のようになっているが、本来なら建築計画をする棟梁なり設計者がトータルで考えねばならない重要な問題なのである。地盤により基礎工事の計画や木造建築の構造方法も変えるし、何より部材寸法や配置はどの建物も同一にしたことはない。建築場所の地質をはじめ、使用する木材の一本一本の性質・強度はそれぞれ違うものなのだから。逆にいえば、木造構造を計画するのは、土壌を含めた素材を知らなければ不可能ということだ。特に構造は外見上は見えない部分なので、おろそかになりがちだが、重要なのは、見えない部分である。寸法さえ基準に合えばいいと、構造材の土台に安価な白太の多い材を使う建物があるが、ここが腐っては絶対にいけない。コンクリートの基礎に接した土台は腐朽しやすく、腐朽を防ぐための薬品は、木材の強度を著しく下げる。このため、私は基礎に延石を用い、土台を使わず足固め工法を採用している。含水量も考慮して土壌を処理した後、延石を配し下にRC造のベタ基礎にする建物を固定ではなく、余裕をもたせて連結させて置く。建物はまず足元を足固でがっちりと固め、その上を壁の下地と土で、更に天井裏の梁で、全体として柔に計画する。木の組み合わせと大工の仕口だけでなく、壁下地から壁土の強度を、基礎や地盤を考慮して総合的に計画する必要があるのだ。

地震などの揺れに対しては、一部に力を集中させずに壁全体に分散させる。壁だけで構造材ということはありえないのだ。伝統木造建築の壁は、あくまでも木造構造材の補助材的なものでなければならない。また、一度揺れても元に戻る復元力を持たせるため、仕口や壁の下地には複雑な仕掛けをしている。例えば壁下地は、まず柱

間に約2尺5寸～3尺に縦横に貫を入れ柱にしっかり楔止めか、込栓で止めた貫構造体を作る。貫の楔の打ち方が重要なのである。私の今まで見てきた古い建物は3角形状であるから、木がやせて緩んでいた。ちょっと考えれば何でもないことなのだ。その貫に芯になる間渡竹を縦横に何本か止め、壁厚に合わせて小舞竹をシュロ縄で編んで止めて壁下地とする。縄はビニールでは壁土の酸に溶け、ワラ縄では湿気に弱く腐るため、シュロ縄が良いようだ。竹を釘止めにせず緊結しないため、下地を強く押すとたわみ、放すと元に戻るような柔軟性が出てくる。小舞竹の幅と間隔が空き過ぎると壁土が付かないし、密にしすぎると表裏の土が付かず、乾くと剥がれるので、壁土の具合や壁厚に合わせて調節する。薄い壁の場合は力貫を増やして小舞を細く小割にし、土の強度を落とさない程度に目を細かくしてたわみを抑え、荒壁土の表裏が十分に付くよう乾燥状態に気を配る。ノレンやヒゲコの使い方で亀裂を防止し、風化や揺れに対する強度を増すことができる。その上で荒壁土、底埋め、中塗り、仕上げと何度も乾かしては塗り重ねて、耐力、防火性、調湿性を備えた壁とするのだ。しかし、このような土壁や左官の技術も継承されなくなってきており、途絶えさせないためにも伝統木造建築を残していかなければならないと、焦るばかりである。

建物は火災に対しても安全でなければならない。伝統木造建築の技術が継承されず、建築基準法上の位置づけも低かったのは、木造土壁の耐火性、防火性を把握する実証的研究がこれまでほとんど行われてこなかったことにも起因している。つまり、伝統木造工法が地震や火事に弱いということが立証されたからではなく、データがないからだ。そこで、伝統木造工法の土壁を一般工法の土壁と比較しながら耐震性と防火性を検証する実験を行った。実験結果によると、耐震性能については、阪神淡路大震災よりも大きな地震が直撃しても、伝統工法の土壁は粘り強く元に戻る復元力を有し、一般工法の2倍以上の剪断耐力があった。外壁を焼板にすると、その耐力が大地震でも下らないことが分かった。建築基準法では土壁の壁倍率を工法や材料に関係なく、一律0.5としているが、実験結果からは伝統工法の土壁の壁倍率が4と出ており、剛性もかなりあることが証明できた。防火性能については、準耐火試験を行ったが、伝統工法は加熱後90分以上もち、基準法で準耐火と認められるのは45分であるから、性能は十分だと立証できたわけである。その試験も工法によって変わることを頭に入れてほしい。しつこいようだが、人のデータを鵜呑みにせず、自分でできる実験は必ずやるべきである。

耐久性を考える

木造建築にとってもうひとつ重要なことは、寿命を延ばすということである。それにはまず、湿気対策だ。木造建築は、湿気により土台が腐ることと、雨漏りで屋根から腐ることで致命的に傷む。敷居から下の足元周りの湿気は、敷石の延石や足固工法により対応をしている。風雨に直接さらされないよう、建物の高さに合わせて軒の出を深くすることも必要だ。1m以上軒を出すと建築面積に入り、面積を抑えるために軒出を短くしようという発想は、木造建築の耐久性を考える上では無用である。また、雨漏りを防ぐには、チタンの屋根材を使って葺くことが有効のようだ。木造建築の伝統的な屋根材の瓦、銅板、檜皮、柿葺は定期的な葺き替えが必要で、これを怠ると雨漏りによる湿気が屋根下地を伝って柱、梁を腐らせていく。銅板はかつては80年程度は保っていたが、近年は酸性雨のため十数年しか保てなくなり、瓦を同時に使用すると硫黄酸の影響で更に耐久性が減少する。また屋根からの滴に混ざる銅の成分で庭の苔が枯れたり、浄化槽のバクテリアを死滅させてしまうことが問題になっている。桧皮(ヒハダコケラ)柿葺も近頃は材料の質が落ちているので長持ちはしない。何より高価で、葺き替え毎に費用がかさんでくる。そこで軽くて耐食性があり、安全性も高いチタン材を用いることにしたのである。葺き足からの毛細管現象による雨漏りさえ防げば、半永久的に葺き替えが不要なことを考えると、価格的にも十分使用可能な材料であるから、長尺にしてその危険を最小限にしている。

森を守る活動

古来日本には、山を尊び森を敬う高山崇拝という価値観があった。森を守ることが川、海、田、畑そして人間の生活を豊かにし、守ってきた。森の自然の営みを大切にしているところでは人間中心主義は通用しない。日本の文化の根底に、森の文明があったのだ。人々は森の木を伐りすぎてはいけないことを知っていた。水が重要で、水は森が蓄えているからである。ところがいま、日本の林業は危機的状況にある。森林所有者にとって、山を持つこと自体が重荷になりつつある。伐採して換金をし、それを管理費にあててきたのが、今は木を伐りだしても市場まで運ぶ経費と管理費を引くと、赤字になる構造となった。誇れる人工林があっても、安い外材が入ってきているからである。森林資源には多面的な機能があるが、森林管理をしているだけでは採算が合わず、国からの補助金目的で、雑木を切り倒して、成長の早い木を植えてしまう。これは防災の面から考えても深刻なことで、杉・檜山の15年～20年毎の間伐を怠ると陽が当たらなくなるので根がくさり、山崩れにつながってしまう。雑木であれば、枯れても枯木から自ら芽生いて再生するところが、杉・檜はそうはいかず、山を滅ぼすだけでなく、大災害を招きかねない。

日本の林業家が百年近くかけて育てる一本の材木に、どれだけの

手間と労力がかかっていることか。森林は地域によって姿が違い、土壌や気候と人との交わりの結果で植林・育林方法が生まれたため、木材にした時の強度や特徴も異なる。日本の気候では、放っておいても雑木林は育つが、死節のない悪い癖のない良質の木材を生産するには、人の手をかけて育てなければならない。優れた木材の生産地といわれる吉野の川上や東吉野一帯は、表面の土は30cmほどの深さしかなく、その下の地層は石ころばかりで水が流れている。冬は寒さがきつく凍り、気温が上がって木が水を吸い上げる時期が遅い。そのような地で、強度と弾力性のある木材にするために、密植して植林し、山の手入れを怠らず、長期的な計画をたてた間伐が行われているのだ。むやみに間伐するのではなく、年輪幅のバランスのとれた真円に近い木にするため、わずかに残す数本の周囲を均等に、段階的に伐採してはじめて強度と弾力性に優れた木材となるのである。強い台風で倒れたり、水割れが出て失う危険をはらんでいるのに、その上に採算が取れないことが、良質材を育ててきた生産者を苦しめている。優れた国産材木が優れた日本の木造建築を支えてきたのだが、この立木を見抜き育てていく育林の技術を失うと、優れた木材は永久に手に入らなくなるかもしれない。このような森林は、多大の時間と労力、費用のかかる植林、育林、伐採のサイクルを継続的に行う必要があり、このまま利益だけを求めれば必ず破壊される。一度林業が途絶えた山林から再び材木を生産しようとしても、少なくとも数百年はかかる。現に今、間伐材が山から降ろせず放置されている山も少なくない。森を守るためにも、林業家、製材所、建築者が協力をすることだ。外国の森林を大量に伐採して伐採禁止・輸出禁止とされている外材や、再生不可能で産廃となってしまうベニヤではなく、国産材をもっと使って国内林業を持続可能な産業として育てることが大切だ。国産材でも最近は、節のある一等材を用いなくても、プレカットの技術を活用すれば十分コスト削減できる。維持できなくなった山には、雑木を植えて元に戻し、雑木を木材として活用する方法を考えることもできる。雑木は火災でも炭化して燃えず、防火性があるため、私はチタン屋根の鼻先、下地に使用している。昔は「国破れて山河有り」と云われたが、今は「人栄えて山河無し」山河海派一体であり、人間や生物すべてに平等に恵みを受けていたが、山が死ねば立ち直れない。それから公的な資金の出し方も検討すべき問題だと思う。また間伐材の利用も、アイデアを出して積極的に行うべきだ。間伐材は十分乾燥させてホゾや栓で継ぎ二重にして梁、構造材に使えばいいのである。

21世紀の「木」の建築

多くの地域で、伝統木造建築を研究し、見直そうという試みが広がり始めているなかで、これからは、せめて3世代が安心して住み続けられるような、長持ちする木造建築の家を造ってほしい。家造りは人づくりでもある。小さな密室化した子供部屋ではなく、ふすまや障子越しに家族の声が聞こえ、互いに姿を確認でき、客をもてなすことを教えられる日本の木造住宅。15年、20年しか保たない住宅を建てるより、百年保つ家を建てる方が経済的である。住まいを相続のたびに取り壊さなくて済むように、100～150坪程度の一般の3世代住宅には相続税を廃止し、住宅ローンも3世代用に考慮してほしい。“親子3世代で家を建てよう”というのが、社会の常識になればいいと思う。

かつての棟梁たちが造った木造建築が何百年も永らえているのに、最近のものはそうではないのは、責任の所在の問題であろう。棟梁ひとりが土木、構造計算、設計から建築、造園まで手がけたものは、棟梁一人が全責任を負う。ところが現代は、責任の譲り合いだ。材料を知らない者が寸法だけで構造も設計して、机上で絵を描き、それをまた材料を知らない者が造る。問題が起きると誰かに押し付けて、誰も責任をとろうとしない。建築検査済書を出す役所は、検査して許可したはずなのに、問題が起きても一切責任は負わない。これでは良い建物ができるはずがない。かつては、弟子たちも早朝から夜遅くまで熱心に働き、研究して技術を磨いていた。それを見ていた旦那衆から、お茶の時間には一服いただき、風呂銭に小遣いも頂戴したものだ。それが今は、定時に来て定時に帰ろうとする。体力もなくなった。寝食忘れて仕事に取り組むことなどできるのだろうかと疑ってしまう。昔はなかった機械でその分をカバーをしているが、昔の大工ができたことが、今はできない。施主も、大工の仕事をよく見て理解してくれていた。どこに手間をかけて、どれだけこだわっているのかを自慢するほどだった。建てる者も施主も一体となって、建築する喜びを味わえたが、今は意匠を優先し、値段と工期だけに重きがおかれている。

私には若い者と一緒に研究し、世界に誇れる木造建築を創るという目標がある。日本の木造建築を再生するには、若者を育て、夢をもたせることだと思っている。弟子には自分のできないことは教えない。自分でしたことは責任をとり、自分がしてからものを言うように教えている。

私としては、弟子たちのなかから棟梁が育ち、さらに弟子を育て、木造建築を再生していってくれれば、これに勝る喜びはないと思っている。優秀な頭脳の若者よ、ペンを捨てノミを持て！

（きのした　こういち　数寄屋研究所・心傳庵棟梁）

老朽危険家屋への神戸市の取り組み

平川利人
前 神戸市都市計画総局建築指導部主幹

建築基準法（以下「法」という）に基づく老朽危険家屋対策には、①所有者等に対する行政指導を通じて粘り強く自力改善を促す方法②所有者等が是正命令に応じない場合に、法による行政代執行によって解決する方法がある。

建基法上の行政代執行

改正前の法第10条は行政代執行の要件として、①既存不適格建築物であること②「著しく保安上危険であり、又は著しく衛生上有害であると認められる建築物であること」と規定する。しかし本条項の運用基準は明確でなく、この要件を満たすか否かの判断はひとえに特定行政庁の裁量に委ねられている。このため、全国の特定行政庁で、老朽危険家屋問題を法による代執行によって解決した事例は、神戸市以外にはないのが実情である。

本市では、市民から老朽家屋の通報を受けた場合、必ず現地調査及び書類調査を実施し、放置しておくと屋根瓦、壁面、塀等が路上に崩落するなど危険性が高く、通行人等不特定多数の第三者に危害を及ぼしかねない場合で、しかも所有者等が確知できない場合、あるいは確知できても所有者等が命令に応じようとしない場合など、特別な事案に限って法に基づく代執行を発動している。代執行の手続きは、違反建築物に対する措置を定めた法第９条第11項（簡易代執行）及び第12項の規定が準用されるが、その他の手続きは行政代執行法の定めに従っている。

なお、調査の結果、相隣関係の域を出ない事案については当事者間で解決するよう理解を求めている。

既存不適格建築物に関する法第10条の規定は、平成16年６月、「著しく保安上危険となり、又は著しく衛生上有害となるおそれがあると認めるときは、当該建築物又はその敷地の所有者等に対して必要な措置をとるよう勧告や命令ができる」よう改正され、より予防的な措置が執れることとなった。今後、国土交通省によって運用のガイドラインが示されれば、これに沿って適切に対処したい。

事例の紹介

代執行は過去４例あるが、本稿では、そのうち２例を紹介する。

（1）兵庫区五宮町の事例（法第９条11項）

料亭が火災後放置され、強風等で劣化した材木等が飛散し、通行人や周辺住民に危害を及ぼす恐れがあった。所有者は死亡、相続人の権利放棄によって所有者不存在となった。区役所、環境局と連携して法第11条に基づく簡易代執行により２階部分を除却した。なお、費用の一部は土地所有者から回収した。

（2）兵庫区北山町の事例（法第９条12項）

平成16年の台風23号で敷地が崩壊、瓦礫等が狭い私道を塞いだため住民は生活用通路を失い、建物はほぼ宙吊り状態となった。このため、生活用道路の確保と二次災害の防止が急務であった。

市は法第12条に基づき、区役所・建設局と協力して崩壊寸前の建物全部と崩落した瓦礫等を除却した。自然災害の被災者に対して除却命令を発することは、一見、酷に映るが、結果的に所有者・占有者・周辺住民の救済に繋がった。所有者は病弱の高齢者と解散法人であるが、費用の一部は分割回収できる見込みである。





老朽家屋問題の解決状況と特徴

最近４年間に当局へ寄せられた事案は45件である（平成16年12月現在）。当局へ寄せられた事案には危険性と不特定多数性の高いものが多い。45件のうち18件は解決済みであるが、解決率は40％と低い。その理由は、民事上の問題（借地、借家、相続、境界問題等）を抱えた事案が多く、建基法による対応には限界があるためである。また、市内には約66万戸＋αの建築ストックが存在するが、長引く不況、地価の下落、少子高齢化等を背景に不動産の更新需要が低迷する中、老朽家屋は将来的に増加すると見込まれる。一方、定期借地権制度は、老朽家屋を減少させる効果があると考えている。

〔解決内訳〕　自力改善15件（33.3％）、行政代執行３件（6.7％）

今後の老朽家屋対策

原則は自力改善。例外的に行政による仲介・支援を通じた解決が必要であろう。そこで、16年６月、庁内の関係部局で老朽家屋対策連絡会を設置、関係部局が情報共有と連携を進め、問題を解決する処方箋を研究することとした。当面は各部局が権限を駆使して共同対処（合わせ技）するなどの対策を進めることになるが、新たな支援策として専門家派遣や訴訟援助制度の創設、民法第697条に基づく事務管理の活用等の施策も研究中である。さらに、老朽家屋問題を含めて、今後、安全で安心なすまいづくりは、地域団体と連携して進めていくことが重要である。

地域団体と連携した“安全で安心なすまいづくり”

本市は、大震災を教訓に「違反・欠陥のないすまいづくり」「震災に強いすまいづくり」などの活動を、地域性を大切にしつつ地域住民と市が協働で進めることが極めて重要だとの認識のもと、地域団体が取り組む“安全で安心なすまいづくり”活動を支援している。

深江地区まちづくり協議会（以下、「まち協」という）との協働事例では、具体的には、概ね次の５段階で進める。①市職員による出前トーク→②地域住民と市職員によるワークショップ。出された意見をKJ法で整理、活動プランの素案を作成→③まち協の総意による自主的な“活動プラン”の策定→④まち協による“活動プラン”の広報と市による広報活動の支援→⑤地域住民による実践活動。

深江まち協の活動プランの主な項目

①違法建築を未然防止する	②違反建築は市へ通報する
③すまいの地震対策を進める	④すまいの防犯対策を進める
⑤啓発・学習活動に取り組む	

深江地区では、老朽家屋対策は“すまいの防犯対策”の一つに盛り込まれており、すでに、まち協が活動プランの啓発・実践活動に取り組んでいる。深江地区と同様の取り組みは、長田区二久塚地区でも始まっている。市としては、今後、成功事例を広く紹介し、同様の活動が他の地域へも波紋のように広がることを期待している。

このような地域住民と市の協働による安全で安心なすまいづくりの試みが“日本で最も安全なすまいのまち”神戸の実現に資することを確信して！　（ひらかわ　としひと）

JR奈良駅の曳家

奥田和弘
㈱大林組本店建築生産技術部専任役

旧JR奈良駅舎を曳家工事にて移動・保存することになり、平成15年から工事に着手した。旧JR奈良駅舎（**写真1**）は昭和初期に建造され、鉄骨鉄筋コンクリート造ながら日本古建築様式を随所に取り入れた異色の仏寺風建築物で、造形的に価値が高い建物である。また、現在では再現が困難な装飾品が施されているため、いかに建物に悪影響を及ぼさないように工事を完了させるかが、プロジェクトの最大の技術的課題となった。



写真1　旧JR奈良駅舎

工事概要

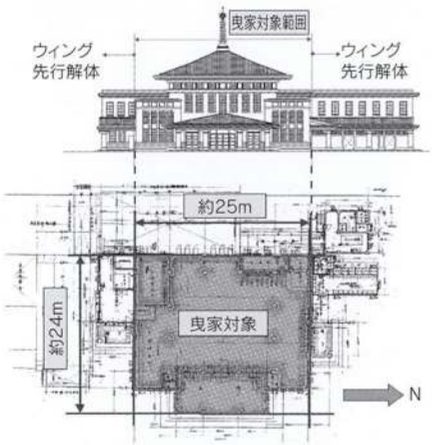


図1　曳家対象範囲

曳家の対象となる範囲を**図1**に、工事の概要を左記に示す。

曳家対象外となる両ウィングは、昭和30年代に増築された部分であり、曳家工事に先行して解体した。

今回の計画は、JR奈良駅高架化計画に伴い必要となる仮軌道との干渉をさけるために実施されるものであり、約3,500tの建物を反時計回りに約13度回転させた後、改めて建物を北東に約18m移動させる。

工事名称：奈良駅本屋1号曳家他工事
工事場所：奈良県奈良市三条本町
契約工期：平成15年5月13日～平成16年9月3日
建築主・設計・監理：西日本旅客鉄道　施工者：大林組
建物用途：未定　移動床面積：約546㎡
構造規模：鉄骨鉄筋コンクリート造（曳家工事）
地上1階（一部2階）、地下なし
最高高さGL＋約21.3m
既設基礎底深さGL－約1.7m（松杭L=2.7m）
最深掘削深さGL－約3.0m
曳家対象部分重量（補強後）約3,500t

最終的に、建物を定着させる位置の地盤レベルは現位置の地盤レベルより約30cm低いため、移動完了後、建物をジャッキダウンさせる計画となった。

施工手順

建物を移動させる準備工事として、山留め（シートパイル）を打設し、基礎底まで掘削（1次掘削）した後、地中梁を増打ち補強した。そして、基礎の両脇を部分的に壷掘りし、地中梁底を反力として、油圧ジャッキを用い鋼管杭を圧入して建物を仮受けした（**図2**）。その後、基礎底を約1.6m掘削（2次掘削）、RC路盤を構築した後、この路盤上にレールを敷設、コロを介して転動装置（**写真2**）を建物の基礎底に挿入した。このときのRC路盤は、事前解析結果を踏まえ、移動中に不等沈下が生じないような仕様とした。

準備工事の後、推進用ジャッキを用いて建物を13度回転した。

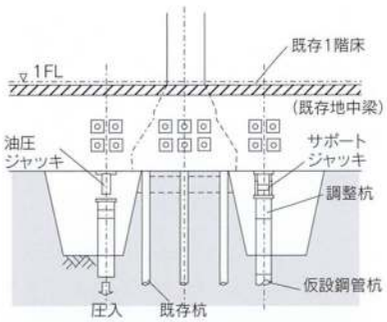


図2　仮受け要領

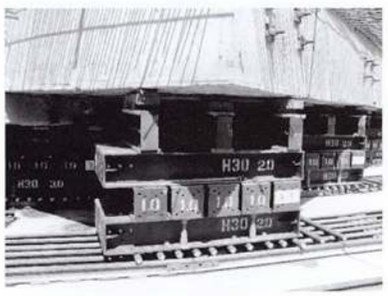


写真2　転動装置

そして再度建物を仮受けし、レール・コロ・転動装置を配置し直した（**写真3**）後、建物を約18m水平移動させた。このときの推進用ジャッキには100トン油圧ジャッキを6台用いたが、この仕様は、レールとコロとの摩擦係数を0.05程度とし、建物の重量および形状を考慮して決定した。また、建物の移動速度は、ジャッキの性能や計測管理等の条件を踏まえて、ジャッキの盛替時間も含め時速約1mとなるよう管理した。

建物移動後、建物を約30cmジャッキダウンさせ定着し、周囲を埋め戻して一連の工事が完了した。ジャッキダウンに用いたのは、150トン油圧ジャッキ31台、100トン油圧ジャッキ26台である。

計測管理

健全性を保持した状態で建物を移動させるためには、各柱間の相対変位角を適切に管理することが特に重要である。当工事では、各柱間の相対変位角を、常時1/2000以下、移動時1/1000以下になるように地中梁側面に水盛沈下計を設置して自動計測管理した（**写真4**）。



写真3　移動直前の様子

また、建物移動時には上記の管理のほか、建物の水平移動量をロータリーエンコーダーを用いて自動計測し、極端に移動コースから建物が逸脱しないよう、パソコン画面上で視覚的に移動量が把握できるシステムを構築した。



写真4　水盛沈下計

なお、移動に用いる推進用油圧ジャッキの油圧の制御方法としては、各油圧ジャッキへの油圧系統を1本に集約することで、常時等圧な油圧が各油圧ジャッキに作用するようにした。その際の油圧量についても、自動的にパソコン画面上にて認識することが可能なようにした。

その結果、極めて健全に建物を回転・移動・ジャッキダウンさせることができ、無事工事を完了させることができた。今後は、この工事計画や記録を類似工事に役立てたいと考えている。

（おくだ　かずひろ）

葉祥栄

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授退官最終講義レポート

『メビウスの輪を歩いて』～ミースから日本的な空間の精神性へ～

横井篤文

私の「父」―グッバイ・ミース

この講義は、最後のものかもしれないし、最初のものかもしれない。

❖

禅問答のように静かな口火である。氏と時間を共にした者なら、チューニングさえこなれたものかもしれない。去る2005年1月18日火曜日、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス大学院棟にて、最終講義「環境空間論」は、こうして幕開けとなった。

プロジェクターに映し出されたのは、『特集　葉祥栄 AMBIENT DESIGN MATRIX　1970→1987』(建築文化1987年9月号) だった[1]。建築界への出世作、「インゴット」や「光格子の家」を含む一連の「光の建築」と呼ばれる作品群をカップリングしたものである。原点回帰の告白であった。歩んできた道のりは、メビウスの輪を描いていたという。聴衆は、禅問答の余韻を反響させる。

❖

ミースなどのモダニストを「父」としてきたことを、今ここであらためなければならない。私の「父」は、この古くから立ち続けている日本的な空間の精神性である。

❖

文字通りになぞらえてしまうと、行間に浮遊しているものたちは、指先からすり抜けていくことを聴衆は心得ている。オリエンタリズムやポリティカル・コレクトネスから語られているわけではないだろう。象徴性やロマンティシズムを繊細な手つきでクールに排斥してきた氏のことである。「日本的」や「精神性」については、講義の最後まで判断を待たなければならない。



2005年1月18日、最終講義の日

アメリカ留学時代

慶應義塾大学経済学部を卒業したのち、アメリカはオハイオ州スプリングフィールドにあるウィッテンバーグ大学ファイン・アプライドアーツ奨学生として、インテリアデザインを学んだ時代から始められる。時は1960年代。この時代のアメリカの文化は、ヨーロッパの模倣から決別し、独自な路線を歩き始めた活気あるものであった。美術においては、デニッシュ・モダンが全盛の頃であり、造形性というよりは、理論武装が奨励され、美術はビジネスとしての様相を呈し始めた、いわば高度に知的に発達した時代である。そこへダイブした弱冠22歳の青年である。あらゆる意味性を徹底的に排斥し、人間との身体性や知覚とのかかわりに純粋に進撃していった現象学のメッカから何かしらの洗礼を浴びたことは、氏の述懐からもうかがえる。

❖

当時の経済学は、人間は合理的な行動をするという前提で組み立てられていて、教育の場でも、そう教えられていた。ラックスという石鹸が、金色のパッケージにした途端に前年の何百倍にも売れ行きを伸ばした。安い車より、高い車が売れていった。私は、戸惑うしかなかった。デザインがそこにはあった。

処女作―ソフトエンバイラメントシステム

帰国後、事実上の処女作「カフェソーラー＋エアーサービス」が大分県にて産声をあげる。現在に至るまで、九州といった特定の地域を中心に据えて活動を持続させていく、スタートラインであった。「最も変化に対応する可能性を持ったニュートラルなソフトエンバイラメントシステム」。1970年1月のテクストである[2]。「ユニバーサルスペース」に重ねて言及される。

❖

あらゆるものが持ち込まれることによって、機能的になる。カフェという機能を満たすために、テーブルが持ち込まれる。すると、照明が必要になる。テーブルを発光させればいいと気付く。

❖

徹底した合理性を追求してゆくこの手つきは、モダニストそのものであるが、それよりも、このテーブルを発光させるといった思考の跳躍が一際冴えて映る。結果、生み出されたシーンは、こうした手続きと相反して、写真で見る限り情緒的なのである。カフェは、50km離れた新空港のためのシティーターミナル付属施設であるからこそ、旅立ち、再会のあえかなひとと

きを演出する。ここに、氏のアイデンティティが見出せよう。徹底して、そぎ落とされるところまでそぎ落とされてゆくのに、生み出されてゆくものは、喜びであり、楽しみなのである。審美的なものに終始するモダニストと一線を画す、それは生命線のようにも見える。

反ゲニウス・ロキ―トランスフォーメーション

「ユニバーサルスペース」は、ランドスケープにまで敷衍される。1981年に開かれた個展「トランスフォーメーション、空間から空間へ」[3]は、大地と無縁の完結したフォルムがテレポーション、つまり空間を移動することを想定したプログラムであることを表明する。「光の建築」群は、どれもキャンティレバーやサスペンション、そうしてピロティといった構造形式を援用しながら、自己完結的な形態を浮遊させている。当時、コロンビア大学教授グレッグ・リンは、こうした古典的伝統の観念的な地面や方位から解放され、実験的なものへ向かう氏の作品群を次のように一括する。

❖

後期モダンの類型やその地面に対する関係を批判した初期の作品から、地勢的表皮といういまだかつてない領域に、葉は踏み込んできたといえる。(中略) 二つの点で、彼の最近の作品は目下のところいまだかつてないものであり、単なるモダンな表皮であることをなんとか免れていよう。これはいまのところ英雄的な業績であり、その草創からおよそ一世紀たったいまも、近代運動がまだ可能性を残していることでもある[4]。

自然現象としての建築

'70年代～'80年代前半期「光の建築」を経て、'80年代後半～'90年代前半期「木の大空間」、そして、'90年代後半期以降「柔らかい建築」へ変容する[5]。氏は、この時代を「自然現象としての建築」と総称し、それ以前を「自然現象の建築」として峻別する。対人間としての、自然とのレスポンスを増幅するための媒介物、つまり建物を装置として捉えていた時代から、装置そのもののあり方の合理性を捉える時代、それは建物そのものと自然とのレスポンスへと主題がスライドしたことを示す。ブロップ派の先駆けであるfoa（アレハンドロ・ザエラ・ポロ＋ファーシッド・ムサビ主宰）が横浜フェリーターミナルの実施へ取り組む際にも、この時期の作品群を参考にしていたそうだから、先駆けの先駆けという意味において、興味が尽きない。対人間としてレスポンスを拡張させていくために、装置＝建物を操作していくために、抽象的な幾何学形態やグリッドを一つの座標軸として、つまりカルテジアン座標のような取り扱いで、レスポンスを拡大させて、「光格子の家」のような、縦横無尽のスリットに刻まれたアクロバティックなフォームを連作していくうちに、次第にその構造自体に世界の広がりを見てしまった、というよりは、こうしたレスポンスばかりを追いかけていては、いつまでもたどり着かない何かがあると自覚したからなのだと、われわれは講義の後半に差し掛かるにつれて気付かさ

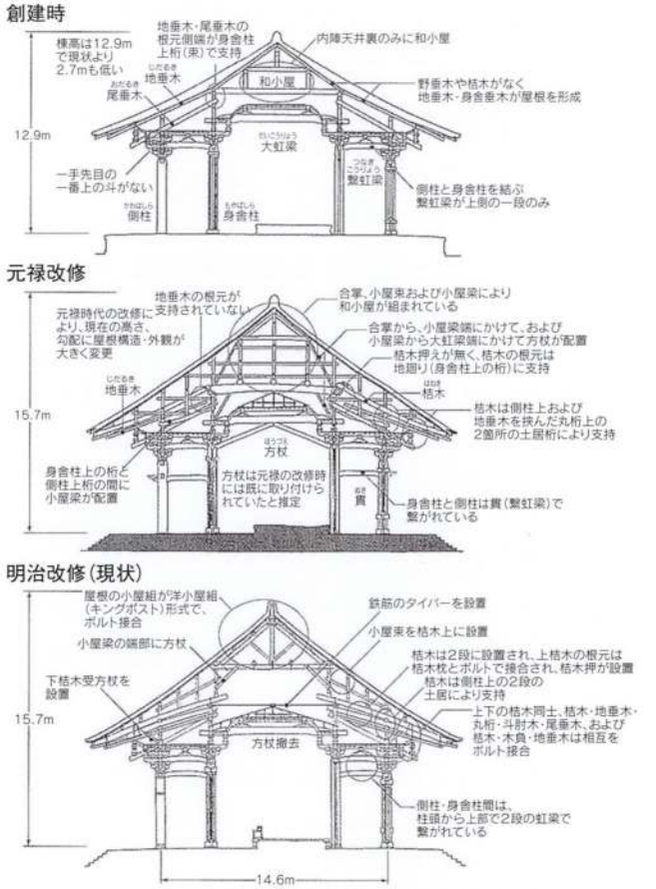


図1　唐招提寺金堂架構変遷図[6]

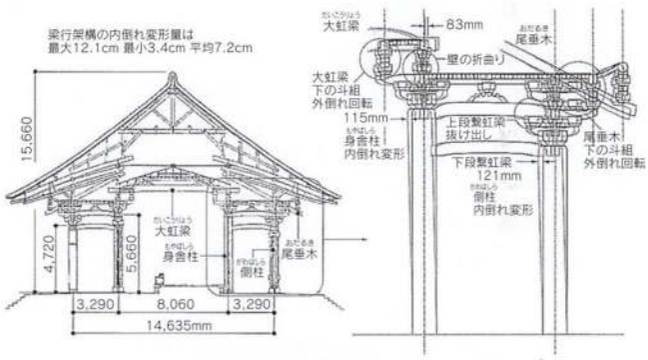


図2　唐招提寺金堂梁行断面の現状変形状態[6]

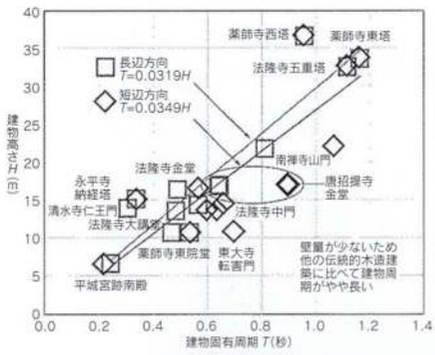


図3
伝統的木造建築の常時微動周期[6]

河合直人・内田昭人・前川秀幸「伝統的木造建築物の振動特性（その1）-（その8）」日本建築学会大会学術講演梗概集　1995-1999より

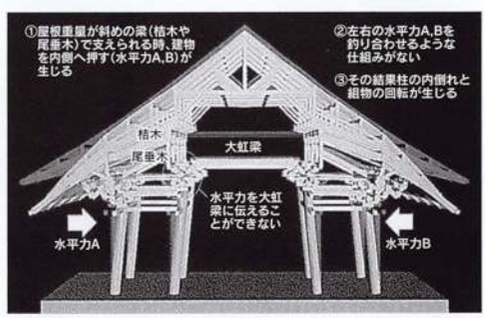


図4
柱の内倒れ変形のメカニズム[6]

*変形を拡大して表示している

れることになったのである。それは「日本的な空間の精神性」への序曲にほかならなかった。

日本的な空間の精神性―棟梁ゲノム

氏は、唐招提寺金堂の保存修理[6]を例にして、その境地を語る。概略すれば、深い軒を支えるために存在していた構造の力の流れというもの、それはまさに棟梁の伝統技術なのであるが、経験的なものであるにもかかわらず、それらを精査しないで（できないで）安易にトラスや鉄筋のタイバーなどで補強を積み重ねてきた結果、庇の鼻先は垂れ下がり、建物全体が内倒れを起こしてしまったというものであった。そこに氏は目をつけたのである。高度なテクノロジーによって、現在、大手施工会社がシミュレーションを実践し、修復は進められている（**図1～4**参照）。それは、棟梁たちが築き上げてきた作法というものを合理的になぞらえる作業にほかならない。一千年以上も建ち続ける日本建築を手掛けた棟梁へのクールな視線。つまり、棟梁精神の科学的アプローチなのである。「精神」を「ゲノム」と置き換えてもいいだろう。構法や形態、空間構成の安易な解釈を実践するエピゴーネンは一掃される。通風や湿度、温度、力の伝達といった不可視で微細な情報のポリリズミックな連関性を、超（スーパー）テクノロジーで徹底的に解析し、汲み取って、そこから新たな地平が築かれる普遍性へと押し広げられることを訴求しているのである。日本建築に、敬意を払いつつ、その繊細な手つきで、触れ始めたのである。ゲノムは、進行中のプロジェクトである小学校に組み込まれている（**図5**参照）。

アンビエンス―ネオ・ソフトエンバイラメントへ

目にみえない気配のようなアンビエンス、非物質的な空間の精神性に関心がある。

アンビエンスをデザインする。われわれはそこから、自己組織化／アフォーダンス／クライマトロジー[7]といったキーワードを連想するかもしれない。自己調整能力を保有した個と取り巻く環境との絶え間ない相互作用を前提としているオートノミズム[8]であり、環境との動的な平衡状態を生成する。氏の出発点である「ソフトエンバイラメントシステム」に寄り添うものと言っていい。こうした環境に対して常に開き合って依存し合う関係性は、J. J. ギブソンのアフォーダンス「ダイナミックな身体」にも接近する[9]。

建築が自己組織化＝ソフトエンバイラメントされることによって、無限に織り成すアフォーダンスの世界観へ参入していくことだろう。人間―建築―自然―地球―宇宙と、果てしなく自己組織化された動的な平衡状態の連続性。初期の作品群である「ソフトエンバイラメントシステム」や「反ゲニウス・ロキ」はユニバーサルスペースから語られるだけでは、今や不十分である。「どこでも運用されるシステム」を純粋に模索していた一過程なのであり、「自然現象としての建築」群においては、自然とのレスポンスをつぶさに見ていくことで、自己組織化へのゲノム＝「精神性」を手探りで確認していく、それらは柔軟体操[10]だったのであり、超（スーパー）テクノロジーとシンクロすることで、ゲノム＝「精神性」のトレーシングが丁寧に促進され、アンビエンスの生成へ活用されていく。これらはかえって地域的な様相を帯びていくことも付言する必要があるだろう。ユニバーサルスペースが挫折したアポリアを乗り越えていくからである。普遍性を推し進めながら、地域に応答すること。それらは紛れもなく、カルテジアン幾何学からの脱却が成し得る一つの可能性であり、超（スーパー）テクノロジーも、そうした原理を支援しつつ相互に依存し、さらなる発展を遂げる。「グッバイ・ミース」たる所以である。四季折々の地震立国日本は、古代から動的な平衡状態に対する自己組織化のゲノム＝「精神性」が豊かに組み込まれている、世界でも稀有な場所性だからこそ、氏は「日本的」に傾倒したと見るのがよいだろう。メビウスの輪も、スパイラルの軌道を描いて、ネオ・ソフトエンバイラメントへ。

「建築家というより、発明家なのかもしれない」。研究室で、対話していた時のことである。アンビエンスのデザインロジックは、確かに現在進行形ではある。が、その眼差しは熱い。フロンティアスピリッツである。それはモダニストとして問われる資質であったという意味で、氏は今でもモダニストと言えるだろう。逆説的にモダニズムを継承しているのである。継承するとは、文字通りに継承するものではなく、更新するものだということを、颯爽と大講堂を去りゆく一人のライブなモダニストの姿に、われわれは教えられるのである。インテリアデザインと建築の微震の狭間で刻まれた数々の切断面は、未来へレスポンスしているようなのである。

註

1）葉祥栄「特集　葉祥栄AMBIENT DESIGN MATRIX1970→1987」『建築文化』、1987年9月号
2）『ジャパンインテリア』、1971年2月号
3）『空間から空間へ　葉祥栄デザイン展』、日本デザインコミッティー、1981年
4）葉祥栄「特集　葉祥栄：カリステニクス　柔らかい建築のための12の柔軟体操」『SD』、1997年1月号、11-14頁（Greg Lynn：Shoei Yoh's Movement From Nature to A New Vitalism、松畑強訳）
5）葉祥栄『Shoei Yoh 1970-2000 葉祥栄の建築』、かたりべ文庫、2000年、3-8頁（三宅理一「ラディカリズムの継承者」）
6）『APPROACH』、竹中工務店、2001年SUMMER号
7）クライマトロジー/climatologyの好例として、フォスター&パートナーズ「GLA building（大ロンドン市庁舎）2002年」がある。日射解析により、最大の容積で熱損失が最小となる球体をベースにオーバーハングさせた。直射日光に晒される北側の表面積はミニマムとなる。超（スーパー）テクノロジーによる環境へのレスポンスが、3次元ジオメトリーに及んでいる。
8）「建築［言葉の道具箱］」『建築文化』、2004年2月号70―71頁（田中浩也「自己組織化」）
9）佐々木正人『アフォーダンス　新しい認知の理論』、岩波書店、1994年
10）葉祥栄「特集　葉祥栄：カリステニクス　柔らかい建築のための12の柔軟体操」『SD』、1997年1月号
11）松畑強『建築とリアル』、鹿島出版会、1998年、（「モダニズムから/モダニズムへ―Calisthenics―葉祥栄論へ」）
12）Folding in Architecture, Architectural Design, 1993年

よこい・あつふみ／1971年神奈川県生まれ／1998年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了（葉祥栄研究室）／1998～2003年株式会社竹中工務店設計部／慶應義塾大学SFC研究所研究員を経て、2005年夏より渡米

日本の精神的空間—非物質性の発見

Discovery of Ambivalent and Ambiguous Ambience in the Spritual World

葉　祥栄

福井県大野市のシビックセンター（小学校公民館生涯学習センター）の工事が進んでいる。SFC研究所で調査委託を受けたのが1998年だから、2006年の完成まで、８年。これは慶應義塾大学SFCでの成果でもあり、僕の考えるcommunity schoolでもある。コンペのような外科的手術に対蹠的な市当局や地域住民との対話をかさねて７年、400年の歴史ある背割り水路と碁盤目の町割りの城下町で３ｍの積雪と名水と呼ばれる地下水での変わらぬ暮らし、そうして天守閣をランドマークとした美しい盆地。歴史的風土とその精神的土壌が求めているのは、どのようなものだったのか？

やっと掴むことができたのは、日本文化の精神的空間性とでも呼ぶべきとらわれることのない融通無碍な建具によって設えるフリーオープンスペース、つまり近代建築が追い求めていたユニバーサルスペースであり、近代建築が無駄だとして切り捨て西欧の合理性が排除してきた長大な軒下空間の濡れ縁の、内外を曖昧にするガラス戸や障子こそ、気配を感得する精神的風土を育むのではないかと気付いたのである。ambivalent, ambiguousなambienceという日本空間の精神性を見出したのである。

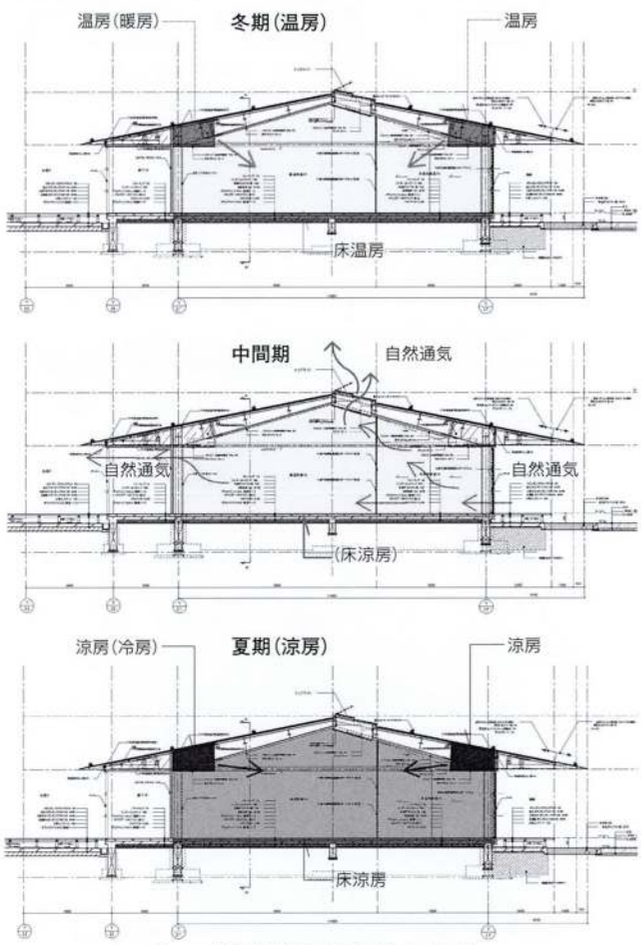


図５　福井県大野市のシビックセンター

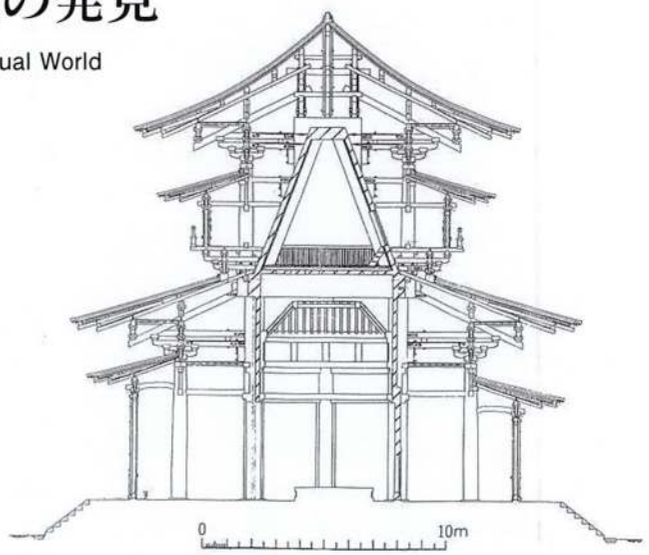


図６　奈良・薬師寺金堂

モダニストにとって、大きな試練であった歴史的伝統的景観との折り合いをつけることができたのは、かえって900kg/㎡という積雪加重に耐える4.5ｍの奥行きの軒の出を300ｍも実現し、半屋外空間の豊かさに共感を得ることができたからである。フッ素塗装アルミニュームの１：５の雪下ろしをしない緩勾配屋根と鉄骨構造による、日本刀のようなシャープな水平線が外見上の特徴である。年間を通じて豊かな地下水の一定した熱を利用して、涼房、温房を輻射熱によって行い、積極的に自然換気を行い、グレアの大きい窓からの採光を減らして上部のトップライトからの自然光を拡散して手暗がりにならないようにしている。

オープンスペースは濡れ縁と教室の中間帯で通過交通のない自由な伸縮自在の広縁のようなものである。複合することで多世代が交流するばかりか、タイムシェアリングにより一日中、一年中地域住民の利用が可能であり、屋内プール、体育館そうしてオーデトリウムにはカフェもある。大野の町では商店の軒下を借りて朝市を続けている。そんな中世のまちにふさわしいcommunity schoolではないかと考えている。

1999年10月『建築と社会』に、木構造のエージングをテーマにした拙文が投げかけている疑問の数々に、答えは未だ見つからないままである。薬師寺金堂をコンクリートで再現した文化庁の文化とは？　明治時代に最適解だと思われていたトラスとタイバーで補強されていた唐招提寺の変形をどう補修するべきなのか？　伝統歴史風土に立ち向かう術も知らず、福岡西方沖地震で大地の烈しい揺れを一カ月以上も体験しながら、僕たちの２～30年にしかすぎない実物大実験は、1000年をはるかに超える歴史建造物の技術文明ではなく精神を畏敬することと自然を畏怖することを学ぶきっかけにしかなっていない、というのが僕の65歳を迎えた実感である。

（よう　しょうえい　建築家）

第７回「人間サイズのまちづくり賞」募集

兵庫県では、「まちづくり基本条例」を制定し、“人間サイズのまちづくり”を県民と行政のパートナーシップにより進めている。安全・安心なまちづくり、魅力あるまちづくりに寄与する優れた建築物やまちづくり活動に功績のあった団体等を対象に県民から推薦を募る。

応募期間　2005年６月23日（木）～７月29日（金）（当日消印有効）

賞の部門　○まちなみ・景観部門○建築部門○福祉部門○まちづくり活動部門

審　　査　学識経験者等で構成する「人間サイズのまちづくり賞審査委員会」による審査

発　　表　受賞者には、各人に通知する。表彰式は平成18年１月を予定。

問い合せ　〔まちなみ・景観、建築、まちづくり活動部門〕兵庫県県土整備部都市政策課まちづくり政策係（内線4669）〔福祉部門〕兵庫県県土整備部まちづくり課福祉のまちづくり指導係（内線4730）
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL 078-341-7711（代表）

第25回大阪都市景観建築賞（愛称：大阪まちなみ賞）

推薦方法　推薦用ハガキまたは官製ハガキに推薦者の住所、氏名、推薦建物・まちなみの名称及び所在地・推薦理由を記入

対　　象　2000年８月から2004年７月までに完成した大阪府内の建物及び建物を中心としたまちなみ

受付期間　2005年７月１日(金)～７月31日(当日消印有効)

問い合せ　社団法人大阪府建築士会（06-6947-1961）

特別展「第51回　全関西美術展」開催並びに作品募集

近畿地方を中心とした日本画、洋画、版画、彫塑、工芸、書の作家たちの公募作品を展示する。同時に作品募集を７月20日（水）・21日（木）の午前10時から午後４時まで受付ける。

会　　期　2005年７月30日（土）～８月17日（水）
９：30～17：00（月曜休館）

会　　場　大阪市立美術館（天王寺公園内）

作品受付　2005年７月20日（水）・21日（木）
10：00～16：00（12：00～13：00は除く）

問合せ　大阪市立美術館　TEL 06-6771-4874

招待券希望者は日本建築協会（06-6946-6981）へ。

特別展「大阪近代住宅ものがたり―あこがれの住まいを求めて」

会　　期　2005年７月21日（木）～９月４日（日）
（会期中全火曜日・8/15休館）

会　　場　大阪くらしの今昔館(住まいのミュージアム)
TEL 06-6242-1170

■講演会　大阪近郊をめぐる近代都市住宅発展の様相―その歴史的考察と問題点

講師：坂本勝比古（神戸芸術工科大学名誉教授）

日　　時　７月31日（日）13：30～15：30（無料）

会　　場　住まい情報センター　３階ホール

申込み　ハガキまたはFAX（06-6354-8601）

問合せ　住情報プラザ「住まいの大阪学」(06-6242-1160)

’05「ダントー」「ディープライス」新作発表会

■大阪開催

会　　期　2005年７月14日（木）～７月16日（土）
10：30～18：30（最終日 17：00まで）

会　　場　ハービスPLAZA 4F リビングギャラリー
大阪市北区梅田2-5-25

■東京開催

会　　期　2005年７月21日（木）～７月23日（土）
10：30～18：30（最終日 17：00まで）

会　　場　新宿パークタワー 1F GALLERY-3

問合せ　ダントー株式会社　06-4795-5017

「海のギャラリー」38年前の姿に復元

「海のギャラリー」（設計／林雅子）は、国内で初めての貝類展示施設として、1967年にオープンした。

高知県土佐清水市竜串で40年近く潮風にさらされて老朽化の著しい「海のギャラリー」は一時閉館の危機にあったが、「海のギャラリーを生かす会」と土佐清水市が2002年に再生に向けて動き出す。

一方、日本建築学会とDOCOMOMO Japanは、後世に残すべき文化遺産として2003年９月に「日本におけるモダン・ムーブメントの建築100選」に「海のギャラリー」を選定している。

日本財団からの資金協力と土佐清水市の予算計上で、平成16年度事業改修工事によって復元された「海のギャラリー」は、2005年４月29日、再オープンを迎えた。

「DOCOMOMO 100選」の中で第一号の改修建物となった「海のギャラリー」のお披露目の式典では、建築史家・藤岡洋保氏（東京工業大学教授）と建築家・林昌二氏によるフリートークも行われた。

歌一洋ヘンロ小屋展

歩き遍路・癒しの道1400kmに、遍路の休憩・仮眠する小屋をボランティアで造るプロジェクト。完成した小屋10数棟の写真、模型、実物大の小屋、線路道の風景、遍路資料を展示する。

会　　期　2005年７月25日(月)～８月４日(木)(日曜休館)
10：00～18：00
(7/29、8/4　15：00迄、7/30　12：00迄)

会　　場　朝日新聞大阪本社1F　アサコムホール
TEL 06-6201-8034　（入場無料）

問合せ　歌一洋建築研究所（担当：宮川）
TEL 06-6252-4772　FAX 06-6252-1612

■「歩き遍路シンポジウム」

日　　時　７月30日(土) 13：00～16：00(事前申込必要)

戦後60年目の戦争展作品募集

「平和の大切さ、尊さ」を訴えるイラスト、デザイン、写真、アニメ等を募集。

締切り　2005年７月31日

問合せ　戦争遺構研究会　072-236-3357
〒599-8126　大阪府堺市大美野155-13

「エコビルド賞」作品募集

2000年６月に建築関連５団体により制定された「地球環境・建築憲章」の趣旨に合致しているプロジェクトを対象に優れた作品を表彰する。

募集対象　1990年１月１日から2005年３月31日までに日本国内で竣工したもの

登録受付　2005年７月１日（金）～８月10日（水）

作品提出　2005年７月20日（水）～８月19日（金）

問い合せ　エコビルド実行委員会事務局(03-5261-4551)

建築仕上診断技術者資格取得講習

受講料／50,400円（テキスト・税込）

募集受付／2005年７月１日（金）～８月26日（金）

東京	2005年９月28日(水)～９月30日(金)	総評会館	220名
福岡	2005年10月12日(水)～10月14日(金)	福岡天神ビル	120名
大阪	2005年10月26日(水)～10月28日(金)	大阪YMCA会館	120名

詳細問い合わせは、下記主催者へ。

社団法人　建築・設備維持保全推進協会（BELCA）
TEL 03-5252-3873　FAX 03-5252-3871

日本建築協会

月間の動き

【平成17年 5 月分】

常任理事会

第２回常任理事会
５月18日（水）15：00～16：00
出席者　佐野会長ほか９名
議　事（１）平成16年度事業報告について
（２）平成16年度収支決算について
（３）後援・協賛名義の使用について
（４）評議員の委嘱について
（５）個人情報の保護について
（６）会員名簿について
（７）その他

役員会

正副会長会議
５月18日（水）16：15～17：30
出席者　佐野会長ほか４名
議　事（１）日本建築協会の当面する課題について
（２）その他

編集委員会

第２回編集委員会
５月18日（水）18:45～20：00
出席者　設楽委員長ほか４名
議　事（１）2005年６月号～８月号特集経過報告
（２）2005年７月号「1000号記念」特集報告
（３）９月号「火から守る」特集の企画
（４）2005年10月号以降の特集企画
（５）作品作風、広告企画、シリーズ頁の報告・検討
（６）収支状況報告
第２回構造分科会
５月13日（金）18：00～20：15
出席者　肥嶋幹事ほか３名
議　事（１）「構造の頁」の企画
（２）10月号構造特集の企画
第２回法令分科会
５月11日（水）14：00～15：15
出席者　溝上幹事ほか５名
議　事（１）「法令コーナー」の企画
（２）「改正建築基準法と景観緑三法」特集
（３）情報交換
（４）17年度の副幹事
第２回施工材料分科会
５月26日（木）17：00～18：00
出席者　吉田委員ほか１名
議　事（１）編集委員会の報告
（２）９月号特集企画案
（３）その他
第２回作品作風小委員会
５月26日（木）19：00～20：30
出席者　中村副委員長ほか８名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（３）「gallery」掲載報告・予定
（４）前回の編集委員会の報告
第２回広告企画小委員会
５月18日（水）17:30～18：45
出席者　設楽・渡邉正副委員長ほか３名
議　事（１）2005年６月号～７月号特集企画と広告収集状況
（２）2005年７月号「1000号記念」特集企画と広告収集
（３）８月号以降の特集
（４）広告企画
（５）来年２月号の特集企画
（６）収支状況報告

事業委員会

第２回情報見学小委員会
５月12日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川・南・松浦正副委員長ほか９名
議　事（１）見学会等の事業企画と検討
（２）その他

見学会

兵庫県立芸術文化センター
５月20日（金）　14：00～16：30
参加者　40名

出版委員会

第２回出版委員会
５月19日（木）18：00～19：00
出席者　中川副委員長ほか８名
議　事（１）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（２）今後のテーマと執筆者選定について
（３）その他

近代建築を学ぶ会

「近代建築共同企画」
ヴォーリズの建築―京都の３作品を訪ねる
５月29日（日）９：30～16：00
講　師　山形 政昭（大阪芸術大学教授）
参加者　55名

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕　大寺 正直（中央電設㈱）
〔個人准会員〕　伊藤 妃実子（学生）

information

AWDA2006、作品募集

４回目の“American Wood Design Awards 2006（AWDA 2006）”、新たに設けた“Sustainable Home Concepts Awards”で、作品を公募している。

■American Wood Design Awards 2006
アメリカの木材を構造材や内外装等に使い、日本国内につくられた建築や住宅、木質構造物。新築増改築は問わず。2001年１月～2005年９月30日に完成したもの。
資格　応募作品の設計者、設計事務所、建設会社、ハウスメーカー、工務店、建築・住宅企画会社等
登録　応募登録2005年７月１日～９月20日
提出　作品応募2005年７月１日～９月30日
応募　www.awda.jp、電話（03-3583-2850）、FAX（03-3589-1560）のいずれかで応募登録後、所定の応募用紙と作品を郵送にて応募。ただし、デジタルデータでの作品応募は不可。
全米林産物製紙協会　〒107-0052
東京都港区赤坂1-1-14　東信溜池ビル８階
審査　隈　研吾（隈研吾建築都市設計事務所）
播　　繁（構造家、播設計室）
藤森照信（東京大学教授）
ロバート・ハル（The Miller Hull Partnership）

■Sutainable Home Concepts Awards
今の日本で実現可能な、良質なストックとなり得る、木造住宅に対する提案を求める。
課題　―サステナブルな木造住宅の提案―「50年を超えてライフスタイルを豊かにする住宅」
資格　グループでの応募も可。応募者は20歳以上。
登録、提出、応募方法、審査員はAWDA 2006に同じ。

「世界遺産・博物館島 ベルリンの至宝展」―神戸市立博物館―

東京国立博物館で開催されていた「世界遺産・博物館島 ベルリンの至宝展」が、神戸にやって来た。
神戸市立博物館では、ベルリン博物館島の５つのミュージアムから美術品約150点を集めて、展観する。



「ティイ王妃頭部」前1360年頃
ⓒStaatliche, Museen zu Berlin

会　期　2005年７月９日(土)～10月10日(月・祝)
9：30～17：00（金・土曜日は19：00まで）
月曜休館(7/18、9/19、10/3、10/10は開館。7/19、9/20は休館とする)
会　場　神戸市立博物館　神戸市中央区京町24
JR「三ノ宮」、阪急・阪神「三宮」下車
観覧料　一般1300円、大高生900円、中小生500円 他
出　品　エドゥワール・マネ「温室にて」、「ティイ王妃頭部」、ボッティチェリ「ヴィーナス」、「ライオンの装飾煉瓦壁」、「クレオパトラ７世頭部」等
招待券希望者は日本建築協会（06-6946-6981）へ。

「建築と社会」誌

特集一覧●1983～2004

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西—魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュ—内外装補修技術の現状と発展—＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール—それが生みだす文化—	●建物の表情—最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合—人体と建築にみる— ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間—都市型集合住宅にみる	●屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発—その創造的仕掛けの鍵をもとめて— ●ツイン21	●CAD—その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり—II— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996～2001—	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●湊町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法—会員作品—	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティ～次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回青年技術者

＊は欠号

「建築と社会」

1000号

記念特集



大正６年９月（１輯-１号）発行
〈創刊号〉



大正７年３月号（1-5）
この３月号から月刊となる。



大正７年８月号（1-10）
〈10号〉



大正８年１月号（2-1）
「日本建築協會雜誌」に改題



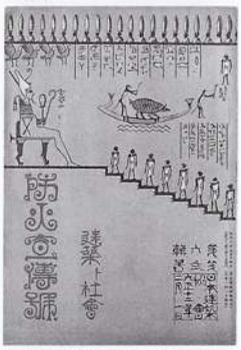
大正９年２月号（3-2）
「建築と社會」と改題



大正11年９月号（5-9）
「住宅號」



大正11年11月号（5-11）
「特別号」



大正12年２月号（6-2）
「防火宣傳號」特集



大正12年10月号（6-10）
「關東大震災」特集



大正15年３月号（9-3）
〈100号〉



昭和３年10月号（11-10）
「建築知識普及展覧会」特集



昭和７年10月号（15-10）
「創立滿十五年記念號」



昭和８年２月号（16-2）
「百貨店の防火」特集



昭和８年11月１号（16-11）
「滿洲建築」特集



昭和９年６月号（17-6）
〈200号〉「住宅、アパート」特集



昭和９年７月号（17-7）
「都市武装」特集



昭和17年10月号（25-10）
〈300号〉



昭和18年６月号（26-6）
「戦争と建築藝術」などの記事を掲載



昭和19年３月号（27-3）
〈終刊号〉



昭和19年５月―建築雑誌58輯―代「建築と社會」の押印がある



「建築と社会」に代わって会員に配布された「日本建築協會會報」６号―昭和21年11月25日―



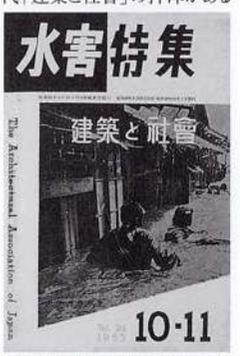
昭和22年１・２号（28-1）
昭和22年３月発行
〈復刊号〉



昭和23年３号（29-3）
昭和23年12月発行
「これからの建築はどうあるべきか（續）」の座談会記事も収録



昭和25年５月号（31-5）
神戸博の記事が見られる



昭和28年10·11月号（34-10·11）
「水害」特集

1000枚の表紙



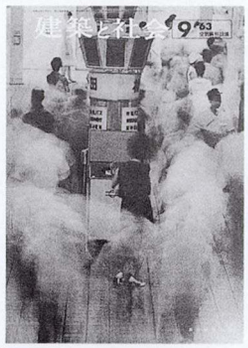
昭和28年12月号（34-12）
「創立35年記念史」特集



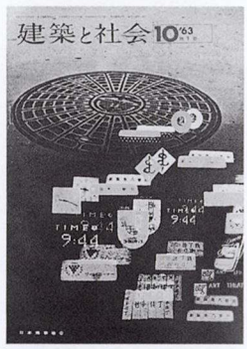
昭和29年６月号（35-６）
「第１回青年建築家」特集



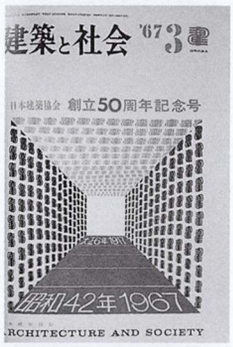
昭和30年４月号（36-４）
〈400号〉「劇場」特集



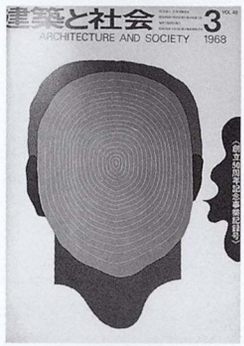
昭和38年９月号（44-９）
〈500号〉「空気調和設備」特集



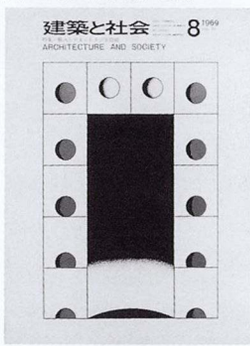
昭和38年10月号（44-10）
「地下街」特集



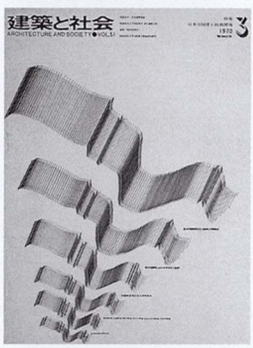
昭和42年３月号（48-３）
「創立50周年記念号」



昭和43年３月号（49-３）
「創立50周年記念事業記録号」



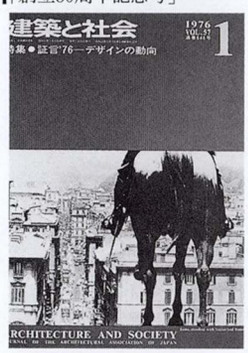
昭和44年８月号（50-８）
「解決をせまられる公害問題」特集



昭和45年３月号（51-３）
「日本万国博と技術開発」特集



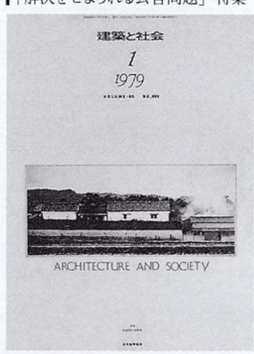
昭和47年２月号（53-２）
〈600号〉「600号記念」特集



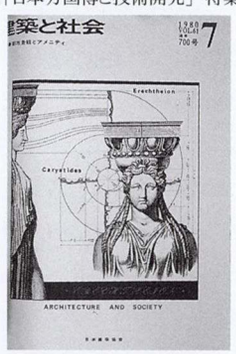
昭和51年１月号（57-１）
「証言'76—デザインの動向」特集



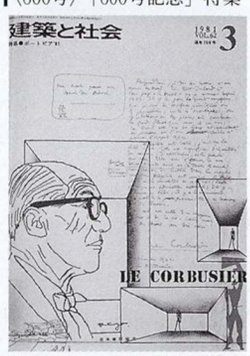
昭和52年３月号（58-３）〈660号〉
「ニュータウンの管理」「日本建築協会創立60周年」特集



昭和54年１月号（60-１）
「転換期の再開発」特集



昭和55年７月号（61-７）〈700号〉
「都市景観とアメニティ」特集



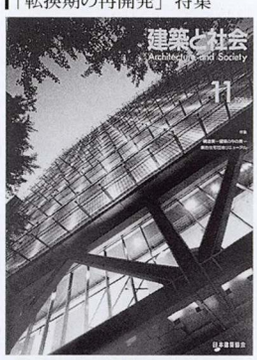
昭和56年３月号（62-３）
「ポートピア'81」特集



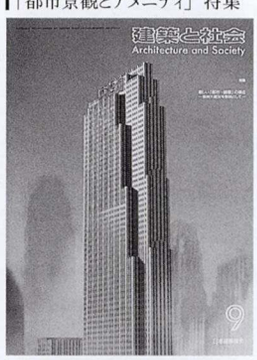
昭和62年３月号（68-３）
「創立70周年記念号」



昭和63年11月号（69-11）〈800号〉
「第35回青年技術者」「800号記念」特集



平成６年11月号（75-11）
「構造美」「集合住宅団地リニューアル」特集



平成７年９月号（76-９）
「新しい『都市・建築』の視点」特集



平成９年３月号（78-３）
〈900号〉



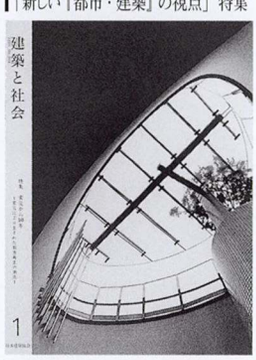
平成９年４月号（78-４）
「建築と私と社会—80人の眼—」
特集



平成12年６月号（81-６）
「スケルトン&インフィル」特集



平成15年12月号（84-12）
「第50回青年技術者＋青年技
術者顕彰50年」特集



平成17年１月号（86-１）
「震災から10年」特集



平成17年７月号(86-７)〈1000号〉
「次世代に伝える『木』の建築」
「1000号記念」特集

1000枚の表紙

「建築と社会」1000号記念

晴れやかさからの出発、そして

日本建築協会会長
佐野吉彦

気象台の記録によると、1917年（大正６年）は厳しい寒さにも見舞われたが、晴天に恵まれた年まわりであったようである。３月30日もそんな日和だったのだろうか。90年近く一貫して社会に果たす建築の使命を問いかけ、実践してきた日本建築協会の、その創立総会の日。この団体には、そのせいなのか、ずうっと晴れやかさを持った空気が継承されているように思われる。建築によって社会の質は高められ、社会によって建築は活かされる。そうした確信によって支えられているのである。たとえば、創立15年を期して協会が主催した住宅博覧会には、時代と社会のなかに、積極的に位置取りをしようとする意欲がみなぎる。最近の事業「近代建築は関西がおもしろい」（阪急電鉄と共催）は、近代建築が関西の地に果たしてきた役割を検証するものであった。

関西建築協会という名で始まった協会は、２年後に今日の名称に改称され、それとともに、その機関誌も「建築と社会」と変わって定着する。以後その命名の精神を受け継ぎ、「建築と社会」は晴れやかな志のステージとなるのである。昭和のはじめの活気ある関西から、戦時下、戦後復興から70年万博、阪神大震災復興に至る道筋のなかで、日本建築協会が多くの知恵と技術を集積し、多くの建築作品の誕生をバックアップした軌跡は、きちんと「建築と社会」のなかにトレースされている。

この「建築と社会」1000号の歳月は、建築と社会の関係を問い直しつづけた厚みと言える。そもそも都市という場所自体が、晴れやかな空気を宿しながらも多くの矛盾に切り裂かれた場所である。建築を専門とする者は、そこにある社会問題に個別に向きあわざるを得ない。そうして、未成のテーマに建築というかたちを与えることによって、必ずや解決がなされるであろう、と信じてきたわけである。もちろん、時代が変われば様相を変えて、困難と矛盾は眼前に現れつづける。それらは、やはり乗り越えるべきハードルとなって、新たな建築を生み出す誘因となってゆく。

いずれにせよ、「建築と社会」は都市の活動と、これに共振した建築創造活動をトレースしてきた。建築作品はその活動記録を視覚化したものであるけれども、雑誌ではその背後にある執念や格闘がすくいとられることになる。言葉の記録は、都市の活動の体温を保持する魔法瓶と言えようか。1000号の厚みとは、時間をかけて都市に寄り添うように成長を重ねたテクストである。

ところで雑誌という形式は、近代都市のなかの見えない情報空間として、その優越的な地位を長らく占めてきた。しかし、1970年代後半になって街角には情報誌が現れ、さらに90年代にはネットが個人と個人を繋ぐ。この流れはある意味で、雑誌が持っていた主役の座の危機である。情報伝達／記録の即時性においては、すでに月刊誌は追い落としを食らった。これはもはや引き戻しようがない。雑誌に残された牙城は、批評的な視点を有するかどうかである。そこが揺らいでしまえば、本当に最後の危機ではないだろうか。

一方で、建築という形式が今後とも都市のかたちをつくる主役でありつづけられるのか、という懸念がある。まさか、ではない。実際、建築は社会のために貢献するものという言説は、もはやすべての建築には当てはまってはいない。いつのまにか、世の中の建築の仕事の多くは、誰かの欲望のために奉仕するなかで、社会と都合よく帳尻あわせをする、ということになっている。建築をつくる側と発注者との対話のなかで、建築のなかに公共性をどう実現するかが真剣にチェックされていないことはゆゆしき問題であるだろう。

眼前の現状を克服して新たな視点を獲得する。そうして、社会をよりよい方向へ導くこと。それが建築をつくることの使命である。従って、建築創造活動には本質に批評性が含まれるものと考える。となると、機関誌である「建築と社会」が持つべき批評的視点は、雑誌としての切れ味に向けられるよりも、建築が本来宿す精神に向かうよう形づくられるべきである。日本建築協会は、建築にかかわる専門家であれば誰にも門戸を開く姿勢を有するだけに、「建築と社会」には異質の要素を排撃しないかたちの批評性を育む土壌がある、私はそう確信している。

歴史をひもとくと、1917年３月はロシア革命が勃発し、世界が大きく舵を切った月ということになる。初代会長・片岡安は創立の日の宵、まだ肌寒い風に身震いをしたかもしれない。片岡は、先行きの厳しい道程を感知できていたと思うが、それゆえ建築をつくることも、「建築と社会」を通して世に論を問うことも、ともに後戻りのできない車の両輪を回すことであった。おそらく、今日のわれわれが遺伝子として受け継いでゆくべきなのは、草創期を支えた者たちが持っていた晴れやかな建築観であり、都市の危機に臨む冷静で理知的な精神ではないだろうか。

〈さの　よしひこ　㈱安井建築設計事務所代表取締役社長〉

「建築と社会」1000号記念

活動シーズの変遷とその行方

日本建築協会理事、元副会長/「建築と社会」元編集委員長

與謝野 久

一公益法人の機関誌として、その発行が1000回に及ぶことそのものも輝かしい偉業であることは勿論のこととして、激動の大正・昭和・平成の歴史の中を走り抜けてきたその軌跡に滲む諸先輩の使命感の強さと執念の底深さとを改めて拝察し、その熱き軌跡にまずは深甚なる敬意と心からの祝意とを捧げたく存じます。

また、この意義深い節目を迎えて、協会活動の将来を見通すとなると、かつての幾度かの節目でもそうであったように、真摯かつ明るい気概と使命感とで将来を的確に見据えねばならないという重い責任感が胸に迫り、身の引き締まる感慨を覚えるものです。

この時機に、かつて編集に汗した経験を踏まえつつ、今日までこの協会活動を動かしてきた活動シーズ（基本原理のようなもの）の変遷の経緯と行方について私の浅見をお示しし、これからの皆さんの議論の資料として頂くことで、責任の一部を果たすこととさせて頂きます。及ばずながら「歴史で現代を見る」という視座で、過去から現在・未来へと見据えることといたしました。

草創の頃のシーズとその後の変遷

今から88年前の「建築と社会」創刊号（当時は「関西建築協会雑誌」）を紐解いてみました。「発刊の辞」に続いて、当時の関西財界の重鎮でもあった建築家・片岡安による「都市大火の危険」、そして「都市と建築」「空中の庭園」等々の論考が掲載されており、我が国における都市計画の必要が切々と語られております。次いで、その後の発刊号を追っていくと、そこには建築設計・構造技術・設備技術・施工技術・材料・教育（若手人材発掘）・都市計画・住宅（個人集合共）計画・会社営繕・官公庁等々、社会の裾野広くで活躍する真剣なまなざしの諸領域の技術者の群像が浮かんできます。この時代の課題は「国のかたちの近代化」であり、社会の上部構造での公共・業務用建築と基盤構造の住宅という両分野で、社会との関係性についての建設的な批評的論考が、かなりレベルの高い内容で寄せられ、実務に有益に寄与した足跡を見ることができます。ここに、社会の近代化に関西人らしい実践的なバイタリティを発揮して多くの分野を取り込むという、この協会独特の「論考の開放的な批評連鎖性」を見て取ることが出来ます。これは紛れもなく協会草創の頃の活動シーズと言えます。

時代は下って、28年前の創立60周年の660号発行記念誌において、当時の塚本猛次会長は今後の協会のあり方について「本会の特色でありますところの各職種・職域の横のつながりをさらに緊密にして、建築界の正しい進路を誤りなくみつめ、斯界の発展に尽くしていきたいと希求致します」と述べておられます。さらに17年前の800号記念号では建築家の浦辺鎮太郎氏が、激動の荒波を受けつつもこの協会が力強く活動し続けてきた理由として、「本協会が本来備えていた柔構造的体質に由来するもの」と指摘されています。この時代の課題は、専門分化が進む科学技術をOpenness概念の導入と多分野連携とにより個別分野技術の成熟化を図ることでした。この流れを受けて協会活動は、柔構造と横断的連携とで技術革新の作り上げた「知の体系（建築・都市・社会文化等の学問体系の総体）」と、実務現場での知見等の実学体系との相互交流を断続的ながら円環論的（シーズとニーズの相互融合）に繰り返していました。

プロトコールの先に見えたもの

この時代での活動シーズは、Openness志向をつなぐ接続子（言わばプロトコール）の拡張を生み、その連鎖の範囲が当初は個人の認識圏の中でも把握可能の規模であったものの、徐々に不気味な広がりを見せつつある時代でした。そして次の時代の予兆として、それでも驀進する技術進化と分野探究の深化とが、包括的視野での希求の眼をそらせ、部分最適解の追求は必ずしも全体最適につながるものではないという「部分最適の矛盾」*が顕在化し、先端科学・医療・製作工場・航空機等の現場事故に遭遇し、言いようのない「時代の不安」を皆が感じ出した頃でもありました。

やがて一気にIT化・グローバル化が進み、従来の社会基盤となっている様々な理念と秩序が激変し、「9・11」という文明の衝突をはじめ、多くの分野で「全体認識困難」の苦悩が広がり出しました。この荒波を受けて斯界における先の「知の体系」も、ツールの平準化と爆発的な普及とで活字系とメディア系との二極化が歴然と見られることになった訳です。やがて後者が前者を駆逐するのでは、という懸念が頭をよぎる一方、社会の良識派からの「活字系必須」の声にも励まされるという「揺れる」感慨に多くの人がとらわれていた時代です。

景気回復が思うように見られない中で、この荒波を受けて協会活動のシーズの革新を問う動きが「協会活動の全体像が見えない」との声として、この頃から聞かれるようになってきたことを私もよく覚えております。活動シーズは、時代を超えて不変の側面もあるものの、変化を受容できなければその生命体は維持できなくなるとの自然界の摂理が、この時ほど身に滲みて感じられたことはありませんでした。

知の摂取の手法の変遷

さて、今後の行方に論点を絞りこむ前に、ここで現下の社会状況と斯界とのかかわりを、「知の摂取（妙な表現ですが）」の仕方に視点を据えながら見つめてみたいと思います。

一般社会における科学・技術の成熟化と平準化とは、「専門性と非専門性」との区別を曖昧にし、それぞれの分野での膨大な技術関連情報を個人が等しく容易に手に入れることを可能にしました。一方、地球環境維持のための資源のトータルマスが明瞭に示された中で、社会の全体像の理解と全体最適解の探究とに認識をシフトする啓蒙的な運動も活発になり出しました。

建築界においては、建築の専門性の垣根を低くし、建築設計業務のコモディティー化を生み、発注形態の多様化と設計プロセスの川上シフト、改修・再生事業の増大傾向も迎え、新素材・新工法・新理論の登場もあり、さらに住宅分野での主婦層の参画を含む知の大衆化普及を生み、街づくりと個人のライフスタイルとの日常生活レベルでの直接的なかかわりの機会を飛躍的に増大させるなど、ツールの世界から見れば新時代の知見をもとにした全体最適社会を垣間見る社会構造へと変換したかのように見えてきました。確かに、多くの知識を身近にすぐに得られる環境となったことは、紛れもない事実です。

しかしよく見ると、これはまだまだ「手段」の基盤の生まれ変わりに過ぎず、目的とする物心ともに豊かな全体成熟社会の到来を見た訳ではありません。大切なことは、これから「手段」を駆使して遠大な「目的」に挑む時代のとば口を迎えたという時代認識です。斯界においても、これらのツール基盤を活かし、これまでにない広範囲の分野を対象とする活動に展開させて、建築と社会の関係性の新たな体系（環境から公共哲学そして知の融合等）を旗幟に掲げた、地域発信の「新たな知の時代」を迎えていると前向きに捉えればよいのです。

ところでこれまでの協会活動は、いわば活字系を軸にした横連携志向で、柔構造の「単層構造」でありました。今後の活動の行方を見据えるとき、立て直した財務基盤の健全な運営を前提にすることを念頭に置きつつ、その活動シーズは、無限拡張志向よりも一定規模での活動網移動志向へ、予算拡大展開からゼロサム事業展開へ、活字系からメディア系・対話系・活字系ほかの多面的な接続子を備える網羅型志向で、変化受容運動体志向で捉える方がよいと見ています。この体系の中に協会草創の頃の「連鎖性志向」「批評精神」がDNAとして組織の基本構造に嵌めこまれていると見ればよいのです。つまり核としては継承しつつ、形で現れる活動基盤は時代の、そして会員のニーズを受けて変容していく、という捉え方です。

6つのニーズに応える新たなシーズ

端的に言って、現下の協会活動に対するニーズを挙げるとすれば、次の6つに集約できます。会員（言わばユーザー）から見た協会組織の望ましい「かたち」という視点で整理すると、少し強引ながら①「論考連鎖（識見・研究・作品発表・異分野交流等…活字画像系）」②「受発信（速く身近な実務ナレッジ…メディア系）」③「学習教育（基本技法・作法・知識習熟等…指導伝承系）」④「親睦（対話交流・見学視察・語る会…対面会話系）」⑤「知見検索（各種分野ノウハウ摂取…分配共有系）」⑥「自主活動（『知に新しく・楽しく・熱っぽく』を掲げる同人グループ的な自主ゼロサム活動…運営支援系）」という6つの期待役割に分けられます。そしてこれらのニーズを強く動かし束ねる新たなシーズは、新たな知の時代を迎えるための「関西特有の批評精神に支えられた知的探究心を育む知の集積・交流の場づくり」であるとのイメージが浮かび上がってきます。

さて、協会草創の頃の活動シーズはオープンな「批評論考連鎖」であると前段で指摘しました。そしてその頃の時代の課題が「国のかたちの近代化」であるとも記しました。90年近く経て、この「国のかたち論」は再び希求の熱を帯びてきており、産・学・官界が大連合して巨大な知の融合を目指す動きが、三界連携で目立ってきています。日本建築協会という関西圏を中心にした歴史的な知的交流組織も、先の6つのニーズに応える活動の中で、この巨大な新たな社会の知の融合の枠組みと無縁であることは出来ないでしょう。

「建築と社会」をよりオープンな知的集積の場に

そのためには従来の活動枠を越える他団体・機関との接続子を太くした活動と組織の形を採ることが、次の時代の活動基盤になるものと思料されます。社会の知の体系の全体像を追いつつ、地域スケールでの身近な活動の中から知を摂取し時代精神を表徴する批評を積み発信していくというシーズを多方面に地道に育んでいく、そのような旗幟が必要なように考えます。「建築と社会」という稀代まれな知的集積場所を核として発展させた、ささやかなスケールでの「オープン・ナレッジフォーラム」と例示表現すれば、その活動組織イメージが少しは脳裏に浮かんでくるのではないでしょうか。

結びにあたり、こうした今後の協会活動の行方を考え、これを支え舵取りをしていくのは、若手の会員をはじめとする会員各位であることをここに改めて言い添えておきたいと思います。そしてあらゆる年齢層の会員との活発な議論を尽くせば、必ずや本協会が社会で果たす役割が改めて明らかになるものと強く確信するものです。

この節目を機に、日本建築協会が新たな旗幟のもと社会に実ある形で広く活動し貢献していくことを祈念するとともに、今後の会員の皆様のますますのご活躍を心より期待いたします。

引用文献 「ストック型社会」岡本久人

〈よさの　ひさし　㈱日建設計 都市・建築研究所長〉

「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷

北浦かほる

「建築と社会」は2005年７月で記念すべき1000号を迎えた。太平洋戦争の約３年余の空白はあるとしても、大正６年から現在に至るまでおよそ88年間、本誌は日本建築協会の機関誌として建築を通じて社会の問題をうけとめ、その解決を目指して活動することで、私たちの生活とかかわってきている。

そこで、これまでの誌面の中から、私たちの生活に最も関係の深い住まいと暮らしの記事を中心にその変遷を振り返ってみることで、次世代の「住宅と暮らし」のゆくえをさぐってみたい。

Ⅰ　封建性と合理性が葛藤する大正デモクラシー

（大正６年～15年）

都市建築の拘束改良や家屋政策など、建築界の近代化を目指して建築協會が大正６年９月に設立された。住宅については、欧米の文化運動や住宅の量不足に刺激されて「生活改造」や「生活改善」など文化的な家庭生活を営むための住宅の質の改良が取り上げられた。「住宅改良」の要点は①椅子式生活と座式生活をどう調和させるか②常用室と寝室すなわち公私室の分離、小供室の設置③暖房・衛生設備、合理的台所であった。衛生思想や能率、経済などの考え方が台所道具や機器類、家事や家政に取り入れられ、女子教育や婦人が科学的知識をもつことの重要性にも目が向けられていた。『子供本位の住宅』や狭くて用の足りる台所が重視された。図１は目下新築中の「大阪府知事官邸の台所」として掲載されていたものである。

面白いと思われたのは『女流の住宅観』『女流の建築観』『私の経験した住宅建て方の失敗』などの記事が毎号沢山掲載されていたことである。女性の目を通して生活を改善したいという意図が強く伝わってくる。『住宅の改良より先づ生活の改造 武藤山治氏夫人 武藤千世子』のように建築の専門家でない、当時のインテリ層を代表している名士の夫人たちが自由に考え方や生活方法を披露していた。それは台所や小供室、主婦の室だけでなく衛生や住宅観念、購買組合など広範囲に及んでいた。これ以降現在に至るまで、本誌で女性の主張が重視され、これほどのびのびと自由に語られているのはこの時期だけであり、大正デモクラシーの清心ないぶきが感じられる。同様に『名流の住宅観』『名士の住宅観』『新聞記者として見た名士の邸』など、建築家以外の男性の目に映った生活観や住宅観も、多様な角度から取り上げられていた。

また、社会的には低所得層の住宅問題が提起され、大阪市における「細民住宅」や「職工住宅」のあり方が保健面や経営面、借家人など多面的視点から論じられていた。図２は大阪市西区に建てられた北港株式会社経営住宅である。サラリーマン用の低廉な家賃の長屋にも浴室や洋間をつけたり、様々な工夫がされている。この時期、３回にわたって誌面で『改良住宅設計図案懸賞募集』を行っていた。うち１回は４戸建の長屋である。懸賞の中流住宅設計では玄関に洋式の応接間を取り入れた「中廊下型住宅」の痕跡を残す平面や、和洋折衷式の「居間中心型住宅」が評価されている。当時、洋服の男

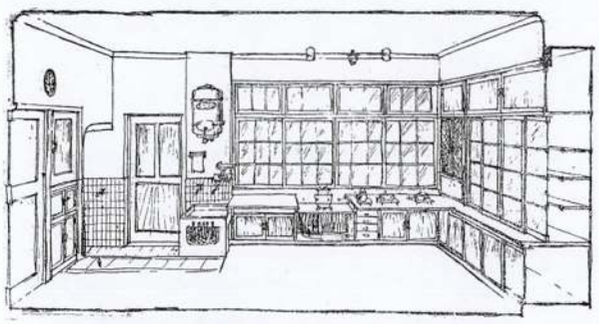


図１　T13.2　大阪府新知事官邸に就いて／澤原隆夫



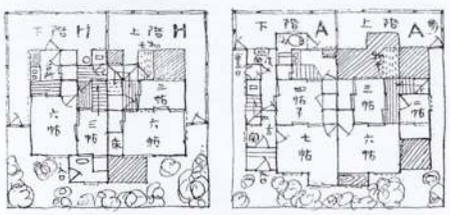


図２　T11.1　大阪北港株式会社経営の住宅に就て／小笠原鋧



図３　T11.9
住宅改造博覧会出品
櫻ヶ丘住宅概要／片岡建築事務所



大林組出品住宅A號配景圖と１階平面

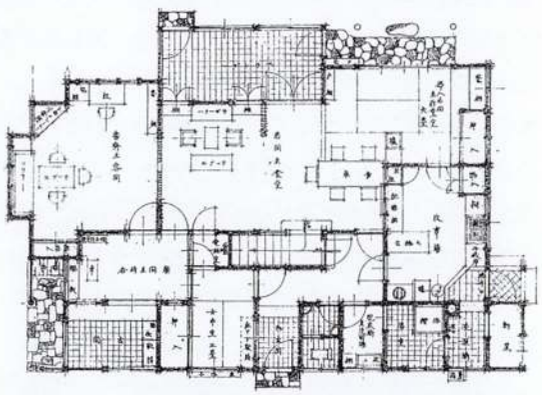


図４　T11.9　住宅改造博覧会出品実物住宅の設計に就て／大林組

性に対して婦人はまだ和服が主流を占めており、食堂は洋室、寝室と小供室は和室が使いやすいとされていた。図3は玄関脇に洋風の応接室をもつ旧来の中廊下型平面の改良住宅、図4は椅子式の居間中心型住宅で2階に和室の寝室をもつタイプである。いずれも大正11年に箕面沿線櫻井櫻ヶ丘で開催された「住宅改造博覧會」に出品された25戸の実物住宅の一例である。博覧会では建築業者らが17戸、懸賞當選案8戸を建築協會が建設している。中流階層で当時理想とされていた生活様式と住宅改造の一端をうかがうことができる。

Ⅱ　鉄道沿線の宅地開発とアパートメント・ハウス

（昭和2年～12年）

『理想的文化住宅アパートメントに就て』と題して、ハーバード大学の既婚学生のアパートやオランダ・ヘーグの長屋住宅とともに、昭和2年に竣工した同潤会アパートが掲載されている。また、イギリスやカナダ、ニューヨーク、シカゴ、オランダなど海外の先進的事例や、居住地の共同体としてのジードルングの概念、新築の大阪パンシオン、外人向きの洋式3軒長屋の事例など実践的な住宅経営の視点を交えて、多様な角度からアパートメントハウスが新しい住まいの形として検討されている。図5、6は『大阪市の最小アパートメント』である。都市の住宅問題解決のために、南区下寺町に建設されたダストシュート・水洗便所付極小（七坪七合五勺）住宅である。

昭和4年には建築協會に住宅委員會が発足し、生活改善や改良住宅の「展覧會」や「住宅設計図案懸賞募集」を多数実施している。この時期に誌面をにぎわした設計懸賞募集だけでも「大鉄住宅、サンマーハウス、貸家住宅(図7)、住宅室内設備、集合住宅、小住宅、改善住宅、分譲住宅、メートル法に依る実用安価小住宅、緑ヶ丘住宅、大美野田園都市住宅、実際に建つる住宅、東豊中住宅、職工向分譲住宅、阪和上野芝住宅、職工住宅、商店住宅、夏の家、農村住宅」と19件に上る。阪神間私鉄沿線の電鉄会社によって、郊外の住宅地開発が盛んに行われた時期でもある。図8は阪神線濱甲子園住宅街完成記念時の「夏の家」懸賞設計入選案である。台所は小さくなり、女中室は姿を消している。台所では動線や配置、人の動きやすさが追求されている（図9）。アパートでは「消費組合」や「共同炊事場」「共同洗濯場」などの提案もみられ、合理化思想がさらに強まり家事を科学的に追究する姿勢がみられた。しかしまだ間取りを考える際には、椅子式と坐居式の問題とともに「家相や方位」が論じられている。図10は「洋式を加味せる中流住宅の台所」として示された台所改造案である。改造のポイントは板敷きの部分を広くし、流しは立ち流しとして板間に設ける、土間は下駄脱ぎ場とし、

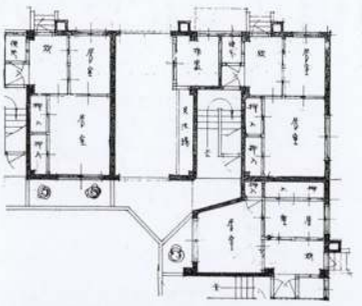


図5　S6.4
大阪市の最小アパートメント
／富士岡重一

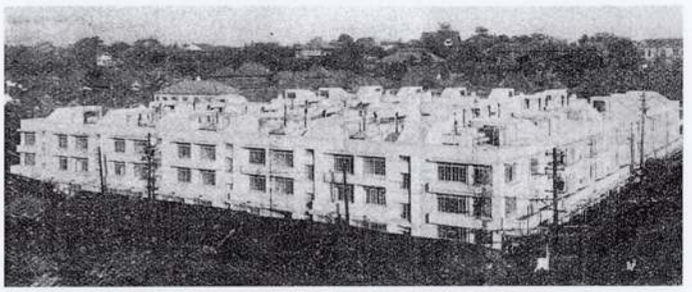


図6　S6.4　大阪市南区下寺町三丁目集合住宅全景

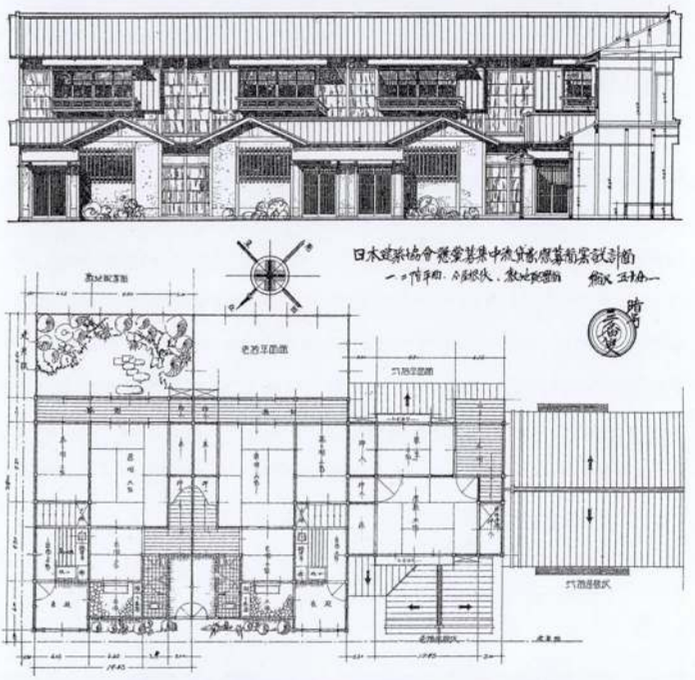


図7　S4.8　貸家住宅懸賞入選図案より、第一等入選

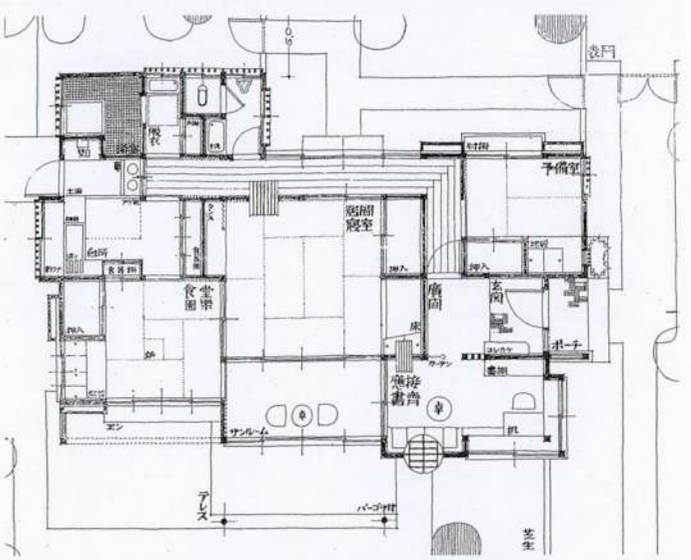


図8　S9.5　海辺に建つ「夏の家」懸賞設計当選図案ー入選ー



図9
S10.5
臺所の紙上展覧会／
増山新平

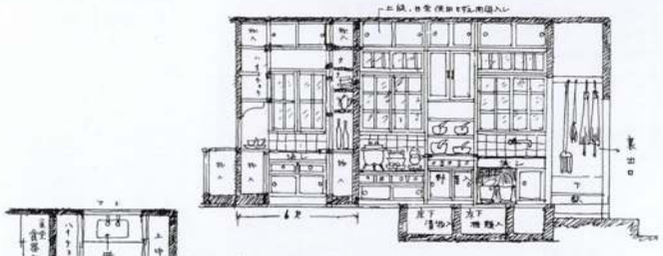
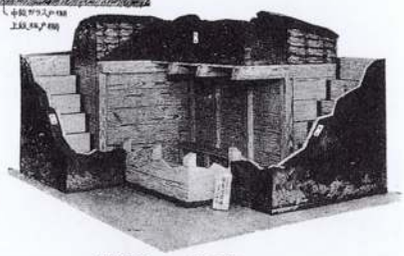


図10　S5.5
住宅の能率化と
台所設備／増山新平



五人用簡易防空壕
（地質良く水高き場合）

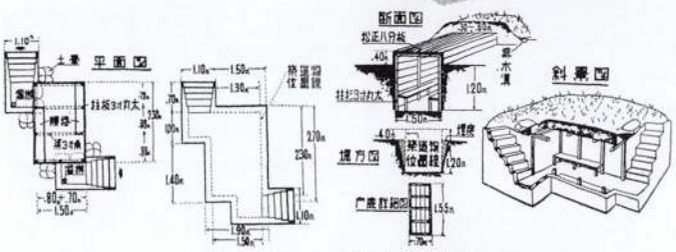


図11　S16.6　市民防空壕展覧會

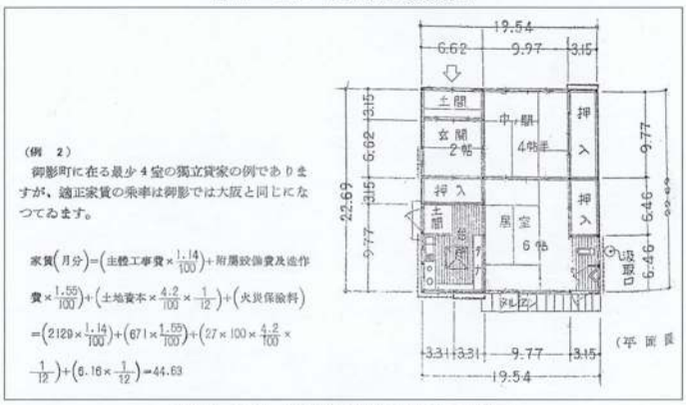


図12　S18.1　住宅問題の研究／矢田鐵三

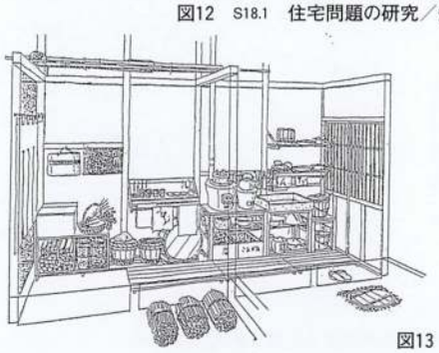


図13　戦時下の台所（S18年）

出窓を付け、水きり台を大きく、瓦斯台は上端を亜鉛鍍鐵板張りとし、食器棚の中間をあけて配膳台を作るなどであった。「臺所塵捨裝置」など生ゴミを直接室外に捨てられる考案もされている。

Ⅲ　戦時統制下の住宅規模の縮小と防空壕時代

（昭和13年～19年）

昭和13年にドイツ軍がポーランドに侵入し、第２次世界大戦が勃発する。16年12月には日本軍が真珠湾を攻撃し太平洋戦争に突入した。物資の欠乏によって誌面は徐々に薄くなり昭和19年３月で休刊となっている。人手不足と参戦への世相を受けて、社会状況が次第に不安になり、それが庶民の生活や住宅などに影響しはじめている様子がうかがえる。市民防空壕展覧会を開催して模型を展示し、防空壕の造り方や効果、工費を市民に説明している。図11は庭や空地に築造するための家庭の簡易防空壕（５人用）の模型と説明である。『時局における大阪市の住宅施設』『住宅の防護室』『住宅と空襲対策』『仮設住宅に就て』が話題を占め、住宅改良や台所改善は二の次となっていた。「統制」や「戦時下」「長期戦」「戦時下お国へのご奉公」「仕事の簡易化」「共同化」など、昭和15年以降は戦時色が一層色濃くなっている。戦時下の生活に対応して住宅規模が縮小され、軍需資材の使用制限規則の発令など、日常生活も統制を受けた重苦しいものになっていく様子がうかがえる。西山夘三の『極小住宅に於ける平面基準の問題』『最低限生活の要請と建設住宅の基準』や『これからの住宅』の座談会や記事から「最小住宅」「改良住宅」「非常時住宅」など、逼迫した社会の余裕のない中でも、動きやすく便利な住宅のあり方が模索されていたことが分かる。

図12は御影町の家賃44.63圓の貸家である。家賃の算定式が各図面に付けられており、戦時統制下の切り詰めた生活がうかがえる。図13は商工省主催による第２回國民生活用品展覧会の、「戦時下のすまひ方」を示す模型住宅の台所部分である。この模型住宅は住宅営団が昭和18年に実施予定の七坪五合型の規模に準拠したものである。水槽台、流し台、七厘台の順に配置されているが、薪・七輪・水槽、盥などが置かれ時代が逆戻りした感がある。空襲・警戒管制・遮光幕などの語句が戦時下であることをひしひしと感じさせる。

Ⅳ　７坪の復興住宅で民主主義を謳歌

（昭和20年～29年）

昭和20年８月、敗戦によって都市は焼け野原となり、物理的にも精神的にも家が基盤を失ってしまった。「建築と社會」が復刊したのは、昭和22年３月である。復刊の第１号は１、２号をまとめた23頁の薄いものであったが、都市や住宅復興への熱意がひしひしと

伝わってくる。450万戸の住宅復興を促進するために、建築の統制強化や建築主要物資の切符制、代用品の育成、労務費の節約、災害の防止、新しい住まい方と設計計画の必要性が述べられている。昭和21～22年の大阪府の復興住宅の床面積は７～８坪であった（図14）。昭和22年に復刊後初めて掲載された住宅は『成長する制限内の小住宅』であった（図15）。主婦の労力を極力節約し、家庭生活に余裕をもたせることを目指した設計がされており、建築面積12坪５合、将来建築制限が解除された時に２室増築することが計画されていた。昭和25年に電力制限全面解除を新聞が報じている。

『赤川モデル住宅を截る』と題して、昭和25年４月号に大阪新聞の記者が書いていた12坪の市営住宅の感想から、当時の様子がうかがえる（図16）。『…大阪市當局が「テスト住宅」と誇るだけに住み心地はまずまずというところ、…家賃も市がご自慢の住吉区の岸里文化住宅の850圓よりも上等の1000圓なのだから鼻もいささか高かろう。安月給のわれわれ風情には、考えただけでもゾッとする高額なのだが、背に腹は変えられぬ　…しかし、ピンはバス改造住宅の55圓から（いや16圓というのが玉出付近にあったかな）、キリは鐵筋住宅の1400圓まである中で、木造住宅中のナンバーワン、横綱なのだから確かにモデル住宅に間違いなかろう。…』。

この頃バス改造住宅も造られており、昭和25年には住宅金融公庫が発足している。住宅委員会では住宅金融公庫を利用して家を建てる人々のために、新時代にふさわしい明朗・快適・利便を目標とした15坪の家を設計している（図17）。『これからの住宅展』『羽衣住宅展』座談会、『伸びる家の審査評』など小住宅のコンペや住宅展が盛んに行われており、狭く小さな住宅にも工夫のあとがみられた。

昭和26年には公営住宅法による公営住宅の建設が始まった。住宅難の解消を目指して都市計画や住宅施策が論じられ、欧米の例が紹介されている。昭和26年の51C型公営アパートに初めて「DK」型式が採用された。後に悪評をうけるダストシュートが当時は文化的な新しい生活を代表するものとして扱われている。民間放送が開始されラジオが家庭に影響を与えるようになった。「君の名は」の放送時間帯には風呂屋がカラになると言われたのもこの頃である。

電気需要の激増により停電時代は昭和27年頃まで続いた。都市部では停電が多く、停電に備えて薪の『新しい炊事竈』やコンロを併用していた（図18）。ガスの時間供給が復帰したのも27年であった。

V　ニュータウンの開発と団地族の誕生
（昭和30年～39年）

経済は順調に伸び続けて、昭和31年の神武景気を迎えた。「もはや戦後ではない」という流行語が生まれたが、住宅難は相変わらず

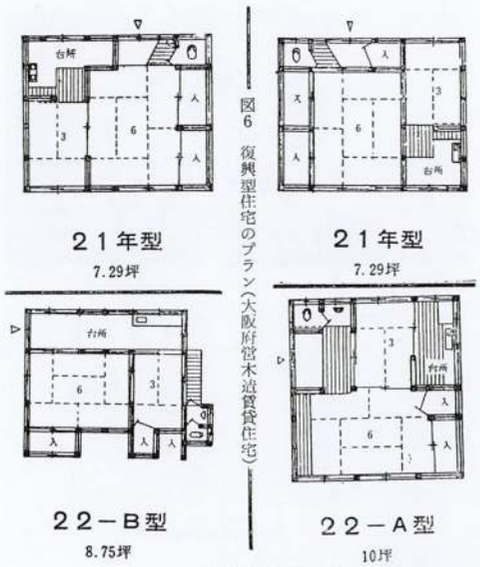
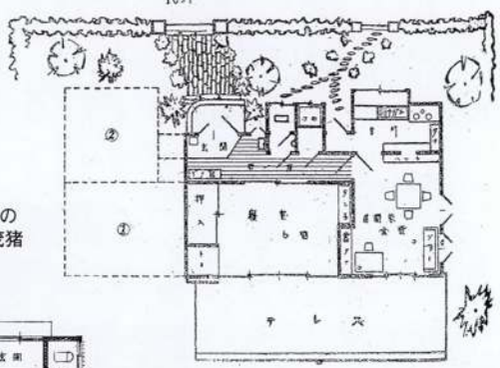
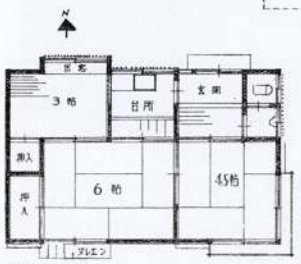
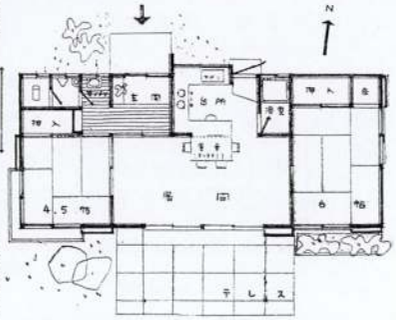


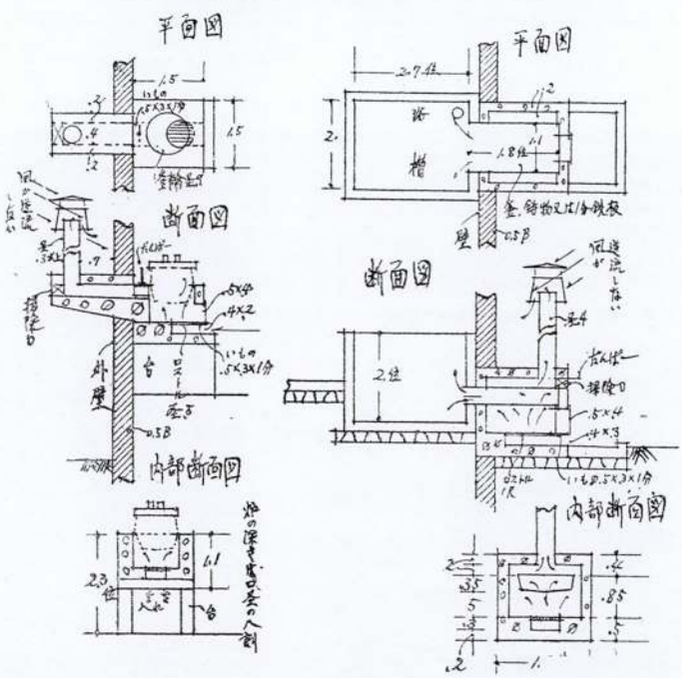
図6　復興型住宅のプラン（大阪府営木造賃貸住宅）

図14
S35.11
公共住宅の15年が語ること／絹谷祐規


図15
S22.3・4・5
成長する制限内の小住宅／岩原茂猪


図16　S25.4
赤川モデル住宅を截る／深澤一彦


図17
S26.6
昭和25年度住宅委員會研究報告



左図　新らしい炊事カマド（２升焚）　　右図　新らしい風呂釜（１人半用）

図18　S25.10　新しい炊事竈と風呂釜の考案／松崎甫

であった。昭和30年には大規模住宅供給を目ざして「日本住宅公団」が設立されている。昭和32年に、本格的な家庭電化ブームが訪れ、「三種の神器」と言われた「電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機」が大量消費時代のトップをきって全国に普及した。昭和29年開局した大阪テレビ局は32年にカラー実験放送を開始し、35年には受信契約数500万台と約5割の普及率を示した。テレビが生活に影響を与え、生活様式や食習慣の画一化と都市化に大きな役割を果たすようになった。

この時期、誌上ではもっぱら団地やニュータウン開発に視点が当てられていた。『住宅問題と住宅経営特集』『都心の団地計画特集』『共同住宅特集』『公共住宅特集』『宅地開発特集』など、住宅特集は集合住宅を対象としたものばかりであった。住宅公団がサンウエーブと技術提携して昭和31年にプレス加工のステンレス流し台を開発し、「工業製品のユニット式流し台」を全国の公団住宅のDKに採用した。nDKの「住宅公団標準設計」によって古市団地、千里山団地、中宮第一団地、出来島団地などが次々に建設されていった。いわゆる「団地族」の誕生である。面積節約のために造られたDKではあったが、文化的な新しい生活を象徴する家の中心となり、台所は家族の民主化を主導する主役となった。図19、20は千里山団地の配置図と住戸タイプの平面図である。実験住宅用に試作したとして、椅子や住宅内の家具などが特集で取り上げられており（図21）、DKにおける椅子式生活の様子がわずかにうかがえる。団地族は消費革命や住宅革新をリードする層となり、DKによる椅子式生活を積極的なモダンリビングに発展させていった。

郊外では電電公社やゼネコン、民間企業の中層アパート建設が盛んに行われる一方、市街地においては、公団の西長堀高層アパートや大阪市住宅協会の法円坂団地高層共同住宅などの高層アパートが建設されていた（図22）。香里ニュータウンの紹介や『公共住宅の15年を振り返って』、宅地造成やスラム改良、ニュータウン、団地計画、高層化、住宅地経営などが問題提起されていた（図23）。昭和37年以降は『千里丘陵住宅地開発』や『大阪駅前市街改造事業について』などの記事にみられるように、用地取得方式や宅地開発に重点をおいたあたらしい「都市づくりの組織」のあり方に目が向けられ、ニュータウンか、市街地開発かが論じられた。団地計画の課題は物理的には家事の合理化を促す空間の設計であり、社会的には住戸を孤立させず、つきあいの生まれる配置計画の手法であった。高度成長期の家庭電化やモダンリビングに代表される人々の生活や、団地に住む人々の暮らし方が、『婦人と住宅座談会』、香里団地の子供座談会『小さなダンチ族』などを通じてうかがうことができた。



図19　S32.3
日本住宅公団千里山団地

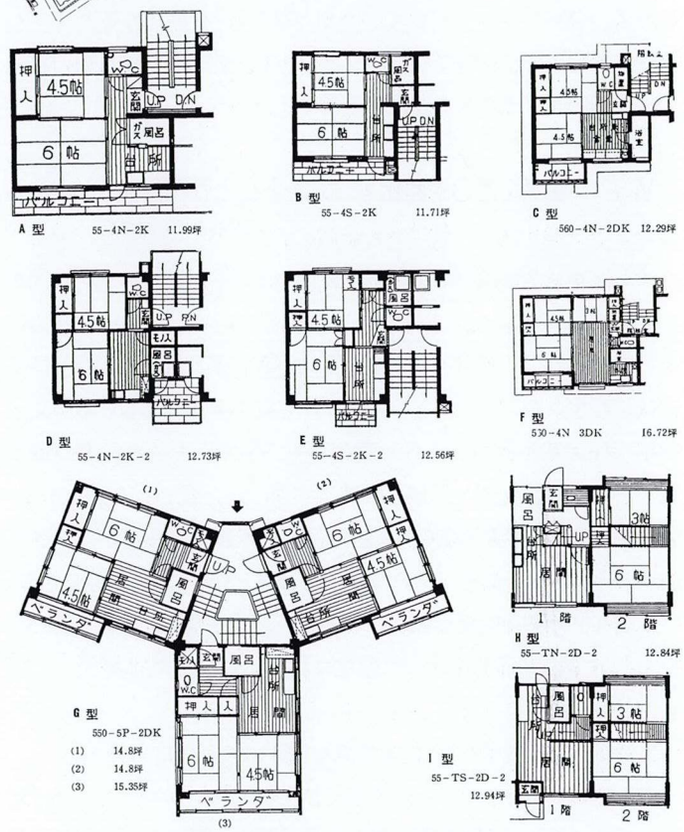


図20　S32.3　日本住宅公団千里山団地

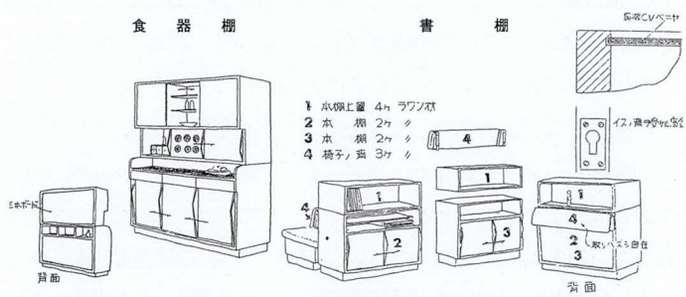


図21　S33.10　多用室の室内／中村登一

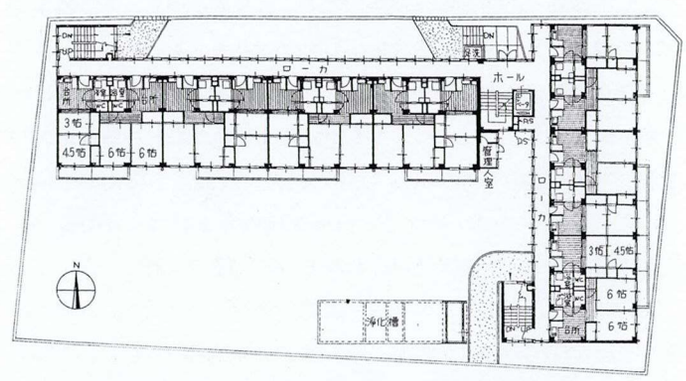


図22　S34.3　大阪市住宅協会法円坂団地高層共同住宅



図23
S34.3
香里ニュウータウン

この時期の戸建て住宅は、初期には近鉄あやめが池で実施された『新しい生活と住宅博・入選作』にみられるような、フラットな屋根をもつ鉄筋住宅が流行していたが（図24）、後期になるとプレハブ住宅の台頭で、一目でプレハブと分かる、弁当箱型で目地の目立つ、特徴的なデザインがみられるようになった。

Ⅵ　住宅生産の量産化・ユニット化と都市居住

（昭和40年～49年）

インスタント食品や冷凍食品が普及し、コールドチェーン時代が到来した。3C（カー・クーラー・カラーテレビ）が三種の神器にとって代わり、昭和44年、世はまさにいざなぎ景気となった。住宅総数が総世帯数を上まわったのは、住宅統計調査によると昭和38～43年、住民基本台帳によると昭和48～53年で、やっと住宅の量不足が解消され、規模（面積）の時代になったと言われた。しかし、昭和53年の欧州共同体ECの文書では、まだ日本の住宅が「うさぎ小屋」と称されたほど、先進国の中では貧しいものであった。因みに、昭和53年の住宅統計調査によると、全国平均床面積は80.28㎡/戸で、戦後の30㎡前後の公営住宅に比べて住戸規模は拡大している。

生活革新や消費革命が、住宅機能や住要求の多様化を引き起こし、設備機器のコア化やユニット化が、第１次マンションブームと呼応して進められた。技術革新とそれに伴う住宅の量産化や工業化の急速な進行は、設計においてかたちからシステムへの流動化を引き起こすとともに、生産・供給機構においても解体・再編への動きを促した。昭和45年からカラーテレビの黄金時代に入り、消費者ニーズの多様化やモノ離れ現象、都市的生活の浸透などとともに８割が中流意識をもつようになった。「住宅産業」という言葉が浸透し、住宅はもう建築ではないと考えられるようになった。バスタブや洗面化粧台、電化台所セット、プレハブ住宅の広告が毎号誌面を飾った。

量産化の課題はユーザーの「少しでも安く、豊かで、便利で、安全な」小空間への要求をいかにして充足させるかであった。特集では、設備のユニット化や工業化へのアプローチとあいまって、住宅の工業化や量産化が誌面をにぎわしていた（図25）。昭和45年にプレキャストコンクリートパネルを用いたプレハブ公共中層住宅の標準設計であるSHPが完成し、躯体・内装・設備の工業化の下地が整った。同じ年に『パイロットハウス技術考案競技』（図26）や、住宅用設備ユニットの開発が行われている（図27、28）。

昭和46年には工場排水の水質汚濁防止法が制定された。水資源の汚染や集合住宅の貯水が原因で浄水器ブームが起こった。また昭和48年の第１次オイルショックが、経済の高度成長に終止符をうち、

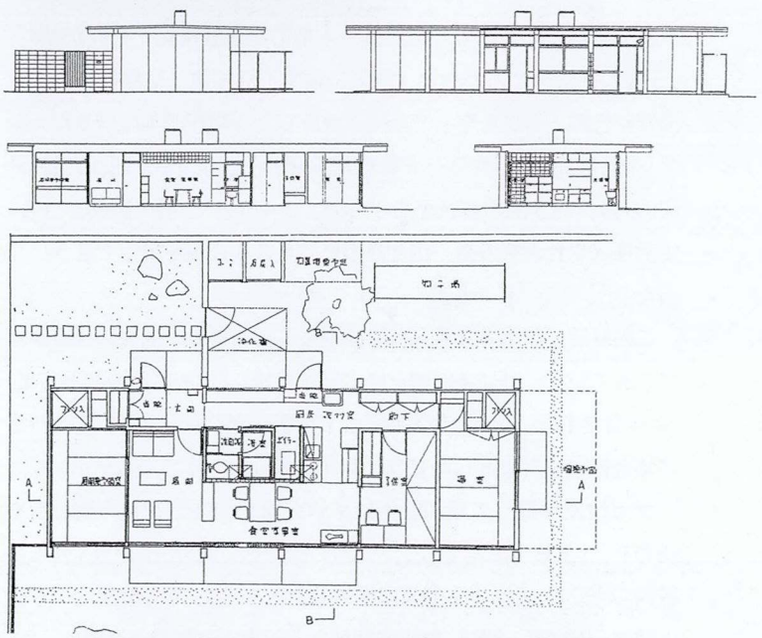


図24　S31.8　鉄筋住宅・新しい生活と住宅博・入選作／池田忠彦

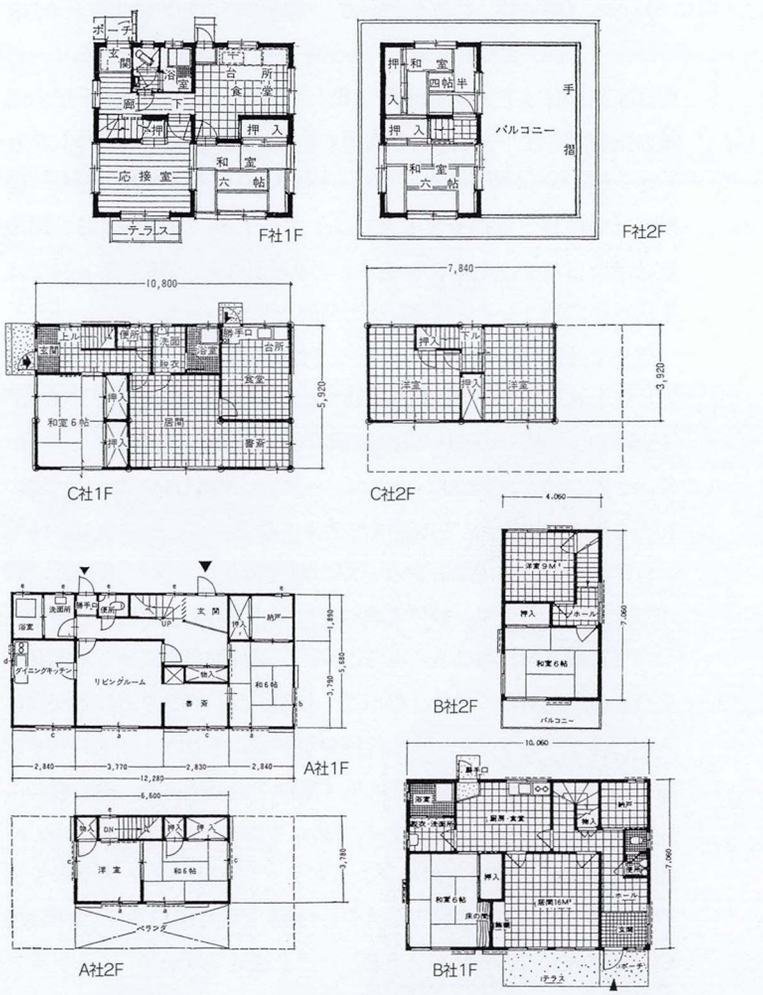


図25　S44.7　「転換しつつある住宅生産」特集より

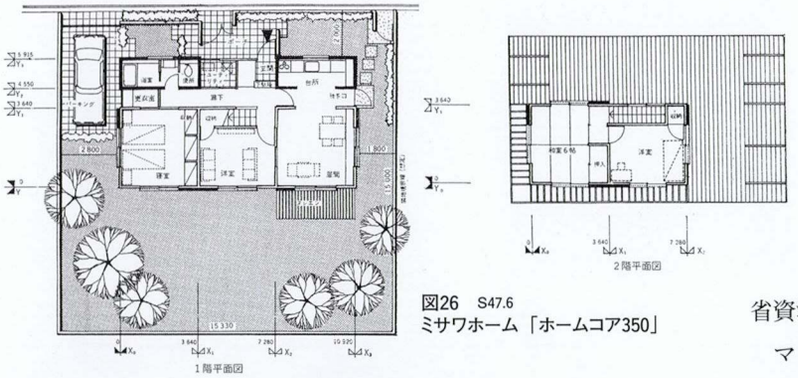


図26　S47.6
ミサワホーム「ホームコア350」

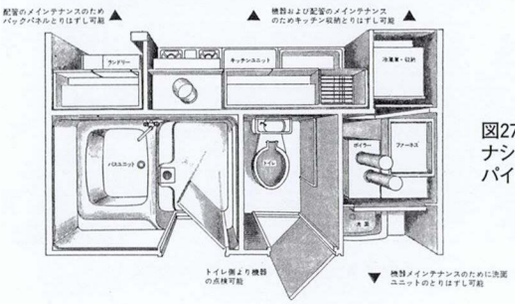


図27　S47.6
ナショナル住宅
パイロットハウス

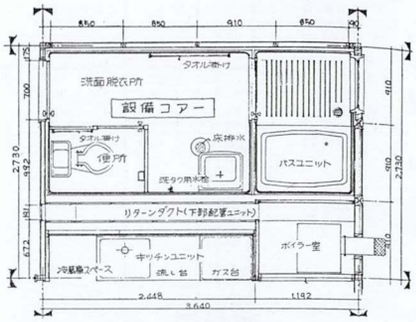


図28　S47.6
セキスイハウス
E-PH'70型の設備

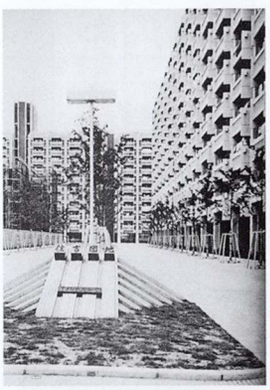


図29　S43.9　住吉市街地住宅

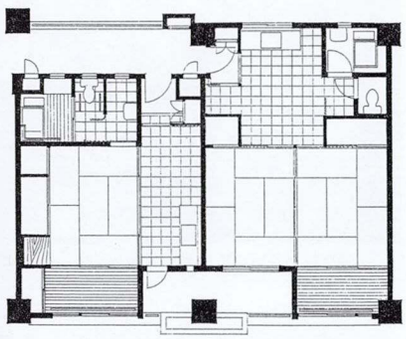


図30　S48.6　ペアー住宅の一例

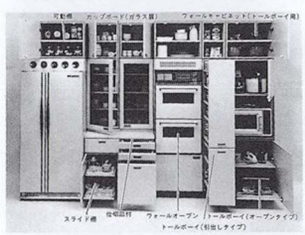


図31　S56.4
システムキッチン―その有効利用／多田昌子

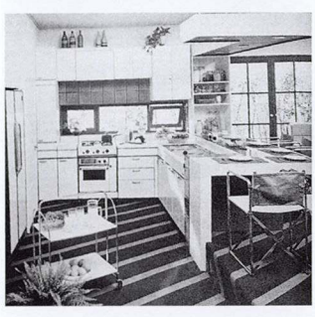


図32　S53.7　システムキッチンLL



図33　S53.12　ワンピース便器

省資源や省エネルギーが本格的に考慮されるようになった。

マンション、コーポラス、ヴィラ、グランドハイツなど都市居住が注目され、市街地に高層高密集合住宅が建てられた（図29）。誌面では、「都市での生活構造」や「新しい近隣空間」「共同で住むことの意味」「住宅地のアメニティ」「住まいの緑」などが注目されていたほか、「住宅政策」や「不良住宅地区」問題など、住環境や社会資本の問題も取り上げられている。戸建てから高層アパートへ、大規模団地開発から市街地開発へ、民間自力建設への依存度が増せば増すほど、ユーザーの声は供給システムから遠のいていった。昭和49年には住宅公団が豊里面開発市街地で「ペアー住宅」を開発し、親子２世帯に賃貸した（図30）。ペアー住宅は1DKと2DKの公団住宅を隣接させてバルコニーで連絡させたものであり、３世代の新しい住み方や高齢者の住宅問題の解決方法として注目された。建築や都市計画の専門家によって、既成市街地の住宅地整備の方策や、都市居住が様々に模索されていた。

Ⅶ　設備の高度化と集住形式の成熟化・多様化

（昭和50年～59年）

昭和50年にNHKカラー受信が2000万を突破したが、経済面では低成長時代に入った。昭和52年に円高旋風が巻き起こり大型倒産が続く中、昭和54年には第２次オイルショックが起きた。住宅面でも省エネが注目され、ローコストエアコンや太陽熱利用によるソーラーシステムの実用化が進められた。集合住宅や工業化住宅の普及で住宅の量不足が一段落し、質や個性のあり方に目が向けられた。

設備のユニット化を推進してきた技術革新の流れは、さらに設備の高性能化を促した。昭和50年にドイツから輸入されたシステムキッチンが、そうした要求をうまくキャッチした。インテリア性をベースに台所機器を組み合わせた台所ユニットがシステムキッチンとして登場するとともに（図31、32）、セントラルヒーティング、エアコン、バス・トイレ・洗面・ランドリーユニット、ゴミ処理設備、節水消音式便器などが開発された。集合住宅では床衝撃音対策としての浮床工法や、トイレ排水音対策（図33）、生活排水や結露などの住宅の保守耐久性の問題にも目が向けられた。大阪南港ポートタウンや森之宮第２市街地住宅では「ゴミの真空輸送システム」がテスト導入された（図34）。昭和55年建設の芦屋浜高層住宅でも真空ゴミ輸送システムが採用され、ゴミはダストシュートから直接地域の焼却炉に送られた。しかし、未解決の問題が多く、それ以後は設置されなかった。美しいシステムキッチンにもゴミ処理と汚れの問題が残った。

初期には、武庫川団地や森之宮第２市街地住宅、新長田駅前市街

地住宅などの都市型集合住宅団地が竣工したが、新規の建設は地方公共団体の財政悪化で事業の進捗が困難度を増した。昭和56年には住宅公団が当初の役目を終えたとして「住宅都市整備公団」になった。低成長時代をうけてミニ乱開発が増加した。誌面では、良好な住環境を確保するための計画的ミニ開発の実施例が紹介されている。1000㎡以下の中層や低層の小規模集合住宅地に、テラスハウスやコートハウス、タウンハウスなどの都市型住宅が、高密であるが計画的に配置されていた（図35、36、37）。居住者の意思を直接反映する住まいづくりとして、コーポラティブハウジング方式の採用や（図38）、ライフサイクル対応の可変型高層公団住宅（図39）、65～95㎡規模のフラットやメゾネット型の多様なタイプのタウンハウスが公社分譲住宅として供給されている（図40）。新しい住まい方に応じた集住形式のあり方と物理的・社会的ハウジングシステムの両面から、多様な計画が実施された。公的都市型集合住宅が多様な展開をみせるとともに、質の面でも民間に劣らず成熟してきた。誌面では都市住宅の新しい住まい方やまちづくりなどが話題をよんでいた。

機能分化・省力化・高性能化されたミニ開発のタウンハウスや電化マンションでは、マイコン利用の電化機器が主婦を家事の煩わしさから解放し、システムキッチンが団らんの場所となっていた。

Ⅷ　住宅とまちづくりにみる感性の時代

（昭和60年～平成３年）

地価の異常高騰が土地投機を招き、株価が下落した、いわゆる「バブルの時代」である。超高層や高層の都市型集合住宅が、土地の高度利用や、住宅の大量供給、高地価を薄める目的で建設された。高見フローラルタウン７番街15号棟、ベルパークシティG棟、桜宮リバーシティAブロックなどが誌面を賑わしている（図41）。低家賃のマンションや公的住宅では、幼児のいる家庭が超高層に入居することになって、生活面で多くの問題が指摘された。他方、ランドマーク性やパフォーマンス性など、超高層や都心居住の魅力が評価されている。住空間の内外を通して、日常的な文化性や芸術性にも目が向けられるようになり、「ニューオフィス」という言葉も流行した。仕事の場であったオフィスに、生活の場としての快適性が求められ、インテリアが注目されるようになった。

一方、商品化住宅には、プレハブ住宅という枠を越えた広がりが求められ、住まいづくりやまちづくり、総合的ハウジングの道具として、町並みとしての調和が意識されるようになった。昭和62年に星田アーバンリビングデザインコンペが実施され、平成２年にはコモンシティ星田の設計計画がほぼ全容を現した（図42）。環境コー

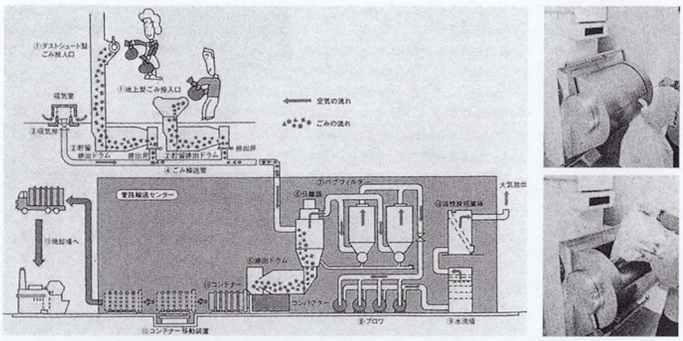


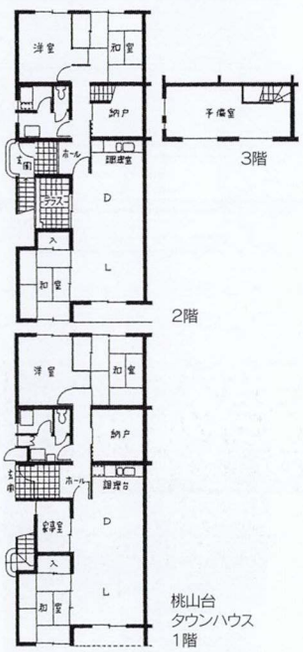
図34　S54.2　大阪南港ポートタウンのゴミ処理の方式



図35　S52.10　メープルホーム六甲



図37　S52.10　千里月見ヶ丘ハイツ



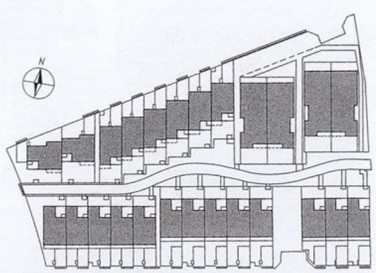
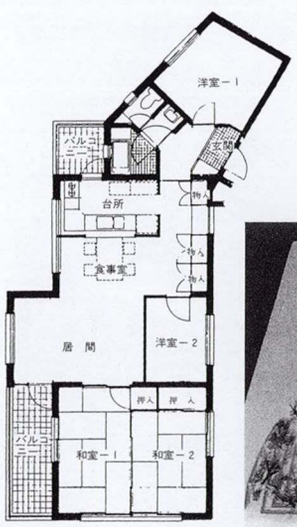


図36　S52.10　桃山台タウンハウス



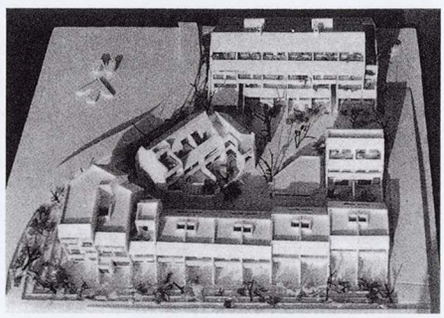


図38　S53.6　泉北原山台コーポラティブハウス

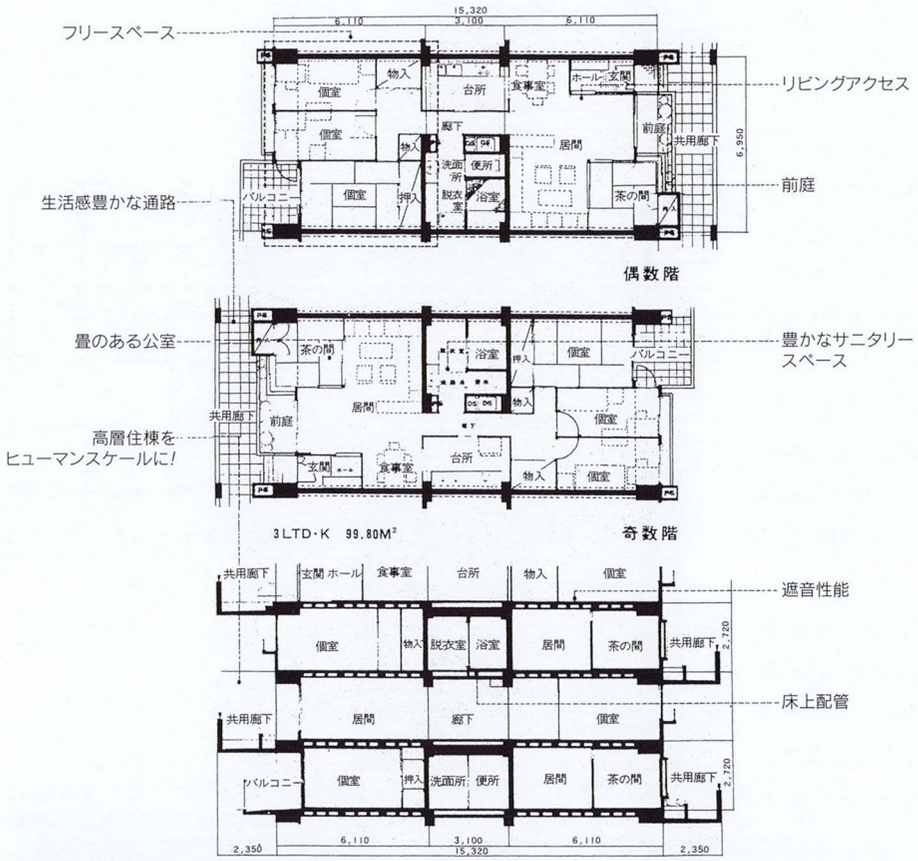


図39 S56.7 「都市住宅―住まい手からの発想―」特集よりニュー・モデル高層リビング・アクセス・タイプ



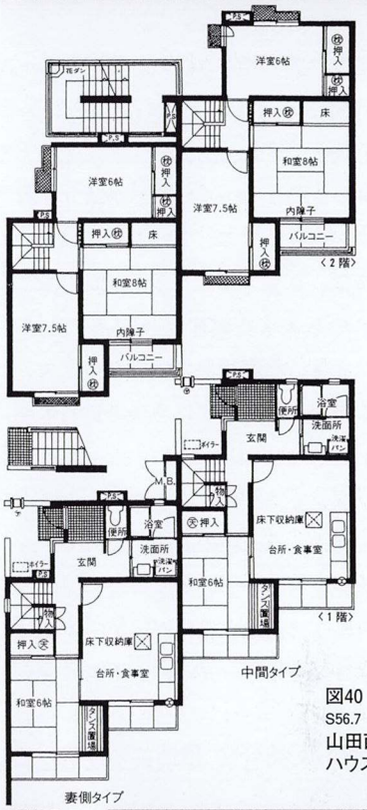


図40
S56.7
山田西タウン
ハウス

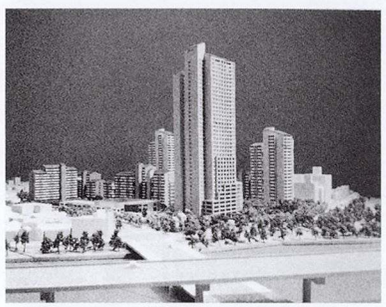


図41 S63.9 桜宮リバーシティAブロック
(コンペ案)



▲ゲート

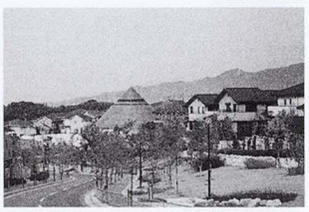


▲コモン広場





▲二戸一のゲート



▲ショッピングセンター

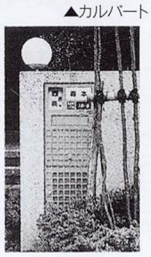


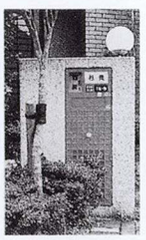
生活のデザイン
を求めて



▲カルバート









▼排水孔

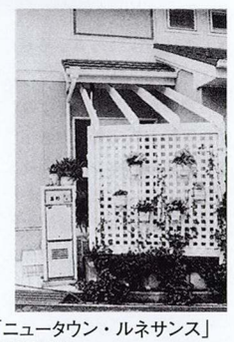


図42
H3.12
コモンシティ星田



図43 H3.12 コモンシティ星田

図44 H1.2 「ニュータウン・ルネサンス」
特集 座談会より

ドの効用や、まちづくりにおけるディテールの重要性がそこで実証された（図43）。また、二色の浜パークタウンのまちづくりにおける色彩計画や、泉北茶山台の建築協定によるまちづくり、再開発型ニュータウンのまちづくりなどが紹介され、魅力あるデザイン戦略の必要性が取り上げられている（図44）。

この時期、さまざまな「21世紀の住まい像」が追求されている。大阪ガスの近未来提案住宅「NEXT21」や、松下電器がグッドリビングショーに出展した「HALSハウス」が紹介され、住宅都市整備公団も21世紀につなぐ住宅像の質的水準を快適、文化、健康の指標で論じている。『21世紀の住まいはどうなるのか』のパネルディスカッションでは、外と内の両面から住まいの変化が取り上げられている。従来の都市性の崩壊によって、あらゆる場所が都市になり得る可能性をもったことで、外から住まいが拡散し始めているとともに、内からは血縁家族の崩壊で、住まい自体のイメージが変質してきたとコーディネーターの上田篤は締めくくっていた。

Ⅸ　地球環境時代の環境共生住宅とユニバーサルデザイン

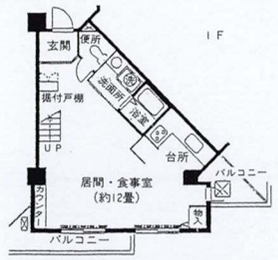
（平成４年～平成16年）

少子高齢社会に入って、車椅子で使えるケアキッチンや、高齢者の生活空間のあり方が問われている。さらに社会環境のめざましい変化や衣食住の外部化が、女性の生き方の変容を促し、多様な価値観やライフスタイルを生み出している（図45）。

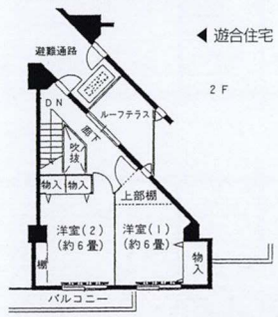
「省エネルギー住宅」や「高断熱高気密住宅」、「ソーラーハウス」「エコハウス」「高耐久可変住宅」「健康安全住宅」など、これまでの様々な省資源や環境配慮型デザインの流れを受けて（図46）、平成11年に「環境共生住宅認定制度」が発足している。科学技術中心の都市づくりに対する反省として、地球環境の保全という観点から、自然の恵みを享受できる住まいやまちづくりが求められていた。「環境共生住宅」はこのような要請に応えて周辺環境との親和性をテーマとした居住環境の形成を目指している（図47）。

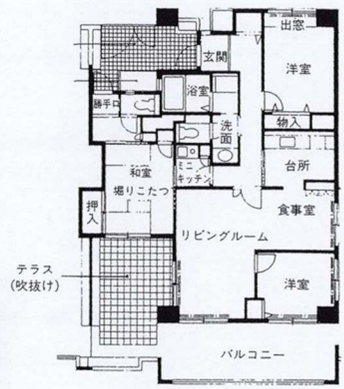
平成７年には阪神・淡路大震災が起こり、まちづくりの視点を踏まえた都市の復興計画が模索された。「コレクティブハウジング」や住宅の「長寿命化」「ペットと暮らせる住まいづくり」「エコリフォーム」「アレルギー対策」なども含めた、多面的な視点から環境と共生できる家が求められた。平成15年には建築基準法が改正され、シックハウス対策のための規制が導入された。ホルムアルデヒドに関する内装材料の制限や24時間機械換気設備が義務づけられた。

一方では、高齢者向けの様々なバリアフリー機器や設備が開発され「ユニバーサルデザイン」による福祉の街づくりが都市に浸透した。「浴室や便所などの水回り設備」（図48）、「介護をふまえた空間

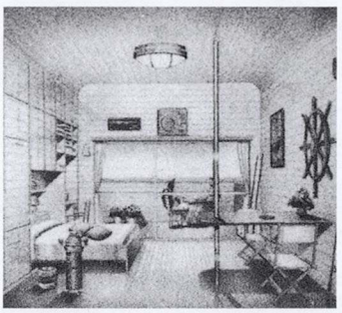


◀遊合住宅



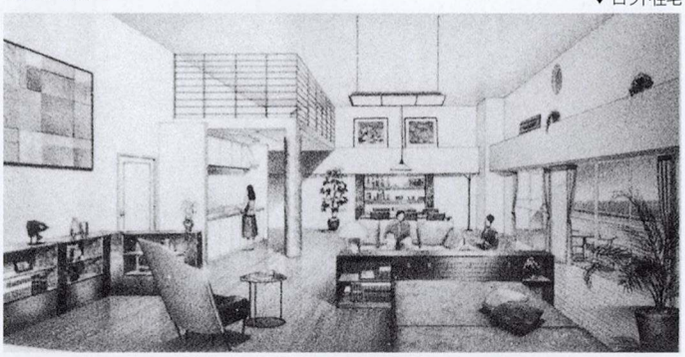


▲お年寄りとの同居を考慮した
2世帯同居（ペア）住宅

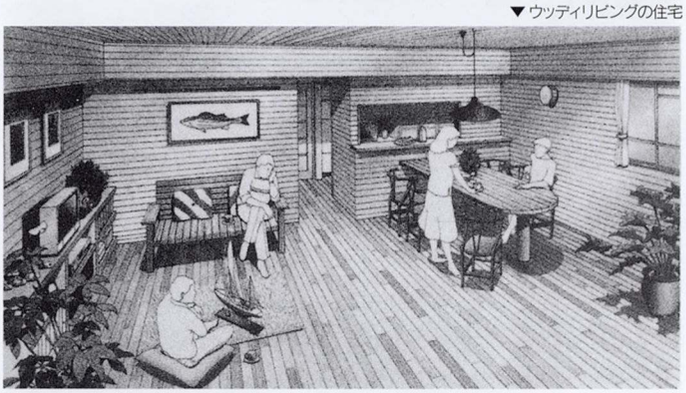


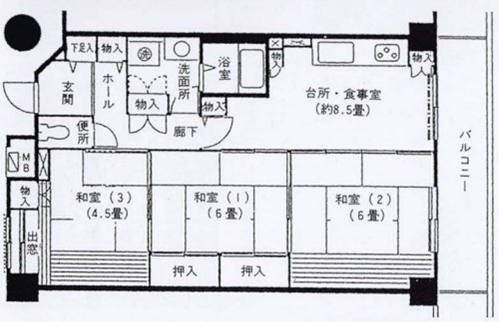
キャビン住宅▲

▼ロフト住宅



▼ウッディリビングの住宅





◀和室（続き間）住宅

図45　H5.11　「都市型住宅再考」より

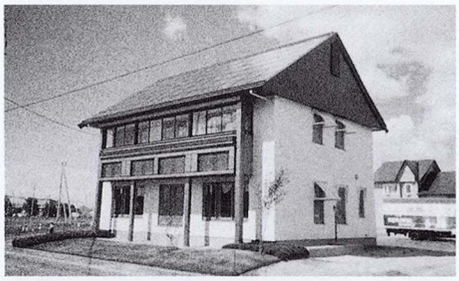
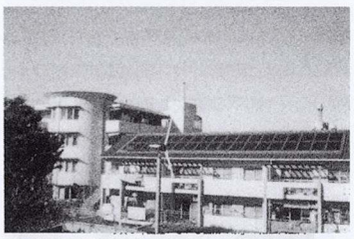
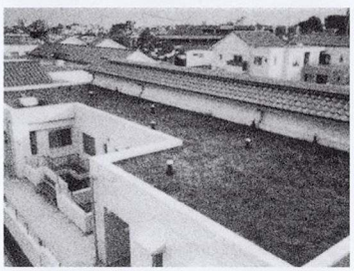


図46
H9.8
「新エネルギー」特集より
ゼロ・エネルギー住宅



▲風車とソーラーコレクター



▲屋上緑化

▼湿地のビオトープ



▼清掃風景



図47　H15.4　「サスティナビリティ」特集より



図48　H15.8　「介護と建築・設備」特集より―水まわり用車いす

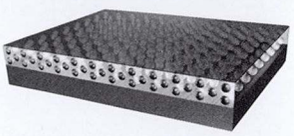


図49　H16.8　サーモフロア

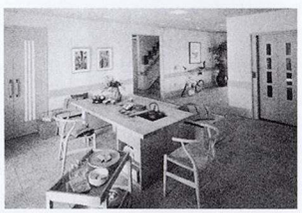


図50　H14.8　「建築をささえるセンサー」特集より「生涯いきいき生活の家」



図51　H6.11　大阪府営春宮住宅

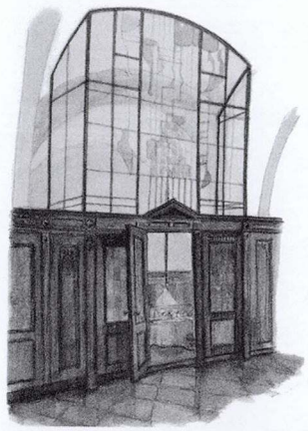


図52　H6.7　ブレーメン・ラーツケラーの個室

図53　H6.7
ほどよい距離感
―中之島公園

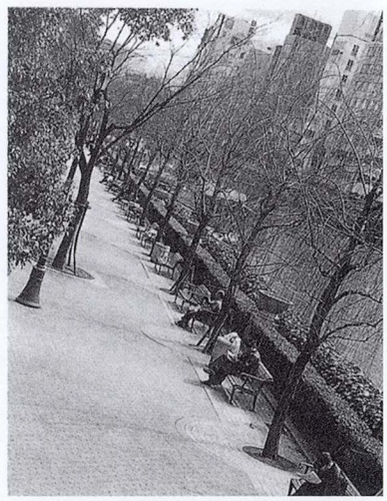


図54　H6.7
思い思いの視線を
―ケルン大聖堂前広場

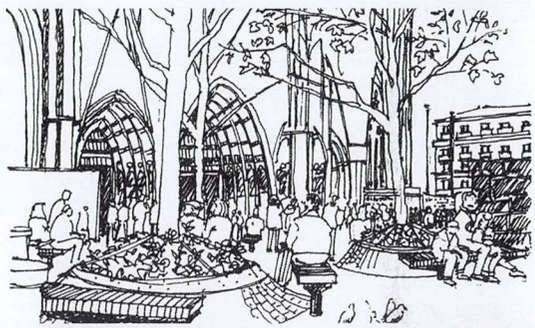


図55　H6.7
自然の中のテラス
―海遊館



のあり方」「ケアキッチン」「ホームエレベーター」「オール電化住宅」「各種センサー」「サーモフロア」（図49）、などの開発と商品化が進められた。生活環境の悪化に伴い住宅の「防犯設備」も注目され始めた。図50は高齢者対応住宅で、玄関の上り框をなくし全体を土間とした、ユニバーサルデザインである。

環境共生型の要素や技術、手法などを、地域性にあわせてバランスよく設計するとともに、古い住宅の修復やコンバージョンも含めて、計画から廃棄までのすべてで環境負荷を低減する「ライフサイクルローインパクト」の考え方が定着し、浸透してきた。

もうひとつの流れは都市居住のゆくえである。平成12年に住宅都市整備公団が既にその役割を終えたとして、「都市基盤整備公団」に改名された。大阪府営春宮住宅の再生や（図51）、古市中住宅再生プロジェクトなど、都市型公共住宅建設は建て替えのみとなってしまった。しかし、住まいの機能の外部化が進むにつれ、人々はモザイク化した都市空間に、安らぎと孤独を求めて「居どころ」を探し続けるようになった（図52、53、54、55）。

X　住まいは、家族のゆくえは？

（平成17年～）

住まいにおいても、個の空間としての「居どころ」が求められ、重視されるようになっている。

従来の子育て核家族に代わって、若年、中年、高年のシングル層が増加する少子高齢社会では、多様な住戸形式が求められる一方、多機能型都市の中で自由な個人として共住できる、環境共生型の個室群住居が求められている。

〈きたうら　かほる　帝塚山大学居住空間デザイン学科教授、学術博士〉

「建築と社会」1000号記念

座談会　歴史を踏まえて未来へ―協会活動を魅力あるものに―

上原正行／河津龍大／神田暢子／小山将史／中村文紀／松浦剛士

座長（上原）　本日はお忙しい中、1000号記念特集の座談会にお集まりいただき、ありがとうございます。日ごろお考えのアイデアを御披露いただけると期待しています。

ところで現在、協会員は教育関係、設計事務所、建設業、建材関係とほぼ４分野の人々の構成となっていますが、50代の方々が一番多く、次が60代、そして40代という順になります。したがって、これから先、若い人にどんどん入っていただける企画をしなければいけないわけです。個人会員は1,433名ですが、毎年７％ぐらいずつ減っています。退会理由は、建設業界の不況から転職、業務変更、定年退職とかです。そして非常に耳の痛い話なんですが、「具体的な会員のメリットがない」、もう一つ「会誌に魅力がない」…とのご意見もいただいています。

「建築と社会」と、建築協会をとりまく社会状況

座長　冒頭好ましくない話をしましたが、神田さん、いかがですか。若い方のご意見をお願いします。雑誌は読んでおられますか？

神田　あまりないですね。たまに気が向いたら、ぱらぱらめくるぐらいです。

座長　もったいないじゃないですか。14,400円払っているのに。

神田　払えと言われたので……。（笑い）

中村　特集頁は毎月、編集委員会の中の各分科会、小委員会が交代で担当していますが、いつもネタ探しにエネルギーを使います。分科会、小委員会は合計９つ。年間で複数月、当番が回ってくる分科会もあります。毎月の収支面でも設楽委員長や広告企画小委員会が苦労されていますが、特集もどれだけ関連広告が取れるかが結構、問われます。

そんなところからして、特集企画自体のあり方を考え直していかないとなかなか、もっと皆さんが読みたいと思われるようなものを作り込めないのではないでしょうか。

日本建築協会会員構成　　2005年４月１日現在

年齢構成	19歳以下	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70歳以上	不明
官公庁			5	16	39	5	2	
教育機関 研究機関			8	21	34	26	6	1
設計事務所		1	94	131	234	123	51	4
建設業		3	68	54	168	71	23	16
建材業			1	3	8	2	7	2
設備			2	2	3	7	5	
学生								2
その他		2	9	16	26	44	84	4
合計	0	6	187	243	512	278	178	29

*その他には、銀行、コンサルタント、デベロッパー、ビルメンテナンス、不動産、印刷出版、会社営繕、各種団体、交通関係、造園業を含む

座長　鶏と卵みたいで、堂々めぐりになるのですが、やっぱり時代の流れということでしょうか。松浦さんも、勤め先で責任の重い立場におられますが、業務の合間をぬって、委員を続けていただいていますね。感じていらっしゃることを、どうぞ。

松浦　「建築と社会」の章立てと他の建築関係の会誌を見比べると、ほとんど同じなんです。新しい作品の紹介があり、続いて特集、後はお知らせ関係、どの会誌も大体一緒なんです。建築学会の会員は３万人ぐらい。そのうち数千人が雑誌の編集に関与しています。建築士会の会誌の厚さはそれほど変わりませんが、「個人の参画」が多いように思います。

座長　今おっしゃった「個人の参画」ということが大きなテーマになりそうなんです。自分が活動に参加できていない…ということがネックみたいですね。

例えば「建築ジャーナル」では、以前、「ビフォーアフター」を特集していました。リニューアルの仕事をしている事務所、工務店への取材が多く、話題性があり、その号はかなり読まれたと聞いています。また「日経アーキテクチュア」は“情報が早い”と思います。若い人が本当に本を読まないかというと、そうでもない。今、松浦さんがおっしゃったように、興味のあるものは読んでいますね。

何かの参考になればと思って持ってきたのが、この材料関係のPR誌です。こういうものが毎月、無料で個人宅に送られてきます。設計事務所の新築作品も取材し、新材料の情報もただで取り寄せることができます。（**写真**参照）

私は西宮に住んでいますが、「宮っ子」というタウン誌が西宮市から無料配布されます。それこそ身近な話題ばかりで、よく読まれています。そして、これはエスバイエルの「すまいりんぐ」という広報誌。こういう情報がはんらんしているわけです。こんな状況で、同じような雑誌を出していては、「またか」と飽きられる。



工高生デザインコンクールへの取り組み

小山　ここ数年、会員数が減って、会の運営が大変だということは、教育委員会の中でも話題になっています。それでわれわれに何ができるのかという話と同時に、講習会小委員会のお力で運営でき

ているということが改めて分かったのです。

この会員構成（**表**）を見ていて、改めて高校生を含めた学生がいないと思いました。建築の教育は学校の中だけではとてもできませんから、生徒を見学などに誘うのですが、なかなか参加してくれません。「未来に投資していただく！」なんて言ったらおこがましいかもしれませんが、協会の催しに若い子たちが積極的に参加できるような形をつくっていかなくてはいけないと思っています。

工高生デザインコンクール（以下コンクール）は、平成16年に第50回を迎えました。審査員15名の構成は、大学の先生方をはじめゼネコンの設計部の方、またアトリエ的な設計事務所の方です。その審査会でよく出る話題は、「入選した学生は、その後どのような道に進んだのか？」というものです。

「工高生デザインコンクール入選作品集」は、日本建築協会創立75周年記念出版ということで、コンクールの入選作品をまとめたものなのです。これの編集を進めていく段階で、入選者たちの過去や現在を各学校に尋ねました。その結果は、大手ゼネコンで働いている方や設計事務所を起こしている方、教育関係に進まれている方など多方面にわたっていました。返ってきた手紙の中には、少なからず建築協会のコンクールを懐かしく思っているものがありました。

入選者のみならず、多くの参加者がコンクールを通して建築を学び、その道に進んでいるのを知り、何らかの方法をもって交流が持たれ、学生が在学中も含めてその後も建築協会とかかわることができたらいいなと思っています。

座長　教育委員会の立場から、「コンクールがいい結果を残している」とのコメントをいただきました。今後、このような場がもっと広く提供できるとしたら、どんなものがあるのか、提言していきたいと思います。

小山　このコンクールは、工高生が参加する建築系コンクールの中でも、「建築を学ぶ」という純粋な精神に基づいて開催されています。賞金が出るわけでもないし（笑い）、選び方も私なんかは好きなのですが、ほかのコンクールが序列をつけようとするのに対して、全国で10点の優秀な作品を選ぼうと…。審査員も、いろんなタイプの作品、例えば余り発想は豊かではないけれどもドローイングは非常に努力しているとか、図面は下手だけれどもすごくおもしろいことを考えているとか…。建築協会の精神と言いますか、歴史がこういうところに表れているのではないかと思います。そういった建築協会の良い部分を広報することで、若い人たちがもっと参加しやすくなるではないでしょうか。

それを考えると、教育委員会のホームページを充実していかなくてはと思います。高校生が携帯でアクセスできるような環境、例えば建築物の情報や見学会の案内があるとか、何かメリットがないと学校が団体会員になることはむずかしい。個人会員の会費は学生で8,400円ですが、この金額を個人で負担するというのは難しいと思います。

高校生は、初期登録費で2,000円とか、極端な話、ただにするとかで、あとは見学会などに参加するときに資料代を徴収して、会員予備軍というわけではないですが、そういったところで協会とのつながりができてきたらいいと思っています。

座長　情報を先生方のところへお送りしたら、その企画に参加するようにご指導いただけるのですね。

委員会活動の現在

座長　次に、見学会、講演会、親睦会などの事業企画が、コスト意識に敏感な若い人に受け入れられるにはどうしたらいいのでしょうか？　河津さん、いかがですか。

河津　建材委員会の中では見学会を年に一度、やっています。見学会の場合は、委員の参加がぐっと上がるんですが、今の若い方々がどういうところを魅力として感じているかというのはつかめていない。アンケートをやって把握するということまではやっていません。ニーズがきちんと分かり、そういったセッティングをすれば、見学会、講習会とも参加率が上がるんじゃないかと思います。具体的にどうしたらいいのかは、ちょっと今、思いつかないんですけれど。

座長　委員会活動への参加が、会員として何かメリットがあるということを感じてもらえたらと思います。例えば出版委員会の場合は、新刊本の講座には無料で出られます。もちろん、その本も贈呈されます。さっき日本建築学会の話がありましたけれども、コンペに応募しようと思ったら、その段階で「会員になる」ことが義務付けられています。だから毎年、学会のコンペに応募したい人はずっと会員です。

中村　学会の「作品選集」への応募も、そうですね。

松浦　私は事業委員会の委員を10年くらいやっていますが、一昨年から赤字は出すなということで、見学会は去年４回、今年も４回、とにかく会員の集まりそうなものに絞らざるを得ませんでした。昨年は４回に絞っても全部定員割れでした。収支ではナントカ黒字になりましたが、見学会は会員へサービスすべき活動だと認識しています。見学会の参加費は1000円か1500円ですから、見たいものがあれば皆さんご覧いただけるはずです。若い人でも同じと思いますが…。

座長　５月の見学会は西宮北口の「兵庫県立芸術文化センター」



中村文紀 なかむら ふみのり

1988年東畑建築事務所に入社、設計部。大阪市内では、ジーニス大阪（第17回ハウジングデザイン賞）や浪速区役所・保健所、NSDビルなどの設計を担当。

神田暢子 かんだ まさこ

1997年㈱北條建築構造研究所に入社。構造設計業務に携わる。2002年退社。2003年神田建築工房を開設。



でしたか？　現役を離れた方、設計事務所の方などが楽しみにしておられます。ああいった機会がないと見られないから…。

松浦　近代建築シリーズとかもそうですよね。ふだん行けないところへ…。

神田　私は、出版委員会に勉強をさせてもらいに行っているという感覚で出ています。

委員会は、企業臭ぬきにして、交流できる場所のはずですよね。会員になっただけだったら、雑誌が送られてくるだけです。見学会なり講習会なりがありますが、それに行ったからといって、そんなに人間関係が広がっていくとは感じられないんです。どの講習会に行っても、そういう感じがします。

同じ会社の中だったら上司、部下で話せないことも、社外では話せることもあるじゃないですか。それぞれの分野で著名な方もいらっしゃいますし…。受け身で聞くだけじゃなくて、人数を少な目にして意見が交わせる、そういう機会があったらいいなと思います。

中村　5年ほど前、若い会員の集い小委員会の企画で、その時々で話題の建築家をお呼びして、30人ほどの集会がありました。

神田　そういう企画があったらいいと思います。

松浦　その企画が事業委員会から現在は消えてしまっているんです。要は、若い人が忙しいから、インターネットでほとんどチェックできるからということで…。若い会員の集い小委員会が企画し、開催した30's EYEに登場したアーキテクト・アーティストたちの素顔に迫る『建築する人たち』という本は出すつもりだったんだけれども、いまだに出せないというか……。

中村　出てないですね。

松浦　若い会員の集い小委員会では伊東忠太の展覧会とか、いろいろおもしろいことをやられていたんですが、忙しくなると、全体で集まって話すより、パソコンで済んでしまうから……。最近もほとんどメールで話し合っておられるようです。

神田　今の協会のホームページだったら、一方的なというか、こういうのをやりますよといった内容だけですね。そこに掲示板ぐらいはないといけないと思いますね。

中村　「私はこう思う」と発言できる場ですね。

神田　「こういう疑問があるんですけど」みたいな質問が書けて、それに対して答えも返ってきてというのであれば、アクセスする回数もふえるし、情報を見る人間もふえるわけですよ。

河津　建材委員会でしたら、検討会のときに、会員にも参加してもらえるんですよ。新しい建材なんかのプレゼンをしてもらって、記事に載せるかどうかという判断をしますが、委員の集まりが悪いということもあるんでしょうが、一般会員にも門戸を開いて、プレゼンに来てくださいと言っているんです。

すると、設計の方もゼネコンの方も、そして私のところ（日本建築総合試験所）みたいな人たちもいるので、思いもよらない質問とかが出て、結構おもしろい話も聞けます。確かにネット上の話もいいんですが、生で聞く場があると、また少し違うという気がします。

座長　材料のPRによって、仕事への引き合いを期待しておられるわけだから、うまくつなげてあげれば非常にいいですね。それで、神田さんがおっしゃるように、そういうものが掲示板の中で、すぐ分かるようにしたいです。

「建築と社会」誌の中でインフォメーションや法令コーナー、こういう頁は、12カ月分まとめて見返すと、非常にためになると聞いています。コラムとしてはいいんじゃないかと思いますね。

参加意識をくすぐる「建築と社会」に！

座長　次に、「建築と社会」の誌面企画についてお尋ねします。

例えば、先ほど話題に出ました「大改造!!　劇的ビフォーアフター」。建築の某先輩曰く「あんなええかげんな番組はない。嫌いだ、見たくない。しかし、うちの家内はよう見てるなあ…」。

「匠百軒」（ぴあMOOK刊）という本が出ています。所ジョージが巻頭でしゃべっています。「この番組を企画し始めてから、リニューアル物件がものすごく気に入った。次は絶対リニューアル、リフォームしたものに住みたい」。こういう企画は、下世話と言われれば下世話ですけれども、分かりやすく身近な話題づくりに長けています。



松浦　建築に関する雑誌は、例えば、都市計画の雑誌もあれば、設備や構造の専門雑誌もあります。そのような状況下で「建築と社会」は、何を特徴として打ち出すのか改めて考える必要があると思います。協会の会員構成を見ていても、役所・教育機関・設計事務所・建設業・建材業など非常に多くのジャンルの方がおられるので、すべての職種に関するモノを載せる必要があるのではないでしょうか。私は建設業に勤務しておりますので、2月号で長崎の医療センターが掲載されていましたが、ひさしぶりに施工記録の記事で、楽しく読みました。

座長　今後編集で「参加意識」をくすぐる企画を掘り起こしていただけたら…と思います。自分の書いたものが載るとなったら、みんな読むでしょう。

中村さん、先ほどお話が出ていた、この雑誌の個性を発揮するこ

とについて、お話しいただけませんか？

中村　まずは協会自体の話があると思います。前身は「関西建築協会」ですよね。日本建築協会になったのは、日本全国へ羽ばたこうということだったのだろうと思いますが、実情は、やはり関西が中心です。そして現在、そのこと自体が会をユニークな存在にしているし、そのことを強調する方がいいんじゃないかと…。

Ｊリーグや楽天のように、地域重視型の、風土や文化が染み付いていて、書き手や読み手の顔が分かって、あるいは組織が分かって、分かる感じ。例えば御堂筋の建物だったら、グラビアで見てから見る人もいるだろうし、その逆もある。「建築と社会」に載って、あの建物の設計は彼だったんだと知らされるような、そういうあり方もあると思いますね。

グラビアに限っていうと、作品作風頁というのは、相変わらず昔のフォーマットを踏襲していまして、なかなか崩しがたい。割としゃくし定規な設計趣旨しか載っていないんですよ。

神田　それはすごく感じますね。

中村　前から作品作風小委員会でも話題になっているのですが、例えばクライアントの声とか施工担当者の声とか、あるいは「日経アーキテクチュア」には、たまに出ていますけれども、周辺住民の声も載せるほうがいいと思うんです。「建築と社会」は、まさに社会との接点に注目するということを強調して、リアルな物づくりの概念というか、そういうものが誌面に表れてもいい。地域を重視しているからこそ、人が見えて、組織が見えるということであって、ある程度の抑制が効くあり方というのがないものかと私は思います。

座長　個人的にそれは全く同感なんです。この際、出発点に戻り、名前を「関西建築協会」としてもいいんじゃないかと思います。改めて独自性を発揮するためですが…。

関西色を打ち出して、あえてスローに！

松浦　見学会は茶室、町並みなど、非常に関西に特有なものを多く行ってきました。今後も、やはり関西色を出せるような見学会を企画したいですね。

座長　匿名の座談会でいいですから、設計料のダンピングの話とか談合の話とか、本音の世界を開示することもいいのでは…と思いますが、いかがでしょうか？　それから、建築三酔人（歴史先生と都市紳士と豪傑）、この３人の建築家がずばりと物を言う「東京現代建築ほめ殺し」という本がありますが、こういったものの関西版があってもいいかなと。「日経アーキテクチュア」なんかは建築作品の紹介で「利用者の声」を載せるようになっています。本当はどうだという評価まで知りたいですね。ですから、BCS賞が１年経過して評価されるというのは、いいシステムだと思います。

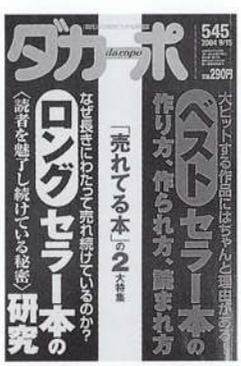
それから、よく言われる建築探偵団。こんなところを知っているか？　古建築から大人の隠れ家、おいしいお酒が飲めるところなど、普段は見に行けないところを紹介してもらえたら、みんなうれしいと思うんです。こういう情報は現地の会員からいただく。言ってみたら、地方の通信員ですね。こういった行為は全部ボランティアでないと協会の経営はしんどいですね。ですけど、何か自分たちのアピールができるものがあれば協力は得られそうにも思えます。

中村　広告というよりは、雑誌が売れて、それでペイするというのが一番健全です。例えば作品作風頁にしても、現場の所長や職人さんなどいろんな方々に登場していただく。そこには現場の内容なり、所長の声なりが直接載っていて、工事に関係した人は皆読みたくなる。それを各組織で20冊なりまとめ買いして現場や営業所に置いていただくというのはどうでしょう。その建物が良いか悪いか、その言葉が正しいか間違いかということも含めて、読み手が考える。どうしても言いたいこと、どれだけ苦労したかという話だっていいと思うんですけれども、それが社会に届かないとおもしろくない。

座長　BCS賞と同じ、１年後にそういう評価ができそうな時期をねらって…。

中村　設計者にこの白はだめだと言ったんだけれども、どうしても設計者は白でやりたいと。見てください、この汚れようをと。（笑い）それだけは出さないで、とかいう議論があっていいと思うんですね。昔は、もっと議論があったと思うんですよ。氷山の一角でもいいから、この雑誌の中に表れてくるぐらいの、互いの批評の心というか、そういうものがあるような雑誌のあり方、そして販売の仕方ですね。

松浦　建築士会のCPD制度、最近「日経アーキテクチュア」にも載っていますよね。取得する人が多くなれば、「建築と社会」にも、そういう記事が載ると、設計の方にはいいんじゃないかと思うんですが。



座長　雑誌が売れるための条件を調べたんですけれども、まず「内容」が身近、そして身近な「タイトル」をつけよと。それから著者も、顔が見える地元の「著者」を選ぶ。もちろん、身近な「値段」もありますけれども。あと、「情報」が身近でないと…。やっぱり「身近」ということを仕込んでやっていただくのがいいんですね。



上原正行 うえはら まさゆき

1964年竹中工務店大阪本店設計部入社。91年設計部設計部長。02年U建築工房1級建築士事務所開設。神戸大学、京都女子大学非常勤講師。

松浦剛士 まつうら たけし



1973年清水建設㈱入社。現場施工管理に20年従事。その後技術部に配属、現在に至る。団塊の世代とほぼ同じ年代である。

ところで雑誌の大きさは、協会誌はA4判でも少し幅広で、ちょっとサイズが違うんですよ。もっと小さいハンディタイプのものでもいいと思うんですが、文庫本サイズの雑誌ではだめなのですか？…せめて「ダカーポ」のようなサイズ。

中村　背表紙はなくてもいいと思うんです。これだけ薄くなれば。(笑い)

松浦　できたら、電車の中で読みやすいような…。

中村　グラビアの写真のことで言えば、今の大きさでないと、インターネットの画像との差異がなくなってしまうのではないでしょうか。「建築と社会」をインターネットのホームページ上に掲載したら、この雑誌は要らなくなってしまう。そのはざまにあると思うんですけれどね。

コミュニケーションをとる場は？

座長　ところで、少し話が飛びますが、各社社報は、雑誌風なものだったんですが、皆さん、ごらんになっておられますか？

中村　見ても、文章までは読まないですね。

座長　某社でも印刷物の時代、ひどい人は社報が来ると要らんと言ってぱっとごみ箱へ捨てた。その後、パソコンがいきわたった時点で、キーをたたいて社報を見ることになったんだけれども、読まなくなっている。だから、訃報も伝わらないという状況があるそうです。3メートルほどの距離にいても、全部メールで報告する。(笑い) 先日、そこの課長が怒り心頭。「君！どういうことやねん、そこにいるんやったら、わしへ直接言わんかい」と。若い課員としては、課長が忙しそうにしているからとの「気遣い？」。そんなことがありまして、「最近の若いのは何を考えとるんや？」と、ちょっとしたひずみが出ています。

若い人は若い人で、自分らが置いてきぼりを食っているようで非常に不安だということを言います。T定規、ドラフター、CADと製図道具が変わって、意思伝達の仕方も…。

小山　製図の授業では半々ですね。手書き半分、CAD半分というくらいです。

座長　もうちょっとしたら、一級建築士の試験も、変わるでしょうね。

松浦　先ほど神田さんが言われたように、若い会員はメールや掲示板で、コミュニケーションをとることが多い。古い会員さんに聞くと、昔はサロン風というか、そういう雰囲気が協会にはあったらしいんです。ある人から聞いた話ですが、サロン風の集まりでいろいろ話をしていたら、相手は若いころの黒川紀章であったり、磯崎新やったというわけですよ。協会の催しにも、そういう人が一時出入りしておられたらしいのです。

サロン風にというのは難しいのだけれども、コンピューターの双方向の会話と、集まって話をするのとでは、やっぱり違うと思うのですが、どうですか？

神田　私は、いろんな方の話を聞ける場所というのがすごく好きなので、例えば、こういう場でもそうなんですが、来なければ、いろんな話も聞けない。私は、本とかを一生懸命調べて、情報を自分で読み取るよりも、耳から入ってきた方が自分には向いていると思うから。

ただ、私よりももっと若い子たちは、コミュニケーションをとるのが下手というか、彼らがそういう場に来るかと言われると、私もそこまではちょっと……。私ぐらいの年代までだったら、そういう機会があったら行きたいと思っている人はいっぱいいると思います。だから、30代の会員がもっとふえたらいいのかもしれないんですけれども。

座長　おもしろいと言われる雑誌は、連載ものやコラムがやっぱりおもしろい。新聞の小説でもそうですけれども、そういうものを毎日楽しみで読んでいる。そういう連続性が欲しい。

それから、今の中国の話じゃないですけれども、反権力、上が言っていることにあえて反対しようという若い人たちの気持ちがあるんですかね。上が右向けと言ったら、左向くというふうな、神田さん、聞かれたことないですか？

神田　前に事務所に勤めていたときは、私にも不満はやっぱりあったんじゃないかと思います。黙って「はいはい」と聞いていたら、自分は何の努力もせずに我慢だけしていることになる。変えようと行動してみて、その上でだめだったら、あきらめるしかないなという気もするんです。そういうふうに、意見というのは言いましたね。

座長　そんなことが、同じような年代層や、立場の人たちの意見として出ていたら、ああ同じだと共感されますね。そうしたら、身近な人たちの執筆とか原稿もあったら、親しみがわくというふうに理解していいのですか。

神田　そうですね。

座長　それと、松浦さんもおっしゃってたように、個性を出すといっても、やっぱり速さ、スピード感というのは要りますか？　話題性という…。ですが、当協会誌編集委員の皆さんは、かかりきりじゃないから…。

中村　きついですよ。むしろスローでいくとか……。

松浦　中越や福岡の地震情報は、皆さん非常に関心が高くて、話題性がありますから、出来るだけ早く載せていただきたいですね。

中村　その辺が一番苦しいですね、大体何カ月かをかけて特集を



河津龍大 かわづりゅうだ

昭和56年㈱日本建築総合試験所に入所。材料試験室にて主に仕上材料の試験・研究に携わる。平成16年4月より新JIS制度対応準備室兼務。

小山将史 こやまま さし

1983年から堺市立工業高校に勤め、全国的規模の建築設計コンペを指導。また日本建築協会のデザインコンクールの企画運営に携わる。



組んでいるので…。たまたまタイミングが合うというのはあるんですけれども。

高校生世代を引きつけるためには…

松浦　先ほど小山先生がおっしゃった、高校のとき入選した方がどの程度入会しておられるのかは興味深いです。協会の存在自体、学生は多分知らないと思うんです。案内や雑誌を直接大学へ送って、存在を知ってもらうことが若い会員をふやす第一歩だと思います。

小山　そういう点でコンクールは、全国の約250の建築科程設置校には必ずポスターが掲示されて、建築協会を知る機会にはなると思います。いろいろな所で言うのですが、学校は入選することだけを目的とせず、カリキュラムに組み込み、多くの生徒を参加させ、建築に興味を持たせるべきだと。協会を知ってもらう入り口になるのでは、と思うんですが。

工高生は、建築とかかわっていこうする中で、先がなかなか見えてこないという不安があります。それを解決する手立てとして、例えば会誌の中で、建築に携わる人物が出てくると、非常に興味を持ったりします。それが設計者であったり、現場管理の方であったり、先ほど「ビフォーアフター」の話も出ましたが、最近、工高への入学も、設計の技術というよりは、大工などの職人さんになりたいといった傾向が、マスコミの影響でしょうか、強くなっています。

会員のための会誌ですが、こういった内容に誌面を割いていただくと、若くして建築を志望した子たちがこれからの建築界へ入っていく窓口になると思います。

広がりのある事業と特化した視点のある編集

座長　会員構成から見まして、官公庁の方が少ないですね。設備系なんてほとんどないわけです。だから、かなり特徴はあるんですよ。さっきのお話のように、関西ということでスタートしたんだから関西にまた戻れというふうなことで、特化もいいんじゃないかと思います。

それと、高齢化社会とともに、技術、技能の伝承がなくなりそうなので、その辺のところを知りたいという人が多いです。京都の工友会という加盟団体があって、石屋さんその他、特殊技能の人たちの訪問手記とかを出していただければ、皆さん読んでくださるし、その周辺の方も雑誌を買っていただけるんじゃないかと思います。

小山　先ほど“関西建築協会”というお話が出たのですが、コンクールには全国から応募があります。ホームページとか携帯のサイトなどで、全国の建築を学ぶ工高生たちとの情報交換とかができればと思います。例えば入選作品集は、コンクールをやるのに、これがネタになると言いますか、ヒントになったりするので、これは早くホームページに載せてあげて、学校格差が出ないようにしたいと思っています。地元密着という考えも賛成ですが、全国規模でやっているこういう活動もありますので、そういうところはぜひ伸ばしていっていただけたらと思います。

座長　今、協会自身が非常に逼迫してしんどいので、学生個人の入会は大変だとすれば、高校で団体会員になっていただきたい。いかがでしょうか？

小山　近畿圏の工業高校に尋ねたことがあります。「以前は入っていたけれどもやめた」というところが大半です。今、公立高校は会費を出すのが非常に難しくなってきています。大阪府下でも、何校か団体会員に入っているところがありますが、苦労して工面しているのが現状です。お金の出どころばかりでなく、どれぐらい生徒へ利益還元ができるのかとかいう理由付けまで必要です。

座長　一方、常設委員会の委員の皆さんには、正会員になってくださいということでした。好きでゆとりがないとできないですね…委員会活動は。ボランティアには違いないんだけれども、何か割り切れぬものが残ります…。

松浦　では、60歳以上の方に頑張っていただいて…と思います。(笑い)

座長　いろいろご意見をいただきましたたけれども、最後に言い残されたことはありませんか。

河津　先ほど中村さんが言われた、むしろ「スロー」でという話ですが、一時期にぎわった話題で、例えば改正建築基準法とか、回転ドアとか、そういったものは今は余り話題にならないんですけれども、実際はどうなっているのかという、「その後の何とか」みたいな話とか、色あせないような話でというのもおもしろいんじゃないかなと。タイムリー性を追うというのは限度がありそうなので。

座長　この会誌の特徴として、「スピードを売りにする」ことはできませんね。きちんとしたもののフォローができればいい。むしろ、そっちに徹した方がいいでしょうね。

松浦　スピードはホームページで求めるべきだと思うんです。

中村　消費スピードが遅いことで目立つということもあるのではないでしょうか。消費されがちなテーマを、そう言えばそんなことがあったなという時期にアピールするという方が何となくこの雑誌に合っていると思います。

座長　本日は貴重なご意見をいただき、どうもありがとうございました。

と　き　2005年4月27日（水）18：30～21：00
ところ　日本建築協会

大正元年10月16日、神戸駅から

1000号記念企画の一環として、「設楽貞雄外遊日記」がスタートいたします。今月号から１年間毎号掲載していく予定です。日本建築協会発足の少し前、大正元年から大正二年にかけて欧米を視察旅行した建築家・設楽貞雄の旅行記から抜粋し、それに京都工芸繊維大学の石田潤一郎教授に時代背景等の解説を加えていただきながら構成していきます。行く先々の都市や人を活写して、大変興味深いものですのでご期待ください。

なお、文中に時折○○という伏字が出てきますが、元来がプライベートな日記であり、元治元年（1864）生まれの設楽の筆跡は難解で、どうしても読み解けなかった部分です。また時代柄、若干の差別用語（外国人に対する呼称など）が出てまいりますが、あえて原文のまま掲載させていただくことにしました。ご了解ください。

また、日記原本の読解は元安井建築設計事務所の山本純孝氏のご努力に負うところ大であったことを、多大なる感謝をもってご紹介いたします。

（1000号記念企画委員会）



大正元年10月16日（水曜日）

神戸駅午後６時30分発。母上、トシ、美音子、須磨子、千鳥、貞一夫婦、左文見送る。ミカドホテル楼上に休憩。事務所員惣体、磯部、竹中、○○諸友の見送りを受け発車す。木村君大阪まで同車。

７時20分大阪発。同所見送りは宮崎○士其他の会社員及知己朋友五六十人。態々萬歳を唱えて予が前途を祝福せらる。京都駅まで尼野氏同車せらる。松本禹象、岡本○○○、清水組麻○○等送迎せらる。古登乗車。

大正元年10月18日（金曜日）

古登同道青山葬場敷乃木大将墓参詣。白木屋等あちこち駆廻る。午後帰宿。風邪熱発の気味。頗る気分あしし。

就褥発熱。

大正元年10月19日（土曜日）

12時45分新橋発横濱に向かう。小林、柴田、コマ、天神、女将見送る。アゴ、ネム、竹馬、古登同車。一時半地洋丸に乗込む。二時五十五分見送人退船。三時抜錨。

地洋丸は吾恋しき日本の地に数多の懐かしき人を残して次第々々に遠ざかり行くのである。桟橋から見上ぐる。デッキから見下ろす。昔ならひれ振る処を今はハイカラになって手巾を振る帽を振る。落着いて考えれば悲いのか知らんが、なんやどさくさ紛れて涙も出ぬ。次第に人の顔が盆鎗してくる。只黒い塊に見える計りである。其黒い塊が白いものを振って居る。湾には夕日影が桟橋を満して益々暗くなる。終に見えなくなった。

キャビンに案内せらる。No.13壱人詰なり。四○八連の角部屋で至極便利なる処なり。西洋人は13の数を嫌うそーな。吾は少しも構わぬ。可愛い美音子も去年は十三なりし。盛装して十三詣でをせり。須磨子も千鳥も十三参りをなすべし。結構なる十三なる哉。十三は富に通ず（御当人貧乏なれども）。兎に角縁起よき部屋なり。

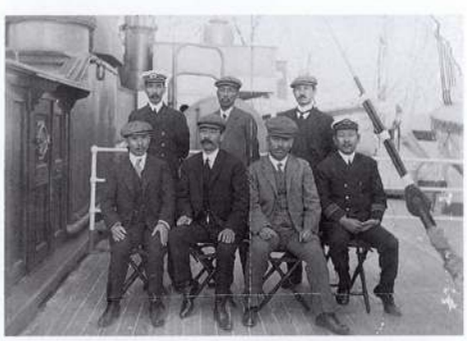
船が廻て舳先が向ふを向く。防波堤を過て○外に出る。横濱が見へぬ。只山が見へる。あの辺が停車場。懐かしき友の一群は今頃汽車に乗りつつあるか等と思う。波は可也に高い様なり。船客極めて少なし。日本人六七人。毛唐三四十人（但一等）。予が部屋のボーイは日本人なり。是が何寄嬉しい。此二週間僕の妻君となるのである。日本人でなければ不便此上ない。

午後６時頃妻君が湯を運ぶ。デンナ（ディナー）は７時からですと云ふ。顔手を洗い髪を梳る。一寸小奇麗にする。着物を着換えるのが小面途臭い。ボーイに相談する。何ーに構いません。相客は少し其儘にて宜しいですと云ふ。直に賛成する。併し船が段々動揺する。食べぬ方が良いかも知れぬ。是も妻君に相談する。何ーにどしどし御上り、腹をしっかりさしてドンドン運動なさいと云ふ。よし此処だと大に勇気を奮て風や波や何かあらん。そんな弱腰では迚も二万五千哩は覚束ない。やっつけろと食堂に入る。

例の光り眩ゆき銀燭の昼を欺く食堂のともっと形容詞を並べたい有様だが、餘り書過ぎると先へ行って種がなくなる。あなたの御席は咄相手に宜しかろーと思いまして機関長を中に挟みましたてな如才ない事云ふて導く。席に着く。Menuを見る。分かるのもあるが分からぬ方が多い。ボーイに見繕てと頼む。ヘイヘイと可也喰えそーな処を持って来る。此流儀で向ふ半歳随分心細からざるを得ず。可也腹も張る。Smorking room に行く。どーも烟草がまづい。

夕方から中々波が高い。船が竪に揺れる事おびただしい。妻君は嘸壺を用意して出去った。Deckで運動する。

午後十時寝に付く。何も知らぬ。



大正元年11月２日、地洋丸船上にて。
前列、左から２人目が設楽貞雄

大正元年10月20日（日曜日）

午前六時起床。洗面。Deckに出て運動す。波高く船の動揺甚し。Deckの歩行頗る困難なり。

●大正時代の建築と建築人

大正一ケタ時代の建築の世界

石田潤一郎



ボーイ昨夜は中々しけました如何でした。今朝もいらい（えらい）です。近頃にないです。此船に酔はねばもー大丈夫です。船にはお強い方です。昨夜から大分お弱りの方が多いです。成程Dinning roomに至れば日本人僅に弐人、毛唐も女は甚だ少ない。

僕は船に乗るまいに覚悟した。船に酔ふ程弱虫、言語風俗気候の異なる長汀曲浦を踏破する事が出来るものか。風吹かば吹け波立たば立て。昨日竹馬君に聞いた深呼吸で魂を臍下丹田に落付て済したものなり。果せる哉胃弱の僕、神経質の僕、酔ふ可き素質ある僕少しも酔はぬ。長航海に経験ある同乗者も大分悩みつつある。日本人では僕とMayumi君（牛場氏の甥）のみ。不思議なものなり。先日来の風邪も根治せる如し。三度の食事はどしどし詰込む。どんどん運動する。終日Deckに腰掛て読書三昧に入る。

Deck椅子の損料San Francisuco迄弐円。

時計を三十分進める。此れより毎日進める由なり。午後十一時就褥。

	部屋ボーイ	¥5
	Deck Stuwerd	1
	Smorking Boy	.5
＋	Deck椅子	2
		8.5

横濱出帆の時千三百九十八円四十五銭の現金を所持し、外に大倉組に四千円を供託し、東洋汽船に七百二円二十銭を支払ふ。

	1,398,45	
	4,000,00	
＋	702,20	
	6,100,65	＝是が旅費の全部なり。

八百円をエングラント・バンク・ノートに、五百円を米国紙幣に両替す。

1912年10月19日、建築家・設楽貞雄は欧米旅行に旅立った。その３カ月前に明治天皇が没し、大正という新しい時間がはじまっていた。乗船すべき地洋丸が横浜からの出航だったため、設楽貞雄は、前々日に東上しているのだが、風邪を押して、天皇の大喪が行われた青山葬場殿とその日（９月13日）に殉死した乃木大将の墓に参っている。僅々１カ月前の出来事だったのである。

1912年をもう少しスケッチするなら、タイタニック号が沈み、吉本興業が生まれ、計算尺が開発された。そんな年である。建築の世界では、セセッションが大流行を迎えた年であり、伊東忠太が京都に真宗信徒保険株式会社を建て、曾禰中條事務所が慶応大学の図書館を完成させている。

設楽貞雄自身は、この年の７月、大阪に通天閣を含む遊園地、新世界ルナパークを完成させている。彼の名前は今日もっぱらそのことで記憶されているが、この時点での設楽の気持ちを想像すると、明治末年の成果としては煉瓦造２階建て、いささか辰野金吾調の京都電灯本社を挙げたかったかもしれない。いずれにせよ、明治40年に神戸建築事務所を開いてから５年で、関西で五指に入る知名度と実績を獲得するにいたっていた。元治元年（1864）生まれの設楽貞雄はこの年48歳、旅先でのスナップでも、村風子然とした風貌の中に自信と気力の充実がうかがえる。

設楽貞雄は近代の建築家の中でも、特に転変の多い前半生をあゆんだ人である。彼は二本松藩士・設楽弥兵衛の次男として、岩代国本宮（現在の福島県安達郡本宮町）に生まれた。父・弥兵衛は、奥州街道有数の宿場町である本宮の代官だったが、1868年（慶応４年＝明治元年）に勃発した戊辰戦争において官軍を迎え撃ち、戦死する。そうでなくてさえ士族が困窮した維新期に父を喪った貞雄少年が辛酸をなめたことは想像に難くない。

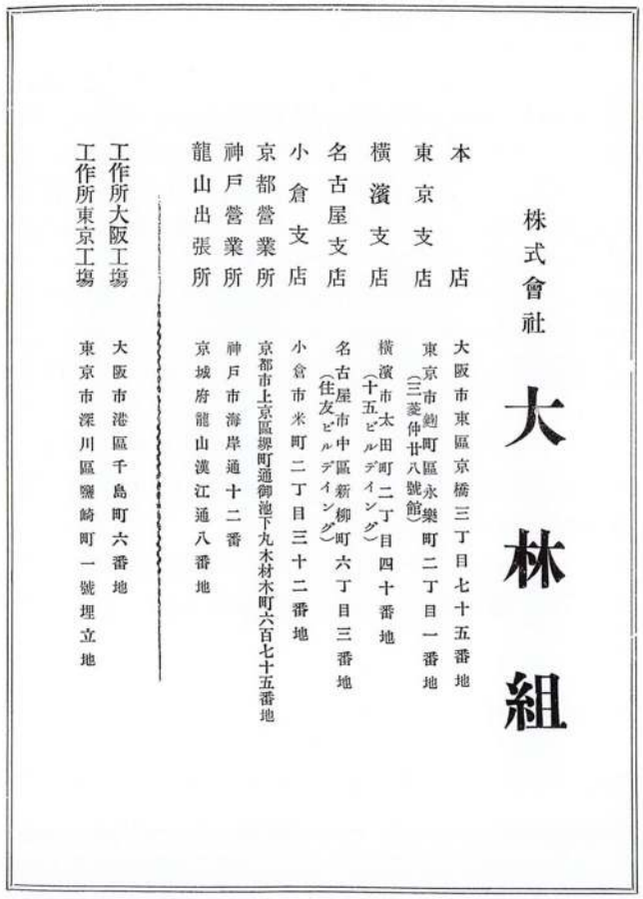
彼は20歳代前半まで郷里の小学校で代用教員を務めるが、そのうち、建築に対する興味を懐きはじめる。明治21年、24歳の設楽貞雄は、工手学校（現工学院大学）創立を知り、東京に出、造家学科に第１期生として入学する。在学中は勉学によく励み、22年７月、19名中２番という好成績をもって１年半の修学期間を終える。卒業後は日本土木会社に就職、東京の現場に配属されるが、ついで宮内省内匠寮に雇用され、帝国京都博物館（現・国立京都博物館）の工事に配属される。ここで関西に来たことが彼の人生を大きく決定することになったと思われる。明治29年、大阪の桑原工業事務所に入社し、そこで建築部長を務めていた山口半六の部下となる。明治32年、山口が建築事務所を開設するとこれに参加、事務所の支配人兼所長代理の地位につく。こうして設計と施工の両面を十分に学んだ設楽貞雄は、翌33年、山陽鉄道株式会社へ移り、建築係長となる。明治39年、山陽鉄道が国有化されたのを機に退社、翌40年１月に、神戸市下山手通に神戸建築事務所を開設する（数年後、設楽建築工務所と改称）。ときに設楽貞雄は満43歳であった。

すぐに多くの仕事に恵まれ、大阪堂島米穀取引所（明43）のようなモニュメンタルなものも手がけるようになる。その作風はアール・ヌーヴォーやセセッションをいち早く採り入れたもので、武田五一と並んで関西建築界での前衛勢力であったといえる。その設計の進め方については次のように紹介されている――「初め大体の図案を具えて依頼者に示し、其取捨選択に任せ、宛として親近者と協力討究するが如きものあり」。つまり、何案か示していちばん気にいるものを選ばせるやり方で、いわば相談に乗るという姿勢だった。彼の作風の「新しさ」と「親身」の態度が、彼の事務所の盛況を呼んだと見てよいだろう。

さて、外遊に話を戻そう。彼にとってはもちろん最初の海外旅行であった。目的は、実は日記からは読みとれない。劇場や遊園地をこまめに回っているので、ちょうど工事に入っていた神戸・新開地の聚楽館の仕上げのため、あるいは翌大正２年にコンペとなる大阪・楽天地設計に向けて、見聞を広めるためと考えられる。事務所には明治42年に名古屋高等工業出の篠田進、同44年に東大出の萩一郎が入所して、スタッフがそろってきていた。だから長期間留守にすることも可能となったのだろう。

ともあれ、この日記からは、勤勉で好奇心旺盛な建築家が欧米とその建築をはじめて体験したときの瞬間瞬間が、手に取るように伝わってくる。設楽貞雄は、日々、感嘆し、退屈し、時に哄笑しながら、街から街へ駆け回る。そして第一次世界大戦直前の、つまりは19世紀文化の残光を漂わせるヨーロッパと、猛烈に富をたくわえながら「アメリカニズム」の形成に向かう合衆国を活写していく。それは明治の留学記で紹介される西洋でもなければ、1920年代のベル・エポックでもない欧米の姿である。一日も欠けることなくつづった日記から読みとるべきことは多い。

（京都工芸繊維大学教授）



昭和２年12月号広告

1892年（明治25年）の創業以来、大林組は日本の建築史を彩る数々の建造物を築いてきました。「良く、廉く、速い」をモットーに、古くは東京駅、甲子園球場から、関西国際空港や東京湾アクアラインなどの日本を代表するビッグプロジェクト、最近では、品川を始め、丸の内、六本木、汐留、なんばなどの大型の都市開発に携わってきました。

また、2003年（平成15年）４月より「優良企業構想」を掲げており、常に高い収益力を持ち、絶えず成長する企業を目指しています。そのためにも、都市再生、リニューアル、環境関連、海外工事など、成長が期待される分野や技術力を活かせる分野に積極的に取り組んでまいります。

＜大林組の企業理念＞

①創造力と感性を磨き、技術力と知恵を駆使して、空間に新たな価値を造り出す。

②個性を伸ばし、人間性を尊重する。

③自然と調和し、地域社会に溶け込み、豊かな文化づくりに寄与する。

これらによって、生活の向上、社会の進歩と世界の発展に貢献する。

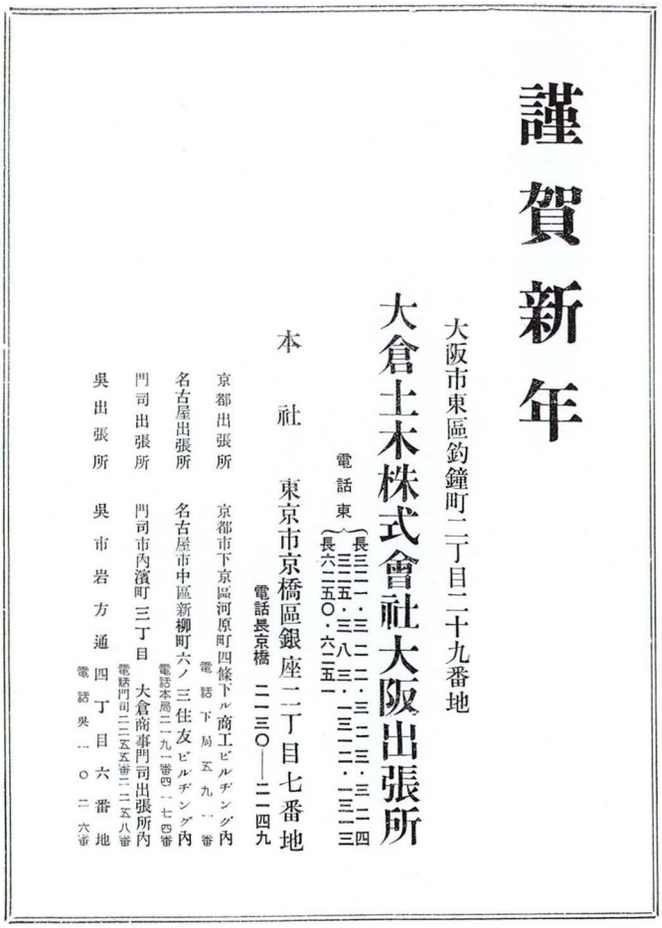
本　　店　〒540-8584　大阪市中央区北浜東4-33　TEL　06-6946-4400

東京本社　〒108-8502　東京都港区港南2-15-2 品川インターシティB棟　TEL　03-5769-1111

事業所：本店、東京本社、札幌支店、東北支店、横浜支店、北陸支店、名古屋支店、神戸支店、広島支店、四国支店、九州支店、技術研究所、海外事務所

ホームページアドレス：http://www.obayashi.co.jp/



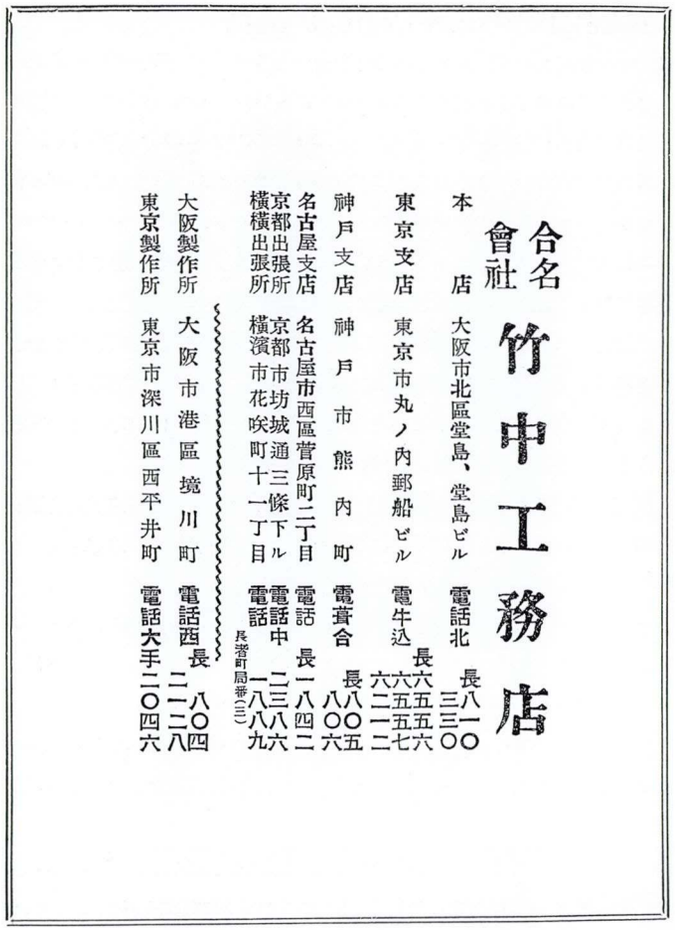


昭和５年１月号広告

地図に残る仕事

スピーディな戦略が求められる時代にあって、単なる空間の創造だけでは、満足できるソリューションを得ることはできません。高度な経営の効率化をはかりながら企業価値を高めるという厳しい条件のなかで、世界的な環境保全ニーズの高まりや持続可能な循環型社会の構築など、私たちがお客様とともに解決すべき課題はますます大きくなっています。大成建設は、施設や建造物をその計画段階から、設計・施工・管理運営・リニューアルにいたるライフサイクルでとらえ、経済性の最適化をはかるとともに、迅速かつ継続的に変革を支援するきめ細かいサービスを提供します。終わりのない変化のなかで、永続的な価値の創造へ。大成建設は今後も、最先端のテクノロジーと培ってきた経営資源をベースに、お客様とともにさらなる飛躍をめざします。





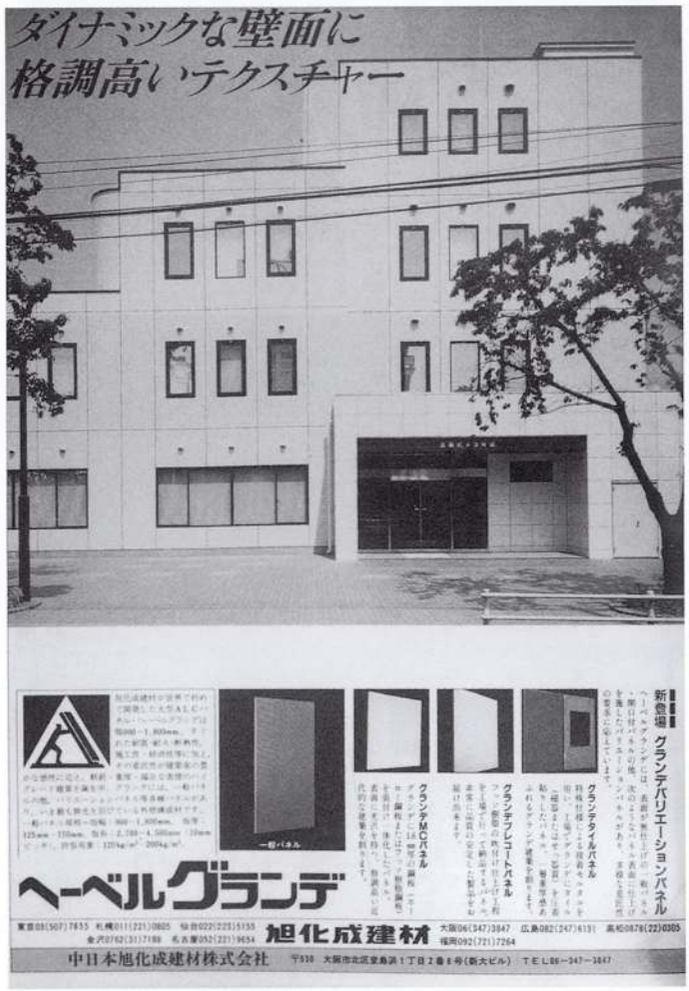
大正15年12月号広告

「想い」をかたちに

～竹中は、いつの時代も、社会の資産となり、文化の象徴として遺される建築の創造をめざしてきました～

1610年（慶長15）：初代　竹中藤兵衛正高　名古屋で創業
1899年（明治32）：14代　竹中藤右衛門神戸に進出、創立第１年とする
1909年（明治42）：合名会社竹中工務店設立
1937年（昭和12）：株式会社竹中工務店設立
1958年（昭和33）：高さ333メートルの東京タワー施工
1969年（昭和44）：OMMビル（大阪マーチャンダイズマートビル）竣工
1979年（昭和54）：芦屋浜高層住宅竣工
1988年（昭和63）：わが国初の空気膜構造による多目的スタジアム・東京ドーム竣工
1993年（平成５）：新梅田シティ・梅田スカイビル竣工
1998年（平成10）：観覧車のあるショッピングセンター・HEPファイブ竣工
2003年（平成15）：超高層免震集合住宅・くずはタワーシティ竣工
2004年（平成16）：第二吉本ビルディング、ハービスＥＮＴ竣工





環境親和を考える旭化成建材

旭化成建材は創業以来、絶えざる変化を遂げてきました。現在では基礎から屋根材までご提案できる総合建材メーカーに成長いたしました。

当社のコア商品の「ヘーベル」は、その優れた特性から幅広い建築用途に、ご採用いただいておりますが、機能だけでなく意匠面からも高いご評価を頂戴しております。その代表例が岩肌調のデザインパネル「ジーファス」です。当社独自の技術でナチュラルな質感をALCに付与し、住宅用途や大型商業施設等に数多くご採用いただいております。

また杭のスーパー・ニッチ商品「EAZET（イーゼット）」は低騒音・低振動、そして残土ゼロでの杭施工を、小型の施工機械による省スペース施工で実現する画期的な杭工法です。都市部住宅地、工場・プラント内での工事に最適な工法です。

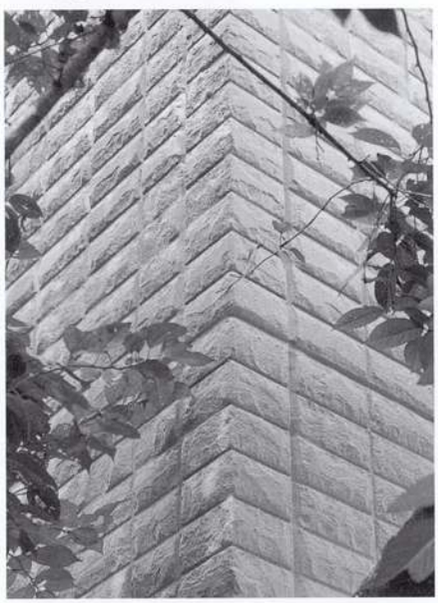
次世代高性能断熱材「ネオマフォーム」は、省エネルギー、長期性能維持、地球環境との共生、安全性の４つの基本性能で「住環境」と「地球環境」との共生に貢献する当社の大型新商品です。

その他にも露出型弾性固定柱脚工法「ベースパック」、ノンダイアフラム形式の柱はり接合工法「ファブラックスG」、杭先端にジオシンセテック袋体を装着し拡大球根を構築することにより大きな支持力を発現する「ダイナビック」工法。床、壁、屋根に隙間なくぴったりと装着出来、断熱効果を高めるポリエチレン発泡断熱材「サニーライト」は高い防湿性、柔軟性、耐薬品性が特長です。

このスペースでは当社の建材商品群はご紹介しきれません。ご興味のある方も無い方も是非、一度「旭化成建材」のホーム・ページに遊びに来てください。

昭和63年３月号広告

ヘーベル ジーファス



ALC建築にも、ナテュラルな質感を。

「ジーファス」は旭化成独自の技術で、岩肌調高意匠を成し遂げた先進の外壁パネルです。（グッドデザイン賞受賞商品）

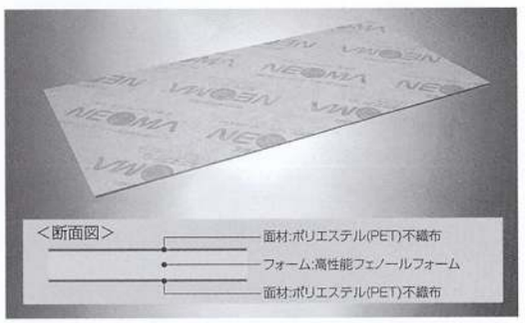
EAZET
スクリューパイル［イーゼット］



人に街に地球に調和する環境に優しい杭工法

AsahiKASEI

次世代高性能断熱材
NEOMA®
ネオマ®フォーム



ネオマフォーム４つの基本性能

①省エネルギー
②安全性
③長期性能維持
④地球環境との共生

旭化成建材株式会社 http://www.asahikasei-kenzai.com/



大正15年１月号広告

地球時代のインテリア空間を創るために。

2005年に160余年を数えた川島織物の歩みは、まさに、西欧化が進む明治以来の日本のインテリアの歴史とともにあった、と言えます。

明治中期、川島織物が最も力を入れたことは、日本の織物文化の伝統を、インテリア材として海外に紹介する仕事でした。海外雄飛の当初より、パリ、シカゴを始め各国万博で多数のグランプリ受賞を重ね、当社の、そして日本の技術力、表現力に、海外でも高い評価をいただいてきました。

近年では、当社コレクション「イルマーレ」が、アメリカの国立スミソニアン博物館の所蔵品となっています。

もちろん、欧米のスタイル、デザイン、時々の先端技術にも積極的に挑戦し、創業以来、近代日本のインテリアや、織物の技術革新の地平を切り拓いてきたのも川島織物です。

地球時代を迎えた21世紀の今日、人の暮しや住い集う場所にも、癒しや優しさが求められる一方で、環境への心配りや、持続可能な成長という命題への責務が問われています。

今、川島織物は、日本のインテリア界の中核企業として、これまで蓄積してきた「人の住まう、集う空間」創造力を、新しい時代の要請に生かす、次の挑戦の歴史を綴る決意を新たにしています。

上質へのこだわり KAWASHIMA。

布に取り組んで160余年。

KAWASHIMAは、いつの時代も上質にこだわり、オリジナリティの高い魅力的なモノづくりで、お客様の信頼に応えてきました。

インテリアファブリックはもちろんのこと、身装・美術工芸、シートファブリックもKAWASHIMAの強みです。

カーテン
filo
vita
assecelyst
シェード
ロールスクリーン
タテ型ブラインド
カーペット
AVAIL
filo rug
壁装
FAB-ACE
イス張地



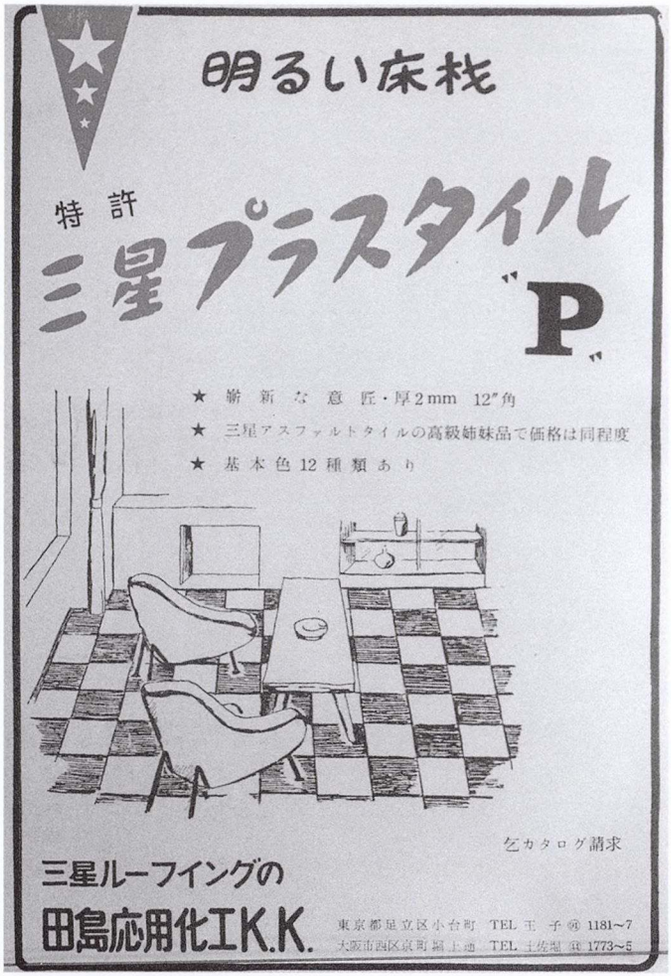


株式会社 川 島 織 物

お問い合わせ先：お客様相談部 0120-52-8484

（AM9:00～PM5:00 土・日・祝日・特別休日を除く） http://www.kawashima.co.jp

feel good
KAWASHIMA



昭和32年７月号広告

よりよい床創りのために、タジマのテクノロジーは進化し続けています。

■ タジマの原点、国産初の「Pタイル」

昭和25年（1950年）プラスチックタイルの研究に着手。昭和28年に国産初の「塩化ビニル樹脂プラスタイル」８色を発売。昭和30年にはさらに改良を加えた「プラスタイル・P」を発売。鮮やかな色彩で、厚さはわずか２mm、しかも安価というこの通称Pタイルは、一大センセーションを巻き起こし、日本の床に新しい表情を創っていきました。

■新たなる床材、ACフロアを開発

ユーザーに喜ばれる新しい材料とは何か。その原点に還って昭和52年に完成させたのが「ACフロア」です。当時、日本の市場には存在していなかった機能型の長尺床材「ACフロア」は、業界にとって革命的な製品として注目され、病院、学校などの施設を中心に大ヒットにつながりました。

このように床創りの専門メーカーとして、プラスチック床材の歴史に大きな足跡を残してきタジマは、これからも、業界のリーディングカンパニーとして、時代が求めるニーズをカタチにしていきます。

■ 沿革

・昭和27年（1952年）三ツ星アスファルトタイル㈱設立。・昭和40年 社内機構改革、田島応用化工㈱を田島ルーフィングに、三ツ星プラスタイル㈱を田島応用化工に改組、改称。・昭和44年 東日本・西日本床工事事業協同組合結成。・昭和61年 田島応用化工㈱を㈱タジマに改称。・昭和62年 インレイドミカグ・ニューサンド アメリカリソースカウンシル協会ロスコー賞グランプリ受賞。・昭和64年 日本建築学会にタジマ建築教育振興基金設立





大正15年６月号広告

「快適な住・生活空間づくりに貢献するために」

東リ株式会社は、1919年（大正８年）に東洋初のリノリューム製造会社として産声をあげました。現在の兵庫県伊丹市に工場が建設され、1920年（大正９年）12月には、アメリカンリノリューム社のパーカー技師指導の下に、リノリューム国産第１号が試作されました。リノリュームは、船舶や官庁関係の建物を中心に広く使われるようになりましたが、単に製造販売するだけではなく、欧米と比較して湿度が高く寒暖の差も激しい日本の気候の中で美しく仕上げるために、様々な施工技術の確立にも研究を重ね、品質の向上と共に、確かな製品を普及させていきました。

そこで培われた技術を基に、ビニル系床材や繊維系床材へと進出しました。土足歩行ができる丈夫なカーペットはもとより、国産初のクッションフロアやPVCバックのタイルカーペット等を製造し、快適な空間づくりに足もとから貢献してまいりました。

その後カーテン・壁紙を発売開始し、1991年にインテリア材をトータルにあつかうメーカーへの業態変換の一環として、社名を「東洋リノリューム」から「東リ」に変更しました。

弊社グループは、経営理念として＜インテリア事業を通じて生活文化の向上に貢献する＞＜顧客中心主義を行動規範とする＞＜トータルインテリアのリーディングカンパニーを目指す＞の３つを掲げ、事業活動を行っています。「すべてはお客様のために」を行動指針とし、住宅やオフィス、学校、医療・福祉施設、商業施設などあらゆる住・生活空間に豊かさをご提供するものづくりやサービスに努めることで、企業価値の向上に取り組んでいます。また、法令を遵守することはもちろん、地球環境保全にも配慮するなど社会に対する責任を果たすべく、良識のある健全な企業活動に徹し、世の中から信頼され期待される企業グループを目指しています。



求めている 安心がある。

「安全性が高く、清潔で長持ちであること。」
これからの高齢化社会のニーズにマッチした、
東リの複合ビニル床シート「SFフロア」。
安全で安心な暮らしを足もとから支えます。



5柄全76アイテム
医療施設・福祉施設から
文教・公共施設まで

シート裏面の発泡層が、高い衝撃吸収性を発揮
抗菌性、耐久性に優れた安全で清潔なビニル床材
東リ複合ビニル床シート
New SFフロア

●厚みのある発泡層の優れた衝撃吸収性により、転倒時などの安全性を高めます。
●抗菌加工により、いつも足もとを清潔に保ちます。
●耐久性が高く、幅広い用途にご利用いただけます。
●柔軟性があり、巻上げ施工等にも対応しやすくなりました。
●立上げ部へは「東リワイド巾木」を、腰壁部には「東リニュー腰壁シート」を併用いただけます。

■全5柄76アイテム
■価格：4,850円／m² 8,830円／m（材料価格 税抜き価格）
■規格：幅1820mm×長さ9m 厚み2.8mm

※右に掲載の写真はイメージです。SFフロアは屋内用の床材です。

東リ株式会社
http://www.toli.co.jp
●東日本営業開発部 TEL.03(5403)2067
●西日本営業開発部 TEL.06(6943)1645
●札幌ショールーム TEL.011(214)8313
●東京ショールーム TEL.03(5421)3711
●名古屋ショールーム TEL.052(745)1691
●大阪ショールーム TEL.06(6943)1649



大正13年１月号広告

日本の塗料工業のパイオニアとして

日本ペイントの歴史は、今から124年前の明治14年（1881年）に創業した「共同組合光明社」にさかのぼります。洋式塗装の歴史はさらに古く、151年前の1854年、ペリー率いる黒船が２度目に来航した時に洋式塗料を譲ってもらい、渋塗り職人が横浜に急造した商議所を塗装したのが日本人として初めての塗装でした。それ以来ペンキは輸入に頼っていました。ペンキの将来性を見越し、国産化を夢見ていた創業者が洋式塗料の研究開発に取組み、明治14年に東京上野で開催された「第２回内国勧業博覧会」に『無毒おしろい：亜鉛華』とともに出品した『ペンキ』が褒賞を受けたのが事業化のきっかけでした。当時の海軍全体の塗料管理者であった中川平吉氏の目にとまり、「塗料工業の発展は国家的重大問題である」として全面支援いただいてスタートしたのが「共同組合光明社」であり、日本の洋式塗料製造のはじまりです。

明治31年には組織と社名を「日本ペイント製造株式会社」に、さらに昭和２年に「日本ペイント株式会社」と改称しました。

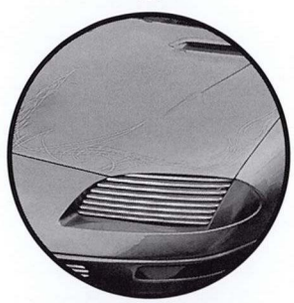
当社のスピリットは塗料工業のパイオニアとしての自負と、常にトップメーカーであろうとする気概と努力、そしてたえず成長を志す進取の気性です。常に時代の先端を行くこと、積極経営に徹することは、当社の伝統であり社会的使命であるという意識は企業遺伝子として組み込まれ、連綿と受け継がれています。「価値ある塗膜を提供するスペシャリティ ケミカル カンパニーとしてグローバルに成長発展する」こと、そして「環境保全と資源エネルギー低減に貢献するエコカンパニーとして信頼される企業となる」ことを経営ビジョンとして掲げ、「ECO Action 21」のスローガンのもとに、その技術力を社会に還元しています。

音の出る塗料



視聴覚型路面表示塗料
「バイブラライン」

色の変わる塗料



偏光性塗料
「MAZIORA®」

発泡する塗料



発泡型耐火塗料
「タイカリット®」

私たちの身の回りを見渡せば、生活用品から大型建造物、電子部品に至るまで、ありとあらゆるものがコーティングされています。美しく彩ったり、耐久性をもたせたり、特殊なチカラを発揮させたり、さまざまな価値をもつペイント。日本ペイントは塗料の付加価値をさらに高めていくために、つねに独創的な技術開発にチャレンジ。ミクロの薄さに最先端のテクノロジーを凝縮して、社会や生活の明日を塗り替えています。価値ある塗膜を提供する“スペシャリティーケミカルカンパニー”日本ペイントにご期待ください。

Basic & New
日本ペイント

〒531-8511 大阪市北区大淀北2-1-2 tel.06-6458-1111 〒140-8675 東京都品川区南品川4-1-15 tel.03-3474-1111 http://www.nipponpaint.co.jp/

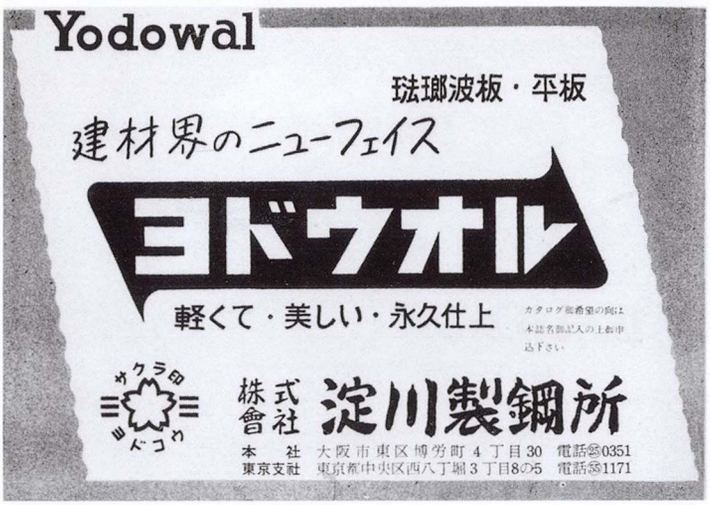
「柔軟性・デザイン性に富む鋼板に、新たな命を吹き込む」

淀川製鋼所は1935年１月、鉄鋼板及び鉄鋼材の製造販売を目的に淀川のほとり、現大阪工場（西淀川区）の地に資本金150万円で設立されました。翌年に鉄板を薄く引き伸ばす圧延機二台で操業を開始し、薄鉄板、亜鉛鉄板（トタン）の製造・販売をスタートさせました。当時導入された薄鉄板を製造するための圧延機はプルオーバー式と言われ、相当な人力を要するものでした。人手で熱く焼けた原板を圧延機のロールに投入し、薄く延ばしていく工程です。機械の前面から流れてきた約30kgの重い鉄板を火箸で掴み、素早くそれを裏返し、再び機械に戻す手作業の繰り返しで、相当腕っ節の強い者しか勤まらない厳しい現場でした。

1940年10月には亜鉛めっき鋼板（切板）の製造を開始。戦後の1951年頃になると生産技術は省力化新設備の採用で大革新となりました。切板材料からコイル状での生産方式への大きな転換です。1954年５月には社運をかけて、広島県呉市に冷間圧延鋼板製造工場として呉工場を建設。続いて連続式メッキライン、カラーラインも設置しました。新設備の導入により鋼板の品質も飛躍的に向上し、更にこの呉工場で蓄積した技術は千葉県の市川工場にも生かされ成長を続けています。

当社は今年で創立70周年を迎えましたが、創業以来ひたすら鋼板に生命を吹き込むことに挑んでまいりました。現在では、大阪、広島、千葉、福井に合計５工場を有し、また営業拠点は全国21カ所に広がり、鋼板から建築用屋根・壁材、物置などのエクステリア商品やグレーチング、鋳鋼ロールにまで、業容が発展いたしました。鋼板の表面処理技術は、創業当初とは比べものにならないくらい進歩し、特にメッキ技術は『ガルバリウムめっき』というサビにとても強いものにまで進化しました。主力商品の高級カラー鋼板は、冷蔵庫、オーディオ、洗濯機等の家電製品や、自社で生産しているヨドルーフ、ヨド物置等の素材として使用され、皆様の生活のあらゆる場面でお役に立っています。

これからも伝承されてきた鋼板作りへの思いを大切に、付加価値の高い、環境に配慮した製品の供給を通じて『常に顧客から信頼され、社会から必要とされる企業づくり』を目指してまいります。



昭和30年９月号広告



伊奈製陶創業80周年 INAX新生20周年

今年度INAXは、伊奈製陶㈱創業80年を迎え、また㈱INAXと社名を変更して20年の節目の年となります。INAXは2001年10月にトステム㈱と経営統合し、持ち株会社「㈱INAXトステムホールディングス」の事業会社となりました。また、2004年10月には持ち株会社も、よりお客様に分りやすい企業発信を提供する趣旨で「㈱INAXトステムホールディングス」から「㈱住生活グループ」に社名変更いたしました。
INAXは徹底した「お客様視点」の発想と行動を実践する企業として、CS No.1企業を目指してまいります。人で言うならば成人を迎える20年の節目にもう一度原点に立ち返り、企業理念を今の視点でもう一度読み返し、本年を単なるアニバーサリーでなく、次の20年へのステップアップとしての20周年ととらえています。INAXは「日本を美しくしよう」を実現するために、日々イノベーションを続けてまいります。



昭和２年２月号広告



商品の技術的なお問い合わせは、株式会社INAX　首都圏統括支社☎03-5250-6544　関西統括支社☎06-6539-3510　中部統括支社☎052-310-1733

Itoki Quality 人が主役の環境創りを目指して

企業の大切な資産である「人」「物」、そして「情報」。いま、企業をはじめとする多くの組織では、こうした資産をさまざまな脅威から守ることが求められています。その取組みは企業経営の一環として重視されており、コンプライアンス経営やリスクマネジメント経営が必要不可欠となりました。何から何を、いつ、どのように守るのか・・・それを万全の体制でクリアすることにより、企業は信用を確保できるのです。
イトーキでは、こうした企業の資産を脅かすリスクを、不法侵入・盗難・サイバーテロ・火災・災害という5つの要素でとらえ、ガードするセキュリティ対策を提案しています。調査・診断から保守メンテナンスまで、さまざまなプランや製品で多様化する顧客のセキュリティニーズに応え、最適なセキュリティ環境づくりのお手伝いをしています。

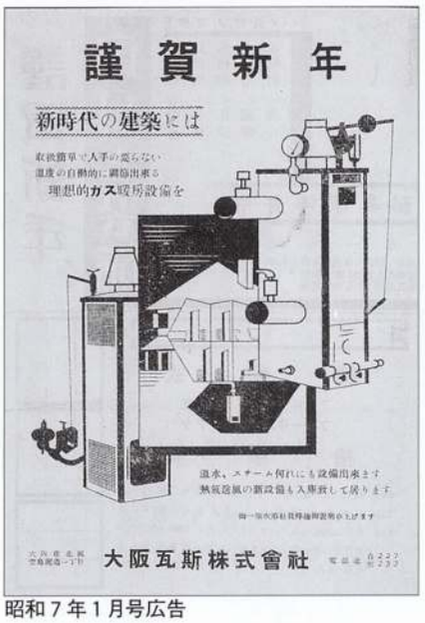


大正６年１月号広告



大阪ガス
更なる省エネルギー・環境保全を目指す

2重効用ガス吸収冷温水機の第1号販売は1969年でした。そして、その翌年の大阪万国博覧会のガスパビリオンにガス吸収冷温水機が採用され、ガス空調の歴史が始まりました。ガス吸収冷温水機は、その経済性・環境性・利便性が評価され急速に普及し、セントラル空調のスタンダードに成長しました。一方、80年代に入り個別空調のニーズが高まる中、85年に「ガスマルチ」が発売され、「ガスヒーポン」の歴史が始まりました。91年にはビル用マルチを発売し、その後も「ストアマルチ」、「クイックマルチ」等様々なバリエーションを加え、2003年には累計100万馬力を達成しました。今後も、大阪ガスでは「吸収式＝グリーン機種」、「ガスヒーポン＝ハイパワーマルチ」を主力商品として営業展開すると共に、更なる省エネルギー、環境保全に寄与する空調商品の開発に取り組んでまいります。



昭和7年1月号広告



創業から約60年、時代は21世紀を迎えました。

焦土と化した1947年に誕生した当社は、耐酸被覆鋼鈑にどこよりも早く着目し、独自のノウハウを駆使して様々な分野の要望に応えてきました。耐酸被覆鋼鈑のパイオニアとして次々とオリジナルブランドを創造してきただけでなく、機能性・品質面の追求、周囲の景観を考慮したデザイン、地球にやさしい新素材の開発など既存の概念にとらわれない企業活動を続けてまいりました。現在ではフッ素樹脂積層被覆板も生産し、屋根や外装材の基材としてあらゆる用途に使用されています。
当社製品が次々と法定不燃材認定を受けているだけでなく、通商産業省工業化技術研究助成金受領、三菱重工業㈱長崎造船所と品質保証協定締結、愛媛工場日本工業規格表示工場認定など、社会の信頼に応え、多様化するニーズに応えるべく新たな可能性を模索してまいります。





（上）昭和33年4月号

オクジューは創業以来８３年間
様々な分野で成長し続けています

83年のあゆみ（抜粋）

大正11年　奥村重兵衛商店創業
大正13年　日進式リブラス(国産第1号)製造販売開始
昭和30年　日進式ボード下地販売開始(NSS型)
昭和42年　遮音パーティションNS-P販売開始
昭和46年　システム天井ALTs工法販売開始
昭和50年　奥村重兵衛株式会社に社名変更
昭和61年　大規模天井無足場工法発売(大阪府立体育会館)
平成 3年　株式会社オクジューに社名変更
平成 6年　NWD(無溶接)工法販売開始
平成 7年　キャンバス天井(光幕天井)販売開始
平成11年　メタルシステム天井SP-600販売開始

メタルラス!!
ウォールボード!!
品質・価格共絶対に他店に負けません。
世界一の称ある英国ネーアンのリノリユウム
常に在庫品豊富でございます。
多少に不拘是非共御用命の程を
大阪市北區中之島六丁目
奥村重兵衛商店
電話土佐堀六九五番
英米獨製の壁紙も取扱ってゐます

大正13年6月号広告

光あふれる空間を



キャンバス光天井
（曲面対応型）

大型商業施設ハービスENT
施主：阪神電気鉄道株式会社
設計：竹中工務店
施工：竹中工務店ＪＶ

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
OKUJU
Space Creator
本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京支社
東京都千代田区大手町1丁目2番3号　〒100-0004
TEL(03)3282-0910　FAX(03)3282-0920
九　州：092-291-0459　上　海：021-6386-5899
南九州：0985-22-7311　名古屋：052-583-5011
株式会社オクジュー
http://www.okuju.co.jp

快適環境を創造する
総合エンジニアリング企業

三機工業は、1925年に「三井物産㈱機械部」を母体として創立しました。社名は三井の三、機械の機が由来です。
1930年代／暖冷房・衛生水道・厨房・電気設備、大型ベルトコンベヤ、鉱山の機械化など、現在の建築設備・搬送・水処理の主要事業の礎を築く。
1960～70年代／あらゆる施設を手がけ、建築設備の第一人者としての評価を確立。クリーンルーム、原子力施設など特殊設備も手がけました。
1980～90年代／30年代から圧倒的シェアを占めるごみ焼却設備に加えてし尿処理施設、上下水道の分野も手がけ、環境保全事業を積極的に推進。
21世紀／80年の歴史の中で培われた技術に加え、ITをはじめとする新時代の技術開発をさらに進め、快適環境の創造を目指す総合エンジニアリング企業として皆様の期待にこたえてまいります。



昭和４年１月号広告

80年前から開拓者でした。



三機工業は いま、地球の大きなテーマに挑んでいます――少々大げさかもしれませんが。
ゼロから育てた技術のひとつひとつが百花のごとく実を結び、気がつけば、80年。
私たちは建設設備はもとより プラント設備を含め、
今世紀の課題「循環型社会」に向けて、さまざまな解決策を産みだしています。

事業内容：空調・冷熱／給排水・衛生／電気／情報通信／搬送システム／搬送機器／廃棄物処理／水処理

おかげさまで80周年
三機工業株式会社
〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1　ホームページ　www.sanki.co.jp

「安全、安心、快適を提供することにより社会に貢献する」

三和シヤッターは、昭和31年の創業以来、「安全、安心、快適を提供することにより社会に貢献する」ことを使命に、シャッター、ドアをはじめとする商品、サービスを通じて、快適な生活環境づくりに取り組んでまいりました。

今後は「グローバルに通用する21世紀型企業グループ」を目指し、企業価値の高い経営体質、グループ力の強化を実現し、新たな企業体質の構築に取り組んでいく所存です。
また、マーケット重視の受注戦略の強化、育成事業の強化・拡充を図るとともに、経営改革の定着、レベルアップ等の諸施策に取り組み、さらなる企業価値の増大、社業の発展に努力する所存です。
今後ともなお一層のご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げます。

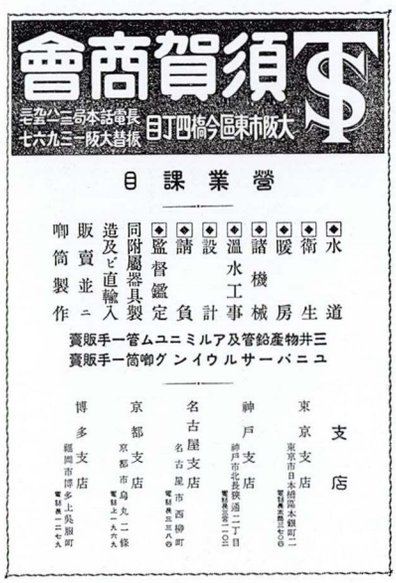


昭和35年１月号広告



須賀工業株式会社100年の歩み ～空気調和・衛生設備業界のパイオニア～

明治34年（1901年）大阪に私設水道工事店として「須賀商会」を創業。続いて東京、名古屋、京都、福岡等主要な支店を明治年代に次々と開設、現在とほぼ同じ支店網による全国的な営業を展開。大正14年（1925年）には株式会社に改組、昭和19年（1944年）には現社名に変更。この間、当初の衛生設備に加え空気調和設備も営業種目とし、海外の先進技術を吸収・国内に紹介するとともに、国産機材の採用・普及に努め、国内の空気調和・衛生設備業の黎明期においてリーダ的役割を果たしてきた。平成に入ってからも、東京新都庁、ハウステンボス、長野オリンピック記念アリーナ等モニュメントとなる多数の大型工事を施工。現在も、業界のパイオニアとして、循環型社会の発展に貢献すべく、安全・安心・快適な空間環境の提供と新しい価値の創造の追求に努めている。



大正６年２月号広告



快適を科学する、総合設備工事業。ダイダンは、
〈光と空気と水〉を生かし、人と地球の新しい関係を拓きます。



大正６年10月号広告

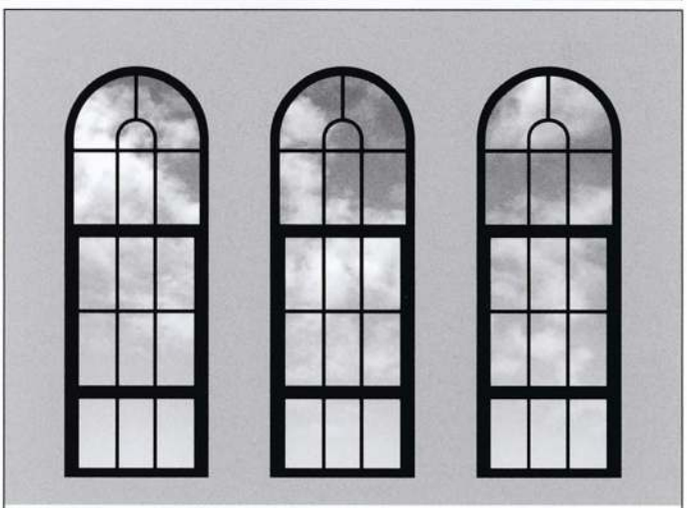


おかげさまで80周年
～オーダーサッシで社会に貢献する～

当社は、大正14年（1925年）５月大阪市に浪速建材工業株式会社として設立いたしました。以降、皆様のご愛顧をいただき、平成４年に社名をテクノ・ナミケン株式会社と改称し、17年には昭和アルミビューティック株式会社より景観製品の「シェルター」の営業を譲り受け、今日に至っております。
また本年（2005年）当社は、80周年を迎えることになりました。
これも皆様方のご信頼の結果と感謝申し上げます。
これからも当社は、オーダーサッシ・ドア・景観システム（シェルター）製品等を利用した豊かな住宅環境づくりを通して社会に貢献して参ります。

昭和35年12月号広告



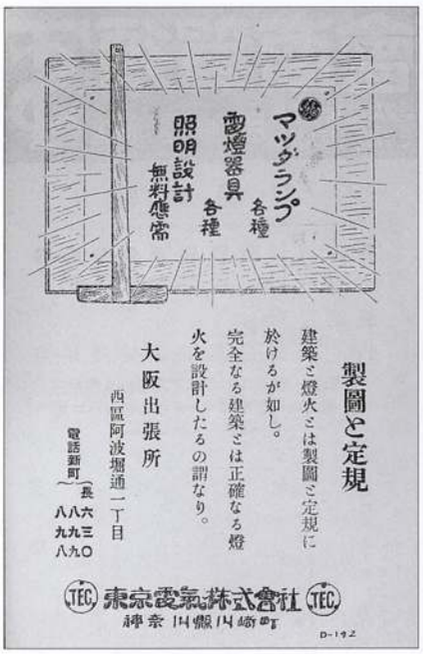


限りなく高度な構造体へと進化する現代建築。
私たちが担当させていただく「窓」には今、
極めて高い品質が求められています。
この品質に責任をもってお応えして参ります。

TECHNO
NAMIKEN
テクノ・ナミケン株式会社
本社 〒550-0013 大阪市西区新町1-4-26 栄泉四ツ橋中央ビル
TEL.06-6533-3855（代） FAX.06-6533-3852
URL http://www.t-namiken.co.jp
E-mail tn-hon@t-namiken.co.jp

日本で初めて白熱電球を製作してから、1世紀以上もの歳月、「あかり」と「ひかり」を見つめてきました。

東芝ライテック株式会社は、世界で初めて大正14年（1921年）二重コイル電球を発明。昭和15年にはわが国初の蛍光ランプを製作し、法隆寺金堂壁画模写に20W蛍光ランプ照明の実用化に成功しました。
東芝の照明技術を継承しながら、「光の総合メーカー」として多彩な光応用技術の開発に取り組みながら、時代とともに歩んできました。そして今、私たちはすべての人々がより豊かで快適に暮らせることを願い「あしたの光で“ここちよい”を創ります」をコンセプトに、新しい価値の創造に取り組んでいます。より豊かな生活、そしてより快適な社会へ。私たちは高い技術力を探求・研磨し、豊かな感性で「あかり」と「ひかり」の未来図を描きはじめています。



大正８年４月号広告



東芝ライテック株式会社　管球照明社　〒140-8660 東京都品川区南品川2-2-13 TEL.(03)5479-3972
http://www.tlt.co.jp/

強く、明るく、美しい会社であるために

バブル経済の崩壊以来、多くの会社が赤字に苦しみながら，厳しいリストラを断行してきた。TOTOもそうした途を歩み、いま成長に向かって再スタートを切ろうとしている。その礎になるものは何か、と社員みんなで考えたとき、先人から脈々と受け継がれてきた「創業の理念」がそこにあった。TOTOの創業は1917年、いまから90年近く前に遡る。
明治から大正期にかけて、日本の国をよい国にするために、日本の国民が豊かで清潔な暮らしを送る為に、ほとんど需要のない中で衛生陶器の製造研究を開始したのである。創業者たちは、私財を投げ打って日本と日本国民のためにあらゆる努力を続けてきた。そうした先人たちの努力があって、いま日本という国にTOTOという会社が存在する。
CSR（企業の社会的責任）経営に向けて本格的に取組みを開始したのも、創業の理念がもともとそこにあったからである。



昭和７年１月号広告



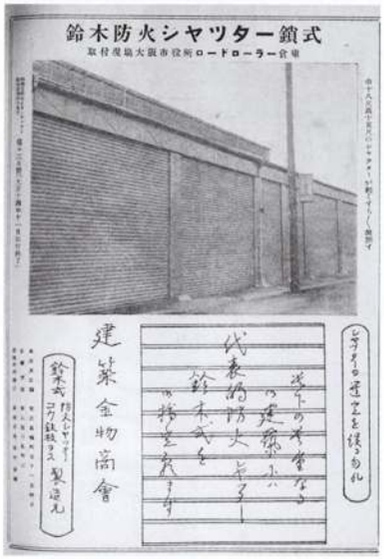
“安心・安全”お届けつづけて一世紀
～シャッターの歴史は、トステム鈴木シャッターから～

1903年創業以来、シャッター専業メーカーとして、明治時代の鉄板を組み合わせたシャッターから、現在のファッショナブルなものまで、時代の求める製品を開発し、多くの建築物にご採用いただいてまいりました。

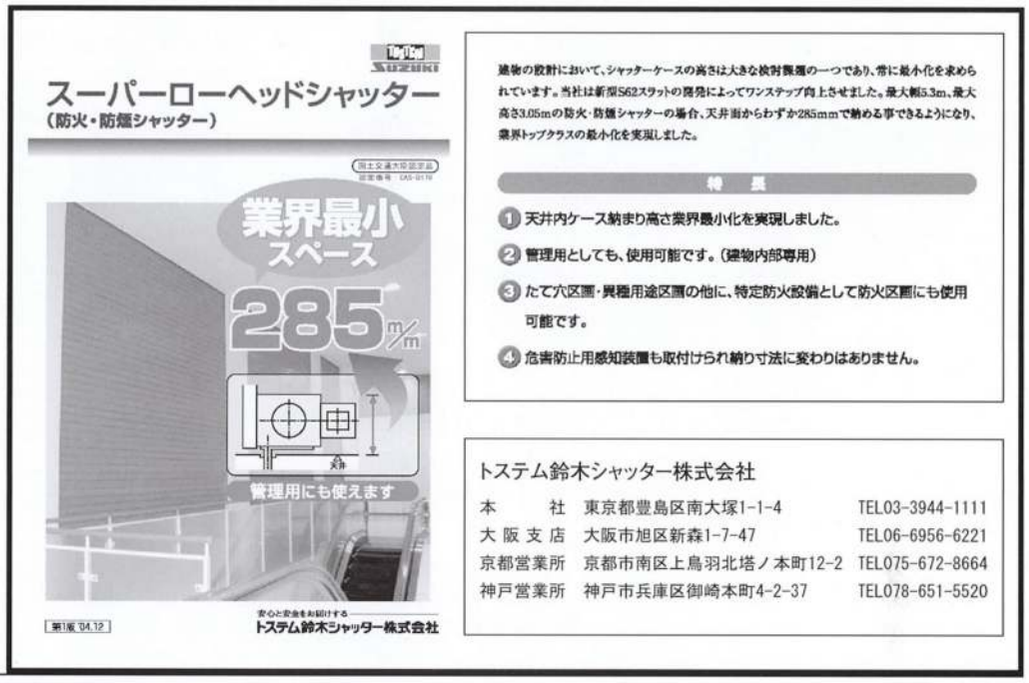
防災の必要から生まれた防火・防煙シャッター、シートを使用した防火・防煙ガラスクロス製スクリーン、軽量シャッター、シースルー型シャッター、工場・倉庫の出入り口に高速シートシャッター、防煙たれ壁、豪雨・高潮から水の浸入を防ぐ防水板と、幅広い製品を取り揃えております。

また万一の故障・トラブルに対処するために24時間・365日フルタイムメンテナンスサービスを実施しております。

今日、シャッターは災害から私たちを守るものから、より快適な生活空間を実現するものに変化しつつあります。これからも、安心・安全をモットーとし、新しい技術で未来を開き、快適生活空間の創造に努めてまいります。



大正15年４月号広告



私たちは、水と空気で快適な明日を考える環境創造企業です。

「命の水」という言葉どおり、水は、人が生きていくためになくてはならない存在です。私たち西原は、創業以来、一貫して水と空気を軸とした快適環境づくりに取り組んできました。高度に機能化する都市を見つめ、人々の豊かな生活の場を見つめて。そして、地球の未来を見つめて。あらゆるシーンで常にきめ細やかな視線を注ぎ、独自の技術をフルに発揮して環境設備のスペシャリストとしての使命を果たしています。もちろんそこには、「誤りのない親切な仕事を通じて社会に貢献する」という私たちの原点ともいえる確かな企業理念が息づいています。給排水衛生をはじめ、防災、空調と、安全で快適な空間環境の明日を多次元に考える私たちの事業。地球上に人が暮らす限り、水と空気の技術を通してやさしく語り合える明日を創造していきます。



大正14年６月号広告

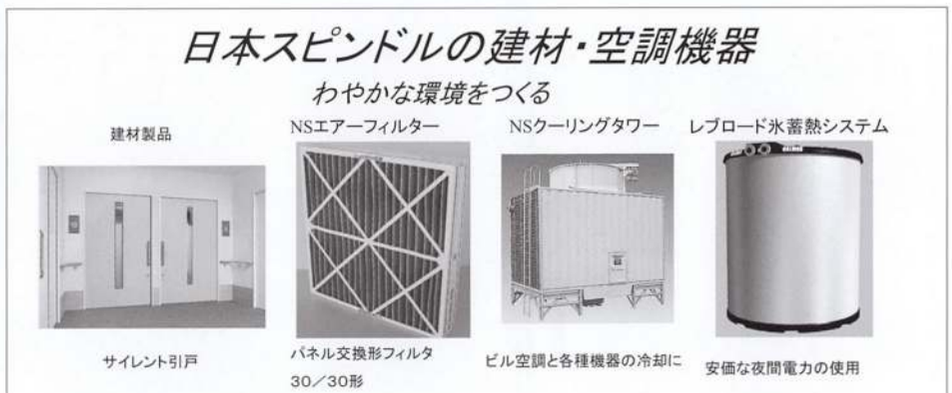


日本スピンドルは、お客様の心に響く商品とサービスによって人や地球に優しい環境と空間を創造します。

1918年　合資会社日本スピンドル製造所を大阪に設立
1949年　日本スピンドル製造株式会社設立
1958年　金属製サッシドアの製造販売を開始
1961年　天然繊維用の高性能エアーフィルタの開発と冷却塔の製造販売を開始
1972年　学校用間仕切り（SPS）を開発し、販売を開始
1980年　サイレント引戸の製造販売を開始
1986年　マレーシアのリニアクーリングタワー社に冷却塔の技術供与契約
1987年　木製学校間仕切（SPW）の製造販売を開始
1988年　米国カルマック社と氷蓄熱システムの輸入販売契約を締結し
1989年　氷蓄熱槽の販売を開始
1990年　米国ファー社とエアーフィルタ「Fシリーズ」の技術援助契約を締結
　　エアーフィルタ「Fシリーズ」の製造販売を開始
1995年　中国大連に大連スピンドル冷却塔有公司を設立
2002年　エレベータ前遮煙防火ドア「しゃえんくん」の販売を開始



昭和40年１月号広告

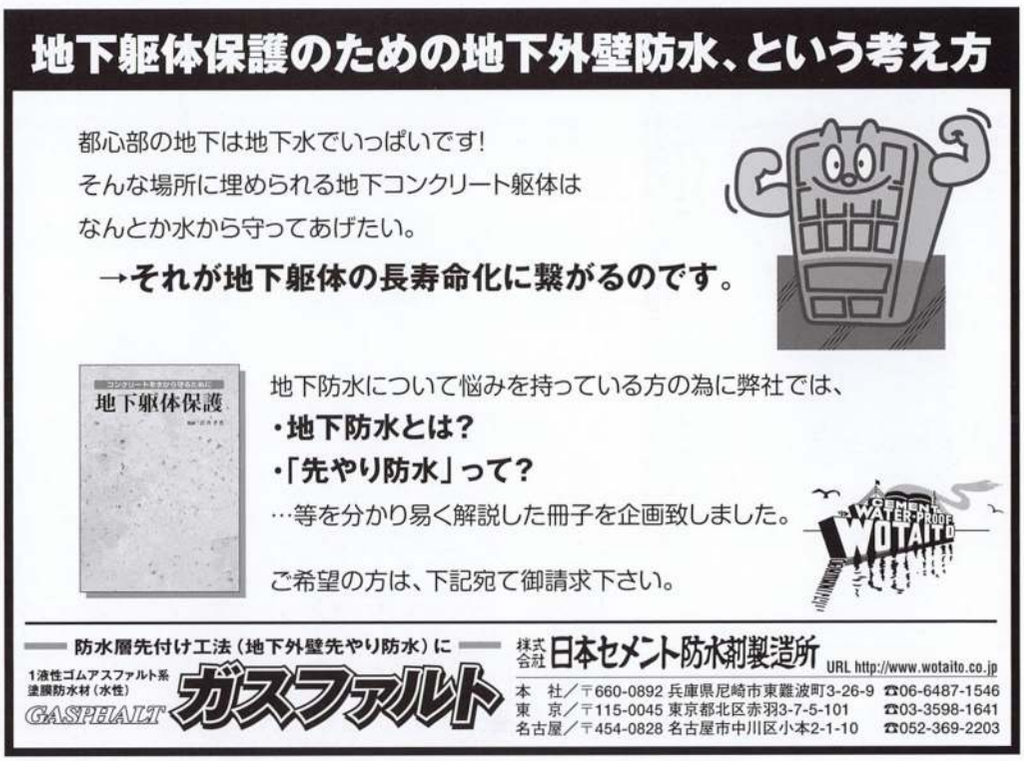


国産最古のセメント防水剤 ～もっとも古く、もっとも新しい　ウォータイト～

ウォータイト（WOTAITO）は、1915年弊社の創業当時に商標登録されています。
明確な記録は残っておりませんが、Water Tight（ウォーター・タイト＝水に耐える？）からの造語であった事は容易に想像出来、大正初期という時代を考えると創業者はさぞやハイカラな人物であったと思われます。
昔の広告にもあるように防水以外にも様々な取り組みをしてきたようですが、創業から90年の時を経て、主力だったセメント防水の需要が減りつつある中、弊社では防水と言う観点だけではなく、躯体を守る事を主眼としたメンブレン防水工法が主力となっております。
防水業界で屈指の歴史を誇る当社も、その歴史に奢ることなく日々新しいご提案を出来るよう、これからも頑張って参ります。



昭和10年10月号広告



Sensing you
～一人ひとりに適した安心と使いやすさを～

株式会社日立製作所は、1932年にエレベーターの第１号機を納めて以来、70年以上にわたりエレベーターのトップメーカーのひとつとして、全国に数多くのエレベーターを納入してまいりました。特に戦後は霞ヶ関ビルから始まり現代に至るまで、超高層ビルに対応した超高速、大容量のエレベーターの開発、納入をするなど伝統と最新技術に基づいたエレベーターをお客様に提供しております。現在は「Security & Safety」と「Universal Design」をコンセプトとして、移動設備としてのクオリティーの追求に加え、安心感・快適性・利便性などの、より高い付加価値を備えた移動環境の実現に向け取組んでおります。『"Sensing you"一人ひとりの「あなた」を感じて、そのとき、その人に適した安心と使いやすさを』これが私たちの目指すエレベーターです。



昭和24年１月号広告



やすらぎと安心の創造
～不燃建材とともに100余年、ひと・まち・みらいを守ります～

弊社は、明治30年８月に野澤幸三郎商店を神戸で起こし、日本初のスレートの取り扱いを開始して以来、１世紀以上の歴史を重ねています。

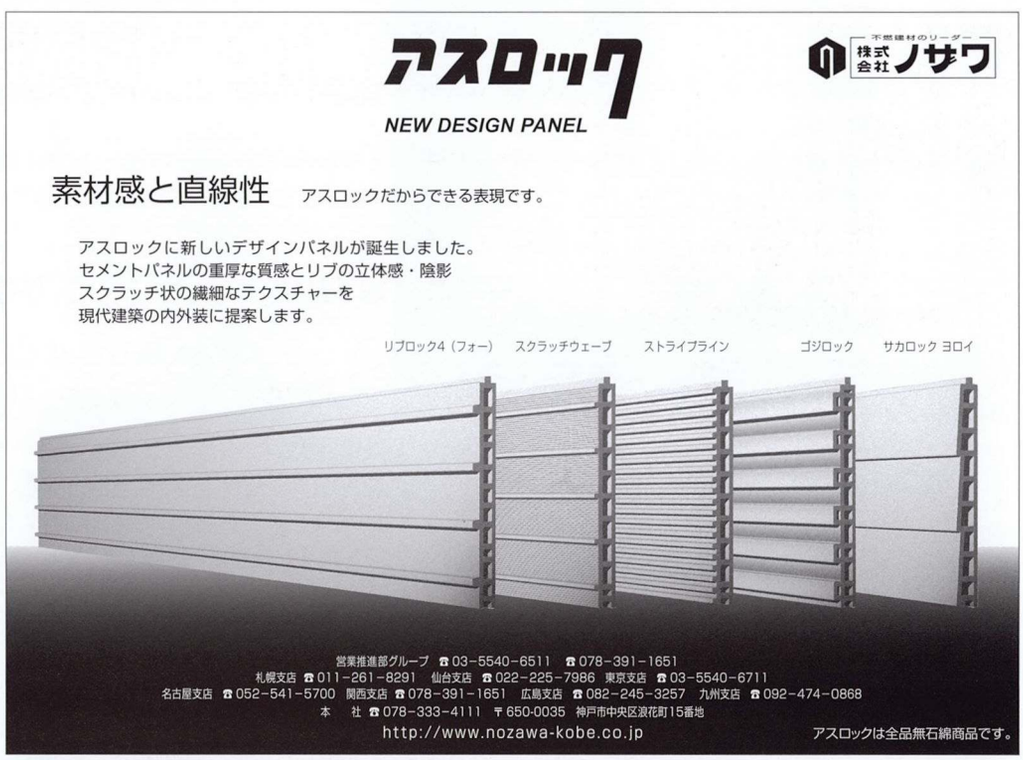
世界や日本の歴史が激動した100余年の間に、扱い製品も時代に合せて変遷し、当初の石綿盤、ロッコー瓦から、波板、平板、特殊ボード、生コン、セメント、混和材、住宅用瓦、押出成形セメント板、住宅用軽量外壁材などを世に送り出しています。

中でも、主力商品の「フレキシブルシート」「バームライト」「アスロック」は弊社独自技術の結晶であり、特に「アスロック」は、仕上げや形状の多様化により、さらなる発展を続けています。

次の100年までの社会変化は予測できませんが、常に時代が求める商品を提案し、やすらぎと安心を創造してまいります。



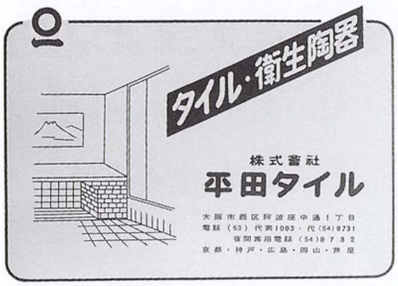
昭和６年１月号広告



株式会社ノザワ
NOZAWA CORPORATION

創業86周年を迎え、タイルや水回りを通じ、建築文化にますます貢献してまいります。

弊社はタイルと水回りを軸に、建築・商業施設などにタイルやトイレ、キッチン、バスルームを中心に専門提案をしてまいりました。国内の商品はもちろんのこと'70大阪万博以降広くヨーロッパやアメリカより商品、そしてそれに伴うインテリアデザインを取り入れ、コアの専門提案を一般ユーザーや設計事務所の方々に提供してまいりました。タイルや水回りの文化は、年を追うごとにグローバル化が進み、海外の設計者の方々が日本の建築や住宅のデザインに関わりをもたれることも多くなってまいりました。弊社は海外に駐在員をおき、皆様方に優れた情報をより速く提供することに努めてまいりたく思っています。また国内の優秀なメーカー取り扱い窓口を広げ、総合的にタイルや水回りの建築関連商材及び工事の提供を進めてまいります。



昭和35年1月号広告

■オリジナルセラミックタイルカタログ



86年の経験と実績を持つ信頼の住宅設備機器と内・外装タイルの販売と工事。世界最新のセラミックタイルのショールームもございます。





■1000号記念特集協賛広告・目次■

旭化成建材㈱	75	㈱ゴール	表紙2	㈱タジマ	77	日本スピンドル製造㈱	88
INAX（㈱住生活）	81	三機工業㈱	83	立川ブラインド工業㈱	表紙3	㈱日本セメント防水剤製造所	88
㈱イトーキ	81	三和シャッター工業㈱	84	テクノ・ナミケン㈱	85	日本ペイント㈱	79
大阪ガス㈱	82	㈱シブタニ	90	東芝ライテック㈱	86	㈱ノザワ	89
大島応用化学工業㈱	82	須賀工業㈱	84	東陶機器㈱	86	㈱日立製作所	89
㈱大林組	72	ダイダン㈱	85	トステム鈴木シャッター㈱	87	㈱平田タイル	90
㈱オクジュー	83	大成建設㈱	73	ニチアス㈱	91	㈱淀川製鋼所	80
㈱川島織物	76	㈱竹中工務店	74	㈱西原衛生工業所	87		

“環境”を考えれば、「マキベエ」をきっと選んでくれる…

発塵がほとんどないなど、建物環境・作業環境に配慮した「耐火被覆材」です。

マキベエ
巻き付け工法

巻付け耐火被覆材



■パーフェクトな“環境対応”

●**建物環境・作業環境に配慮**：施工中はもちろん、施工後の発塵がほとんどありません。一養生不要、リターンダクトにも最適です。
●**工期短縮が図れる**：発塵がほとんどないため、並行工事が可能で工期短縮が可能です。
●**ゼロエミッション**：プレカットで納入されるため、現場での残材はほとんど発生しません。
●**リサイクル**：「マキベエ」にもし残材が出ても、工場でリサイクル可能です。
●**鉄骨もリユース可能**：固定ピンを抜けば「マキベエ」を鉄骨から取り外せ、鉄骨のリユースが容易です。

■抜群の品質安定性!

●工場で品質管理されているため、耐火性能に必要な厚さ・密度が確保され安心です。
●振動（地震）に強さを発揮します－溶接ピンで鉄骨に固定されているため、振動（地震）にも安心です。

■トータルコストで「吹き付けロックウール」に挑戦 !!
設計価格　2,800円／m²（見え隠れ標準施工部位）

●養生、残材処理、動力用電気、水などの諸経費がほとんど掛かりません。

■施工実績

現場名	設計事務所	建設会社	現場名	設計事務所	建設会社
六本木ヒルズ	森ビル	大林・鹿島JV	榛原総合病院増改築	久米設計	清水建設JV
大阪証券取引所	三菱地所設計・日建設計JV	大林組JV	金沢大学病院	佐藤総合計画	清水建設
山形新聞放送会館１期	日建設計	安藤建設JV	東京大学駒場Ⅰキャンパス総合研究棟	東京大学施設部	錢高組
三洋電機枚方工場	安井建築設計事務所	鴻池組	愛知万博日本政府館	山下設計	りんかい日産建設
宮原ショッピングセンター	日本設計	大成建設	中部国際空港管制塔	日建設計	三井住友建設
シャネル銀座本店	石本建築事務所	大成建設	九州大学育成施設	梓設計	清水建設

ニチアス

本社・建材事業本部/〒105-8555 東京都港区芝大門1-1-26 Tel. 03-3433-7207
東京営業部/〒105-8555 東京都港区芝大門1-1-26 Tel. 03-3438-9731
名古屋営業部/〒457-0833 名古屋市南区東又兵衛町2-30 Tel. 052-611-9217
大阪営業部/〒542-0081 大阪市中央区南船場4-11-10 Tel. 06-6252-1301
九州営業部/〒810-0012 福岡市中央区白金1-1-15 Tel. 092-521-5648
•ホームページ http://www.nichias.co.jp/
•Eメール build-ma@nichias.co.jp

暑中お見舞申し上げます

平成17年盛夏

淺沼誠夫

株式会社　淺沼組　会長

〒543-8688　大阪市天王寺区東高津町12－6　電話06（6768）5222

上林研二

株式会社　地域生活空間研究所　代表取締役所長
社団法人　日本建築協会京都支部副支部長

〒602-8077 京都市上京区上長者町通新町西入土御門町313
電話075（441）8480

杉山泰生

社団法人　日本建築協会　監事

〒578-0947 東大阪市西岩田3－1－15－113　電話06（6784）0761

石原俊一

株式会社　INAX
取締役　常務執行役員　営業本部長

〒163-1314 東京都新宿区西新宿6－5－1 アイランドタワー14F
電話03（5381）7754

木瀬照雄

東陶機器株式会社　代表取締役

〒802-8601 福岡県北九州市小倉北区中島2－1－1
電話0120（03）1010

錢高一善

錢高組　社長

〒550-0005 大阪市西区西本町2－2－11
なにわ筋ツインズ　ウエスト
電話06（6538）7801

名誉会長
市川宏

株式会社　東畑建築事務所 取締役会長

〒541-0044　大阪市中央区伏見町4—4—10　電話06（6202）0391

鴻池一季

株式会社　鴻池組　取締役社長

〒541-0057 大阪市中央区北久宝寺町3－6－1
電話06（6244）3547

相馬一男

住友電設株式会社　相談役

〒550-8550 大阪市西区阿波座2－1－4　電話06（6537）3430

奥村正樹

株式会社　オクジュー　取締役会長

〒530-0047 大阪市北区西天満5－3－7
電話06（6312）4131

佐々木徹

西日本建設業保証株式会社　取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2－1－2　電話06（6543）2553

髙木嗣郎

株式会社　大林組　専務取締役

〒540-8584 大阪市中央区北浜東4－33　電話06（6946）4701

落合行雄

株式会社　イトーキ　ゾーニング事業部営業本部
西日本建材営業統括部長

〒541-0047 大阪市中央区淡路町1－6－11
電話06（6223）3801
FAX06（6201）5926

名誉会長
佐野正一

株式会社 安井建築設計事務所 代表取締役相談役

〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7　電話06（6943）1371代

立成良三

財団法人　大阪住宅センター　理事長

〒542-0081 大阪市中央区南船場4－4－3
御堂筋アーバンライフビル4F
電話06（6253）0071
FAX06（6253）0145

嘉納秀一

三宝電機　株式会社　代表取締役社長

〒530-0047 大阪市北区西天満2－6－8（堂ビル）
電話06（6364）1471

佐野吉彦

株式会社 安井建築設計事務所 代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7　電話06（6943）1371代

田中和明

株式会社　イトーキ　オフィス事業部営業本部
関西支社近畿販売部長

〒541-0047 大阪市中央区淡路町1－6－11
電話06（6223）3081
FAX06（6223）1828

川口順弘

社団法人　日本建築協会　監事

〒659-0032 自宅・芦屋市浜風町6－10－2　電話0797（38）7623

設楽貞樹

株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役大阪事務所副所長

〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7　電話06（6943）1371代

谷淳之介

株式会社　東畑建築事務所　取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町 4 — 4 — 10
電話06（6202）0391

月城則男

新東洋合成株式会社　代表取締役

〒550-0004 大阪市西区靭本町2－9－11　電話06（6446）6121

松本壮一郎

愛知工業大学工学部都市環境学科建築学専攻
助教授

〒470-0392 豊田市八草町八千草1247　電話0565（48）8121
〒465-0083 自宅・名古屋市名東区神丘町2－17
三旺マンション神丘公園303　電話052（703）2610

森本晴夫

三和建設株式会社
取締役社長

〒532-0013 大阪市淀川区木川西2－2－5　電話06（6301）6636

内藤正克

株式会社　内藤建築設計事務所　相談役会長

〒675-1379 兵庫県小野市上本町240 小野ビル　電話0794（62）4757代
〒675-1362 自宅・兵庫県小野市久保木町1063　電話0794（62）4668

名誉顧問

薬袋公明

日建設計　顧問

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4－6－2　電話06（6203）2361

安田誠

安田株式会社　代表取締役社長

〒542-0081 大阪市中央区南船場1－11－9　安田ビル7F
電話06（6251）7091

中村光男

日建設計　代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4－6－2　電話06（6203）2361

宮本博司

株式会社　宮本工務設計事務所　代表取締役

〒665-0022 兵庫県宝塚市野上1－2－34（宮本ビル）
電話 0797(71)0431大代表　FAX 0797(71)5139 受信専
E-mail : mto@gold. ocn. ne. jp URL : http : //宮本設計. jp. io
神戸支店　TEL & FAX 078-997-0371

山本貴士

朝陽電気株式会社　代表取締役

〒530-0005 大阪市北区中之島3－2－4　電話06（6385）1361代表
朝日ビルディング内
〒565-0873 自宅・吹田市藤白台4－23－8　電話06（6871）0851

長瀬博一

(有)長瀬建築研究所　代表取締役

〒603-8172 京都市北区小山初音町30の2　電話075（491）0848
〒573-0034 自宅・枚方市岡山手町2－18　電話072（846）2474

村石全

株式会社クトクコーポレーション 代表取締役社長

〒556-0021 大阪市浪速区幸町2－5－3　電話06（6568）3671
〒596-0011 工場・岸和田市木材町9－3　電話0724（37）2524
〒649-7167 工場・和歌山県伊都郡かつらぎ町移430番地
電話0736（22）7880

和中勝

株式会社　和中商店　取締役相談役

〒531-0072 大阪市北区豊崎5－8－11　電話06（6371）0731～5
〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町11－5　電話03（3464）9723
〒453-0804 名古屋市中村区黄金通3－34　電話03（3464）9723
〒662-0836 自宅・西宮市大畑町10-22　電話0798（67）0386

原眞一

コーナン建設株式会社　代表取締役

〒531-0075 大阪市北区大淀南1－9－10号　電話06（6456）4311

森田司郎

財団法人　日本建築総合試験所　理事長

〒565-0873　吹田市藤白台5－8－1　電話06（6872）0391
http://www.gbrc.or.jp

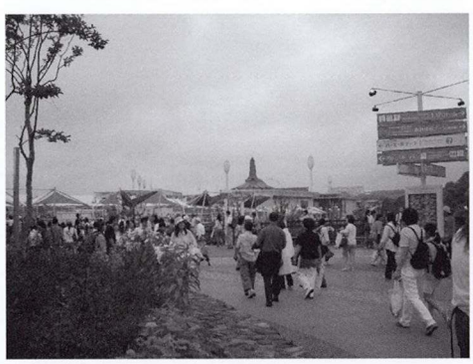
三木ちゑ子

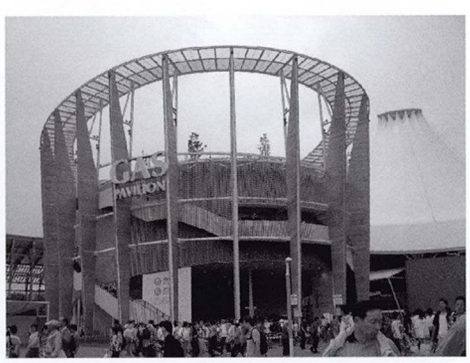
日本建築協会　ゴルフ同好会

人見尤浩

社団法人　日本建築協会
常務理事兼事務局長

〒540-6591 大阪市中央区大手前1－7－31　電話06（6946）6981





2005年日本国際博覧会（愛・地球博）長久手会場
写真／原　博元

暑中お見舞申し上げます

平成17年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊東建築設計事務所

代表取締役　岡　本　清　彦

〒556-0016 大阪市浪速区元町2－12－30 難波KIビル　TEL 大阪 (06) 6646-0161(代)

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長　織　田　愈　史
代表取締役社長　森　口　雅　文

本社・名古屋事務所　〒460-0002 名古屋市中区丸の内1－15－15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田3－5－12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役　瀬　戸　本　淳

〒650－0024 神戸市中央区海岸通1－1－1 神戸郵船ビル　TEL（078）333－0138

株式会社 東畑建築事務所

取締役会長　市　川　　宏
取締役社長　谷　　淳之介

本社・大阪事務所　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　TEL（06）6202-0391
http://www.tohata.co.jp
大阪・東京・名古屋・九州

日建設計

代表取締役社長　中　村　光　男

東　京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2－18－3	TEL (03) 5226-3030
大　阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4－6－2	TEL (06) 6203-2361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4－15－32	TEL (052) 261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐　野　吉　彦

本　社　〒540−0034　大阪市中央区島町2−4−7　TEL (06) 6943−1371（代表）
支　社　大阪・東京・名古屋・広島・九州　　http://www.yasui-archi.co.jp/

暑中お見舞申し上げます

平成17年盛夏

建設業有志

人・都市・自然のシンフォニー

Asanuma

株式会社 淺沼組

代表取締役社長　淺　沼　健　一

本社・大阪本店　大阪市天王寺区東高津町12−6　TEL(06)6768-5222
東京本店　東京都新宿区荒木町5　TEL(03)5269-3111
名古屋支店　名古屋市中村区名駅南3−3−44　TEL(052)571-5571
支　店　北海道・東北・北関東・横浜・神戸・広島・九州

OBAYASHI

株式会社 大林組

取締役会長　大　林　剛　郎
取締役社長　脇　村　典　夫

東京本社　東京都港区港南2−15−2　TEL(03)5769-1111
本　店　大阪市中央区北浜東4−33　TEL(06)6946-4400
支　店　札幌・東北・横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州

株式会社 奥村組

取締役社長　奥　村　太　加　典

本　社　〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町2−2−2　TEL 大阪(06)6621-1101(代表)
東京本社　〒108-8381 東京都港区芝5−6−1　TEL 東京(03)3454-8111(代表)

100年をつくる会社

鹿島

KAJIMA CORPORATION　代表取締役社長　中　村　満　義

本　社　東京都港区元赤坂　1−2−7　TEL(03)3404-3311(大代)

人がつくる、人の場所。

SHIMIZU CORPORATION

清水建設

取締役社長　野村哲也
執行役員副社長 関西事業本部長　増島修二

本　　社　東京都港区芝浦１－２－３　TEL(03)5441-1111
関西事業本部　大阪市中央区本町３－５－７　TEL(06)6263-2800

大地への愛　人間への愛

錢高組

社長　錢高一善

本　　店　大阪市西区西本町２－２－11
なにわ筋ツインズ　ウエスト
TEL(06)6531－6431
本　　社　東京都千代田区一番町31番地
TEL(03)3265－4611
支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州
URL　http:// www. zenitaka. co. jp/

TAISEI

大成建設株式会社

社長　葉山莞児
常務 関西支店長　寺下均

本　　社　東京都新宿区西新宿1－25－1新宿センタービル　TEL(03)3348-1111大代表
関西支店　大阪市中央区南船場１－14－10　TEL(06)6265-4504
ホームページ　http : // www. taisei. co. jp/

株式会社 竹中工務店

取締役社長　竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4－1－13　TEL(06)6252-1201(代表)

戸田建設株式会社

代表取締役社長　加藤久郎
執行役員支店長　野村昇

本　　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1－7－1　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1－13－47　TEL 大阪06(6531)6095
支　　店　東京・千葉・関東・横浜・北陸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

保存と開発に
取り組む

総合建設業

yasui moku

株式会社 安井杢工務店

代表取締役社長　安井洋

本　　社　〒617-0006 京都府向日市上植野町御塔道42　TEL(075)933-0012(代)　FAX(075)933-4931
東京事務所　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-1-10 赤坂ビルデング303号室　TEL(03)5474-3671　FAX(03)5474-3672
http://www.yasuimoku.co.jp/　E-mail:moku0744@lilac.ocn.ne.jp

暑中お見舞申し上げます

平成17年盛夏

団体・報道・建材・設備工事有志

建設業界でもっとも信頼　読まれている日刊情報紙

建設日報　創業50周年

株式会社 **建設日報社**

社主　重村　一

本　社　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－7－3　TEL(06)6444－2405－9
別　館　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2　TEL(06)6444－6431－4

建築 インテリア 大工 設備 土木 環境 機械 CAD

モノづくりの学校

大阪工業技術専門学校 SINCE1895



OCT
大阪市北区天満1－9－27　〒530-0043
0120-0910-19　FAX(06)6352-2861
URL http://www.oct.ac.jp

建築図書専門店

有限会社 柳々堂

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-12-3
TEL(06)6443-0167　FAX(06)6443-1826
E-mail ryuryudo@osk4.3web.ne.jp
URL http://www4.osk.3web.ne.p/~ryuryudo

NKK

社団法人 **日本建築材料協会**

会長　藤井　實

〒550-0003 大阪市西区京町堀1－3－13 辰巳ビル9階　TEL(06)6443-0345　FAX(06)6443-0348
http://www.kenzai.or.jp/

社団法人 **日本建築協会京都支部**

支部長　望月秀祐

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 TEL(075)211-2857-2877

社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　古林敏郎

〒730-0042 広島市中区国泰寺町1－8－4日興ビル内　TEL(082)244-2111

社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　松本壮一郎

〒460-0008 名古屋市中区栄4－3－26（昭和ビル5階） TEL(052)261-1451

社団法人 日本建築協会和歌山支部

支部長　東野信義

〒640-8045 和歌山市卜半町38番地 建築士会館内　TEL(073)423-2562



Electricity E空調
[電気の空調、E空調。]

電気の力でビジネスをサポート

中部電力株式会社

名古屋支店

〒460-8310 名古屋市中区千代田二丁目12番14号
TEL(052)269-1242　http://www.chuden.co.jp

山本窯業化工株式会社

YAMAMOTO YOGYO

代表取締役社長　山本泰通

本　　社　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町41-20　TEL(06)6338-8601　FAX(06)6338-8606
大阪支店　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町 8 - 7　TEL(06)6338-8701　FAX(06)6384-0557
支店・営業所　東京・名古屋・広島・福岡・仙台／福崎工場



空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社
関　西　支　社

執行役員支社長　島田高樹

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社西原衛生工業所大阪本店

大阪本店　〒531-0071 大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628（代表）
本　　社　〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441（代）
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　宅　清光
常務執行役員関西支店長　畑　佐彰保

関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町1－4－1　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

OKUJU
Space Creator

クオリティ＆コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー

本社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

CHOYO

人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

Digital Pri-Press

AOBA PRINTING CO.,LTD.

代表取締役社長　依藤孝行

青葉印刷株式会社

〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

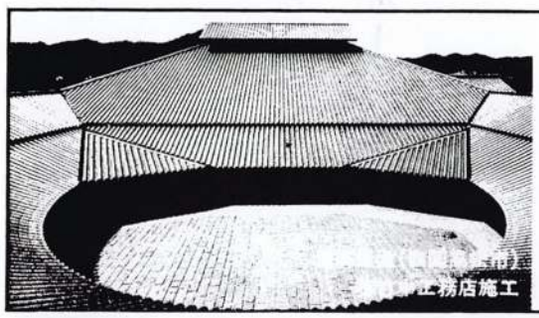
本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768－1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話（03）5689－2351代表

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、

株式会社NPCコーポレーション

本　　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎　六五六一～七四五四
ファックス　六五六一～七四一六

ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、

次世代マンションサッシ
RMG-90シリーズ

マンションブース

スリムでありながらスケールを感じるデザイン。
シンプルでありながら高い性能と多機能。

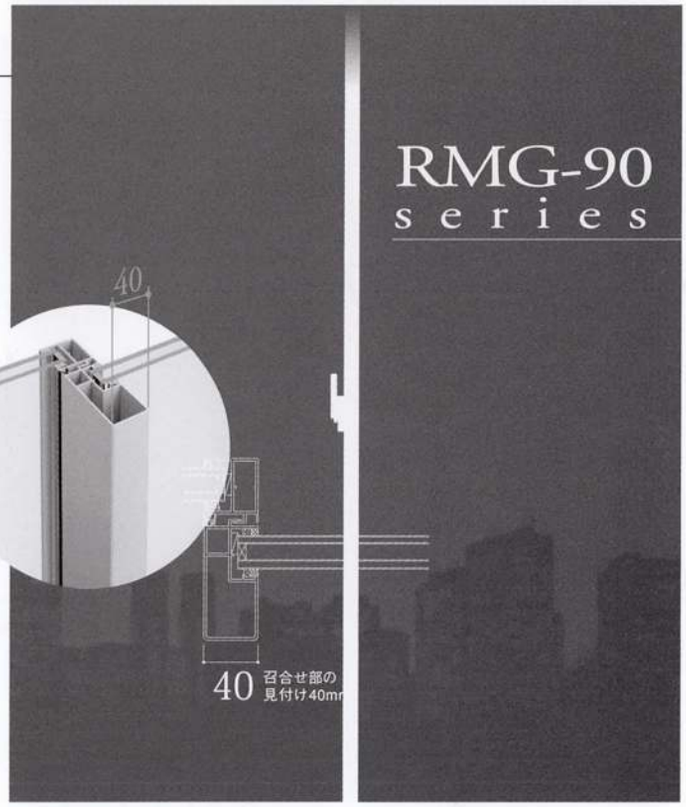
複層ガラス対応のサッシでありながら、スリムな見付けでデザインを統一。
シンプルでシャープな内外観を演出します。

90mmが実現する新しいクオリティーが、次世代をつくります。

空気層12mm
複層ガラス対応。

スリムな見付デザイン

2kgf以下の軽い開閉力



新日軽株式会社
本社/〒141-0032 東京都品川区大崎1-11-1(ゲートシティ大崎ウエストタワー)
お客様商品相談室 0120(37)2534

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581



住宅用タテ型ブラインド ｜ LINE DRAPE

ラインドレープ

New Arrival
新発売

すべてが新しい。

- 多岐にわたって充実した26柄、全133アイテムのラインナップ。
- 人気のロールスクリーンと64アイテム共柄。コーディネートの可能性が拡がります。
- 新たに、100mm・127mm幅のワイドなスラットを追加。
- バトン1本で操作できる「バトン式」も登場。

日本の住宅の窓辺に新しいニュースをお届けします。

立川ブラインド工業株式会社

http://www.blind.co.jp/

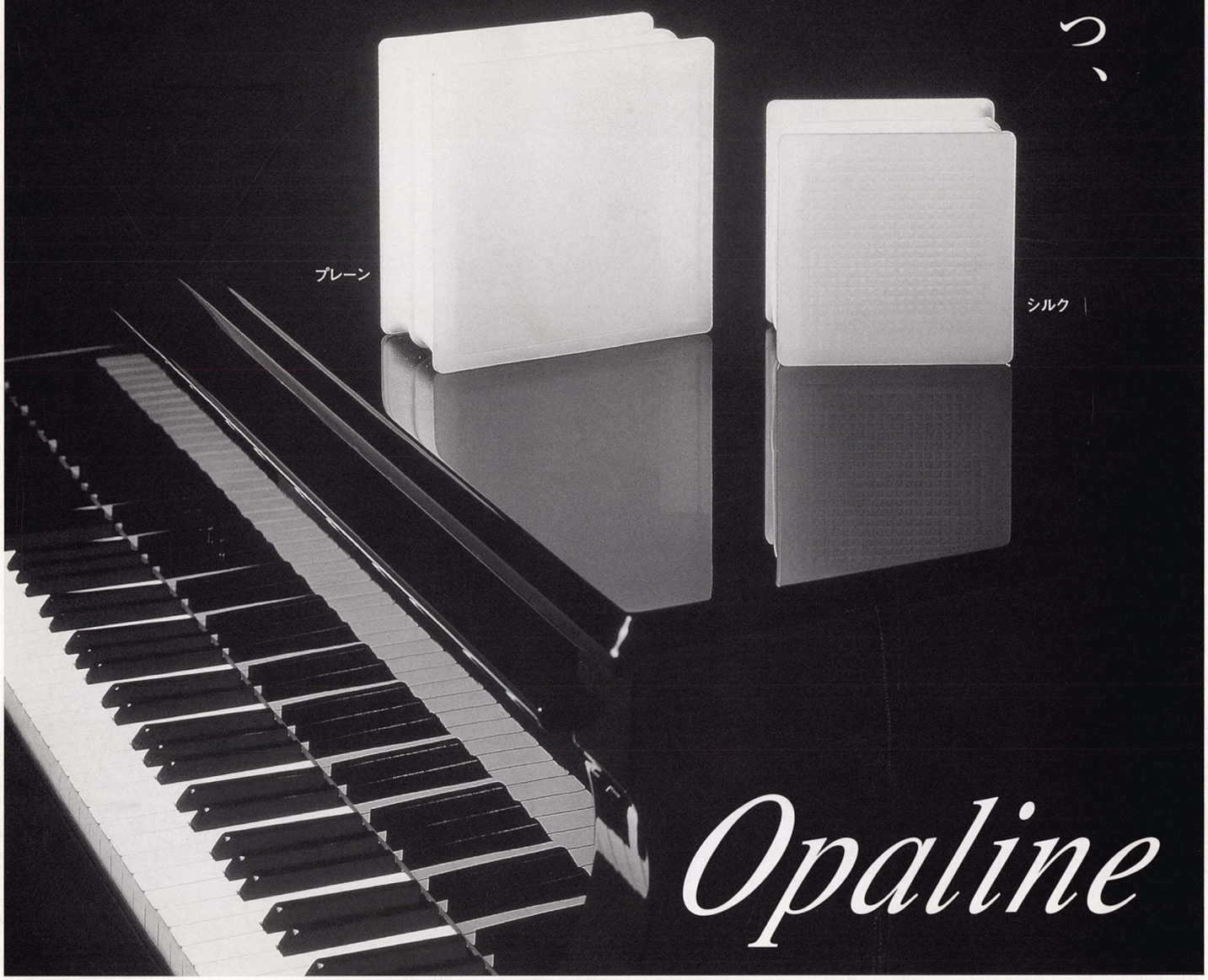
本　　社	〒108-8334	東京都港区三田3-1-12	Tel. 03 - 5484 - 6100（大代表）
銀座ショールーム	〒104-0061	東京都中央区銀座8-8-15 青柳ビル	Tel. 03 - 3571 - 1373
仙台ショールーム	〒980-0004	宮城県仙台市青葉区宮町5-1-12	Tel. 022 - 275 - 1311
金沢ショールーム	〒921-8015	石川県金沢市東力4-181	Tel. 076 - 291 - 1146
名古屋ショールーム	〒451-0066	愛知県名古屋市西区児玉3-4-4	Tel. 052 - 532 - 5085
大阪ショールーム	〒542-0081	大阪府大阪市中央区南船場4-6-17	Tel. 06 - 6881 - 1781
高松ショールーム	〒760-0080	香川県高松市木太町六区2662-1	Tel. 087 - 837 - 2720

透光性乳白色ガラスブロック

オパリーン

表現力を持つ、白き調べ。

乳白色の柔らかな光で空間を包みこむ〈オパリーン〉
そこにあるだけで、豊かさを感じさせる、白い存在感。
あたかもオパールの輝きが奏でる調べのように。



Opaline

お問い合せは、下記までお気軽に。

■建材事業本部 営業部／東京(03)3632-7780　大阪(06)6399-2728　■代理店ショールーム／東京:日本硝子建材株式会社(03)3632-7721　大阪:エヌイージー建材株式会社(06)6392-2711

ハイテクガラスで未来をつくる
日本電気硝子

●株式会社建材社／札幌(011)736-1137 釧路(0154)31-1131 苫小牧(0144)74-1651 旭川(0166)48-5935 帯広(0155)36-5191 函館(0138)49-8072
●日本硝子建材株式会社／仙台(022)254-8411 高崎(027)325-3220 東京(03)3632-7721 横浜(045)661-1531 ●エヌイージー建材株式会社／名古屋(052)522-5491 金沢(076)243-1058 大阪(06)6392-2711 広島(082)502-0081 高松(087)866-8822 福岡(092)483-3371

当社ガラス建材製品	ガラスブロック	ネオパリエ	ラピエ	ファイアライト	グラソア	アクラス	チュービー	ベルーナ	放射線遮蔽用鉛ガラス〈LX〉	真空式ソーラーシステム

■会社情報 http://www.neg.co.jp/　■建材製品情報 http://www.neg.co.jp/kenzai/　■ソーラー製品情報 http://www.neg.co.jp/solar/

建築と社会　2005.7　Vol.86　No.1000

社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31　電話:06-6946-6981　FAX:06-6946-6984　http://www.aaj.or.jp

毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

定価1,200円(税込)　正会員の購読料は会費に含めて徴収

雑誌　03379-7